山岳

第四年

山岳會

第三號

山岳

第四年第三號

本號目次

（明治四十二年十一月三日發行）

圖版

口繪

白峰三山　高頭式氏撮影
祖父ヶ岳絶頂　辻本滿丸氏撮影
祖父ヶ岳より望める鹿島槍ヶ岳　同　人
廣河原附近より荒川岳の絶巓を望む、前岳より望める甲州駒ヶ岳及鋸岳　河田默氏撮影
鹿島槍ヶ岳より西南方展望　三枝威之介氏撮影
大黑岳　同　人

挿圖

蘆安の湯宿。五葉根の小屋より望みたる白峰農鳥殘雪。ひろがはらの小舍。白峰北岳の中腹より望みたる奥仙丈岳。中腹より見たる北ヶ岳大山塊。大かんばの池。仙丈岳頂上。籠川の溪谷。劍山。赤倉温泉より妙高山を望む。（以上寫眞銅版）
蘆安村淸水方藏百五十年前の古圖。白根北岳登山圖。白峰山附近明細圖。仙丈岳附近地圖。金峰山。絶頂近きにあり。杖立峠より南西を望む。（以上木版）
其他、網版、膠版十數個

本欄

白峰北岳登山記　野尻正英……一頁
三峰川の上流（荒川岳及仙丈岳に登る記）　河田默……二三
金峰山から國司嶽　田中富彌……四五

祖父ヶ岳の二日　工學士　辻本滿丸……四九
日本河川志（三）　高頭式……五八
阿波國劍山幷に高越山登山記　多田香疇……六二
妙高登山記　山中証太郎……八四
山民の生活　法學士　柳田國男……九一

雜錄

山の表裏に就て（辻本）傾斜面の見え方（梅澤）山岳の稱呼に就て（山本）劍山の一研究（笠井藍水）甲斐駒ヶ岳の小舍（さんゆう）淺間裏山（岩佐定一）早池峰及白馬岳植物採集案內（飯柴永吉）山岳界だより（神東生）四方山話（烏水生）寄顯鈴木某甫玩易盧（檜谷）

雜報

淺間山噴煙記。淺間山噴火坑內に下る。木曾駒岳の山開き。燒岳噴烟記。ドイツに於ける山中人命救護に關する會議。今年の富士山。樽前山噴出詳說。諏訪湖の秘密。日本最深の湖。古代諏訪湖上生活に就て。北アルプスの初雪。高山植物取締。飛行器にてアルプス橫斷。高山登攀のレコード。北海大雪山登攀記。北海道第一高山の初雪。

會報

飛驒高山町に開かれたる山林大會。規則の改正。改正規則の要點。會員諸君に。熱心な會員と購讀者。第三會日本山岳會有志晩餐會。會員登山報。內外圖書交換目錄。新入會員。

高頭式氏撮影

白峯三山

Three peaks of Shirane. Phot. by S. Takato.

辻本滿丸氏撮影

頂絶岳ケ父祖

The summit of Ziigatake. Photo. by M. Tsujimoto.

辻本滿丸氏撮影

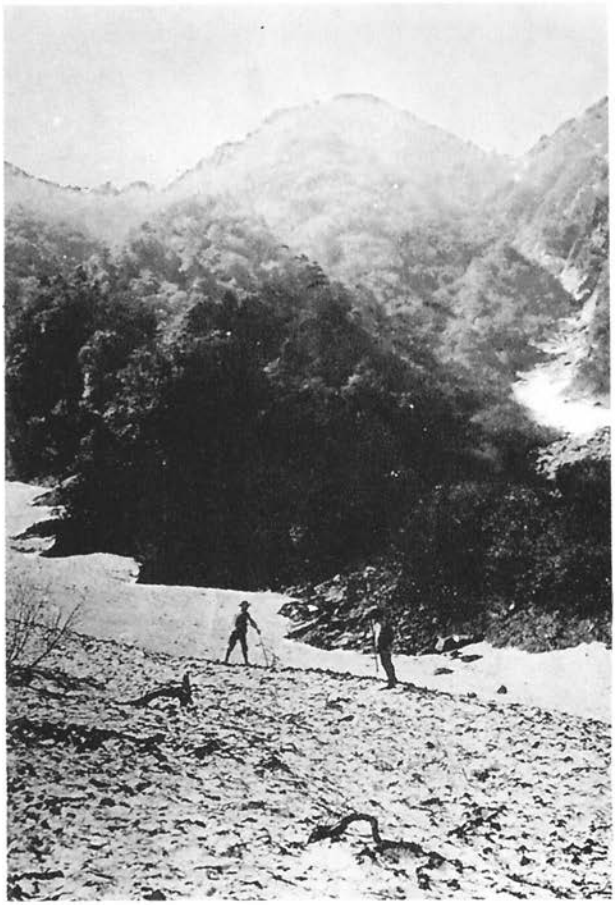
岳ケ槍島鹿るめ望りよ岳ケ父祖

Kashima-Yarigatake from Ziigatake. Photo. by M. Tsujimoto.

河田默氏撮影

前岳より望める甲州駒ヶ岳及鋸岳

Komagatake (Koshiu) and Nokogiridake from Maidake.
Photo. by S. Kawada.



河田默氏撮影

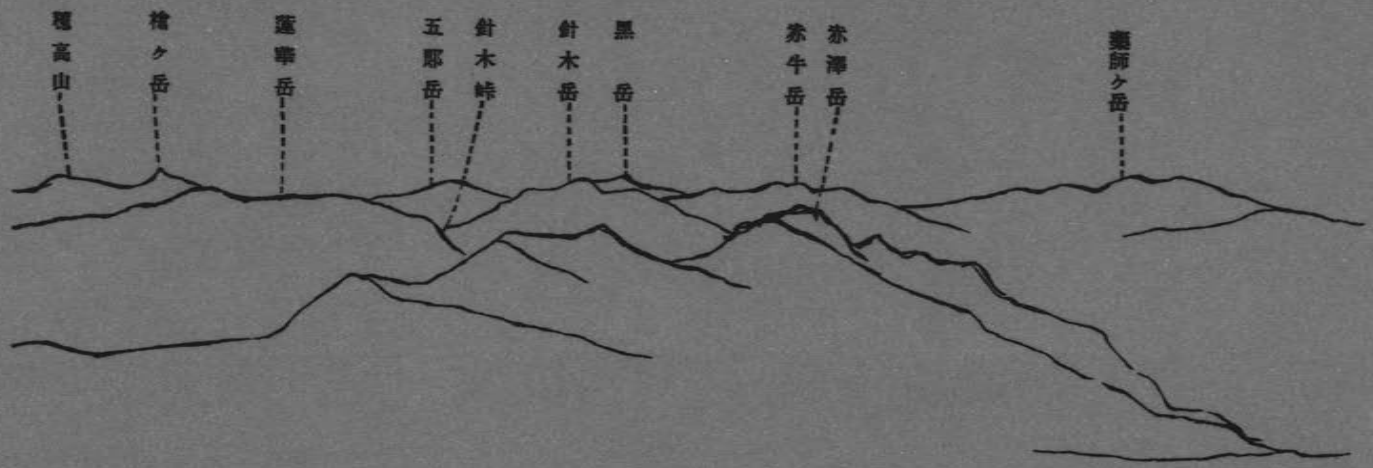
廣河原附近より荒川岳の絶巓を望む

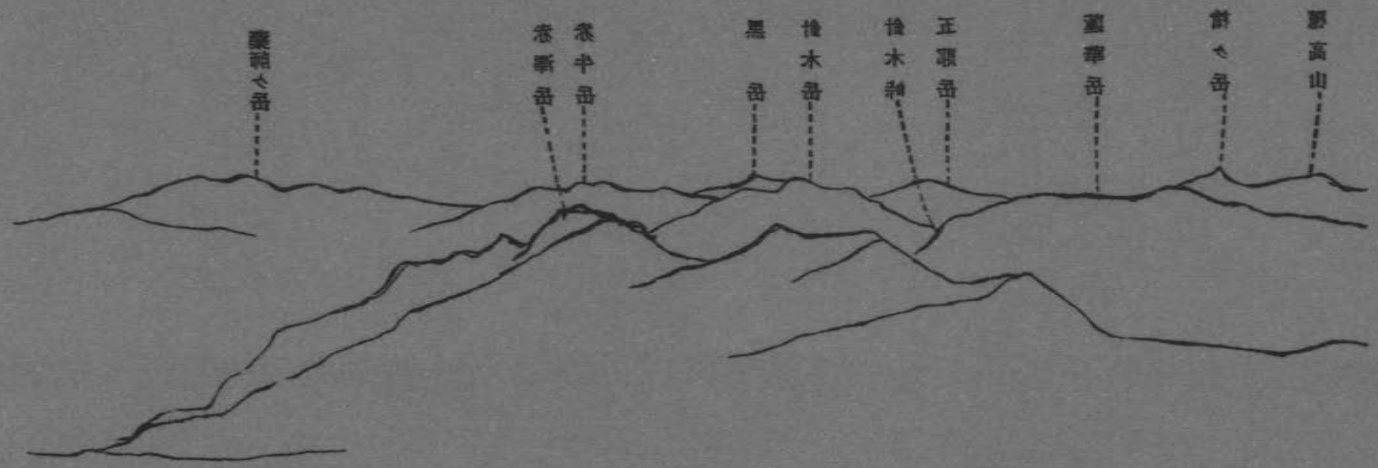
The summit of Arakawadake seen from the visinity of
Hirokawara. Photo. by S. Kawada.

三枝威之介氏撮影

大黒岳

Daikokudake.


穂高山
槍ヶ岳
蓮華岳
五郎岳
針木峠
針木岳
黒岳
赤牛岳
赤沢岳
獅子ヶ岳


鬱高山
鄙々岳
富士岳
正頭岳
檜木神
檜木岳
黒岳
泰平岳
泰澤岳
薩摩々岳

三枝藏之介氏撮影

鹿島槍ヶ岳より西南方展望

View from Kashima-Yarigatake, looking south-western direction. Phot. by T. Sayegusa.

山岳

第四年第三號

白峰山北ヶ岳へ登る記

野尻正英

一、甲府—蘆安。
二、導者—強力—宿。
三、蘆安—林立—廣河原の小屋。
四、山物語。
五、北ヶ岳登攀。
六、廣河原—蘆安。
七、蘆安—甲府。
八、補遺。

明治四十二年十一月三日發行

（禁轉載）

（七月二十五日）甲府―蘆安

菅笠、着座の扮裝と云へば、甲府あたりの人々には、富士詣か、身延參りと、凡その相場を定めて居る丈に、龍王迄のガタ馬車の馭者も、釜無川の渡し守も、一行四人の風體に相應はず、菅笠の廂の向きが些と見當違ひと思ったか、何れも『何處へ』と尋ねた。『白峰へ』と答へて、偖、其の道筋やら今宵の宿の蘆安村の樣子やらを叩かうとしたが、てんでお話にならぬ。尤も土地っ子が土地の名所に冷淡なのと一般、殊に甲斐の西も西、山また山の奥深くに幾億刼の緘默を守って居る恐しい山々に就いて知る所の少ないのも道理なのだらう。產聲を高くあげて以來、明けても暮れても、山國の住民に附きの、夫れの習慣に捉へられて、只四時折々の凄じい變現を仰いで、今更らしく怖毛を慄ふのが漸くで、其の他には山國に居て、山々とは妙に緣が離れて居るらしい、山岳は山國の住民に取って、底意地の惡い、沒義道な母親で、住民は其の母親の見幕が恐しい時のみに、歷々と其の存在を認めるので、其れ以外には大抵は冷かに背中を向けて居る。荒々しさの中へ迄、探りを入れて少しでも優し味を求め樣ともしないのだ。

龍王から釜無川を渡って百々村、此の邊へ來ると、餘程もふ土地が高く成る。烟草畑が多い。曇り日の堪へられ無い程の暑さでは無いが、北、黑富士の圓錐形の山容より外は、八ヶ岳も茅ヶ岳、金ヶ岳も、又志す、西、白峰連嶺も、雲の中に隱れて、間近く低い山々のみが、夏らしい緣を凝らして居る。次で源村。（百々も、源も、共に有野村の字であるらしい。）

源村から直に山へかゝるので、村を貫く水の流が如何にも淸い。豐かだ。そして早い。大抵の家は床が溝よりも低い。理髮床の客人や、糸を繰る里の娘達は、此の水聲を前にして、定めて凉しからう。溝際に月見草や、書顏などが、慢と咲き亂れて居る。月の夜を思はせる村だ。

源村を出離れると、益々爪先が昂る。初めて山影が近付いて來る。左の稻田も、直に山百合の花を點じた山の裾とかはる。右は山萩や、檜扇の花やらに、緣を飾られた、赤松原一帶の向ふに、勾配の急な御勅使川の川床が白く横って居る。此れからは始終此の川を右にして、山間をうねり〳〵、迷宮の樣な奥深くへ辿って行くのだ。甲府からも、此の御勅使川の、川床は白く瀧の樣に見えて、何日も土地の人々を刼かして、忌々しい不安の感を抱かせる。信玄堤も此の川下にある。川楊が澤山堤に植えられて、餘程の老木になって居るものもある、其の四五本の蔭に、村人の三四人が、背負梯子を下して、休んで居たのを遠く望んで、何が無しコローの畫を思ひ出した。自分等も、只或る凉しい木蔭で、午飯を濟した。此處で

分捕の大雑嚢を開いて、初めて、大切の鑵詰やらバンやらの大部分を忘れて來たのを發見したが、例の客觀化連中の事として、却て抱腹した迄で濟んだ。近い急流でサイダアを冷さうとしたが、水は生温かった。背負梯子を背負った乞食の樣な老人が通り懸って、種々と話し初めたが、言葉が能く聞き取れぬ。蘆安村の名取と云ふ家を尋ねた。『大家と新家とあって、大家の運一ちやんは、元村長さんだったが、今は一家中東京へ出て居る。甲斐ヶ根の先祖の家だ。上の息子は龍王の學校へ出て居て、此間中お嫁樣が來た』と答へる。此の名取運一（大家）と云ふ家は山岳（第二年第一號）で伊達、高松兩氏の『北岳登攀記』中に紹介されてあったので、自分は出立前、其の家宛で、案内、宿泊、登山用意の件などに就いて、問合せた。そして其の返事には『宿泊は相談出來ぬが、案内はしても能い』との事で、此れを一圖の力と頼んで居るのだ。尤も其の返事も主人から來たのではなくて『運一男耕』と書いて居たので、其の龍王の小學校に勤めて居る子息と同じ人か如何かと、種々想像説が持上った。

御勅使川の此のあたりからは、甲府方面が手に取るやうに見える。が金峯山一帶は、例の黑富士の外、雲に包まれて居た。川幅は一寸廣い。絶えず山間を迂曲して行く。村一つを拔けると、今度は川原の左を歩くので、水は碌に無い。所々溜って居る位なもので、水成岩の碎片がざく〳〵草鞋を嚙む。手に取ると石板石の樣に、脆く剝げるのもある。硬くて白く細く美しい班の通って居るのもある。子持石と云ふのも多い。川原撫子が蒸暑い風に頷いて居た。老鶯が絶間無く鳴く。山鳩の氣疎い聲が時々峯を仰がせる。

郵便脚夫に遇った。一日一度蘆安から往復するのだと云ふ。待たして置いて、葉書を一本書いて、渡した。川に出會った所から一里餘りで、漸く山畑を見た。危い橋を渡った。此處が蘆安だった。蘆安とは總稱で、字が種々ある。ぱつ〳〵大きな家棟が點在して居るのを右に見て、川に沿ふて進む。石は著しく大きさを增して來た。礫岩が多い。雪を噴く谿流の眺が美しい。山から瀧などが懸って居た。

途中で橋を一つ渡ってだら〳〵と上ると、古屋敷と云ふ一圍の字がある。其の入口の左に荒壁塗の眞新しい水車小屋があってごと〳〵音が洩れる。夫れと向ひ合って小い藏の白壁を控えた家が目に付く。郵便切手賣捌所と札が出て、門に栗の木が茂って居た。此の邊で名取家を聞かうと、幾ら聲をかけても返事が無い。今度は水車小屋の主人の大兵な男を捕へて聞くと、右の家こそ大家で『耕ちやんは居た筈だ』と云ふ。種々案内の話などを聞いて居る中に、「耕ちやん」は書寢をして居たので二階から下りて來た相で、改めて面會した。二十二三に見えたが、後で聞けば十八だとの事だ。目の細い、温厚らしい青年だ。荒物も鬻いで居たらしく硝子戸張りの戸棚の中に、煙草の大箱やら、麥酒の壜やら殘って居た。『留守でお泊め

申す事は出來無いが、案内して上げても能い。剛力も一人は雇はなけりや成らぬ』と云ふ。それに定めた。偖宿はと云ふと先刻も水車小屋の主人が、向ふ山の上の大杉を指して『あの下の湯宿しきや泊る所は無え』と云った、其の温泉へ案内して呉れる事になって、背負梯子に例の雜嚢其他を結び付けて先へ立った。

新しい家が多い。小學校も最近に建たらしく先生の妻君らしいのが、井戸端にイんで居た。村役場も其の隣にあったが、此れは古くて小い建物だ。此の字を過ぎてから、川を渡って、坂を上って、氷室を左に見た所から、畑の間を又川縁へ下り切ると、温泉宿がある。清水館と云ふ二階建で、明治三十五年以來の開業だと云ふ。小新しい。後は川を隔てた恐しい絶壁で、頂に大杉が小く見える字大曾利は此の上にある。尤も湯宿も此の字に屬して居るとか聞いた。

愈、此家へ泊る事になった。今日午前十一時頃此の宿へ着いて、人夫一人を雇って白峯へ登った某師範の先生がある、農鳥を越してヒロカウチを經、奈良田の湯へ下りるのだ相で、今年の第一登山者だと云ふ。少しの時間の相違で、第二位に落ちた。『岳は草が深からうぜ』と云ふ。此の邊では白峰を「西の岳」、鳳凰一帶を「東の岳」と云ふ。自分達は此の東、西、兩方の岳へ上るつもりで「耕ちやん」に相談した。如何にも實直に相談に乘る。去年も案内した相だ。

米を五日分六人前、大鍋と一所に運んで行くので、剛力は、役場の小使が是非連れて行って呉れ、兩の岳へは初めてだからと云ふ相だ。此の男は先刻逢つた、髪の毛の被さった二十年輩の痩形の男だ。古屋正藏と云ふ。

二階へ案内されて、猶は此處で種々話を聞いた。八疊敷位のが二間で、木口は新しいが家根裏は所々大孔が開いて居て、夜は月も洩らう。家には亭主の骨組の逞しい胸毛の荒れたのと、女房とが居る。質朴で、突立った儘「氷けえ、おき持って來てやらざあ」と云った調子だが、莞爾して居て、氣が置け無くて能い。湯へは入ら無かったが、神經痛に効能があるのだ相な。耕ちやんに山の話を種々と聞いた。一年中に登山者は二三十人位しきや來無いと云ふ。で明日からの豫定は左の樣だ。

（第一日）未明出發—杖立を越え、八軒、シレエザハの小屋を過ぎ、ヒロガハラの小屋に泊る。（此の里程六里）
（第二日）ヒロガハラの小屋より登山、下りて同じ小屋に宿る、（此の里程、往復四里）
（第三日）ヒロガハラの小屋出發、八軒小屋を經、杖立の近くより分れて、東の岳方面に向ひ、大コンバの小屋に一泊、
（此の里程五里）
（第四日）地藏、鳳凰へ登山、下りて蘆安迄（此の里程七里？）

烏水氏から送られた『山岳』の切抜伊達、高松兩氏の紀行の敎を受くる所が多大である。

夕飯には塩鰯と、馬鈴薯、氷豆腐の汁とが副食物だった。宿の庭を下りて川原へ出た。恐しく大きな子持岩が方々に蟠って居る。水が其れに堰かれて渦を卷いたり瀧を懸けたりして轟々と流れて行く。水に入ったが、手足も凍る樣なので直く逃げ出した。夕映が美しい。寒蟬が盛に鳴く。

夜は半輪の月があった。光と影との美い川原、後の凄じい絶壁は、眞正面に月光を浴びて凹凸明暗の具合から全然大蝦蟇の口を開いた姿だった。北斗の第四星が其の上に懸って居た。宿から鰯を燒く香が通ふ。爐を圍んで主人を入れて四人計りの荒くれ男が濁酒の醉に高話をして居た。其の一人の大曾利の源十郎は次の晩ヒロガハラで泊つた小屋の主人だった。

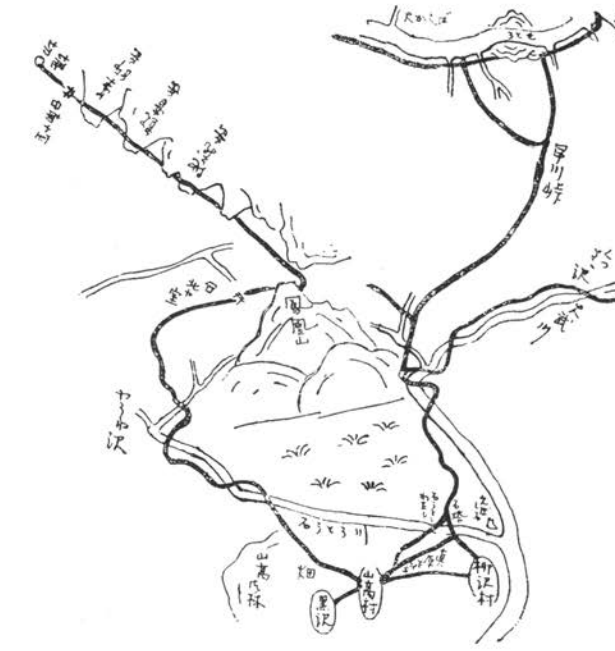
床も氣味惡く無かったが、蚤の恐しい攻擊と、耳を去らぬ川瀨の音とで、碌々眠られ無かった。堪まらなくなって床の中で、身体中へ手の届く限りアルボース石鹼を塗り付けた。ニーベルンゲンリードを思出して苦笑した。夫れでも効はあった。

導者—剛力—宿

△蘆安の村人達の多くは樵夫だ。若い女房や娘達も、男を助けて、何日も山路を往復して居るので、白峰登攀の導者や剛力は幾らでも居る譯だ。只伐採で能い賃金を取って居る丈に一寸相談に骨が折れるかも知れぬ。

然し清水館の主人が、骨を折っても呉れるし、村人は未だ多くの登岳者に接して居無い丈に、惡擦れた目には會はぬ。まあ一人一日の賃金が食料を此方持ちの、一圓見當だと思つて居りや間違ひは無い。

△茲で自分は「名取耕」なる人を紹介する必要がある。自分が此の導者を得たと云ふのは、如何にも幸だったからだ。村でも「耕ちやん」の名で通って居るが、此の青年の祖父さん名取直江と云ふ人は、明治二年に上申して、四年に官許を得て初めて獨力白峰登山の道を開拓した。そして甲斐ヶ根神社の本宮、中宮、前宮を建てた人だ。然し時が未だ至ら無かった



故か、惜しい事には、其の莫大な勞力と、費用を擲っての事業も失敗に終って、世の中の人は全然顧みもしなかった。其の開いた捷徑などは、今は大方荊棘に埋まって、通ふ人も稀だと云ふ。耕ちやんの父は前にも云った通り、村長の役にあった人、兄は小學校の教師だと云ふ。で、此の青年は源村の小學校を出て、東京へ行って本郷のさる商店に暫く奉公して居た相だが、今は村で遊んで居る。名家の末だけに實直な、温厚な、そして山にも頗る通じて居る。身躰も中々強い。剛力が法螺を吹いたり、不當の賃金を貪らうとすると、何時も傍から其れを抑え付けて居た。小學校卒業の十八の青年としは理に通じ過ぎる位だ。若し山案内として強いての慾を云へば、多少此の點で興を殺がれる。偶像破壞者の方だからだ。『大カンバの池で牛の鑵詰が食へねえ　其樣馬鹿な事があるものか、游ぐと山が荒れる？馬鹿なあ、澤山游ぐが能いさ。牛が池の中に住んで居る？ありやうは無え』と云った調子だ。『速力は暑さの二乘に反比例する』の『遠くなり近く鳴海の』などゝ口を衝いて出る所は珍しい案内者だ。行末見込のある青年らしい。若し白峰登山に志す人があったら、此の青年を訪れるが可い。そして剛力をも世話して貰ったら、頗る便宜だらう

△宿は蘆安には此の清水館一軒しきや無い。甲斐國の最も西の果の村の、最も西の端にあるのだ。默って居れば宿料は三十錢だった。決して堪えられぬと云ふ家では無い。此れから泊ら無きやならぬ樵夫小屋に比べれば、雲泥の相違

だ。歸りの泊りの時には、鑵詰を馳走して呉れた。主人も山通だ。模樣によっては山へも案内する樣だ。彼の青年に賴まなけりや、此處で案内や剛力の世話をして貰ふと能い。自分は此の主人の秘藏の古繪圖を非常の興味を以て寫して來た。白峰や鳳凰へ登山の人々は、是非見せて貰ふ可き品であらう。殊に此の邊の參謀本部の地圖は、曖昧極まるもので、大井川の上流は、地圖に見る程深く入り込んでは居無い。却て野呂川の水源は、農鳥山の後から、大きな彎曲をなして流れ出るので、地圖で本流のやうに描いて、仙丈岳の方から流れて來るのは、北澤と呼ぶ枝流に過ぎない。又、三峰山の位置は農鳥山の後に當って少し南よりになる、『此の地圖はあてにならねえ』と主人は云った。

で此の古繪圖の大きさは、三疊敷位は充分ある。村役場にあるのを、主人（清水多四郎）の祖父の彌一右衞門と云ふ人が寫し取ったので、裏に『甲斐國巨摩郡蘆倉村より同國同郡黑澤、山高、柳澤三ヶ村山論裁許之事』と大書して、其の一條が達筆に認めてある。終りに寛延三午年七月十九日、三（井）下總、遠（藤）伊勢、曲（淵）豐後、松（平）河内、神（田）若狹、印とある。つまり三個村が所有山の關係上、水爭ひを初めたので、蘆安の古老が江戸表へ呼び出されて盡七俵を撒いて、白峰、地藏、鳳凰附近の村々の鳥目圖を作って、其れを繪圖にした。五人の役人が此の土地迄出張して檢分した後、繪圖に誤りが無いと認めた其の遺物なので、今から百五十餘年前の圖丈に、山梨縣廳でも參考にした相だ。

宿帳を調べたら柿、鑛業、土木、山林など記した泊客が多い。

（二十六日）蘆安—杖立—廣河原の小屋

寐覺に驟雨が來たかと思ったのは、矢張水の響だった。夫れが晝間よりは遙に高い。四時半に起きた。曙の色が。東の山際に仄めいて居る。山蔭は未だ夜の夢を惜しがって居るが、水計りはもう大きな目を明いて居た。薄暗い向ふ山の氷室から、親爺が氷を背負って歸って來た。昨夜の約束だったが、此の朝冷に何で齒が觸れられるものか。日が昇った。先づ後山の高い落葉松の梢に第一光を投げた。活々しい水の光、岩の濡れ色。

山稼ぎの男が叺を背負って二人、三人づゝ行く。昨夜と同じ樣な菜で朝飯を食ふ。漸く導者も剛力も來た。導者の背負梯子へ、米袋と大鍋とが結び付けてある。が、鍋は源十の小屋にあらうし、又東の岳へ行っても御室から西へ少し下れば、沓澤の某が床骨を切りに行って居る小舍がある筈だからと主人が云ふので鍋は此家へ殘した。腰へ山刀を帶びて居た。一行の雜囊やら麻草鞋（三足宛）やらを剛力の背負梯子に結び付けて出立した。朝の山氣が清々しい。志すヒロガハラの小屋迄六里、八軒の小屋が其の眞中にあるのだが山路の事だから何里あるか分ら無い相だ。八軒の手前の杖立迄が上りで、夫

れからは樂だと云ふ。

暫くは御勅使川に沿ふて行く。山が壞れて大石小石の露出した大澤の樣な所を横切る。大きな石が苔を帶びて、老蒼と云つた風なのが思ひ切って水に飛躍を打たせて居る。信玄堤が川下で腕を張って一年に數へる程の、此川の暴虐を防がうとして居るが、此の勾配を見たら心細がらう。山柴陽花が咲いて居た。

やがて川を渡ると、朝日を背に浴びて、曾根尻の坂を上る。川は此れから一行に背いて、奈良田の方へ流れるので、後から來た六七人の女樵夫は、向ふ岸を傳って行った。道は奈良田の少し上へ出るので五里と聞いた。曾根尻を上り切ると、可成り廣々した曾根平を行く。左、桑畑を隔てた谷底は御勅使の本流、右は落葉松の茂った山々。此の山の向ふにヤザヂン峠、堀切峠が聳えて居るので、路は迂廻に迂廻して行くのだ。鶯が啼く。谷底で山杜鵑の一聲が懷しかった。此邊で二三年前、或る登山者が兎を見付けて散々暇潰しをやったもので、山の中で日が暮れて、一人は山氣に中てられて途中から行方が知れ無くなって大騒ぎをした相だ。獸は兎、熊、岩鹿、位なもので、少しも害はしない。野呂川に大蛇が居る相だが、見た者は稀だし、蝮蛇は居無い相だ。現に此の一行、長蟲には一度も出會は無かった。山登りに此の方面の懸念は少しも無い譯だ。

曾根平を汗を流して行き切ると、落葉松がこんもりと茂った、如何にも涼しい木蔭がある。大山祇の小い祠が此處に建てゝある。大石がある故に大石とも、又地藏がある故に車地藏とも呼ぶ相だ。三四人の『山人』が鎌を研いで居た。水音とみん〳〵蟬の聲許りだ。

大石を出て、萩や芒の咲き亂れた小徑を行くと、やがて御勅使川へ流れ込む谿川を渡る。此れはショザワ（初澤？）と云ってヤザジン（夜叉神）峠の方から流れて來るのだ。ショザワの少し前の山蔭に、美しい清水が湧く。此れからは今迄の路とは、全く異った方角を指して、此の谿川傳ひに急坂を登るので、眉近く眞黑に連屏を作って居るのが、ヤザジン峠、それから右へ堀切峠が聳えて、杖立は其の頂になるのだ。ショザワの谿流は、都合四度右へ左へ横切らなきや成らぬ。初めのを下騒、次を中騒、次を奥騒、最後のは無名で、左に崖の崩れた所、方言でガレがあるので南ガレと云ふのだ相な。下騒を越すと、梢平に廣い灌木の原で、芝平の名がある。ホタルブクロや、キンバウゲらしい花が、山萩や芒に混って咲く。落葉松の小い森も潜った。奥騒で腹を拵へた。清い、冷い水を椰子の盃に汲んだ。用意の乾あんずを頰ばり乍ら、此所を去る。此れからはヤザジン峠を左手にして、杖立の方へヤセオチ（八瀨尾根？）の峻坂を登る。隨分骨の折れる坂で、日盛りには蘆安の衆も越す者は稀だと云った。導者は甲斐根神社を開いた祖父の苦心を語る。此の八瀨尾根の東の、落葉松に蔽はれた山の中腹に、一際目に付く樅と、檜の大木が突立って居るが、其れが甲斐根神社の前宮だと云ふ。中宮は大カ

ンバに、本宮は北ヶ岳の絶巓のが夫れだ。火事の時、名取家に藏してあったお札や、お姿などは、皆燒いて仕舞て、金剛杖へ押す燒印が殘って居たが、今は夫れすら失って仕舞ったと、帳然として語った。

羊腸の急坂、熊笹が茂る。水音には全く綠が離れた。喘ぎに喘ぐ。汗は洋服の背に透る。シヽウド、シヽブキなどゝ云ふ薄氣味惡い植物が現れる。九時半漸くモミソへ出る。山懷の二坪計り平らな地で、樅の大木が三本蔭を作って、小さい權現の祠がある。例の古繪圖にも「樅の木」とあるのが此れで、風が頗る凉しい。旅人は茲で一息吐く。腰を下して來し方を看下す、隨分と登ったと思ふ。御勅使川の姿は見え無いが、其の南の八田山、桂澤山などがぐっと低い。八田山の一角から、淡い雲が立ち上る。彼れが擴がらうかと氣遣ひだ。鶯が美い聲で獨り轉って居た。

同じ樣な急坂を折々は這って上る。虎の尾が滿開だ。其の中、右の方に恐しく深い谿が大きな口を開く樣になった。そして其の正面に、幾千仞とも計られない大絶壁が聳えて居る。所々に落葉松が群って瀧が細く、途切れ〳〵に落ちて居る。頂は眞黑な木立が髮の樣だ。畫圖には巢鷹大がれ山とある。「大ガレ」は絶壁の大雪崩れを云ふのだ。杖立は此の大ガレ山の向ふ裏だ相だ。

白く立枯れた落葉松などが、サルオガセを山羊の髯のやうに垂らして居る。中にも路を跨いで、落葉松の大木が、奇拔な形をして聳えて居る所を、ゲエルマタ（蛙股）とは振ったものだ。直に清水へ出る。此の邊から路は稍平らになる。紅葉の大木の蔭に、小い祠がある。が、清水は前の谷へ四五間下りた狹い平地に湧き出すので、ハナガラの大木が、照り付ける日光を遮って呉れる。此の木の枝には箱辨當の包が、鈴生りに振下げてある。樵夫の二度分の食糧だ。水は非常に冷い。

清水からは御勅使川、蘆安、夫れから甲府盆地が廣々と見える。沈と霞んで居る樣だ。富士が其の東南に恐しく高く聳えて居る。大ガレ山の頂から雲が湧く。

清水から清水橫手、木蔭が多い。ゴハが、黃花のヤマオダマキなどゝ混って蔓って居る。熊笹の茂みを越すと「カリヤセ」へ出る。

今迄更に姿を見せなかった白峰の連峯が、不意に西なる深谷の向ふへ、今、地から湧いた樣に出現した。其の壯觀、嬉しくて言葉が出無かった。甲府に春秋を送る二年、山國の刺激の新しい身は、此の白峰連嶺を夢寢の間にも懷しい者と仰いで居た。農鳥の山の額の白鳥を、我れ一人への優しい姿とも、朝、晝、夕、月の夜にさへ泌々と眺め入って居た。少なくも自分には白峰は靈あるもの、何事かを語って居るものと、眞正直に左樣思った事が多い。其の山影が雪の斑鮮かに、白鳥の姿をさへ留めて、胸に迫る樣に、忽然と現はれた時の、其の『刹那の印象』程强い印象を受取った事は無い。思はず、

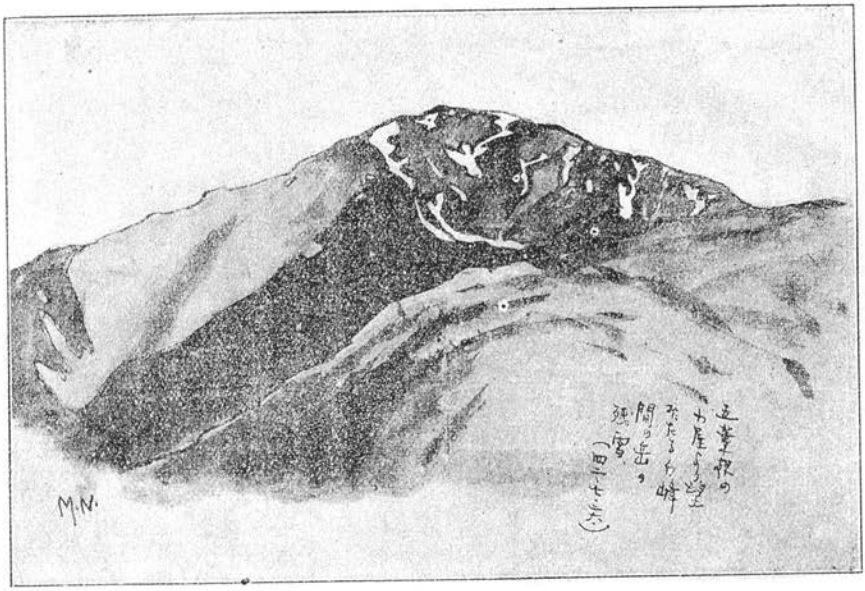
名を呼んだ。足が宙に浮いた。兩腕を擴げた。涙が流れ相になった、心から仕合せ者だと思った。

農鳥山、間の岳、北ヶ岳、大方は暗綠の色に蔽はれて、絕頂のあたりや、又は大膽に谿底へ直下する雪田の近くなどが、山の膚を露出して居る。農鳥の南の一峰は、名は知らぬが、度々白峰の寫生に入った其の山と頷かれた。其の背から赤石が雲を排いて覗いて居た。雪が白い。

脚下から深い谷が起る。カリヤセ（蕕？）と云ふ笹とも葭ともつかぬのが一杯に谷底まで茂って行く。白樺や楢の木立が下へ行く程深くなって、野呂川の水は見られぬ。カリヤセ（？）が茂って居るのでカリヤセと云ふのだ相だ。夜叉神峠へはモミソの邊からと、此處からとから路が分れる。急に日が照り付ける。小粒の石でざら〳〵辷る坂を這ひ上る。白峰は北ヶ岳から次第に、北の山蔭に隱れ初める。右へ折れた所に大落葉松の枝を張って居る塲所があって、甲府盆地の眺望を一手に引受けて居る。路は細くて、馬の背越と云った風だ。木の根が縱横に踏張って居る。地衣が草鞋に柔い。堀切と呼ぶ相だが此れは此の邊一帶の名なのだ。兩側は深い谷で吹き上げる風が寒い位だ。鳥が囀る。淋しい程澄んだ音色だ。駒鳥だ相な。佛法僧も此樣淸い聲だや無いかと思った。雪の冷さを含んだ風に吹かれて居なければ、彼樣透通った聲は出ま い。尋で栂の林が起る。路は廣くなったが波を打った樣な凸凹だ。サルノオガセが笠に觸れる。栂に混って白檜や、石楠木や、白樺が茂って居る。白樺とは懷しい名だ。玉葱の薄皮のやうな、そして櫻に似た木肌で、如何にも高山へ來たと云ふ感を深からしめる。濕々した木蔭の土を拔いてゴセンタチバナの愛らしい白い花をも見るやうになった、此處で一隊の女連に會った。米や味噌を背負ってあたり構はぬ大聲で、鄙びた唄を歌って行く。駒鳥が相拍子を取る。皆丈の短い筒袖に脚半草鞋。細帶の上へ、普通の帶のやうなものを結ぶ切りにして餘りをだらりと後に垂らす、此れを布いて座るのだ。「耕ちやん」は彼等の間にも敬はれて居る樣子だ。

其の內ッョタテ（杖立）へ着いた。六千尺餘もある相だ。急な登り路が茲で終ると云ふ所から、樵夫が杖を置いて行くのだ。稍々廣々とした峠の頂で、山神の小い祠が型の如くに祀ってある。後は山、前は谷であるが、栂の木立に遮られて、白根は能く見えぬ。此れから直下りに下って行く方に蔚然たる一山が控えて（路は其の中腹を行くのだ）其の左の端れに奧仙丈岳の半面が緣に見える。此處で正午だった鳳凰の方向から山霧が起って來た。然し襲はれずに逃れた。

杖立から苔の深い樵路を下りて行くと、間も無くセエバョコテ（背負塲横手）で、東の岳へは茲から路が分れる。蘆安を未明に出れば、充分日歸りが出來る、其の經驗もあると導者は云った。此處から鳳凰へ約三里半、路も樂だ。大コンバーキリワケ小屋—ッヂ—御室—砂拂岳—藥師岳—觀音岳—地藏岳—賽の河原—鳳凰山と云ふ順序だ相な。此れからは何時も栂

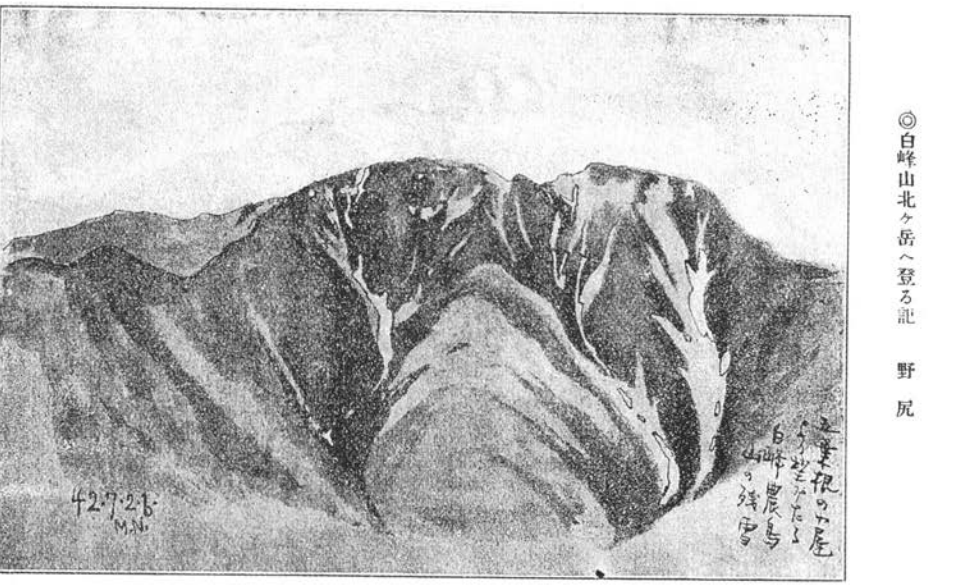


の樹立を縫って下りて行くので、登りは極めて稀だ。駒鳥の聲。谷へ近付くと水の響。

其の中ゴヤウネ(五葉根)の小屋に着いた。荒れた小屋で、栂の皮で葺いた屋根は半ば破れた儘だ。前は谷を隔てゝ、間の岳や農鳥に向って居る。中へ入る。屋根裏も、柱も焚火に燻されて黒く光澤を帶びて居る。米の袋や、味噌の桶などが幾つと無く置いてある。導者も東の岳へ登る用意丈の米を小い袋に分けて草鞋と一所に柱に吊した。杖立で出會った女房や娘連も此所で追ひ着いて、各自に背負って來た袋や樽を此處へ下して、次の八軒の小屋へ白檜の板を背負ひに行く。

此の女共の事を荷背負衆と呼んで居る。蘆安から來る連中を上の荷背負衆ヒロガハラから來るを奥の荷背負衆と云ふ。ヒロガハラの小屋に一隊の山人(方言)が白檜を削っては板にする。それを其の山人の女達(奥の荷背負衆)が背負って八軒の小屋迄運んで來る。で、歸りに里から運んで來た米味噌を背負って小屋へ歸る。蘆安からは、又女達(上の荷背負衆)が米、味噌などの荷を背負って來て、歸りに板を運んで行く。白檜の板は尺六の物四十枚が一束で大抵三束位宛、十貫目の重さを運んで三里の急坂を上下する。一束の運賃として二十錢宛を貰ふと云ふ。米は三斗入一俵で十一貫はある。歸る日途中で會った女などは味噌桶三個、十六貫を悠々と背負って行った。斯うなっては顔色が無い。一日一升五合も食べるのだ相だ。人間業だや無い。

五葉根の小屋から、同じ樣な路を下りて行くと深澤を横切る。右手の山の上から、野呂川へ流れ落ちる谷川で、大石が轉々して居る。野呂川は此の下で西へ曲って居る相だ。此れが澤の初めで、此れから



ヒロガハラ迄幾つも澤を渡ると大概路は登りになるのだ。スバオネの小屋跡と云ふ鋸屑に埋まった平を通る。

八軒の小屋は小屋として、一番高い位置にある。名は八軒だが小屋は二軒、稍間を隔てゝ並んで居る。中には白檜の削り板が積んである。清水も近くから湧く。甲斐ヶ根神社を初めて開いた當時は、カリヤセから八軒へ近路があったのだ。此處からキャサデを經て赤澤へ行く間に、熊笹平が二個處あって、其の間は辛い降りだ。梅の林で谷底は眞暗。路も木の根や、岩角に苔の蒸した上を行く。大木の白く洒れたのが枝を擴げて此處、彼處と立木の間に倒れて腐って居る。そして絶えず金鈴を振る駒鳥の聲。水晶蘭と云ふ毒々しい花を見た。ホトゝギスをも得た。次でキャサデ（木屋叉手？）を通る。此れは天保の頃木を谷へ伐り落した遺跡だ相で、水の無い澤だ。木を谷へ落す仕組をサデと云ふのだ。其の頃には將軍の御座船に造ると云ふ三尺角十三間の材木を此所から落した相だ。今は、奥仙丈の方へでも行かなけりや、此樣ものは無い相だ。又あった所で伐らぬと云ふ。次で赤澤の側に打壞れた小屋の跡がある。赤澤は水に鉱氣があるからか、石が何れも赭色に染められて居る。岩茸が名物だ相だ。暫くしてゴト〳〵澤と云ふのに達する。苔に封じられた大石、小石の下を水が忍んで流れ落ちるので、ごと〳〵と音のみを立てるからだ。此の類の澤は此のあたりに多い。野呂川が大分近いて水音が次第に高くなる。夕近い山氣が身を引き緊るやうだ。次が立石の澤だ。此れが一番水嵩も多い。丸太を組んだ危い橋を傳って下りて、流れを横切る。

此れから細い澤を二つ許り越すと嘉助の澤と云ふのに出る。路は

急に降って、此の澤のごろくた石の上を横切ってから、又も下りに下って野呂川の水際へ突き當った。

左まで廣い谿谷では無い。向ふ岸には白峰續きの連峰が眞黑に迫って、頭は大空を狹めて居る。然し磊々と横はった怪岩亂石に堰かれて雪を噴き乍ら南へ奔馳する激流に臨んだ時、此れが名にのみ聞いて、とても到り難いと思って居た、彼の山奥の水かと嬉しかった。源は千秋の雪を嚙んで來る故か、手を入れると冷さはぢんと齒の髓まで泌む樣だ。川の中の洲の上にも、白樺などが伸びて居た。シレイザワの小屋迄、川添ひの濕々した林の中を行く。蕗や羊齒などが繁って足を隱す位だ。小屋は二軒ある。

此れを右にして猶ほ林を辿って行く中に、今度は川原へ出た。石に踞して暫く休む。粘板岩や、硅岩や、石の色は紫がかったもの、青味のあるもの、紅に近いもの、大きのは二十疊も敷け相のさへある。水は淺黄。美しい川原だ。シレイ澤を越す。澤の上にシレイ澤の瀧が懸って居た。始終大石の間を縫って行く。アカヌケの澤を渡る。此處の川の中に美しい瀧が落ちて、萬斛の水が聲鞳と鳴って居る。アカヌケの瀧と云ふ。次で丸太を組んだ橋を二度渡って又野呂川の右へ歸る。此れからは多くは嵯傳ひで、藤蔓で絡げた危い棧や、岩角を抱いて、渦卷く碧潭の上を越す所が幾つかあった。ゴーロ澤と云ふのを途中で一つ越すと直に對岸にコカンバ谿と大カンバ谿とが間を隔てゝ顎を張って居るのを見やる。大カンバ谿を壓して山間からもう北ヶ岳が野呂川を覗き込んで居た。雪の縞がくっきりと黑い膚から浮き出して居た。大カンバ谿の向ふの山蔭に低く長い小屋が見えて來た。夕餐を炊く烟が緩々とくゆり上って火がチラ〳〵する。小い人影が隱現する犬の聲が聞える。夕日は川上に重り合った山々の額を薄り照して居る。谿の隈々には夕靄が靜かに烟って居る。一同の草臥れた足も勇んで丸木橋を向ふへ渡ると直に右が其の廣河原だ。川岸にも削った板が投げ出してあった。百日草の淡紅色に咲いた下に鉋屑が散ばって居る。丸太が澤山切り倒してある。慓悍らしい小犬が飛び出して、仰山に吠え懸かる。山袴を穿いた樵夫が小舍の中で板を削り乍

ら目を光らせる。娘らしいのも居た。小供も居た。細長い小舍は五棟程に仕切られて二十人位の山人は住んで居るらしい鉋屑が山の樣だ。

小屋の川の方から二つ目が大曾利の源十の住居だ。道者に談判させると『無代では嫌だ』と云ふ。其處で皆、草鞋を解いた。汗の滲んだ洋服も總て小屋の前へ脱ぎ捨てゝ、鉋屑の上を踏み乍ら水際へ下りた。浮べてある丸木傳ひに川の眞中へ出て身體を拭ふたが、手拭を浸して二絞り目で指が痺れた。

日が暮れた。月の白い夜となった。澄んだ空にヴェガが大きく、強く輝いて居た。爐を圍んで借りた鍋へ、川の水で白げた米を打込んで炊いた。若布の味噌汁の熱いのを啜り乍ら、食事を濟した。部屋の廣さは六疊もあらうか、屋根と、隣との隔ての壁は栂の皮で、眞中へ爐を切って、向ふへ少高い臺を作って、家族の寢所としてある。自分達の居る所は畫間、板を削る、謂はば仕事場で、板敷だ。着座を敷いて横に成った枕もとに山刀や、一連發の鐵砲や、伐採用の道具が並べてある。壁の大きな筋孔から、隣りの家族が覗ける。足を伸すと爐の火で焦げ相だ。家根裏は漆を塗った樣な黑さで、白檜の焚火の舌が時々嘗め上げるので、ぼろ〳〵と燃えかけるのを源十が長い棒でがり〳〵と搔き落す。

源十は五十近い、六尺豐かの、如何にも嚴い、骨太な、力の結晶とも云ひ度い樣に肉が引緊って居る。毒の無い、打切棒な言葉で種々と山の話をして呉れた。山人の代表者だらう。力は飽く迄强いし、鐵砲の名人、睨んだら逃した例が無い相だ。一所に二人の逞しい娘が居る。二十近い姉と十六七の妹、手織の縞目も分ら無い樣な筒袖を着て居る。時折り足を踏み伸して指へ藁を引掛けて草鞋を編んで居る。醜いと云ふ方ぢや無いが、言葉の亂暴なのには驚いた。用意の毛糸のシャツを着込んで、洋袴をも穿いた儘、火花の足に散りかゝるのを氣にし乍らとろ〳〵と夢に入ったが、間も無く非常の寒さに目が覺めた。起き上って見ると皆もう眠った後で、爐の中には螢火程も殘って居無い。入口には戸も閉ざゝ無いので、霧も流れ込まう。星が燦々覗き込んで居る。更けた夜の山氣の冷さ、如何程縮まっても堪え切れ無い。夜着は勿論無いし、此れ程の事はあるまいと毛布をさへ置いて來て終った。隣の愚僧君もとう〳〵起上って、其處で焚火をして能いか如何かの相談をした。其の間にも齒の根が合はない。危險だらうと諦めて、又横になったが、到底遣り切れ無くなって、友は外から白檜の木切れを集めて來た。自分は西洋蠟へ火を點けて、其れから焚火を初めた。眠い目で積み上げた燃料へどつと火が移ると焔の先か屋根裏迄届いたので、慌てゝ棒で火を崩す。此れ程火の有難味を感じた事は無い。

他の二人は感心に熟睡して居る。向ふの寢臺の上から厚い夜着がむく〳〵と動くと、源十の髯面が起上って、長い太い手で、下の棒を取って屋根裏をがり〳〵引搔いて『寒かんべえ』と云った。恐縮した。其の中他の二人も起きて火に暖った。愚

僧君は火の消えぬやう〳〵と氣遣って計り居たので、一時程しか眠らなかったと云ふ。

山物語

大曾利の源十の話と、後に安通の芳一郎と云ふ、此れも樵夫から聞いた話を一所にして此處に紹介する。

△山に棲む獸は、岩鹿(又は青鹿)と熊が多い。今頃は岳へ登って居る。八九月頃捕るので、熊は孔の外で騷いで追出したり、稀には簑を着て、孔の奥へ入って行って、熊に人間とは思はせないで、次第に外へ押出す樣にする。そして待構えた山人が、鐵砲を打放す。獸が人を傷ける事は少い。蘆安で多く取れて二三疋、三十貫位のが居る相だ。岩鹿は多い。皮は二圓五十錢位にはなる。

△伐採した材木を流す爲に「鐵砲」と云ふものを造る。材木を組んだ堰の樣なもので、此れが爲水が昂まると、其れに穿ってある六尺四方位の窓の戸が開いて水がそこから奔逸する。材木が夫れと共に流れ出る。山人は水に浮かせた二本の丸太の上に乘って鳶口で引懸けては材木を流すのだ相な。此の鐵砲の爲にヤマメは夥しく損はれて、食料とするに乏しくなった。

△白峰の山腹には大カンバの池がある。物凄い池で、牛の主が住んで居る。此の池へ放尿したものとか、岩鹿の肉を洗った者とかゞ、山から下り路で恐しい豪雨に出會って、野呂川を渡れ無くなった話が多くある。『罪のある者がゴハンのイレ(御飯の煎り?)を參らせると』何時迄も水の上に浮いて居る。罪の無い者が投げ込むと、水が渦卷いて吸ひ込んで仕舞ふ。水底の「お石」を拾って歸って茶椀へ入れて水を注ぐと泡が立つ。食中りに靈驗がある相だ。山人仲間の此の池を信賴する事は大したもので、秋口、川の水嵩が減じて、木を流すに困る時は、此の池に祈りに行くと屹度雨を降らして呉れる、白い旗を御禮として奉納するのだ。

△農鳥山の農鳥は此の方面からは見えぬ。が、鳳凰山から見ると農馬が現はれる相だ。自分は今迄甲斐の群山に現れる殘雪の形と傳說とに就いては、一種の興味を以て漁り歩いて居たが、此の農馬の事は今が初耳である。鳳凰の農牛の誤りで無いかと思ったが、正しく春の暮、農鳥山に現はれるので、雪の消えた後に黑く白鞍を置き、シンドリ、ハンドリ(馬具の名)をさへ備へて居る相だ。秋になって草葉が色付くと、黑馬は赤馬と變ると云った。面白いと思ふ。何日かは其の姿を知りたいものだ。

△此の小屋から鮎差へは野呂川傳ひで南へ五里ある。それから奈良田(西山の湯)迄は三里で、途中一里半から川を離れ

ると云ふ。高遠へは北に向って北澤―戸臺―溝口を經て十一里。奥仙丈岳へは二里だ。初めは北へ、半分路で南へ折れるので、坂形の高遠の村は眼下に手に取られるやうで、木曾路から遠州路迄見遙かせる相だ。

駒ヶ岳へは北澤迄二里、富士製紙の伐採所迄一里、それより一里半で登る。地藏、鳳凰へも杖立まで取って歸らずとも、此の邊から―難路ではあるが―登れるやうに聞いた。以上は大体に於て聞き誤りは無い積りだ。

△山人は四月初旬、雪が七八尺もある頃から、通例二百日間は小屋住居をする。白檜の板は篩などの木格にするので、能い金になる相だ。冬は里で其の板を丸く撓め乍ら、山籠で儲けた金を使って仕舞ふのだ。

（二十七日）北ヶ岳登攀

駒鳥の鳴く音と、川水の響とに、廣河原の夜は明ける。導者に呼び起された時は、四時を少し廻った計りだ。園爐裏には、もう榾火がめら〳〵と燃え上って、自在鍵に振下げた眞黑な大鍋は、蓋がぶつ〳〵と吹くと白い烟を上げて米の汁が吹き溢れる。主人の源十は裏の川から水を汲んで居た。外へ出ると未だ薄暗い。重疊たる群巒の底に、名のみは廣河原の、僅に膚寸の平地を得て、呼吸して居る此處だけあって道程としては左迄遠くも無い白峰一萬二百尺の絶嶺が、其の絶巔の三角標が、旦には日輪の第一光を浴び、夕には其の最後の光を宿して居るとは反對で此の短か夜に七時に漸く日が昇る。四時には最早日が落ちると云ふ。朝の影、夕の影が入り亂れる秋より冬にかけては如何樣に詫しい事だらう。

夜霧が深かったのか小舍前に散らばって居る鉋屑は濕りを帶びて、朽葉の樣に、踏まれても音を立て無い。川へ降りる。所所に大石を押へとして浮かしてある丸木を渡って中瀨へ出る。茲もちよろ〳〵水が流れて居る丈に、樂いやうな冷さが足を爪立たせる。流石に大空は全然明け切って、目を見張っても星らしい光は認められない。其の空を映して野呂川の水は仄明るく滑らかに流れて行く。眞夜中の谷川で何かの神秘を行ったが、今はけろりと澄し切って、愚な顏の自分達にぢろりと一瞥を呉れて流れて行くのが、直き川下で邪魔物の大石に喰ひ止められやうとして慌てゝざは〳〵と騷いで走る。

向ふの山蔭は殊に暗い。空は明らんでも、日の目が覗き込む迄はと云った風に、凝と身を堅くして夜を抱き締めて居る。しっとりとした朝の山奥、清く澱んだ大氣を振はして、駒鳥が鳴く、頻に鳴く。

顏を洗って小舍へ歸ると、直ぐ支度に取り掛った。午後になると、大方は雲か霧かに岳は隱されるからだ。源十は鍋の蔓が附根から挽げたので、澁い顏をして工夫して居た。娘は丸い裸な肩を夜着から剝出して、飯を食ふ樣を眺めて居た。『彼樣に遲くなって焚火をしたり話をされたりしたので昨夜は、へえ、寢られなかったゞ』と隣の男はもう白檜の板を削り乍ら

高聲をかける。忌々しい奴だ。

四時半に出發した。荷物は大方小舍へ置いて、雜囊へ晝飯の燒むすびと、鮎の鑵詰とを入れて導者が脊負った計りだ。山犬の子の樣な犬も馴れて、尾を振って居る。人の善さ相な澤山の目に見送られて潔く岳へ向ふ。

川に添ふて木賊の原を少し南へ辿ると直き右手の山へ入る。此處にも用材衆の住むとか云ふ小屋が一軒蹲って居た。青い烟が未だ薄暗い木立の間に彷徨って居た。大きな白檜の木が切り倒してあって枝や葉が縱橫に張って居る上を越えさせられた。左に下ると谿川が大カンバ谿に流れ込む所へ出る。其の流を橫切って大木が倒れて居た。岩角を攀ぢて此の自然の橋を渡った。

大カンバ谿は其の源を大カンバの池から發すると云ふけれど、事實は左樣で無いらしい。然し大カンバの池の傳說を知らぬ先から、大カンバと云ふ名が、自分には如何にも荒れた、凄い、調子を帶びて居るやうに思はれてならなかった。其の大カンバ谿が前にくわつと開けて居る。眞黑に老木の生ひ茂った大カンバ山と小太郎山との間を抉って源の方を窺ふと、北ヶ岳が雪班らな臚頂に朝日を染めて、瞰下して居る。物々しいと云ふ氣に、周圍を立て籠めさせて、大カンバの激流は岩角を躍り躍って野呂川へ突いて行く。谿川の其處此處に白樺が岩角を抱いて、根は水に洗はれ乍らも吾れ自由の天地を得たりと云った風に枝を張って居る。其の下には自然と倒れた木や、切り倒されたのが、流れに首を突込んで居た。

大カンバ谿の水音を暫くは左に聞き乍ら愈々登って行く。蠱々と嚴しい牢獄の格子の樣に、前後左右に立ち開かる樅や、白檜や、白樺や、唐檜や、栂などの大木が高く枝を交へ、葉を亂して、ぽつかりとした大空の目も隱されて居る。サルノヲガセが霧を帶びて、重たげに枝から菅笠の廂へ垂れ懸る。『山路元より雨無うして』と云ふ小供の時から好な文句が胸に浮ぶ。如何にも濕やかだ。日は未だ森を暖め無い。駒鳥が頻に鳴く。が。姿は見えぬ。大木の間に僅に路らしいものが迂曲って、縱に通って居る。森林の香。

昨日の疲れが漸次に膝に應へて來る。息が喘んで來る。無言で岩角に杖を突立てゝは攀ぢ上る。水音は次第に遠くなる直ぐ前に行く導者の蹤は何時も自分の胸の邊にある。時々、岩角が轉ついたり、木の根に足を打突けるのは有難く無いが、左樣で無い場合には、濕々した上を封じた苔が、やんわりと剔れた草鞋の底に快い。太い蔓が見上る梢から、見下ろす谷へ懸って居る。何時伐り倒した大木か半ば腐って橫はって居るのが多い。右に谿川が現はれたが直きに其れも水音と遠ざかり、尋では山彥にも響かないやうになった。

其の中、甲斐ヶ根神社の中宮のある所へ出た。僅か計りの平地で、空が仰がれる。直ぐ二間計り下に、行者の休み場であった

とか云ふ、此れも同じ程の些細の地があって、雑草に蔽はれて居る。中宮には、殆んど壊れた白木の堂が殘って居る計りで、見る影も無い。此處で暫く休んだ後、再び木の間を分ける。西洋人が先年野宿した跡とか、木を五六本切倒して、棚のやうに作った塲所があった。

道は險惡になる計りだ。朝日の光が、此の時漸く、枝や葉の重なり合った網目から忍び入って、金色の縱糸、横糸を濃やかに宙で絡み合せ亂れ合せて、そゝくれた荒い木肌や苔に包まれた土の面や、木の根や、岩角や、そして、六人の菅笠に、着座に、様々の美しい文を描き。初めた。森の日光。ツルゲネーフを思はずには居られなかった。駒鳥の聲が一際澄み切って聞えた。

岩角に踏み懸けた爪先に力を集めて一伸し伸すと、今肩にあった日光の紋様は、活動寫眞のフィルムの移り變りのやうに、するりと着座の背を辷って腰に落ちる。路は益々急だ。木立の透いた間から、振返ると、野呂川の向ふの峰が黑く鼻を衝く様に見える。頂の剝げて白いのが地藏ヶ岳だと云ふ。胸が躍る。手前のはゴーロ澤の上にあるゴーロ澤頭だらうと云ふ。然し例の古繪圖にある高根天狗ヶ岳が丁度此の見當にあたるから、夫れかとも思はれる。大氣が清々しくって足が輕くなって來る。

次いで雨乞平と云ふのに出る。此のあたりは最も森林の深く茂り合って居る所だ。で、此處に「サデ」を設けて木を伐採して居る。サデと云ふのは材木を谷へ辷り落す樋の事だ。太い丸太を四五本づゝ並べたのが、緩い傾斜で、木の間を通じて一町程の長さに續いて居る。兩側に一層太い丸太を添へて縁としてあるで、一間二間位の長さに切った材木を此の「サデ」の上で辷らせるので、サデを離れると其の勢で可成りの谷間へ轉び落ちる。雨の後などは殊に能く辷ると云ふ。三尺角十三間などゝ云ふ大木を落すには「サデ」として澤山の木を犧牲にしなきや成らぬ相だ。其の「サデ」の上を傳って行く。頑丈なもので、表面は擦り剝けて居る。中程の所に山人の飲み水を入れた小樽などが置いてあった。サデが盡きた所に一間二間位の皮を剝いだ白檜や、唐檜の材木が澤山轉がしてあった木の香が快く靜にかほる。

此れからは全く路が無い。北ヶ岳と思はしい方角へ向って木の間を這ふやふにして行くのだ。森は益々深い。倒れ木は益益多い。蛇の住んで居無い事を知って居る丈に心强いものゝ、斯くした大森林の底には、何となく陰欝な、無氣味な何者かゞ潜んで居る心地がする。草双紙で見る魑魅魍魎や、神仙譚に現れる侏儒など、決して其様ロマンティクなものが黑い葉裏や幹の洞穴に棲んで居やうとは思は無い。然し何と無く恐しい。森林として、老木として、不可思議な呼吸をして居る様に思はれてならぬ。凝として彳むと、何事か初まるのを待って居る時のやうな氣がする。まはりを取り圍むだ、すゝ

黒い唐檜や、樅や、栂の幹にも、白ちやけた白樺の幹にも、皆生きた血は通って居る。大きな何者かゞ見下して居るやうな氣もする。地衣は一面に這ひ廻って土を露さない。大木の立ち枯れて倒れたのが、眞白な大きな枝を幾本と無く擴げて行手を遮る。着蘿に引っ懸る。前世紀の巨大な怪物が斷末魔の苦惱に其の肋骨の一本々々まで、虚空を掴んで呻き立てた其の骸かとも見られる。枝を傳はるとボクと鈍い音と共に折れる。又、伐り倒された大木が花苔などに隙間無く包まれて横はって居る上を傳ふと、妙な音がして、二つに崩れ割れる。足は膝節迄木の中へ潛る。壞滅とか、森の恨みとか云ふやうな事が繰り返し胸に浮んで來る。

追はれるやうに倒れ木の上を傳ったり、跨いだりして千鳥に登って行く。尋で白樺の林へ入る。駒鳥の聲はもう聞え無い。シヽブキや、ハリブキや、ゴハや、オシダや、種々と大きな葉の茂みが膝頭迄隱れる程で、黄や藍の鮮かな花がもう其間を綴り初めた。多くはシナノキンバイである。然し其の羊齒や蕗類の香が、枝葉の香と混じてむんむと鼻を突くので我慢が出來無い。枝を振り廻して薙ぎ倒しては路を作って登って行く其の中急に森が左に開けた。北ヶ岳續きの峰が赤黑い、嚴い肩を怒らして、頭の上に蹲って居る。振返ると地藏一帶が自分達と同じ位の高さに聳えて居る。鳳凰の地藏佛は未だ見えぬ。外の眺望は、左は今迄の森林と右は、北ヶ岳の岐脉が波を打って居るのとで遮られて居たと思ふ。

此處から上は一面に種々の色の草花で埋められて居る。周圍に白樺の森があっても今迄に比べると頗る疎だ。そして其の白樺の幹も枝も皆谷の方へ身を傾けて居る。面白い形だ。シナノキンバイの咲き亂れた崖は頗る勾配が急で、途中までガレ（石の澤）の細いのが通じて居る。此れを厭々這ひ上った。日は脊から照り付ける。水筒の水は空になつたしガレから浸み出す水は蟻を溺らすにも足り無い。そして石ががらく崩れる。其を登り切った時には大息を吐いて、白樺の横斜の幹に身体を寄せた。次で草花の中を暫く這ひ上ってから左手の樺林へ潛り込んだ。手近の木の幹を抱いては登る。富士櫻か、櫻の花が散って間も無いので、白い蕋と赤い蕚とが枝頭に殘って居た。

林を潛り乍ら目を凝らすと、左の方に木の間を洩れる青空が一番低いので、其の方角へ攀ぢ登る。やがて、大きな白樺の木を髮として谷へ覗き込む樣な大岩が左へ現はれた。その岩の肩を上ると、一度に今迄の林は盡きて、再び四方は廣濶となる。先刻仰いだ鉢金形の山塊は眞上になって夫れから右南へ尾根が伸びて恐しい深谷を成して居る。然し此の山塊は未だ北ヶ岳の絶頂では無い。爪先から其の尾根―空線を形造って居る尾根までは一面の這松帶で、眞黑だ。空の碧は目の前に迫って居る。あの山塊を右に避けて、あの尾根にさへ登って仕舞へば……と云ふ奥底の知れ無い期待と不安とが、胸に大きな皷動を打たせる。振返る後は目も眩む谷間。高く深く晴れ切った夏空の、北に、東に、南に、八ヶ岳、立科山、鳳

凰、地藏、藥師、觀音、そして富士！六人は遮二無二、射り付ける日を浴び乍ら這松の中を押し分けた。其の赤い實が美しい。香が快い。押し分ける、踏み跨ぐ。最早先登は青空を抽いて。尾根に立ったが聲を揚げない。自分も次で尾根に登った。そして思はずむと息を呑んだ。

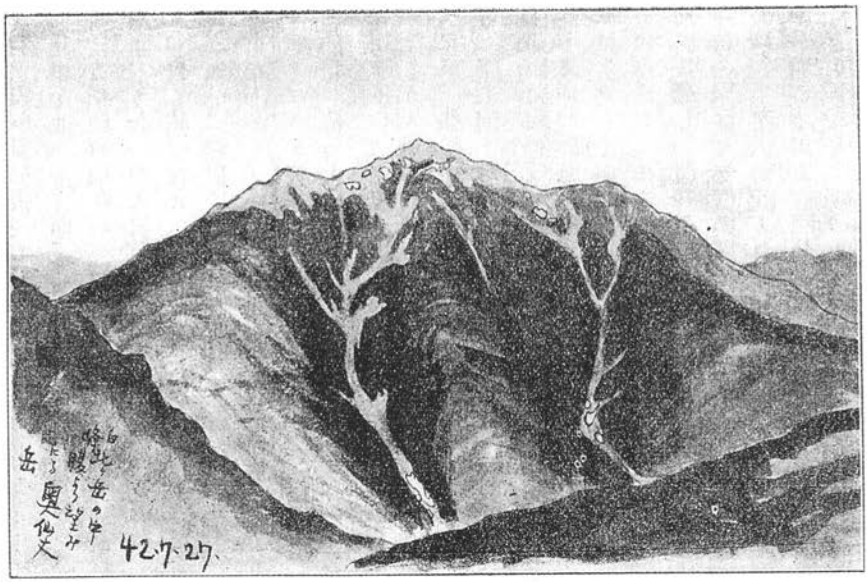
崇高美の底には何時も恐怖を含んで居る。絶大なるもの無限なるものに對する恐怖である。此れが一番先に胸板に打付かった。恐しい程壯大な眺望である。度胸が落付く迄、足が岩に踞る迄は六人とも暫く無言で立って居た。微細な人間の二ッの瞳に映すとして餘りに色彩が複雜に過ぎる。範圍か廣濶に過ぎる。眞暗な隧道の中を手擦りに辿って來て、不意にパノラマ——恐ろしく明るい、光線の強いパノラマの前に突きつけられた時のやうに、視覺は餘り慌て過ぎて、遠近も何も一時は混亂して仕舞ふ。身体中目にでもなたやうな晴れやか過ぎる心地がする。

大空は怪しい迄に晴れ渡って、無限から無限へ深い紺青を擴げて居る。其の紺青を頭に戴き、其の紺青を背に負って信飛から越中、越後の連峰が、今新しく生れ出たものゝ樣に、各自瑞々しい山容を重ね合せ、連なり合せて、鮮かな綠から淡い黛の色と、次第に遠く〳〵擴がって行く。

立って居る所は幅にして一尺に足りない尾根だ。此れが深谷を左右に、南へ伸び〳〵て大曲りに曲った其の向ふに、恐しく巨大な北ヶ岳の山塊が、圓頂閣の樣な形をして屹立した勢は、如何にも壯嚴なもので假に地軸を露出したらば——と思はれる位だ。絶頂の三角標は未だ〳〵頗る小い。

直ぐ足の爪先からは、此處も攀ぢ上って來た方と同じ樣に、這松帶より初まる千仞の谷が恐しい傾斜をなして栂か、樺か、只眞黑な色が幽かに漠として底を埋めて居る。そして其の喬木帶が再び頭を持上げる所から、奥仙丈岳が獨り悠揚として空を摩して居る。頂は畧三つの峯に分れて、其の露出した部分は稍々紫がゝった色で、所々に小さい雪の斑を點じて居る。二つの縱谷も同じ色に迂曲り下って、其の他は一面に濃綠に蔽はれる。そして濃綠の綠は稍淺い綠に彩られて居る。谷底の「鐵砲」まで手に取る樣に見える。

奥仙丈の裾が東へ伸びて暫くして、名の如く凹凸の烈しい鋸岳と昂まる。そして甲斐駒ヶ岳の白く崩れた尖峯が怪しい姿を爪立てゝ居る、甲府方面から見る程人を魅する形で無い。其れから餘程の隔てを置いて、東の岳、鳳凰が聳える。地藏佛の怪岩が白く兀として空を突いて居るが駒ヶ岳と同じく周圍の山容の變化から何時も程の興趣を覺え無かった。賽の河原、地藏ヶ岳、藥師、觀音、黑い膚に頂のみは白く連って後の方へ顏を捻ぢ向かせる。駒ヶ岳の向ふに八ヶ岳が立派な裾を曳いて落ち着き拂って聳えて居る。最も高いのは赤岳か、餘の峯々は其の凜たる風貌に一切を任じたと云ふ樣に殊勝らし



く蹲って居る。左に立科山の圓錐が尖って居る。八ヶ岳の右肩の向ふからは黒い一抹の雲が次ぎ次ぎに湧く。慥に淺間の烟だと導者は云ふ。奥仙丈と鋸岳との間には、幾重の小山脈が、僅に頭のみを見せて、數知れず走って次第に後へ昂まって行く。そして其の果を、我が日本アルプスの大連嶺が限って居る。絶大な穂高の山塊が、奥仙丈の直ぐ肩のはづれから起る。金色を含んだ雪の天衣！尋で槍ヶ岳の尖鋭！信州路へ足を踏み入れた事はあっても、槍ヶ岳は名にのみ聞いて、其の英姿を望むのは今が初めてだ。それも天の一角と一角、懐しさは止度も無いが心を通はすには餘り隔たりが遠過ぎる。とても自分の物にはならない。何と無く胸に空虚を覺える。

槍ヶ岳からは、殆んど高さに於て平等な群山が、暫く北に走って行く。そして漸く首を上げた雪白の峯々は、立山と白馬ヶ岳であらう。それより猶ほ北は次第に空の色に溶け合って居たと思ふ。

奥仙丈の左から、北ヶ岳の後の尾根まで、即ち西の眺望は、さう廣い間隔も無いが、同じく雪を帶びた乘鞍岳や、御嶽らしい山々が望まれた。見て居る間に、雲が亂れ初める。そして細く白い犀川の上流（？）が、幾重にも曲折して、鮮かに浮き上って居た。

後は野呂川の谿谷の東、先に述べた地藏一帶の南に、甲府平原の一部が、低く赭色に澱んで、裏富士が思ひもよらぬ高さから、あの秀拔な裳裾をさばいて、思ひ切って引き擴げて居る。今更ら美しい女性的な姿だ。半腹以上は日光の具合で驚く計り、深い瑠璃色に染まって居る。右の裾は、半ばから岳の尾根で隱れる。甲府から見る富士中腹に近い卓子形の峰は、著しく下の方へ引離されて、今は見る影も無く、富士からは全く忘れられて居るやうだ。

二一

肌薄な身に山の風が冷い。燕は氣紛れな鳥だ。町人の袖の下を掠めて飛び交ふ眷族を持ち乍ら、此の高根の空に、一羽、二羽、鋭い翼を張って飛廻って居る。

尾根を北ヶ岳に向って辿り初める。勾配はもう急では無い。兩側を見下すと足が振らつき出す。這松の頂が足許に盡きる所に黄花の石楠花が一輪咲いてゐた。暫くして右に突出た峠の額を迂廻する。先づ第一の度胸試しだ。粘板岩の薄片が層層重なり合った大岩角に縋って擦り拔ける樣に、罅隙を攀ぢ登ると、足懸りの岩ががく〳〵動く、或物はがら〳〵と頽れて、目も眩む谷底へけし飛んで行く、再び尾根を傳ふと、稍廣い中凹の塲所へ出る。兩側から抱へ込まれて居るので、風は當ら無い。野宿に適した所と思った。イワウメや、チングルマや、イワツメクサや、チドリランなどの愛らしい花が、此のあたりから、一面に岩間々々を埋め初める。多くは厚い滑らかな葉を蔓らせて居るので度々、草鞋が辷りたがる。

ざく〳〵と後退りする石の上を踏んで、再び險しい尾根の緣へ出る。此の緣が西へ曳いて、更に南へ曲った所から、青空に、北ヶ岳の大山塊が頭を壓して蟠って居る。北ヶ岳が向ふの端れに大膽な線を描いて、一度は低くなると、次いで再び東南に向って支脈を昂まらせて、其果は野呂川の谿谷へ雪崩れ落ちる。

元より大能の靈技に成った大山塊である丈に、蠢爾たる人間界の工作を以て、これに比べるのは不遜の罪を免れぬかも知れない。然し强いて類似を求めさせれば、北ヶ岳は高さ幾千仞、恐しいまでに巨大な、赤黑い石の圓頂閣の、額の一角を荒っぽく削り落した形とも云はれやう。圓頂と云っても單になだらかな弧線では無い、端倪し難い幾變化を綴って出來た圓頂である。そして、野呂川に面して削り立った廣額は、凄じい迄の垂直な大絕壁で、一萬二百尺の絕巔から、息をも繼がず眞逆樣に薙れ落ちて行く。岳を盟主として、其の左右に羽翼を張って居る兩支脈、――一は自分達の脚下から起る――、も、我れ劣らじと南北から、此れも著しい急勾配を作って同じ方向へ直下りに下る。そして遙かの途中から鼻を突き合せて北ヶ岳の裾持ちになる。岳の大絕壁は初めて此處からやゝ緩やかに、落付いて野呂川へ下るのだ。即ち岳と其の兩支脈とは、此處に恐しい深谷を抱き込んで、巨口將に天を呑まうとして居る。

岳の緊硬な絕壁の膚には、無理に抉り取った樣な、荒い、强い凹みが奇怪な形を彫り付けて居る。そして十時近い日光に、夫れ〴〵深い紫ばんだ影を潛めて居る。此の緣には地衣らしい綠色が彩ってある。雪が白銀の色鮮かに其處此處と凹みの中を塡めて居る。隨分と廣い班點もある。殊に大絕壁の面を稍下った所から、二條計り、野呂川の谿谷に向って眞一文字に走り下る雪谿は、如何にも强い、力の籠った線を描いて處々に美しい蔭を宿して居る。幅は一、二間位なものだらうが其の長さに於て白馬ヶ岳の雪田を凌ぐと云はれたのは確かに此の雪谿の事だらう。

岳の向ふの支脈は其の傾斜面を這松や、下っては白樺、唐檜などの森林で蔽はれて居る爲に、日に背くと殆んど眞黑で、思ひ出したやうに白く立ち枯れた大木が其の中から身体を乘り出して居る計りだ。

其れに對して自分達が立って居る支脈は、一間計り下った所に、低く横に堤を成して居る殘雪を踏み跨ぐと、其の下からは一面の黄いシナノキンバイの群が、果しも無く、谷底へ伸びて行く。そして途中から斜に右へ擴がって岳の大絶壁の中腹をも美しく彩る。若し香が高い花であったなら、此の尾根に立っにも得堪へないだらう。が、下へ進む程漸く這松や樺林に狹められて終りには一條の線と變ずる。そして其の絶えた山懷に、彼の大カンバの妖しい池が緑に一圍の白雪を帶びて小い古鏡を横へて居るのが見える。それから下は黑い森林で、見え隱れに白い谿流が野呂川に志して居る。

中腹より見たる北ヶ岳大山塊

塵の世のものならぬ美しさと、怖しさと、嚴しさとの極みを盡した此の雲表の大觀を、思ふが儘に貪り得た、其の幸福の感じは、此れを、未だ嘗て彼の尾根の一角に、杖を立てた事の無い人に、現さうとしても、到底人間の業では及びもないのだ。谷底には風が渡るか、耳を澄すと時折り、遠潮の動みの樣な聲が、靜かに向ふの尾根を這ひ上る。只見る岳の大懸崖の罅隙からふふふふと凄じい勢で末擴がりに霧が湧き起ったが、やがて淡れて、何時か大氣に消え込んで行く。此れが相圖か、先刻から地藏岳の峯に往來して居た雲が、次第に西へ崩れ初めた、振り返ると駒ヶ岳の絶頂からも盛に雲を吐いて居る。剛力が白茶けた顏で心配氣に云った通り、全然噴烟のやうだ。

高山に登って雲の湧くのを見るのは、如何にも壯觀だが又不安を免れ無いのは誰も知って居やう。通り雲の影が靜に山の額を撫でゞ行く。其の時同じく其の蔭の中に入れられると、何と無く冷りとした心細い感じがする。其れを雲が四面の山々から俄かに色めき出して、それと共に冷い風さへ折々耳朶を鳴らし初めたのは、決して快い事ぢや無い。一つには岳の絶頂からの眺望も氣遣はれる。

然し一行は運を天に任せて、導者の導く方向へ付いて行った尾根から稍々谷の方へ、險崖を下って崩れかゝる岩角に縋って行くと、茲にも長さ二間程の雪の堤が横ばって居た。其の表面は氷の様な硬さである。茲で思ひ入れ咽喉を濕した後、又尾根へ上って只或る岩蔭で腹を拵へる事になった。時に十時。一同は小い美しい花に蔽はれた傾斜の上に、腹を押し當て、鑵詰の鮎に燒むすび、手拭に包んだ雪を嚙んで垂液を作っては、舌鼓を打って居る。自分も頻ばり乍ら岩に踞して首の痛くなる程仰向いては北ヶ岳の大圓頂閣を寫生しにかゝった霧が折々湧く。そして餘りの巨大に瞳は惑はされて、寫さうと凝視めて居る岩の凹み、その曲線がぐら〳〵と、左右に動き初めるので輪廓を取るのでさへ大抵な事ぢやなかった。及ばず乍らも出來得る限り其の眞を描きたいと云ふ張り切った胸は壯嚴、嵩高の氣をしみ〴〵と味ひ得た。そして溢れる計の歡喜の底からも、何者かの偉大なる存在を思って一種の恐怖を覺えざるを得無かった。暗い森林で感じたのは無氣味や不安だった。此處では紺青の空深く高い下に、白日の光を浴びて猶ほ且感ずる恐怖なのだ。目も鼻も口も無い、額と云ふ文字も只比喩に過ぎなかったのだが、北ヶ岳の大山塊は山塊と云ふ以上にもっと深く生命を納めて居る樣に感じられてならない。凝と見上げて居ると、凝と何處からか—目は無いが—見下ろして居るやうな氣がする。何んと無く恐ろしい。堅い廣い地盤に足を踏張り、腰を踞えて居るけれど今にもぐらつき相だ。ぐら〳〵する椅子へ腰掛けて居るより遙かに氣が落付か無い。

亡いハーン先生は『夜の樂』と云ふ文章で、熱帶の海の月夜に西班牙ぶりの音樂の音色が如何にも優しさと悲哀との調子を帶びて居た事について種々の感想を述べて居るが、其の中に最も不可思議な感情として、此の音樂からの情緒、初戀の情緒、そして大自然の壯嚴美—即ち恐怖美から動かされる情緒の三を敎へて居る。大自然の壯嚴に對すると美しいと云ふ讚嘆の底に欺き難い恐怖の情を覺える。そして先生は此れを解くのに吾々生物の個性は、過去に滅びた幾千萬の生靈の知覺や情緒などの蓄積、複合から成って居るので、即ち過去の生物が沈靜なる時の自然に對して、感じた歡樂の情と、荒れ、狂ひ、暴虐の權威を擅にした時の自然に對して抱いた恐怖の情とが微妙に錯綜して現在の各自の胸に宿って居る。それが自然美に對する時、自分は理由を知らないけれども、胸の底から美さの感じと共に恐怖の感じが浮び出るのだとの樣に說いて居る。東西を知らぬ幼兒もなほ此の不可思議なる遺傳を證する事が往々あると云ふ。

兎まれ神秘は永久に盡き無い世だ。平凡な事實の中に考へると戰慄するやうな不可思議は幾らもある。メーテルリンクは屢々此れを描いた。今北ヶ岳の大山塊に對しても自分は種々と眞面目な感想に耽らされた。

さあ出かけやうと云ふ。雲行は少しの間に頗る怪しくなって來た。そして霧はふつふつと細い細ひ水滴を吹き散らし乍ら

眼下の谷から上って來る。霧が蔽ってしまっては、岳登りも何にもならないが、行く所迄行かなけりや、氣が濟ま無いので、又も尾根傳ひに絶頂へ志した。尾根は目の前で、急に直立して居るので、岩角へ縋るやうにして、次ぎ〳〵に戒しめ合ひ乍ら、攀ぢ上ったが、幾度と無く岩角がくつついては、冷りとさせた。上り切って一寸一息する。頂上迄にはもう一箇處、斯樣難場がある。

愈々三角標を間近に望むやうになると、案の通り霧が蔓って來た。ふっ〳〵と霧の足が脚下の冷い大額へ觸れると、待ち構へて居たやうに、其處此處の凹みから眞白い烟のやうなのが大額を撫で傳ひ乍ら、非常な速力で絶頂へ登って來る。そして淡れて擴がらうとする間も無く、後より、右より、左より亂れ上る仲間と親しげにもつれ合って、濃さを增す、白さを加へる。嘗て秩父の深山で夜霧の中を炬火を振って歩行いた時に、霧の不可思議さに驚かされたが、今は驚く所の話ぢや無い。濕っぽい冷い風が霧に連れて、兩側から吹き上げて來る。着座は捲くれて宙に游きかける。菅笠が臺の上でぐらつき出す。益々身体が地殼と緣遠くなるやうな氣がする。剛力が先づ目がぐら〳〵すると弱音を吹き出した。西の深谷には蔭が多い。そしてこゝにも雲が、中腹から湧き上って、次第々々に擴がって居た。一行の登って來るのを密かに知って居乍ら知らなかったから今更止める譯にも行かぬと云った風で、動いて居る。西天遙かの乘鞍、御嶽から南に續く連延たる山山にも、もう先刻見かけた雲が擴がって居る。西南の間の三峰山も、成る程其の名に負ふた山貌とは頷かれるが、僅かの頂を殘して雲が湧き立って居る。それを中心として、南北に伸びた、眞黑な赤石山脈は、北ヶ岳から一度堅硬な大うねりを打って再びむっくり頭をもたげた雪の多い間ノ岳、尋で農鳥山に限られて居る上に、雲に半ばは封じられて大壯觀とは云ふものゝ思ふ樣な眺望を恣にする事は出來無かった。東の方も前に比して頗る廣濶な舞臺を開展したが、それ程興味を牽かれ無い。顧ると駒ヶ嶽は盛に雲を噴いて全く山腹以上を隱して居た。八ヶ岳の後の黑烟は淺間に定まった。奥仙丈から信越の連峰のみは一抹の雲も纒は無い。

脚下から湧き立つ霧は次第に擴がり出して周圍を白い闇に搔きくらさうとする。三角標に迫って愈々茲が絶頂と云ふ僅の平地を得た時には、間ノ岳も蓬たる雲に呑まれたり吐かれたりする。大日如來を祀ったと云ふ石の小い祠、元は六七寸の黃金の像を安置して、祠の軒には金鈴が天上の音色を響かせてゐた。其の黃金像は、今鳳凰の屏風岩に移してある相だ。洒れて散らばった儘の木片は、其の時の祠の名殘なのだらう。此處から大カンバガの池見下ろせる相だが雲霧の爲に果し得無い。岩角に縋って見下ろした後では、馴れた袖でも其の儘に這って後退りをしなければ立ち上れない相だ。病人が二人になった。強い風になり相だ、霧に封じられ無い中に一刻も早く。と促されて、頂上はそこ〳〵に再び目の眩む尾根を、這

ふ計りにして降り初める。が、下山と云ふのと、又一つには餘程險崖にも馴らされたのとで、路も捗取って間も無く先刻の岩角―晝飯を食べた―まで戻って來た。此處で各自に、目ぼしい草花を採集した。次で愈々大カンバの池に向って急勾配を降る事になった。岳の額から上は凄じい景色だ。

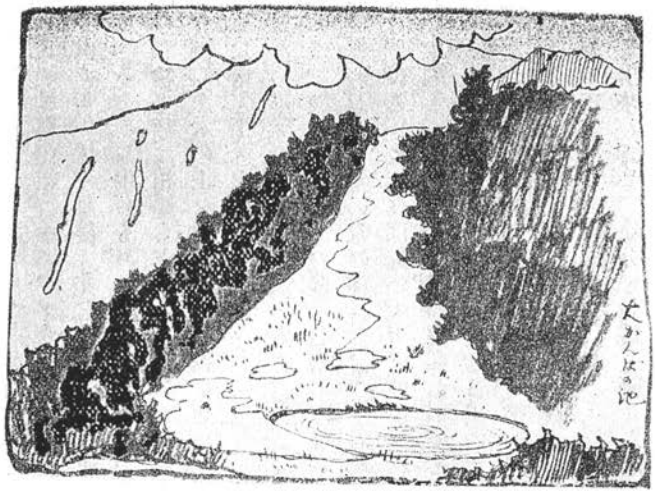
初めは怖しい眼下の深谷に氣を呑まれて、自づと足も縮んだが、導者に勢を付けられて、どう〳〵、頽れ易い岩石の上を攀ぢ下って雪の低い堤を越えると、此れからは彼の爛熟たるれ花畑が大カンバの池迄續いて居るので、目も覺める計り濃黄なシナノキンバイに埋められて居る。

路は勿論無い。遮二無二、此のお花畑を降れば能いのだ。然し足場も無く、辷り易い、轉び易い草の中を降るのは岩石の上を降る以上に困難だ。殊に腰を下して、背を反らせると直きに笠の緣は草花に觸れる程の大傾斜だ。其の中に導者は暫くの距離を辷り下って、其處から起る這松帶の中へ踏み込んだ。そして腰から山刀の鞘を拂って這松の枝を幾本か切り落した。何とするかと見て居る中に一人々々に五六本宛分けて渡して、此れを馬にして辷り落ちるのだと云ふ。珍しい離れ業だ。で、各自に、其の這松の枝を手拭で絡げて手綱を作った。そして此れに跨って兩足で草を一蹴り蹴ると、それはそれは凄い速力で急轉直下する。まるで翼のやうにぱっと着崖が後へ靡く。左手に手綱、右手に杖を取って、處々で杖を踏張ると這松の馬は直ぐ止る。ハイヨーと呼ぶ、チン〳〵と呶鳴る、六人は歡喜の聲をあげ乍ら草花の中を逆落した。危險も何も今は眼中に無い。無暗に辷り下る一蹴り遲れると、もう前に行く者は遙か下に小くなる。そして一度辷った跡には、草の莖が無殘に臥し倒れて後から來るものは驚く計りつる〳〵辷り轉ぶ。時には三人も重なり合って躓こつこと云ふ遊びのやうに、順に着崖の裾を踏まへられ、其の紐に咽喉を締められて、身動きもならずに、口々に呶鳴り合ったのは噴飯の極みだった。又、草の中に潜んで居た石の爲に馬を掬はれて、横っ倒しに轉げる事も度々あった。草帶が二筋位に分れて一寸撰擇に迷ふと、導者は直ぐ側の大木の梢に登って、小手を翳して眼下に大カンバの池を求める。そして再び其の方角へ驀然に辷り落ちる、其の中に這松の葉が擦り切れて枝の爲に洋袴は大きな孔をあけられたので、今度は草花を毟り取って這松の上に重ねて其の上に腰を下ろした。居心地が能かった。シナノキンバイに混じて瑠璃色の花が多くなった。アカヌマフウロだ。黑麥酒の色の樣な黑百合が、車百合と混って首を頷かせて居る。

三十分餘も辷った時分から花が餘程減じて來て、シ、ウドや、シ、ブキや、それに薊や羊齒が膝を沒する位に茂り出した。そして岩が澤山潜んで居るので、遂に這松の馬を棄り捨てゝ、杖一本を力に崩れる岩を踏みしめ〳〵、次第に深く成って來る雜草を押し分けて漸う大カンバの池へ達した。尾根から一時間かゝった。初めのお花畑を降るに比して此の後半は實

に不快な、そして難儀な路だ。足を踏み返した事も幾度だか知れ無い、此の方面から登る人もあるやうだが、時間の經濟の點から云っても自分達の取った順路から登って此方面へ降った方が遙かに樂だと信ずる。

大カンバの池から廣河原の小舍迄は一里半あると云ふ。想像は薄暗い、物凄い白樺の林の中にでも光って居さうだが、事實は左樣でもない。周圍半町足らずの池で、枯葉や枯枝の細い芥で蔽はれた、殘雪が池の南と西との緣に廣く横ばって、其の末は綠礬色のぞんよりとした水の中までずり込んで居る。池畔に立って西を仰ぐと、今直下りに下って來たシナノキンバイの黃花の脉が、樹林に兩側を挾まれ乍ら蜿蜒と縣崖の面を這ひ上って行く。そして其れが、途中から見えなくなって、北ヶ岳の大山塊が半面をなほ雲に蔽はれ乍らのつと上から覗き込んで居る。南は、北ヶ岳と左の尾根とが裾を擴げて、例の雪谿が勢よく走って居る。北は草帶から續く森林—喬木帶が天の一角を蔽って居る、東には池に臨んで「金福天女」と彫った碑が立てゝ古い白旗が二三本しよんぼりと竿に搦まって居る。其の後から又谷が起るのだ。池の北にイむと雲、峰の形、雪の班點が歷々と倒映する。池の主が牛だと云ふ傳說と、池に映る雪の形とに何等か關係があり相にも思はれる。それにしても、金福天女とは西遊記にでもあり相な、されば聖僧は誰れに當らうかと聲を合して笑った。水の色は如何樣凄い、が、左程深相にも見えない。周圍は今述べた通り開濶である。幻は破れて仕舞った。兎に角雪解の水の幾千年と無く湛えられたものだ。西緣の殘雪の近頃消えた跡には雪に壓された灌木の類が、皆見る影も無く枯れて、地に臥して、其の隙から若い芽がふいて居た。



金福天女の碑の下に四五人の山人が腰を下して烟管をくはへて居た。何れも山幕の前で割臺詞を云って、分れて左右に引込まうと云ふ扮裝、何時も腰に下げて居る岩鹿の小さい皮を布いて居る。で、マキリ君に池で游いで見ろ〳〵と勸める。惡い奴は斯うして雨でも降らうものなら、酒手を强請る相だ。然し蘆安には左樣云ふ、太い男は居ぬと導者が辯護した。

此處で暫く休息した。此處迄に採集した植物の名を擧げて置く。元より素人目に洩れたものも頗る多からう。如何したものかチヤウノスケサウや、イチヤクサウなどを洩して來た。

キバナシヤクナゲ、コケモヽ、アチノツガザクラ、シラタマノキ、クロマメノキ、ツガザクラ、チングルマ、ミヤマダイコンサウ、イハウメ、イハカヾミ、タカネヨモギ、ミヤマカウゾリナ、タカネウスユキサウ、ヤマトリカブト、ハクサンイチゲ、ミヤマカラマツサウ、ハクサンチドリ、タカネツメクサ、イハツメクサ、アカヌマフウロ、イハベンケイ、ミヤマカタバミ、ムカゴトラノヲ、タウヤクリンダウ、クロユリ、ギンリヤウサウ、クルマユリ、ウラシマツヽジ、ダイモンジサウ、ホトヽギス、シナノキンバイ等

氏の鳳凰山紀行中に、タカネウスユキサウは甲州の他山に產しないとあつたが、白峰山にも發見された。

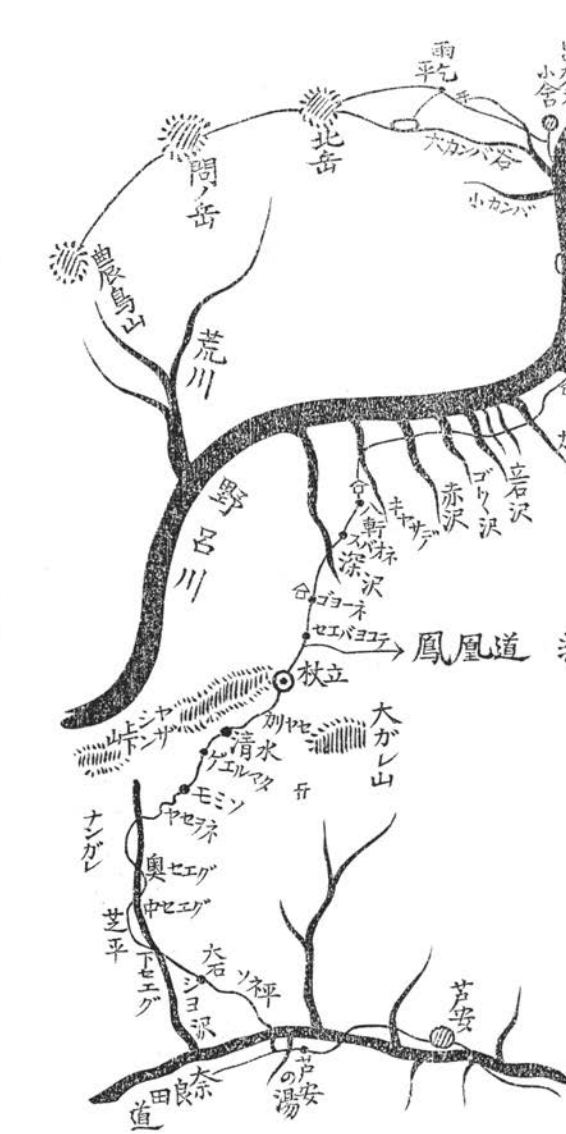
此處で暫く休んだ後、非常な速力で廣河原へ向つた。路は池より北の喬木帶の中へ分け入るので、初めは濕々して蝮蛇を思はせるやうな木蔭もあつたが、雨乞平から攀ぢ上つたのに比べれば、形計りの路もあり、又下りでもあるので頗る樂だ、栂や唐檜の類は相變らず空を暗くして居る。暫く耳にしなかつた駒鳥の音が、また靜かな森の大氣を顫はせる。倒れ木や、切り倒した木の上を幾度と無く越させられた。瀧のやうな谿流をも横切つた。大カンバ澤の上流か、如何かは聞き損なつた。直きに雨乞平へ出た。

茲からは元の路を辿る迄の事で、變つた話も無い。只、山人が十人近くも集つて盛に鋭い鉞を振つて居た。サデの周圍の森林には、枝や葉の茂つた儘の白檜が、幾本と無く、苔深い土を穿つて倒れて生々しい木の香があたりに漲つて居た。憂と高い響がして、鉞の刃の輝きが、黑い木肌に消え込む。閃く、又響いて消え込む。その中に絶望の呻きを上げて、老木は仰反り倒れる。たまには近い大木の枝に靠れて、未練らしく蹌踉ふ足を踏み張らうとするのを、無殘にも引き擦り倒される。森に年久しく威を振つた果が淺間しい姿と變つて、これも同じ一族から組まれたサデの上を辷らされて、深い谷へ落ちて行く。時折、堤を裂き人を溺らせる川の水に、森林の根が含まれ無いだらうか。朝のやうにサデを傳つて元の路と合した。此れから中社のある平迄も大カンバ谿を見下ろす迄も、隨分遠かつた。廣河原の小屋へ着いた時は四時半頃。源十も近所の山人もお山のまわ晴天だつた事を祝つて呉れた。

鳳凰山行きは止めになつた。大コンバの小舍に山人は居無いと云ふので、米を煮る肝心の大鍋が無いのと、又一行の中に、病人も出來た爲で、隨分と熟議を凝したが、來年を期する事になつた。耕ちやんも殘念がつて居た。

今宵一夜の名殘と思つたので、廣河原の小舍を川の向ふから寫生もした。夜は殊に月が美しかつたので、大カンバ谿に面した大岩の頂に蹲つて、默想に耽つた。對岸の山々は、飽く計り月光を吸つて居た。大カンバ山、小太郎山、廣河原一帶は、月光に背いて其の深い影は野呂川へ横ばつて居た。北ヶ岳の一角から雲が緩やかに湧く。其の雲と彼の雪の班とが銀灰色

に輝いて居た。冷い眞白な岩の影は、二人の影を載せて餘の岩の影と共に白い河原へ黑く落ちた。たゞ、月を碎く激流の響。しんみりとした熱い涙が込み上げて來た。



小屋へ歸ると間も無く、晝、白檜を削った其の鉋屑を山の樣に積み上げて火を點けた。凄じい火花を舞はして燃え上った。源十に又も山の話を聞き乍ら、遲く眠りに付いた。此夜は主人が心配して呉れて、方々から毛布を三枚借りて來て呉れた。此れを冠って寢たが、其の夜の寒さは斯うしてさへ足が凍る位に激しかった。

（二十八日）廣河原―蘆安

起きたのは白々明けだった外へ置き忘れた菅笠には、正しく霜が置いて居た。口々に夜半の寒かった事を話し合ひ乍ら、

熱い朝飯を終った。一人前十錢宛呉れろと源十が云ふので、味噌代や毛布の損料やらで、一圓遣ったら、『皆で一升も買ふべい』と云って、親切に送り出して呉れた。

歸りには、赤澤を過ぎてからの路の登りは、少し辛かった。晝飯は八軒の小屋で濟した。始終山人の女連と後先になって山の話も種々と聞いた。そして駒鳥の聲をも。五葉根の小屋で、凰鳳山行きに貯へて置いた米や草鞋を見た時には、殘念だった。杖立へ行くと、空が怪しくなって來た。嶽一帶は少しも見えない。それでも別に降りもせず、清水で再び晝飯を食べて、後は急坂を一散走り、石楠の杖を馬に跨って驅けたは〳〵駒の動悸、身體からは汗と一所に火焔を噴き相だったが、ヤセオネ、も大石も轉瞬の中に走り過ぎて、清水館の崖の上から『氷だ〳〵』と呶鳴り立てた時は、未だ日盛りの三時少し過ぎた計りだった。亭主はのつそり出て來て、東の岳を惜しがった。『來年供をすべえ』と云った。此れから氷にも入った氷も食べた。晩は鑵詰を馳走して呉れた。導者や剛力をも慰勞って歸してやった。但し此の剛力だけは決して滿足な資格の男ぢや無かった。其の夜も美しい月夜。そして主人の持ち出した古圖を寫して遲く床に入った。左まで蚤の難にも會はずに寢た。水聲。

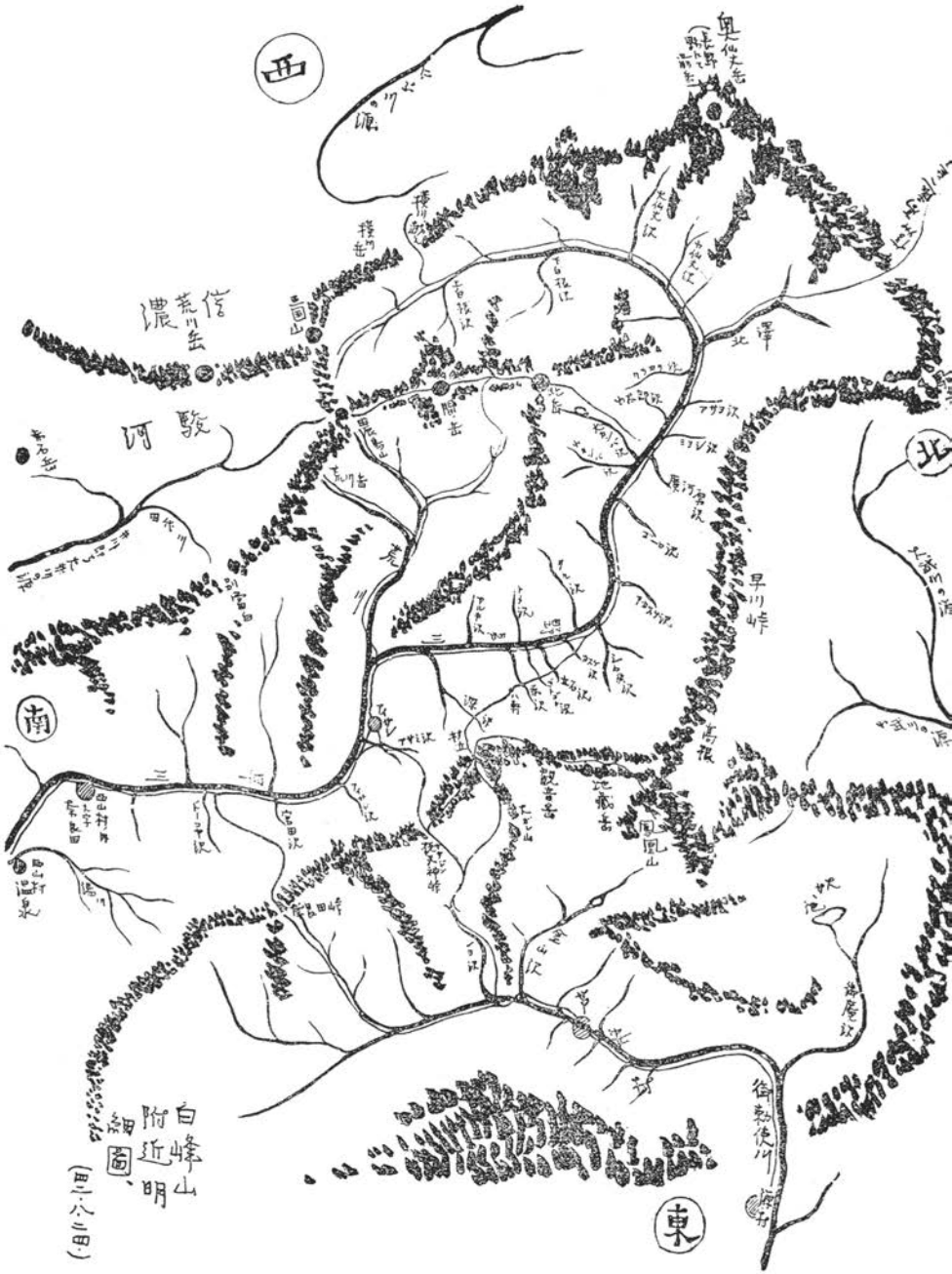
（二十九日）　蘆安—甲府

日の昇る頃、勇んで蘆安を出た。主人は頻に來年を期して居た。約束で耕ちやんの家へよると、親切にも茶菓子まで供へて待って居た。村の俚謠などを聞いた後惜しい別れをした。御勅使川—源村—百々—釜無の渡しを越えて十二時、ガタ馬車で甲府まで走らせる道々、西、白峰の方を仰ぐとなほ頂に雲が漲っては居たが、農鳥、間ノ岳の殘雪も鮮かに、そして今迄度々寫生に入った前山が、彼の夜叉神峠であった事も分った。甲府へ午後一時着。全然煮られる計りの暑さだった。此の後白峰連嶺には、前とは遙かに異なった感興を以て對する事にならう。

補　遺

△蘆安村は、御勅使川北部を蘆倉と云ひ、川下より新倉、古屋敷、小曾利、大曾利、沓澤の五區とす、川の南を安通區とす、人口千二百餘、戸數百六十、今年は登岳者が平年より少い。僕等一行の後に、甲府中學の生徒が二人と、其他二組程あった計りだと、名取耕氏から知らせてくれた。

△前に陳べた清水館所藏の古書圖全體の寫しをも載せたいと思ったが、蘆安村の舊村長名取運一氏が、親切にも非常に緻密な自筆の地圖を送って呉れられたから、此れを元として古書圖をも多少照し合せて、附圖として置いた。名取運一氏は、


西
北
南
東
奥仙丈岳
信濃
荒川岳
駿河
早川峠
高根
白峰山附近明細図
(目川・小川田)

從來の畫圖や地圖よりも、遙に此の方面に熱通せられて居て、御料局や測量部の役人達も、此の方面では、氏を唯一のオーソリティと頼んで居ると聞いたから、白峰登攀何百枚の紀行より、此の一葉の圖を、天下に紹介する事を、非常の誇りと思ふ。

△清水館所藏の古畫圖で見ると、御巣鷹、大がれ山だとか鷲の住家だとか、如何にも興味のある山名が見える、そして斯う云ふ場所の鷲や、鷹は滅多な村人には、打たせなかったと云ふ。此の圖でも、野呂川は農鳥の西から、大曲りに曲って流れる。北澤からのは貢流に過ぎ無い。そして蘆安からモミソ（樅の木とある）シミヅ（清水横手）へ出て、これから杖立へ行く途中で路は笹平を西へ走って小澤（堀切より流れ出る川）を横切って野呂川の縁へ出て、どこ迄も此の流れに添ふて進んで居る。今本道として居る路は、此の頃には滿足なものぢや無かったのだ、凰鳳山へ登るには柳澤村—山高村、それから石うとろ川を幾度か渡って北御室に出て登山、峰傳ひに地藏、觀音、藥師—南御室から堀切へ抜けて杖立を下るので立派な路が描いてある。

△蘆安村獨得の俚謠を掲げて置く。

お室高根が高いと云へど野呂川仙丈はなほ高い。
五里の峠もあの杖立も主がゐるから苦にやならぬ。
わたしの主さん野呂川谷で、嫌の原料伐り止せば能い。
酒は三杯男は五尺、五尺三寸出ず入らず。

「いやな原料伐り止せば能い」眞實の叫びだ。背景の色はセピヤだらう。

△白峰三山の名について云ふと、古畫圖には只白峰とある計りだ。名取運一氏の報には『白根、相の嶽、農鳥の三山を惣じて白嶺と申し候、又は各々別名を北嶽、中岳、南岳とも云ひ此の三山を古へ甲斐ヶ根山と申し候』とある。『南岳と農鳥とは同山』だ相だ。即ち北ヶ岳が最高峰なので此れを代表者と看做して白根とも呼び、單に岳とも云ふらしい。南ヶ岳も、何れを呼ぶかに就いて從來惑って居たが、今度こそは明瞭になった。荒川岳は伊達、高松兩氏の紀行附圖を見ても間ノ岳の別名と考へられて居る。其の他にも斯う信じて居る人が多い。現に蘆安の村人の中にも、間ノ岳と同一なりと答へた人があった。然し名取氏の圖には間ノ岳どころか、農鳥よりも南に、立派に獨存して居る。此の圖を受け取って後も、再三、荒川岳に就いては教へを乞ふた。その返事が斯うだ。

荒川岳と間ノ岳とは、全く別山なり、而して同名の山二つあり、一は農鳥の支峰にして、其の東南に立てり。西山村大

字奈良田の地内に屬す。一は甲信駿三國の境界にある一峰を三國山又は三峰山—是れ其の位置により名付く—と云ひ、此の脈續き信駿二ヶ國の境にある荒川岳なり。故に間ノ岳とは全く別山なり。

△『早稻田文學』第八月號、烏水兄の『峽谷』と云ふ文中に「白河内岳—數多い日本アルプスの山の中でも、こんな名を聞いたことは一度も無い」と其の破壞的な山貌を蠻人の酋長に譬へてあったが此れについては、白河内山は即ち農鳥山の南より幾分東によりたる峰續きにて、別當白と云ふ山なり。

と返事があった。白河内と云ひ、別當白と云ふ、白と云ふ共通の文字に說明して居る或る特質があらうも知れぬ。が、別當白は多く別當代と書く。さすれば田代川の名と關係するかとも思はれる。

△大井川の水源に井川の名があって田代川をも併せて居る。此の井川の名も僕には耳新しい。大井川の畧だ相だ。

△次で又北ヶ岳絕頂に曉天磁石を置いて、四方を望見した時の記憶によると云って、諸山の方角圖をも送って呉れられた其の中南東の間に、

此の方角に東海を望む、其の色金の如し、但し曉天に限る。

と書いてあった。此れを讀んだ時、自分は微妙な感じに打たれた。一年の中二百日宛も山また山の奥に籠って白檜の板を削り乍ら、一生を送る山人達の中の幾人が、海を知ってゐるだろう。甲府にさへ、海の觀念を抱き得ぬ者は澤山ある。曉の明星が漸く淡れ〳〵て、曈々たる大日輪が徐ろに軌り上る時、僅かに一瞬、しかも赤金の光、爛銅の樣な東海の波を望んで海を拔く一萬二百尺、北ヶ岳の冷かな絕巔に凝立して、質朴な曈を輝かす時の山人の胸の鼓動は、如何だらう。常には覺えぬ失望も、此の刹那計りは、無言の彼等を刺すかも知れ無い。（四二・八、三〇、）

三峯川の上流

（荒川岳及仙丈岳を登る記）

河田默

一、伊那に入るの記

松島の町を出はづれると、左の方の小山の後から仙丈岳が見ゑはじめる、行手の方やゝ右には西岳（木曾駒ヶ岳）の山つづきが、うすれ行く夕靄につゝまれて黑く聳え、それに引きかへ夕陽を受けて仙丈岳は金色とかがやく、しかしそれも一

時で、やがて木下の少し先きまで來ると、日は全く沒して、すべてが闇の中に葬られてしまった、馭者は思ひ出したやうに、一鞭あてると、痩せた馬は急にとび出し、ガタ馬車は六人の客を乘せ、飯田街道を南へ向って、夕闇の中を馳せて行き、ラッパの音はひとしきりあたりの丘陵や林にひゞく。

日が暮れてからは、暑さも幾分からすらぎ、天龍河原の方から吹いて來る冷風も氣もちよく、しばしうっとりとして居ると、やがて馬車が止った、見ると最早馬車は坂下町の「みのわや」の前に着いたのであった、全體高遠まで行くつもりであったのが、馬車がおくれたので、坂下に泊ることに定めて、「みのわや」に腰を下ろすと、目下上伊那郡の小學教員の夏季講習があるとかで、空室がないと云ふ、それでも、どうかかうか、やりくりをして、馬車の中で一處になった木曾の人と相宿をすることになり、草鞋をとって、二階にあがる、何だかうす汚ないので、風呂もそこ〳〵にすませて、夕飯とする、同宿をした木曾の先生、もとは飯田の人とかで、中々伊那地方のことに明るく、諸處の名所古跡や、さては青崩峠の模樣から、天龍河船下りのことなど、種々と噺をして呉れた、やがて飯もすむと、木曾の先生は友人を訪ねるとか云ふて出掛ける、自分は別に用もないので、明日早朝高遠の方へ行くからと、宿に命じて寢床に入った、しかし大して勞れもして居ないのに、中々蒸暑いので、急には寢りつかれない、そこで種々と考が、頭の中にわいて來る。

全體自分は、何しにはる〳〵と、上伊那地方までやって來たのであらうと思ふ、自分は去年の夏燕岳に登った、中房温泉を出發して、燕岳の尾嶺に登りついたとき、忽ち日本アルプスの連嶺は、穂高山からはじめて矗々と天を刺す槍ヶ岳や、さては笠ヶ岳、鷲羽、黑岳、五郎、烏帽子と前面に展開する、脚下はるかの高瀨谷より躍り上って、髻を天風に櫛らせ、千古の積雪は谷を埋むる其の雄大さ加減、是非來年は此の邊へ來やうと、同行の二三氏と話しあふた、それであるのに、今自分は方面の異る伊那町まで來たのは、何故であらうか、自分は六月のはじめから、身體の工合がよくなかったので、名にし負ふ日本一の山歩きとか自稱する先生が、隨分苦しまれたと聞く日本アルプスの縱走などは、とても思ひもよらぬことゝ斷念してしまって去年の同行者の二三の友から、今年も同行をすゝめられたけれども、遂に行がなかった、そのうちに、身體の工合が大分よくなって來ると、好きな道とて引込んでは居られず、どこかへ旅行したいと思ふけれども、同行でもしやうと思ふ友達は、大抵とくに出發してしまったあとで、東京に殘って居るものは、一人もないと云ふ次第だ、それで大いに弱って居たが、ふと思ひ出したのは、一昨年麓まで行って遂に望を果さなかった仙丈岳のことである、仙丈岳!!!はじめから其の名が何だか至極氣に入って居った、しかも一昨年登山しやうと思って、失敗したのであるから、其のうちに是非行かねばならぬと定めて居った、それで前年失敗した（山岳第二年第三號「白崩山に向ふの記」參照）のを考へて見る

に一人も案内を知ったものが居ないで登らうとしたのが、其の大なる原因であったやうに思はれる、戸臺の者は一度兩乞に登ったとか云って居ったから、彼をつれ行けば、行かれるであらうけれども、戸臺は人家が僅に二軒ばかりで、人の數も少ないから、彼が果して家に居るかどうか、又家に居ったとしても、直ちに行って呉れるかどうかゞ、頗る不明である、それであるから、他の方面の登山道について、穿索して見やうと思ってやって來た次第である、さてそうとすれば、明日はどこまで行こうかと云ふに、別段宛はない、たゞ市ノ瀨の方から仙丈へ登れると云ふやうなことを、一寸聞いたことがあるから、市ノ瀨まで行かうか、などゝ考へて居るうちに、いつしか眠りについた。

二、坂下より市ノ瀨

坂下から高遠町へも、乘合のガタ馬車が通ふ、けれども昨日、辰野から坂下へ來る馬車は、時間馬車であると云ふのに、大變に遲れた位だ、それであるのにこゝのは定期の馬車ではなくて、客が集れば出るし、そうでなければ、何時になっても出ないと云ふ厄介な奴であるから、別段前途を急ぐ旅でもないけれど、まづ〳〵そんな馬車は、こっちから願ひ下げして、徒歩と定め、荷物は高遠まで負ふて行ってもらふ約束で、人足を雇ひ、午前六時四十分「みのわや」を出發した、町から東に折れると、ぢきに天龍川に架けた橋がある、橋を渡りきると高遠へ行く馬車の發着所に、馬もついて居ない車臺が一つ置いてある、そんなものには、用はないと云ふ見得で、一寸横目ににらんで、さっさと通り過ぎると、やゝ上りになって道の左手には、小さな丘陵がつゞいて松林がある、右手は漸々低下して、畑を越えて三峰川の河原が見える、この三峯川は、仙丈岳から出てはじめ、數里の間は南に向って流れ、それより一寸西に向ひ、更に北流して高遠町の邊に至り、再び西流して伊那町のところで、天龍川に注ぐ天龍川の一支流であるが、非常に荒れる川であるから、高遠町附近以下の河原の廣大なことは、本流なる天龍の河原以上である、對岸の方を眺めると、高鳥屋山や、其の他の近い山々が立ち列んで、其の後から荒川岳ともおぼしき赤石山脈の尤物が、はるかの空に一寸顔を見せ、行手には仙丈岳が廣げられるだけ肩を張ってひかへ、其の左に、雪と白い尖影をあらはすのは、問はでもしるき白崩山（甲斐駒ヶ岳）である、ひるがへって西方を見れば天龍川を隔て、伊那の平原を隔てゝ、西岳は天馬の空におどるが如く、朝日を受けて蜒々と連って居る。

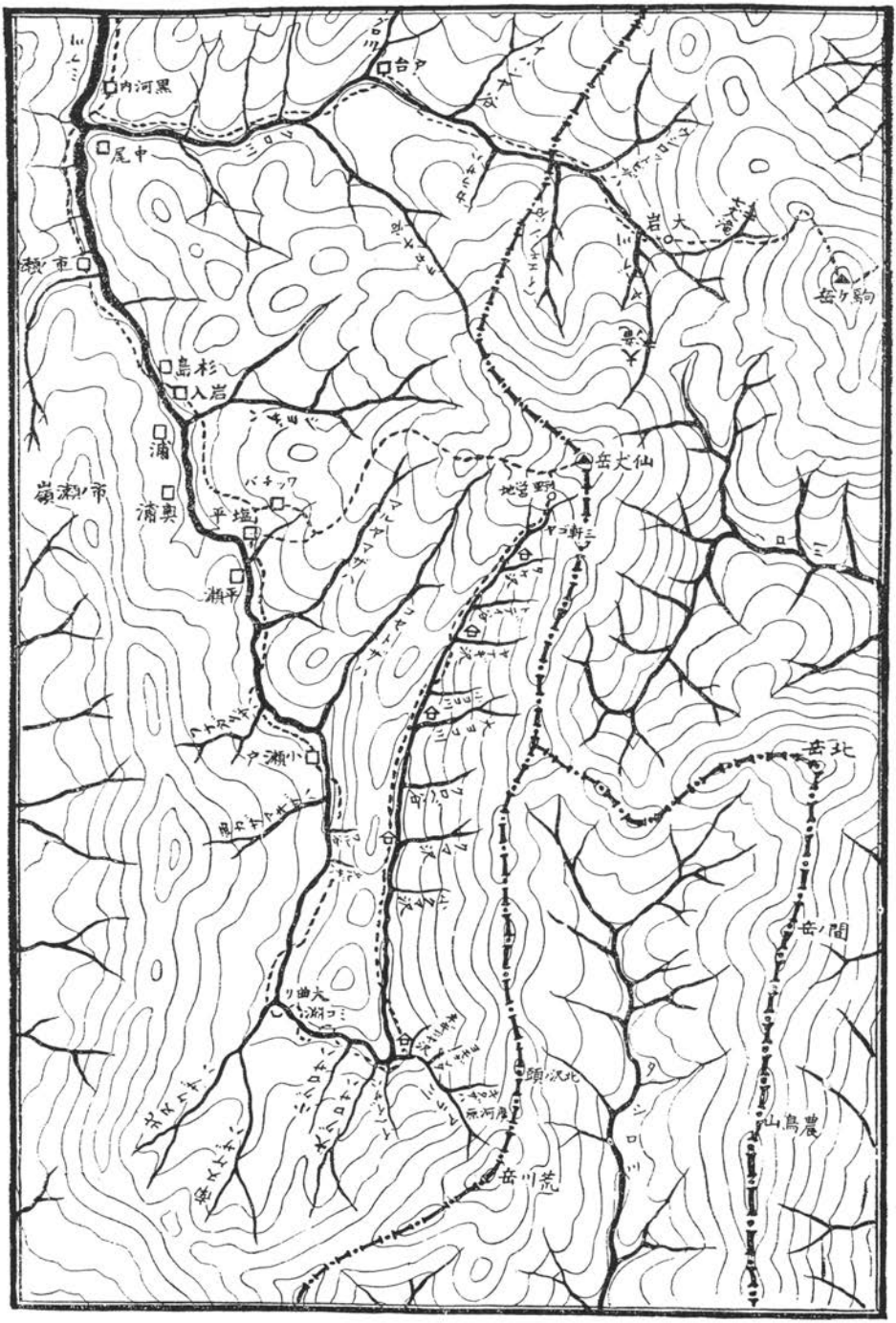
爪先上りの坂路を登りきると、左手に小さな神社がある、此の邊は平な土地が可なり多く、道の兩側は多く田地になって居る、他の土地では、田に水を引くのに、大抵は引きばなしで、始終田の水は一方から流れ込んで一方へ出るやうにしてあるが、此の邊では田の水は流さないで溜めてある、これは氣候が寒いからで、常に水が新らしくなっては水の暖まる間

がないからだと云ふことを、人足が語った、大方山地などの氣候の寒冷な土地では、すべて行って居ることであらうと思ふ、やがて高遠の入口の「ヨケ」にかゝる、こゝは北の方から山が突き出て、川に迫り、斷崖をなして居る處を切って道を開いたので土地の人は之を「ヨケ」と云って居る、すべて川の岸が斷崖になって居て、通過しがたいところを、避けて行く道を「ヨケ」と云って居るやうである。

人足はこゝまでの約束であるから、賃錢を拂ってかへし、荷物は高遠よりは、市ノ瀬への歸り馬に托し、自分は僅ばかりのものを肩にかけて、高遠の町を過ぎる、ミヤマウスユキサウと鳥の羽を挾んだ帽に、會員章をつけて帽を頭にいただき、右手にはいかめしき鳶口を持った異樣の姿に、小供等はもとより、大人までも怪嫌な顏つきをして自分を見送る、やがて藤澤川に架した橋を渡ると、うしろから馳けて來て、自分を呼びとめたものがある、誰かと思って振りかへって見ると、昨日辰野からの馬車で、一處になった、小松某と云ふ學生である、氏は高遠の人で、東京の某學校に在學されて居るが、夏期休暇になったので、歸省される途中、馬車に同乘したのであった、昨夜自分は、坂下に泊ったが、氏はおそくなったにもかゝはらず、高遠まで歸られ、自分が高遠を通過するのを今朝から待って居られたのであると云ふことで、しばらく休んで食事でもして行かぬかと云はれた、しかしまだ食事には時刻も早いし、市ノ瀬へは少し早く着く必要もあるので、たゞ御好意を厚く謝して、出發しやうとすると、それではと云って高遠の公園等を案内され、其上暑い日ざかりを、非持村の入口まで一里許の間を送って來られた、その御好意は有りがたくこゝで、御禮申して置く。

非持の入口で、シビラ川に架した橋を渡る、三峰川は南から北に向って、流れて來て、此の邊から西に向ふので、今自分は暑い〳〵日中の太陽に向ひ、三峰川の右岸を南へ南へと、遠州街道を進んで行く、坂下以來常に行手に仰いだ仙丈岳は、こゝまで近よると、最早前山にかくれて、姿を顯はさない、あまり暑いのと、少し空腹を感じたので、溝口で軍用旅舍の看板いかめしき家の椽に腰をおしろた。

飯はすぐすんでも、暑さは益激しいので、しばし椽先に横になって風を入れながら、奥の方を、見るともなしに見ると、何やら四五人の屈强な男が集って、相談をして居る、何の噺かと思って、一寸耳を立てゝ居ると、一人は此の家の主人で、あとのものは、此の附近のもので、黑川近傍の山の伐木に入って居る人夫のやうであるから、これ幸と、主人を呼んで仙丈岳のことを尋ねると、今奥に山仕事をする人が居るからと云ってこれらの人々を連れて來た、中に戸臺の小倉龜十と云ふ人の弟が居た、この龜十は仙丈岳に明るいが、この弟も中々黑川方面の山に詳しい、其の噺によると、仙丈岳と云ふ名は矢張甲州方面の名であって信州では前岳又は小河内岳（宛字）と云って居る、本誌第二年第三號の「白崩山に向ふの記」


黒河内
尾中
瀬ノ市
杉島
岩入
浦
嶺瀬ノ市
浦奥
平塩
瀬平
小瀬
大曲
岩大
岩ケ駒
岩大仙
地蔵野
ヤコ野
岩北
岩ノ間
山鳥農
頭沈北
黒河屋
岩川荒

中に前岳とも御鉢岳とも云ふやうに書いてあったが、今思ふにこれは小河内岳と云ったのを、御鉢岳と聞き誤ったのであらう、何故小河内岳と云ふかと云ふに、戸臺の少し下で黒川に入る澤がある、この澤は、もと石灰岩を採った澤で、其の名を小河内谷と云って居る、それで其の谷の出て來る岳を、小河内岳と云ふので、即ち前岳がそれである、それでオガチとはどういふ字を書くのかと問ふたら、此の家の主人は「尾勝」と書くのであると云った、ところ、例の戸臺の人は「いや小河内と書くのだ」と云ふた、ところで本誌前號の附錄に出た中村學士の「赤石山系」の圖中（第三圖）に荒川岳とおぼしきものゝことを、小河内岳と書いてある、それで荒川岳と云ふ名は、三峯川岳のすぐ南の低い峯について居るが、少くとも市ノ瀨附近で云ふ處の荒川岳は、同圖に小河内岳と書いてあるものと思ふ、それでもし、これが小河内岳のことならば、これは仙丈と同一であるから此の名は除いて、仙丈の異名としなければなるまい、しかしながら荻野音松氏の「田代山奥横斷記」を拜見すると、釜澤附近で小濁川に合流する小河内川（この讀み方は何と云ふか知らず）と云ふのがあって、その谷が中村學士の小河内岳と書かれた岳の方から出て來る樣であるから、中村學士の小河内岳とせられたのも、即ち自分が荒川岳（市ノ瀨方面で云ふ）であると思ふ岳を、釜澤とか、小濁とか、小濁川の附近の方面では、小河内岳と云って居るのかも知れないと思ふ、御存知の方があらば、御教示を願ひたいものである、ついでながら、中村學士の同記事中、第五圖に赤石岳とあるものは、確かに同學士が第三圖に小河内岳と書かれたもので、自分が荒川岳（市ノ瀨方面で云ふ）と思ふものであるから、一寸考を述べて置く。

しばらく嘶をきゝながら、休んで午後一時三十分こゝを出發し、半里許行くと黒河内である、戸臺から東岳（甲州駒ヶ岳）の方へ行くには、こゝで東へ折れて行く道がある、眞直に三峯川に沿ふて行くと、隧道が二ッある、その第二のものをくゞって行くと、間もなく三峯川橋と云ふ橋があって、道は三峯川の左岸にうつる、この橋のところで黒川は三峯川に合流するので、黒川の上流を眺めると、鋸岳は、鮫の齒を並べたやうに、ギザ〳〵尖って居る、東岳はこゝからは近くの小山にかくれて、見ることを得ない、橋を渡って少し行くと、やゝ平地があって、田もあれば市ノ瀨の人家も見える、ふと南の天を見ると、右左から、重なりあふ山の裾の間から、はるか奥に隱然と頭をもたげた一峯、塗り上げるのに何千年、何萬年かゝったかしれぬ時代の色は、鋭く眼に映って來て、嬉しいのやら、何やらで、もはやぢっとしては居られない、思はず「これある哉、これある哉」と口づさみながら、市ノ瀨村目がけて一散に馳け出した。

市ノ瀨に着いたのは三時四十分、橋本屋と云ふ旅屋に入って草鞋をとる間も、もどかしく、直ぐに甚兵衞隱居と云ふのを呼び出して、今途中で見た岳の名を聞くと、それこそ荒川岳であると云ふ答であった。

三、南へ三峯川を溯るの記

市ノ瀬の獵師で、今年六十二になるまで、四十餘年間、荒川岳の附近の山々を隈なく歩いたと云ふ、宮下高吉の息子で銀彌と云ふ、今年三十五才で、これも十餘年間老父に從って三峯川附近の岳を歩いたと云ふのを案内とし、外に馬場喜一（二十才）と云ふ男を人足につれて、午前七時市ノ瀬を出發した。

村を出はづれると、すぐに市ノ瀬峠への道と別れて、三峰川の岸へ出る、行くこと二十町餘りで道は二つに分れ、右は浦村と云ふ方へ行く道である、自分等は左の道をとり、杉島橋と云ふ橋を渡って、三峰川の右岸にうつり、杉島、岩入等の村を過ぎると、道は漸々上りとなり、一里程で峠の頂に達する、こゝは鹽平峠と云ひ、地藏佛か何か安置してある、三峰川の流は、脚下はるかの谷底に音を立て、荒川岳は南方の天に峙ち、東方を顧ると仙丈岳は指呼の間にある。

鹽平の村はこゝから五町ばかりも下ったところで、村を通過して、三峰川の河原に下りて小憩をした、時に九時半であった、川はこの邊になると大分小さくなり、鹽平からは道と云ふ程のものはなく、たゞ河原の石の上を行くのである、鹽平から少し行くと對岸に一軒家がある、これは平瀬と云ふところで、これより上には小瀬戸の湯場に一軒家があるきりである、横岩と云ふところで徒渉して、左岸に移り、右から來る船形澤（宛字）を横ぎり、左に小瀬戸澤を見て、十二時小瀬戸の湯場に來た、湯場と云っても、溫泉が湧き出すのではなく、後の山から、僅ばかりの冷鑛泉が出るのみで、これを沸かして浴するのである、未だ湯場には人が上って來ないので、荒れ果てたまゝである、鑛泉の湧く處は家のすぐ後で、小さな桶があって、それに小さな樋から、水がたら〳〵と流れ込んで居るばかりで、實に僅少な量である、汲んで味って見ると、鹽分を含んで居ると見えて鹹い、又硫黄を幾分か含んで居ると見えて、一寸卵のやうな味がする、湯場の椽先に、腰を下すと、蚤がぞろ〳〵と這上って來るので、急いで逃げ出して、河原の木蔭で辨當を開いた。十二時半に、こゝを出發して、直ちに第二回の徒渉をして、右岸に移り、南へ南へと川に沿ふて進む、其の間にワリ澤、瀧澤等の大小の澤が、左より三峰川の本谷に流れ込む、右左から突出した山の裾は、幾重にも重なりあふて、一っの端をめぐると、又新しいのが現はれて、いつまで行っても盡きさうがない、此の邊の山には、鹽水の滲み出す處か多くあるので、對岸のナギの中腹から、滲み出して居る處を、二三個所も見た、鹿がこの鹽水を舐めに來るとか云ふことで、河原の砂の上には、鹿の足跡が散在し、中には小鹿を連れたのか、小さな足跡が大きいのに混って居るのもある、小瀬戸から一里半も進むと、忽ち前は一脈の山でさへぎられ、右も左も山又山で、川はこれで行きどまりかとも思はれるやうな處へ來る、こゝでまた川を渉って西

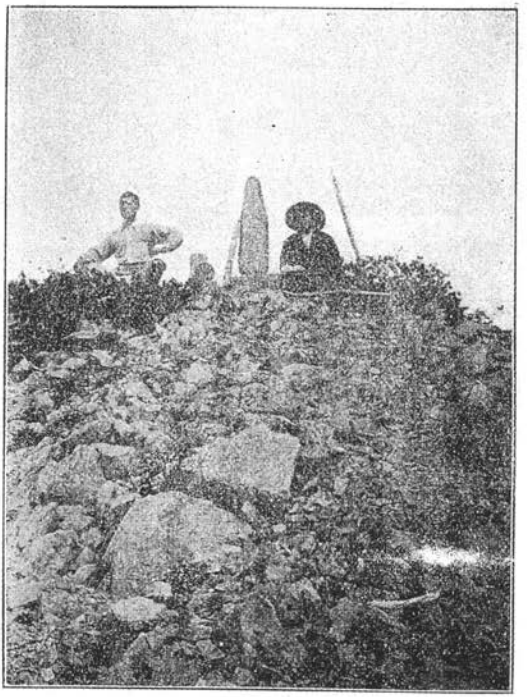
岸に移って行くと、右手の山から二つの澤が三峰川の本谷に注いで居る、北にあるのを北ヌケ澤と云ひ、南にあるのを南ヌケ澤と云ふのである、三峰川の本谷は、東の方より西に向って流れ、こゝに至って忽ち方向を北に轉ずるので、このところを「大曲り」と名づける、こゝから自分等も方向を東に轉じて進むので、この邊に至ると兩岸は斷崖をなして、谷に迫って居るので、己を得ず或は右岸にうつり、或は左岸に渉って行くと殊更に兩岸の高くせばまった處がある、こゝは神子淵と云ふところで、昔親子三人の神子が、修行の足らないと云ふことを思って、この淵の上に來て修行をして居ったが、遂にこの處の土となったと云ふ傳說から名づけられたので、今では川の左岸の、とある岩の上に、これを祀った小やかな石の祠が置いてある。

小瀨戸の湯場　（河田默氏撮影）

神子淵から少しく行くと、ドーメキの大瀧と云ふ處がある、こゝはもと、川が瀧になって轟々たる音を立てゝ居たから、名づけられたのであるさうだが、大荒れのときに、瀧が崩れてしまったので、今では別段とり立てゝ云ふ程の名所でもない、「大曲り」から一里程も來ると、川の上流は北の方に轉じて、この邊から河原がまた廣くなり、南の方から小黑澤、大黑澤、伊平澤（宛字）等が合流し、やがて非常に廣い河原へ出ると、右の山間から荒川が出て來て、本谷に注いで居る、このところは「荒川ドウ」と云って居るところで、今宵宿すべき小舍は、荒川と三峰川の本谷との間の尾嶺の麓にある。

五時十分、小舍に着いて、先づ荷物をおろし、小舍の中を窺ふと、忽ち蚤が這ひ上って來る、これではたまらぬと人足は裸體になり、小舍の中に敷いてあった藁を、鳶口でかき出して火をつけ、すっかり中を掃除してイタドリを苅って、敷きつめると、蚤はこと〳〵く退治されてしまった、そこで小舍に這入って腰を下ろす、早速夕飯の支度にとりかゝって火を焚いて鍋をかける、飯が煮えるのを、待ちながら小舍を見まはすと、この小舍は中々立派な木小舍で、羽目や屋根は三寸も厚サがある、サハラ材を割ったもので、

里に出さうものなら立派な飯櫃の木になるやうなものを、惜しげもなくつかってゐる、三方は板で圍ひ、後の方は山につづいて、棚もつってあれば、茶椀や、杓子や、自在鈎や、燭臺、カンテラ等迄も備へてゐり、屋根は一部分とりはづしの出來るやうにしてあって、大きな焚火をするのに差支なく、設備の完全なることは、かゝる山中の小舍としては、稀に見るところである、夕飯もすみ、乾板の入れ換へも手早くすませた頃には、十一夜の月は、伊平ナギの頭の邊に照り、皎々と廣い河原を照らした。



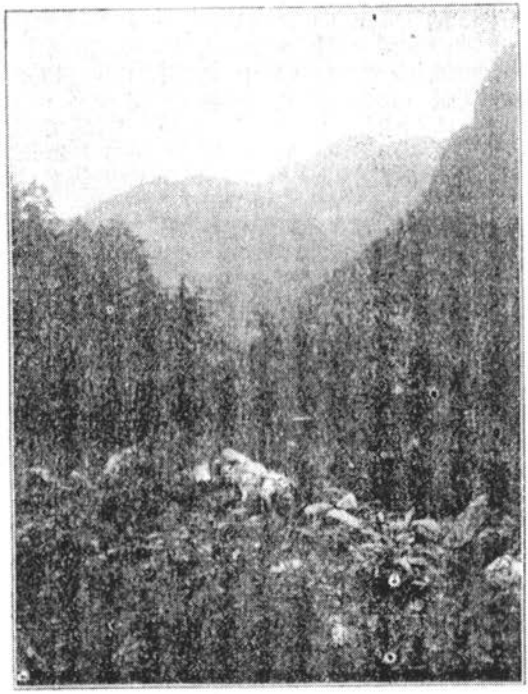
仙丈岳絶頂　（河田默氏撮影）

あまり月がよいので、其まゝ寢入るも、心なきわざのやうに思はれたから、小舍を出てあちこちと河原を散歩する、四方の山は寂として聲なく、仰げば明月は天に一ッ、伏せば影は千々に碎けて流れて行く。

四、荒川岳

早朝荒川ドウの小舍を出發して、荒川岳に向ふ三峰川の本流と別れて東に向ひ荒川を溯る、右も左も行手の方も近くに連なる端山に拒られて荒川岳の頂は何處の方とも知るとが出來ない、北の方より荒川の流に注ぐネギゴヤ澤、蓬股（宛字）等の谷を左に望み、或は川を徒渉して其の左岸に移り、或は跳石を傳って、其の右岸に出でなどして、半里許行くと、谷は二つに分れ、東より來るのを北澤と云ひ、南から來るのを南澤と云って居る、この合流點から東南に當って、はじめて荒川岳の尖影を望むことが出來る、こゝから南澤に沿ふて東南方にすゝむ、こゝに至ると谷の勾配は非常に急になって來て、川は諸所に小さな飛瀑をなして流れる、小石を跳び越え大石を攀ぢ、時に又兩岸が迫って通過し難い處は、崖を攀ぢ登り、或は右に移り、或は左に轉じて登ること半里許で、やゝ谷の豁いた河原がある、こゝは廣河原と稱するところで、荒川岳の絶巓は、近く頭上に聳へ、其の三角測量標までも、明に認めうる、廣河原より進むこと少時で、谷を埋むる數町の殘雪を過ぎると、しばらくして、谷は復左右の二つに分れる、

向って左のものを北澤と云ひ、右のものを南澤（前の南澤、北澤と異る）と云ふ、これより北澤をすて、南澤に沿ふて登る、谷の水はだん〳〵少くなり遂に一帶の殘雪になる、こゝより谷を離れ、右側の尾嶺を目あてに、急峻なるところを、登ること二時間ほどで、頂上より西北に當る尾嶺の一角に達した、こゝに至ると、樹木は全くなく、たゞハヒマツの地上に伏するのみである、こゝよりまた東南方にすゝみ、一峯を越えてやゝ下れば、頂上は頭を壓せんばかりで、磊々たる大小の岩石を蹈み遂に頂上の三角測量標下に達したのは、午後の二時二十分であった、こゝに立って見ると、また東南方に一峰がある、高さは畧こゝと同じ位ではあるが、幾分か其の峯の方が高いかと思はれ、最高點はむしろ其の峰の頂であると思ふ、しかし時が想の外遲れたのと、病後のためか、自分が非常に疲勞して居ったので、歸途のおそくなるのを恐れ、殘念ながら三角測量標のある方の、峯の頂までゞ引かへすことゝした。



三峰川上流より仙丈岳の一角を望む（河田默氏撮影）

さて高頭、小島、高野、三枝、中村氏の一行が、甲州方面から赤石山脈の間ノ岳から、惡澤、赤石と赤石山系南部の跋渉をせらるゝ爲めに、七月の二十日頃已に出發せられたと云ふことを承って居ったから、自分がこゝに來たより前に、この一行は間ノ岳に登られたはづである、それで元來自分は間ノ岳（赤石山脈の）と荒川岳とは、同一のものであると思って居ったから、この三角測量標下に、何等か高頭氏等一行の記念物が殘っては居まいかと思って、探したが遂に何も見當らなかった、しからば自分の推察は當らないで、荒川岳と間ノ岳とは別山であるかと云ふに、「山岳」前號の口繪に間ノ岳（赤石山脈の）とあるものが、果して甲州方面で云ふ間ノ岳そのものであるならば、自分はこれが、市ノ瀨方面で云ふ荒川岳なることを斷言するに躊躇しない、しかもこの荒川岳以南、西河内岳、千枚澤ノ岳、惡澤ノ岳等に至るまでの間には、とり出して名を與へるほどの岳はないやうに見受けるので、益この荒川岳、間ノ岳の二山が異名同座であることを想ふのである、或はこの前記の東南に當る一峯には、高頭氏等一行の記念

物があったかも知れないが、そこまでは自分が行かなかったので、遂にこの二山の異同については、立證することを得なかったのを遺憾に思ふ、しかし自分の考では、これは甲州方面と市ノ瀬方面とで、同一の山岳を名を異にして呼んだものであると信じて居る。

さてこの頂上に止まること約三十分で下山の途につく、南澤（上の方の）から登りはじめて、とりついた尾嶺の一角までは、同じ道をもどったが、こゝからは前に登った河原へ下るよりも、道をかへて尾嶺傳ひに、小舍まで歸ると云ふことに定め、河原を右に下瞰して、西北に向って尾嶺を進む、はじめの間は、測量標を建てたときに開いたものと見えて、ハヒマツも切ってあり、シラビソの森林など「切り當て」があって、幾分か道らしい處もあったが、だん〳〵進んで、一寸小高い峯の頭に、三角測量標のあるところまで來ると、「切りあて」も、何もなくなって數間のところを通過するにも非常の時間を要する、そのうちに夕立が降って來る、兩具を小舍に殘して來たので、全身ぬれ鼠になって、ハヒマツの宙乘をやる、帽子は引きかゝる、鳶口は邪魔になる、第三者から見て居ったらその滑稽さ加減、とてもたまったものではあるまい、けれども自身では、中々一生懸命でやって居るのだ、ハヒマツをやっと通り過ぎて、やれうれしやと思ふ間もなく、今度は森林の中で、シラビソ、ツガなどの大木の枯れたのが、倒れ伏して重なりあひ、どこを歩けばよいのやら、足が地につくのと木の上に乘って居るのと、どちらが多いか判らない位である、凡そ山中で惡絶の處と云ったら、道のない森林中が、その最たるものであらふ、時は容赦なくたつのに、いくらあせっても足ははかどらず、いつまで森林と闘っても到底駄目と思ったから、宜い加減に見當をつけて、右の方の河原をさし、眞一文字に下ると、そこは南澤と北澤の合流點（下の方の）の少し上の處であった、それからは朝來た時と同じ處を行くので、小舍に着く少し前に、日は全く暮れて、四面暗く一點の流螢は寂寥を照して谷水を越えて行った。

五、北へ三峯川を溯るの記

二夜の宿りを借りた小舍になごりを惜んで、午前七時三十分荒川ドウを出發し、また三峯の流に沿ふて北へ北へと進む、右には信濃、駿河の境をなし、田代川と三峯川の水を分つ赤石山脈の峰つゞきが、あるけれども、谷が深いので峰は見えない、左に連るのは中山と云ふ仙丈岳よりつゞいた尾嶺で、中山一つ越ゆれば、そこは一昨日過ぎた三峯川の谷で、中山の西では三峯川は北に向って流れるが、中山の東の三峯川の水は、それとも知らず、ひたすらに低を求めて南へ向って流れる、流れ行く人の運命も、又こんなものではあるまいかなどゝ、想に耽りながら行く、ふと案内が立ち止まったので氣

がつけばそこは牛淵（宛字）とやら云ふナギで、過ぐる年の大荒れに、山が崩れて出來たもので、其時そこにあった獵師の小舍は、全く埋もれて一人も殘らず死に、死骸さへも出でず、又其の時川が堰きとめられて、一時下流は水が涸れたと云ふことである、此のナギは川の右岸、中山の方の側にあるが、こゝより少し行くと左岸に「ゴロサ」と云ふナギがあるこのナギの上にて、此の春「ニク」（クラシ、のこと）を二頭撃ちたりなど、案内者の自慢噺をきゝながら行くと、又もや右岸に野田ノナギと云ふがある、これは中山の尾嶺の頂より、川まで崩れたナギで、このナギが最大きなものである。

三峰川はこの邊まで溯ると、水量も非常に少くなり、又河床の勾配もあまり急でないから、歩くには至って樂である、荒川ドウから一里半も來たかと思ふ處で、東の方から一つの澤が本谷に合する、これは小熊澤と云ふので、それから間もなく熊澤が、東の方から流れ込んで、この合流點には熊澤ドウの小舍がある、この小舍も木小舍であるが、荒川ドウのものより荒れて居った、尙進むと黑檜谷（宛字）と云ふのが合流する、この邊から岩魚釣りをしながら行ったが、遂に一尾も得なかった、大横川と云ふ谷が、合流する處へ來たのは十二時頃で、合流點から半町も行くと、大横川ドウの小舍がある、大横川と云ふのは、三峰川岳の附近から出て來るらしく、何でもこの邊から白峰の北岳の方へ登れるので、市ノ瀨方面では北岳のことを、大横川の岳と稱へて居る、大横川の次に合流するのは小横川で、其の又上で合流するのが柳澤でこゝには小舍がある、尙もすゝむとトデイ谷と云ふのがあって、其の次には岳澤と云ふのが合する、岳澤は仙丈岳から出て來る、澤で、其の合流點から東の方を望むと、仙丈の一角が近くに現はれる、（寫眞版參照）こゝには岳澤ドウの小舍があるが、これも隨分荒れて居る、此の邊まで上って來ると、左手の中山の尾嶺は、手が屆きさうに近く低くなる、岳澤ドウから少し行くと三軒小舍（宛字）と云ふところで、名は三軒小舍と云ふけれども、見たところ泊れさうな岩穴もない、時間の許すかぎり仙丈に近よって野營しやうと思って、尙もすゝむと本谷は俄然東に折れて、其の正面に仙丈岳は夕陽を受けた全身をあらはす、時に午後六時、とある大木の下に野營地を選定し、久戀の仙丈岳に抱れて一夜をあかし、はじめて戀人の懷の中は、いたく寒きものなることを知った、後に案内者銀彌の老父高吉の噺をきくと、この自分等が野宿した處は、奥三軒小舍と云ふところで、少し上には二十人も泊れるやうな、とても大きな岩穴があるとのことである。

六、仙丈岳に登る

早朝野營地を後にして仙丈岳に向ふ、尙三峰川の上流に沿て溯ること數町、こゝに至って谷きはまり、川は數丈の飛瀑をなして懸って居る右側の懸崖を攀ぢて瀑の上流に登れば、川は二つに分れ、向って右のものは、大きくて岳の直下より出で、

左のものは小さくて左側の尾嶺から來る、自分のつれて行った案内者は、前にも述べた如く、市ノ瀬の獵師で、十數年間三峰川附近に入り、荒川岳附近には實に詳しいが、最早こゝに至っては案内者もはじめての處である、そこで右をとらうか、左を行からか、いづれにしやうと云ふ評議になったが、右の方は仙丈の直下から來るが、見たところ崖が大きくて登れるかどうかゞ判らぬ、それに左の方の尾嶺は、黑河入りの小河内谷との間の尾嶺で、この尾嶺の上には「切りわて」が確にあると云ふから、左の小さい方の谷に入って行くと、水は直ちになくなってしまった、それから急な處を登りつめて、尾嶺の上に出たが、こゝは中尾嶺で「切りわて」のあるのは今一つ向の尾嶺であるから、一寸下って水のない谷を過ぎ、向の尾嶺を目がけて行く、途中ハリブキが多く、脚胖の上から脚を刺して傷いことおびたゞしい、又ハリブキの葉が奇麗になくなって、坊主になって居るのが諸處にあるので、不思議に思って尋ねたら、熊が食ってしまったのであると答へた、やがて尾嶺に出ると果して「切りわて」がある、こゝへ荷を置いて仙丈の頂上へ向ふ、東の方へ「切りわて」をたどり、小さなシラビソの林中を登って行くと、間もなくシラビソはつき、ハヒマツがこれに代って地上に伏して居る、しかし切った跡があるので、さまで歩きづらくはない、二三個處の小高い所に神樣を祀った石が立てゝあるのを見ると、大分信心で登るものがあるのであらう、ハヒマツの枯骨が狼籍たる上を過ぎると、やゝ平な處がある、左には脚下に黑河の谷を控え、右には仙丈の絶巔頂上に聳へ、一躍して達せんばかり、甲斐の駒ヶ岳は眼前に其の尖頭をもたげ、其の脈左に延びて鋸岳となり、また八ヶ岳は東北の天に延々と連って居る。（口繪參照）

こゝより東南に轉じてすゝみ、手近い一峰を過ぎると左方の凹地に殘雪があり、又此の附近に石を疊んだ小舍の跡がある、往年三角測量標を建てたとき測量師の泊ったものであらう、こゝから少し登ると絶頂で、測量標の石は存するけれども三角柱は折れて、僅に柱の一部が殘って居るに過ぎない、又其の側には「前嶽三柱大神」「明嶽大神」「國常立尊　國狹槌尊」と彫りつけた三つの石が建てゝある、頂上は中央に雪のたまった凹地を殘し、東南西の三方には嶺をめぐらし、北の一方は低くなり、恰も擂鉢の一方を缺いたと云ふやうな形で、殘雪は其の底にたまり、こんな處をカールと云ふのではあるまいかと思ふ、雪消の水は北の方面の缺けた處から黑河の谷の方へ流れて居る、しばらく眺めて居ると、南方の谷から人聲が聞える、不思議に思って耳を峙てると、伐木の斧の響が丁々と聞える、この日は南風が吹いたから、其の爲めではあらうけれども、とにかく富士製紙會社の野呂川上流に於ける伐木は、奥仙丈の絶頂から音が聞えるほど、奥深くまで手が入って居るのが判る。

頂上にしばらく止って、やがて十時半頃下山の途につく、荷物を置いて來たところまでは、登ったときと同じ處を下り、

十二時頃荷物を殘した處に歸った、さてこゝからは「切りあて」をたより、シラビソの森林の中を尾嶺づたひに下るのであるが、市ノ瀨方面から登るものがあると見えて比較的によい道がある、二三度上り下りをすると地藏岳と稱して居るところで、こゝには三角測量標が建てゝある、こゝから南側の方へ下って行くと、やがて木を伐り出す大きな道に合し、尙半里もすゝんで左手の谷の方へ少し下ると炭燒小舍があって、其の側に水が湧き出る、頂上で雪を嚙んで以來六時間目でやっと水にありついたので、鬼の首でも得たやうに雀躍してガブ〳〵と飲んだ、こゝまで來ればもうよいので一時間ばかり晝寢をし、五時頃こゝを出發する、こゝから下は立派な道があって馬が通ふ、草山を急ぎ足で下り、やがて前日過ぎた鹽平を下に見ながら、ワッチバの村を過ぎ鹽平峠に來て一休みする、これで全く一週したことになる、鹽平峠からは前日と同じ道で、岩入、杉島等の村を過ぎて、市ノ瀨に歸着したのは午後七時三十分頃、御祭の夜宮とかで村は少し賑はしく、橋本屋に着いて前の流で足を洗って居ると、向の郵便局の老人(おあぢ)まで出かけて來て、登山の無事を祝して呉れた。(了)

金峰山から國司嶽

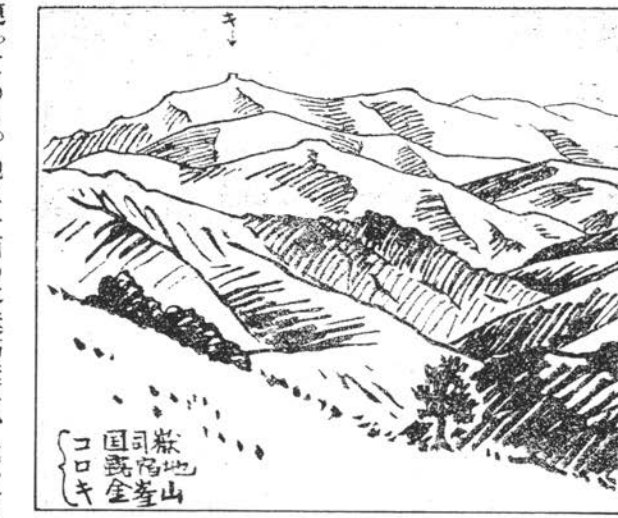
田中富彌

(八月二日)

彼是二時半頃だったろう。

案内者は、金峰の外は何も知らぬので、頂上へつくと、早速御嶽へ歸したので、僕等三人は銘々二日分の食料其他を背負ひ込み、荻野氏の地圖(山岳二年二號所載)をあてにして、國司を差して五丈石下を出發した。

三角標の打倒れてゐる邊から、東北に向って數歩下ると、身はもう森林の底。北の山腹に雲が湧いて、蓬々と山風に逆卷くのを、チラチラ木の間に見たのも、ほんの少時、長い下り坂を下り盡して、北側から南側へとレンジを越したと思ふと、六七尺の灌木の列が、兩側に起って眺は丸できかなくなってしまった。灌木の後には、色々の木が、綠葉を重ねてゐる間に、白い枯木が飛々に交ってゐたり、同じ樣な幹が、縱縞を織って、並んでゐたりするばかりだ。おまけに數十とも知れぬ蛸が集って來て、三つの頭を圍んで、雨の樣にぶっかり出したので、たゞさへ暑いのが、一層蒸し暑くなってしまった。僕等はこんな道を、生木朽木の倒れ木を踏み越えたり、木の根に草鞋を引かけたり、出しやばった木の枝に雜囊の



根子坂よりの眺望　（田中富彌氏作）

紐を捕へられたり、折々つぶやきながら根氣よく進んだ。

フト木の少ない所へ出ると、遙に甲府盆地が見渡される。四周の高山は、皆雲にかくれて、僕等にも日はさゝぬが、盆地一帶の綠は烈日を吸って黃に燃えてゐる。あすこに居る人々も、此位な暑さだろうか。僕等はホッと溜息をついて、油汗を拭いた。けれども蚋が相變らず大變なので、ゆっくり休む事も出來ない。

もう奥仙丈だろうと思ふと、花崗岩はなくなって、砂岩が現はれた。單調な道にあき〳〵して、もう大分歩いた樣な氣がするので、むすびを一つ食べて行く事にした。蚋がうるさいので、僕はアルボース石鹼を鼻の先に臭せて、いくらか顏にぶっかるのを擊退して、やっと食事を終る事が出來た。

其處を立っと間もなく、又砂岩はなくなって、やがて花崗岩の現はれてる、少し廣い所へ出た。北に湧いた雲が南へ押して來て、霧がすっかり四圍を包んでしまったので、もう國司は東に近く高く見えるはづだが、それも見えない。休むでゐると、傍の枯木の枝を籠めて、小さな水滴の群が流れて行くのが見える。もう夕暮近いので、何となく其處らが暗くなった樣に思はれる。僕等は此處で北から西へ廻って行く道（信州へ下る道？）へ迷い込むで、レンジを北へと横切ったが、引返して更に東へ行く道を見つけて、せまいレンジを渡り出した。

灌木がなくなって、樅や何かの大木が數百本突立ってる廣い所へ出て木の根をつくろった、一人位泊れそうな小舍の前を通ったと思ふと、ハタと道を失ってしまった。

まっすぐな丸い巨木が、柱の樣に一間程づゝ、間をおいて、見るかぎり連ってゐる。地は一面の落葉朽葉で、沈むだ鳶色の處々に、青苔にとぢられた朽木が打倒れ、羊齒の群が靜に綠葉を組合

はせてゐる。もう國司の長坂の元へ來たに違ひないが、どう進んだら、道があるやら、僕等はガッカリして立止った。
霧は晴れて、木の葉の間から青空が見えだしたが、五時過の日は、既に山の端にかくれて、四邊には薄暮の色が滿ち滿ちてしまった。
「あの小舍へ泊っちまほう」。
皆はすぐにそれにきめた。そして東北に向って少し下って、冷な水を水筒に滿して、小舍へかへった。
倒れた木の根が斜に一方を持上げて、一人位寢られそうな陰を作ってゐる。根のすきまには土がぬってあって苔やら羊齒やらが、一面に生へてる。地面は少し濕ってゐるが、今日は此處へ寢なければならない。
二人が道をさがしてる間に、僕は背負って來た布で、根を元として、天幕を張り出した。ブヨはいつか影をひそめてしまったから、此度は樂にむすびが食べられる。暗い彼方の木陰に、二人の落葉を踏んでくる音が、カサコソと聞える。ペキッと木を折る響や、低い話聲が段々遠くなって、二人共幽寂な、再び出る事も出來ぬ森林の奥の奥へと、次第々々に吸ひ込まれて行くんじやあるまいかと思はれる。
天幕が張れる、道も見つかると次には三人がゞりで、枯木を山の樣に採集した。
六時三十分、もの寂しい森林の夜は來た。

（八月三日）

寒さに堪えかねて、三人共天幕を出た。そしてドン〳〵、火を焚き始めた。
午前三時だ。月は中空に輝いてるが、重なりあった木の葉をもれて、林の底に落ちて來る光は、僅なものだ。四邊は闇も同じである。パッと火がもえ上ると、三四本の木だけ赤く照り出された。南西の風がかすかに吹いてるらしい。焚火の煙は、東北の闇を目がけて、靜に流れて行く。煙になめられる枝は、深い眠からさまされて、驚いたかの樣に、サワ〳〵僅にふるへ出した。
焚木はドンドンくべられる。顏や手は熱い程温いが、背中は夜氣になでられて、氷の樣につめたい。
やうやく一時間たった。
東方の木の間に、木の茂った國司の北の山腹が黑く一寸ばかり見える。其邊の空に紅の色がなびき初めた。頭の上にはまだ月がキラキラ輝いてる。

けれどももう暮だ。小禽の騒ぐ音が遠くから近よって來ると、林の中も段々明るくなって來た。僕等は朝飯をヤリ出した。

蚋軍の先手が一疋ブーンと羽を鳴して飛むで來た。僕等はあむまり、早いのに呆れた。

六時半過ぎて露宿地を立つと、案の定國司の長坂が始まる。蚋と戰ひ、灌木と闘ひ、カサカサ草を分けて、長い坂を登りつくすと、林が一寸開けて、葉の茂ってる所へ出た。其處から南に見える、木の茂った峰が最高點だ。僕等は前に道をこしらへた跡らしい、切株の列に沿つて深い草の中へ入って行った。

雜木がなくなって這松が現はれたと思ふともう頂上で、花崗岩の露出した上に、細い哀な三角標が立ってる。

噫頂上へついた。案内なし旅行が成功した。僕は大きな聲で「來たゞッ」と叫むだ。

七時半、丁度露宿地を立って一時間經た。

天は又となくよく晴れて、不二山、白峰、駒ヶ嶽兩山脈、木曾の乘鞍、御嶽、其二山の間に昨日踏だ金峯山、乘鞍の右に八ヶ嶽、立科山、北には妙高、淺間、日光火山群、はては東に武藏の山々まで見渡された。殊には立科山の山腹から北に一文字を引いたちぎれ雲の斷續を脚下に踏んで、高い碧いギザギザ頭を突きならべた立山から北のアルプ列嶂の美事さ。白馬、鑓、杓子、立山を初として、夥しい山々の殘雪は、朝日を浴びて、遠目ながらギラリギラリと輝いてゐる。

列嶂の下は信野平野だが、一面水蒸氣が立籠めてゐて、立科の裾の線が、紫烟に溶けてボーッと消えてしまふ、其下には森があるか川があるか、山の姿を大きくする爲、平野は此日夢の世界にかくれたのだった。

フト嘴の長い、黑い斑のある烏程の鳥が、現はれて、二三間向ふの岩へ止って、黑い丸い目でじっと僕等を見つめた。そして大きな鳴聲を殘して、又這松の陰へ飛んで行ってしまった。雷鳥ではない。何だろう。

蚋は皆山風に吹散らされたので、僕等は少し寒いのをこらへて、悠々スケッチをはじめた。いつの間にやら二時間程たった僕等は去り難い頂上に別れをつげた。

元の廣場へ出て、元の路を追って、大きい三角標の立ってゐる所へ出るとあの廣い廣い眺望は、美事に立木にかくされてしまって奥の院の岩と云ふ入道の樣な大岩が、南東の山腹にニョッキと突立ってるのが見下された。

大岩の西の深い、深い谷、の底からは、ドッドウと瀨の音が聞え出した。

「アッ今人が呼んだ樣だね？」

奥の院へと下ってゐた途中で、だしぬけに先頭のO君がこんな事を云ふ。耳をすますと、やがて又「オーィ」とかすか

な響が、葉摺れの音に交って傳はって來た。
「オーイ」と答へると「オーイ」と又呼ぶ。
わゝ人！人！僕等は急に足を早める。
木が絶えると奥の院の大岩が、ついそこに見え、大岩の下で、此方を見つめてゐる小さな人間が見えた。
「おつれが待ってるから早くいらっしやいよう」
「オーイ」
僕等は大岩の元へ立った。
大きな花崗岩が、がっしり、いくつも積み重なって、一つの大岩となってゐる。其根本の大穴の底に、所謂奥の院の祠がある。僕等を呼んだのは強力一人つれた行者の一行で、僕等の案内なしなのを見て大變驚いた。此處から西を見ると、最高點が深谷の向に聳えてゐる。北を見ると大きい三角標が仰がれる。
「サア行こうじやありませんか」
國司嶽、大天狗、小天狗と書いた白衣を着、白鉢卷をした先達が云ふと、皆せまい岩の上で支度をする。そして強力が先頭に立って、次が頭のはげた御爺樣、次が京の澤の小屋を作った大盡（後に聞た）次が其人の子かなんからしい甲府の學生、次が大天狗、小天狗の先達、次が僕等、こう八人一列にならんで、危ふい岩道を下り出した。岩には岩カゞミ等が生へてゐる。下るにつれてそろそろ暑くなって來た。
碧い水が、白い花崗岩の間を、躍りながら歌ひながら走って行く京の澤、其畔へ下りついたのは十二時頃。
野火にでも焼かれたのだろう、立ったまゝ枯れた大木の元に、青い草が茂り美しい花が咲亂れてゐるアシゲ山脈の東腹、牛首を起して其油繪の樣な景色に包まれたのは三時過。
こうして僕等は長閑な心持で、段々人里へと近づいて行った。（僕の見た國司はかく花崗岩の山であった。）

祖父ヶ岳の二日

辻本滿丸

白馬岳は、近來非常に名高くなって、年々多數の登山者を見る有樣であるが、其南に連る信越國境の諸高峰に至っては、

單に登山者が極めて寥々たる許りでなく其名稱さへ、よく分って居らぬものが多い、有名なウエストン氏は今から十六年以前、大蓮華に登山して、其紀行を「日本アルプス登山探險記」中に記載された、白馬が大蓮華と同一である限り、此山は同氏に依って一つの古き記錄を持ってゐるのである、然し其他の山に就ては針木峠の通過を除いた以外、ウエストン氏も遂に足跡を印せられた事が無かった、外國人に先鞭を着けられたことが無いのと、之と云ふ記錄を持たない點に於て、此等は孰れも處女の山々である。(但し烏帽子岳以南に關しては「山岳」第三年第二號に志村烏嶺氏の「日本アルプス縱走記」が一つある。

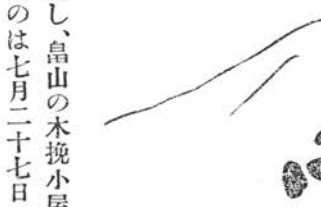
信越國境の山脈中、針木以南は暫く省畧することゝして、其以北、白馬までの間には、どふ山があるかを、地圖や、書物で調べて見ても、一向確かな事が分らない、輯製二十萬分一圖の如きは引き合ひに出す價値もなからう、地質調査所二十萬分一地形圖には白馬の鑓の南に、不歸(カヘラズ)岳、次に大黑岳、鹿島槍ヶ岳、赤鬼ヶ岳、餓鬼岳、祖父(ヂイ)岳、鹿島大岳、後立山(ウシロタテヤマ)と云ふ順序に、山名を記してある、然るに自分が今年大町で買った北安曇郡明細地圖(明治四十二年調製)には鹿松谷岳、大黑岳、鹿島鏡ヶ岳(鏡は鎗の誤であらう)、屏風岳、鹿島入岳、祖父岳、赤澤岳と云ふ順に記してある。是等は比較的信用されて可き方であるが、山名の一致してゐるものは割合に少ない、又た豫察四十萬分一地形圖の此區域に記されてある山は上犬ヶ岳、東穀山、乘鞍岳、布引岳、祖母岳、屏風岳と云ふ順序で、前の二つとは餘程相違してゐる、斯樣に名稱の確定されてゐないだけでも、此等の山岳が如何に世間から閑却されてゐるかゞ分るであらう。

會員三枝威之介君は、昨年の夏、白馬岳から此山脈を縱走して五龍(ゴリウ)岳に至られ(「山岳」第四年第一號、一〇二頁)、今年は大黑岳から尾根づたひに白馬以南の最秀峰たる鹿島槍ヶ岳の絕頂を極められ、頗る此方面を精探せられた、三枝君の話によると、白馬(鑓ヶ岳を含む)の南に續いた重なる山は不歸、八方(ハツパウ)、大黑、五龍の諸峯で、其次が鹿島の槍であるさうだ、鹿島槍ヶ岳以南を、自分の管見から記して見ると、尾根は一旦餘程低くなって、直に祖父ヶ岳に連り、夫から山脈は西南の方向に折れて赤澤ノ頭(アカマ)(一名赤澤岳、後立山と云ふものは即ち之であらう)となり、南に走って針木峠の西に聳える尖峰(名稱不明「附記」參照)となる、自分は赤鬼ヶ岳、餓鬼ヶ岳、鹿島大岳など云ふ山を人に聞いたが、誰も知って居らず、且又地圖上の其位置に左程の山を認め得なかったのである、或は此等の名は祖父ヶ岳及鹿島槍等に對する越中方面の異稱であるまいかと思ふ。

大塚博士の「信飛越山間旅行談」中に「野口村より其北にある鹿嶋谷入を登り、信越國界の骨體ともいふべき、秀峰の鎗ヶ岳、乘鞍岳、不歸岳、祖父岳、祖母岳、蓮華岳等を乘り越え、越後西頸城郡大所村に出でたり」(「山水無盡藏」一二

頁に據る）と云ふ文がある、鎗ヶ岳は勿論鹿島槍のことであらうが、山の順序から推定すると此祖父岳は自分の登った祖父ヶ岳とは違らしい、博士の文中にある祖父岳は黑部の谿谷に祖父谷（ヂイダニ）、祖母谷（ババダニ）といふ處があるからして、其上の尾根に便宜上與へられた名稱らしく、三枝君も此邊で斯樣な山のあることを聞かれなかったさうである。

祖父ヶ岳は信州北安曇郡大町の西北、信濃、越中の國界に聳え、其頂上は分れて二峰となる、高さは鹿島槍ヶ岳に讓るけれど、亦た此山脈中の一重鎭たるを失なはない、此山が祖父ヶ岳と云ふ名稱を得たのは大に意味がある、寒い北信の山地も、晩春の頃になると山々の積雪も次第に融けるが、此時祖父ヶ岳の雪解の部分が所謂「種蒔き爺さん」の形を現すからである、農鳥山と蝶ヶ岳では殘雪の形が鳥となり、蝶となるのであるが、之は丁度其反對である、「爺さん」の現はれる位置は大町方面から見て、頂上の二峰の間から、少し下った左の方で、衣服を始め、笈を持った工合など、如何にもそれらしく見えるさうである、殊に八十八夜頃は最も明瞭であるとの事だ、盛夏になると雪は大部分融けるから勿論見ることは出來ない、「種蒔き爺さん」の形が祖父ヶ岳に現はれる頃から、山下では農作にかゝるのである、自分が登山しての想像によると、此現像は雪解の頃、偃松が先づ、頭を雪の上に攢がるから起るので、つまり此邊の偃松が大凡「爺さん」の形に蔓（はびこ）ってゐるからであるらしい、名高い「爺さん」の運命は此偃松と密接の關係があるものであらう。



祖父ヶ岳の「種蒔き爺さん」

立山溫泉から佐良峠を越えて來た自分は、黑部川の籠渡しの破損した事を知らなかった爲め、其渡渉について頗る迷惑を感じたのであるが、此災難は却て有名な品右衞門翁と邂逅するの機會を造った、翌日翁の二男兵三郎を案内として、難なく、黑部川と針木峠とを通過し、畠山の木挽小屋に一泊した後、信州北安曇郡平村大出なる遠山家（翁は戸籍上の姓名を遠山里吉と云ふ）の客となったのは七月二十七日である、此日の午後は連日の疲勞を癒すべく休養に費し、翌二十八日再び兵三郎の案内で、祖父ヶ岳登山の途に着いた。

午前四時半大出出發、前日の針木路を復習して六時半山の神、七時五分白澤（シラサワ）の堂（ドウ）（信州地方にて川の合流點をドウと云ふ、本誌前々號河田氏の「日本北アルプス中央部横斷の旅行談」中に見えた宛字を借用する）を過ぎ、八時畠山の小屋を横に見て、同十五分オホキ澤の堂に着き、此處から籠川に離れ、右折してオホキ澤を溯る、オホキ澤は大平氏（「山岳」第

二年第一號一一八頁)及志村氏(「やま」二〇一頁)の紀行に扇澤と記されてゐるもの、又た或地圖には大入澤と云ふ字が用ひられてゐるのを見た。大町方面から祖父ヶ岳に登るには此オホキ澤又は前記の白澤を登るのが最も便利である、案内の兵三郎はまだ白澤を登ったことが無いと云ふので、登りは兎に角樣子の分ったオホキ澤の路を取ることにして、若し天候等に差支がなかったら、歸りは白澤を下ることに定めた。

四時間餘りの急行に大分疲勞を覺えたので、河原に休んで、先づ第一回の中食を取る、「今日は山はコワイわい」と兵三郎は云ふ、越中から引き連れた人夫の歸國を送る意味で、昨夜汲みかはした別盃の御蔭が、大分ゐるらしいが、自分は其上釜に攻められて一夜を半醒で明かした爲め、實はコワイこと頗る夥しいのである、次に今日は土用の丑の日であることを彼から聞いた、彼は体量二十貫に近い屈强の壯漢、素人相撲では松本平に敵手がなかったと云ふ豪の者、十四の年から父に從って山入を始め、今年三十まで十七年の間、一年もかゝしたこと無いさうだ、やがては父の後繼者として耻かしからぬ者となるであらう、「動けなくなったら旦那一人位かついで飛んで行く」とは前日針木峠の途中で聞いた詞で必ずしも誇大ではないらしい、嘗て三井の鑛山員とか云ふ足弱男を負って、針木を往復したこともあるさうだ、彼は、愉快な、又た親切な男である。

オホキ澤の入口を口元(クチモト)ゴザと云ふ、(ゴザは御澤であらうか)籠川と同樣な河原であるが、傾斜は餘程多い、我々の登らふとする祖父ヶ岳の尾根は、行手を遮って美しい綠色に、白雪の斑點をつけ、後には針木峠の東なる蓮華岳が高く雲表に聳えて見える、オホキ澤の岩石は、水のある處は、苔があるのか、滑って歩き難くい、どふした機會か、さしもの兵三も石上の飛行に足踏み滑らして、横倒れとなり、鮮血脚絆の外に滲み出す程の負傷を、右脚に受けた、然し進行を續けることの出來たのは幸福であった。

行くこと暫時にして、左方に一雪谿の來り會するのがある、之れ奥(オク)ゴザである、九時四十分溪流を行き盡して、雪谿の登りとなる、雪のトンネルの下から急湍霧を吹いて、奔騰する樣、凄まじくも又壯烈である、カンジキは昨日針木路で行き遇った會員某君に貸した爲め、大出の村から貸りて用ひる手筈であったが、兵三の不注意よりして、忘れたものと見え、荷物の中を調べても見當らない、據處なく今日はカンジキなしで、雪登りの練習をやる可く、餘儀なくされ、危き足元に氣をくばりつゝ登る、十時雪谿の分岐した處に至り、其最も左なるものを取る、此處で下りて來る二人の獵夫に會った、彼等は越中のもので、鹿島の槍の附近で、熊狩を行って居ったのだそうな、其話に依って此上の尾根に獵夫の造った小屋のあることを知った。

此雪谿を何處までも登り切れば、國境山脈を越えて、黒部の谿谷なる棒小屋の澤に下ることが出來る、其峠地の處を棒小屋ノッコシ或はオホキ澤ノッコシと呼んでゐる、ノッコシは乘越で、つまり峠と同意味である、地名としては通常其前後の澤、又は其側なる高峰の名をつけて之を呼ぶ、針木峠の南にある北クゾノッコシ、七倉ノッコシ、不動ノッコシ濁ノッコシ等は、孰れも高瀨の谷から黒部の谷に移る峠で即ち此類である。（「山岳」第三年第二號所載、志村烏嶺氏の「日本アルプス縱走記」に據ると中房川から、燕岳の連脈を越えて、高瀨川に下る處に、乘越峠と乘越澤と云ふものがある、乘越と云ふ語を固有名詞として、用ひた場處は此外餘り例の無いことゝ思ふ。）

雪溪愈〻急となったので、右方にある一つの山背にかかって、樹木と竹の繁った中を押し分け登る（十時三十分）、兵三は鉈で幾分づゝか、路を切って行って呉れたが、枝に跳返され、竹で滑り、氣はあせっても、中中果敢取らない、休みては掻き分けつゝ登ると凡そ二時間許り、果しもなき坂路に、今は根氣も何も無くなった頃、辛うじて祖父ヶ岳より棒小屋ノッコシに連る國境の尾根に辿り着いた、尾根は偃松と高山植物とに依って、彩られて美しい景色を呈してゐる、殘雪から滴る水を掬んで、中食を認め、漸く蘇生の思をした。此處から尾根を傳って、祖父ヶ岳の南峰（低き方の峰）の頂に達したのは午後一時半である。（祖父ヶ岳頂上の二峰は、略ぼ西

籠川の溪谷（辻本滿丸氏撮影）

南乃至東北の方向に連るから、之を南北と云ふのは餘程無理であるが、假に大町方面から見て、左にある低い方の峰を南峰、右にある高い方を北峰と名づけて區別し置く。)

此頂上は甚だ狹く粗末な三角櫓がある、下の石には何等とも書いて無い、恐く補助三角點とも云ふべきものであらうか、偃松は此附近まで繁茂し、シャクナゲ、ガンコウラン、コケモモ、タカネウスユキサウ、ミヤマダイコンサウ、ミヤマキンバイ、チングルマ、ツマトリサウ、タカネスミレ等が見參に入る、先刻熊取獵夫から聞いた小屋は、自分等の到着した處より、少し先方の尾根の凹地に見える。

午後になって雲は稍や多くなった、北の方には右半を白雲に浸した鹿島槍ヶ岳の大岳、西には雲中に隱顯する立山の連峰、南には蓮華岳及針木峠の連嶺が見え、東の方なる大町、池田の市街、細きこと髮の如き糸魚川街道、蜿々曲折せる高瀨の大流等より、今朝出發した大出の人家は、目の下である、木崎の湖水は其一部を山間に現す。

最初は祖父ヶ岳から尾根傳ひに鹿島槍に登らふと云ふ考も抱いて居ったが、大分今日は弱り込んだのと、且つ三枝君が今年是非登山すると云ふことを、話されたから、槍登りは見合せ、ゆる〳〵祖父ヶ岳で遊ぶことにして、時間も早いから、頂上の岩を枕に、午睡を試むべく横たはった、こんな高い處にも、蟻が少なからず居って襟から這ひ込む爲め、とても熟睡は出來ない、ウトウトしながら山靈と同化した樣な好い心地で三時半頃まで横になってゐたが、何時しか一面雲に包まれ、冷々して來たので、先刻見て置いた小屋へ行って野營することにして、頂上を下りた、最高點の北峰は、此處から勿論近いが、明朝に讓って今日は行かなかッた。

前に來た尾根を戻って小屋に達したのは午後四時過ぎ、小屋は草葺きの屋根を、直ぐ地面に接して造った堀立小屋で、僅に雨露を凌ぐに足る丈けのものに過ぎないが、夫でも間口九尺、奥行六尺もある、一通り野宿の支度をして來た我々には、此位のものがあれば、金殿玉樓と云っても差支へない、此處は海拔凡二千五百メートル、針木峠の頂上位の高さはある、小屋の側には殘雪から流れる水を集める筧がある、アヲノツガザクラ、ミヤマキンバイ、イハカヾミ、ミヤマキンバウゲ(?)の花が地面を飾る、日沒には間もあること故、悠々燃木を集め、夕餐を終った時もまだ明るかった、氣溫は夕刻になって攝氏十六度となった。

草を褥に横りつゝ「神立(かんだち)も先づ無さそうだ」と云って居る内に、何處ともなく、殷々たる響が聞える、矢張り始まったなと思って小屋の外に出て見ると、下界は一面に重厚な雲海、時々我々の方に吹き上げて來る雲の中を、岳燕(だけつばめ)が高く飛んでゐる、追々暗くなるにつれて、大町方面に當る脚下の雲中から、閃々たる電火が漏れ、雷鳴が高く聞えて來た、山上の雷、

之れ登山中の出來事として、自分の最も恐れる處であるが、今日は雲の低い工合や、風の方向等を考へて、先づ此處まで襲來することは無からうと思はれるので、稍や安心の胸なでをろしつゝ、此光景を眺めて居ると、實に又何とも云へぬ痛快の感じがする。

登山中の雷が、どの位危險なものであるか、自分は此事に就て、一向確かな智識を持って居ないから、嘗て晩餐會の席上で此問題につき、諸君の教を乞ふた事もある、割合に危險は無いものかも知れぬが、誰も決して平氣で居られべきものでない、山上の雷の危險は、多くの場合に於て隱れ場處が無いこと、雷雲に極く近いこと、加之其者に依って包圍さるゝことすらあるからである、雷雲は通常餘り高くないが、然し高山だとて安心は出來ない、現に絕頂の三角櫓が雷火の爲めに破壞された例は少なくない、自分の今思ひ出し得るものでも、立山又は甲斐駒の如きは夫である、川涉りや、崖傳ひの危險は、準備次第で、いくらでも、人工的に之を減少することは出來るが、落雷の危險は避雷針でも、かついで行かない限り、天災と見做すより外はない、自分も以前は雷のことなど、全く念頭に置かなかったが、或夏上州の大胡から瀧澤を經て、赤城山に登った時、今考へて見ると牛石峠と云ふ邊であらう、烈しい雷雲に包まれて命辛々の目（少くも自分は斯く信ずる）に遇って以來、山上の雷鳴が非常に恐ろしくなったのである、其後幸に烈しい雷に遇ったことはないが、左程でもないのには度々遇ふ、今年も藥師ヶ岳で一寸したのに遭遇した、長い登山旅行中には、どうしても避けられないものであらう。

アルパイン、ジアーナルの變事（アクシデント）欄を、少々調べて見ると、墜落や、暴風雨で死んだ人は、年々少なくないが、落雷の爲めに死んだ人は、見當らなかった、只或る登山隊がモンブラン登攀中、雷の爲めに一同氣絕したことが記してあった、高アルプス地方でも、雷鳴が稀でないことは、登山紀行中に、其記事がいくらもあることで分る、雷の時に、岩が恐ろしく鳴ったとか、氷斧（アイスアックス）が五月蠅い程唸り出したので、雪の中に埋めて、唸りの止むのを待ったとか、或は雷鳴の兆候があった爲め、某山の登攀を放棄したと云ふやうなことが記してある、彼地では山上の雷の研究は、餘程進んで居るであらう。山には大膽な兵三郎も「岳で雷に遇ったら、火の玉が飛び廻って、とても堪ったものでない」と云って雷の恐ろしいことに就ては、よく自分と話が合ふ、自分は露出した山頂へは、成るべく早朝に登り、午後は比較的隱れ場處の多い山麓に下ることにして居るが、何日もさう都合よくは行かぬし、途中の森林帶などは、中々危險と思はれるし、又近頃流行の縱走と云ふやうな場合には、自分の規定は不可能となるのである、山上の雷が餘儀ない出來事として避け得られないものとすれば、其危險の程度と、出來得べくんば避難法について、確固たる智識を持って置くことは、一般登山者に向って大に必

要の事ではあるまいかと思ふ。

今宵の雷は、幸に豫想の如く、風に連れて鹿島谷の方に移り行いた、然し其強さは次第に増加して、我々の尾根も時々雲に包まれ、卒然たる驟雨の來襲を見るので、遂に小屋の中に縮まった、雷鳴は十時頃まで續いたであらう。翌二十九日午前四時起床（氣温八度）、五時半頃小屋に別れを告げ、再び昨日の尾根を辿って南峯の頂に達したのが六時二十分、撮影等に時を費してから、猶ほ尾根づたひに祖父ヶ岳の最高點（北峰）に到着したのが七時二十五分である、頂上の狹いこと南峰の如く、三等三角の檜立てども、祭神とては一もない、携帶の氣壓計は二千八百七十メートル（九千四百七十一尺）を示した、これは少し高きに過るかも知れぬ、然し九千尺以上の山であらうと思はれた、北峰も、南峰も、共に其頂上に磊々たる岩石は、石英粗面岩であって富山圖幅の地質圖に記してある如き、輝石安山岩でないことを認めた。

眼を放てば黑部の深谷を隔つる立山の連峰は、雪色燦然として朝日に輝き、其莊嚴なる景色は筆にも言にも盡し難い、其南に連って、自分の新交を結んだ藥師ヶ岳の頂下には、三つのカールが歴々として見える、北の方（北々東）には、鹿島槍ヶ岳の二つの頂が高く聳えて、此方面の眺望を遮る、南の方には蓮華岳と針木峠の西にある尖峰（名稱不明）が聳え、蓮華の左には槍ヶ岳が高く群を拔き、穗高、常念、燕の諸山は其左に雲積する、昨夜の夕立の名殘か、東南の方向は雲が多く、富士、日本南アルプス等の見えなかったのは、殘念である。

山頂に足を止めて居る内に、鹿島槍ヶ岳の東方、冷澤（ツメタダ）に屯した雲は、いつしか、むら立って、恰も液體を注ぐ樣に、祖父と鹿島槍との間の尾根を越えて、黑部の谷に流れ込む、東南の風に吹き送られた雲は、一方棒小屋ノッコシの尾根を越えて、同じく黑部の方に流れる、自分は昨年立山の雄山に登った時、別山の上を越えて、黑部の谷に入り込む雲を眺めたが、今日は夫と反對である、奇妙な事には、信州方面は雲が湧き起って、居ながら、之が一度黑部の谷に入ると、跡方もなく消えてしまふ、鹿島槍と針木方面は、此雲で大部分消されてゐるが、正面に見える劍ヶ岳は全然晴れてゐるのである、黑部の谷で雲の消えるのは多分温度の關係であらう。

何の文字も記されてない三角標の柱に記名して、九時下山すべく頂上を辭した、昨日と路を換へて白澤を下らうとするのである。

二峰の間の低い處から、先づ「種蒔き爺さん」の偃松に沿ふ二三回雪を横ぎる、此雪の側で新しい熊の糞を見出した、オホバキスミレ、シャウジャウバカマ、シナノキンバイが近頃雪解になった處に咲いたのを見て、カンバの木などを頼りに、急斜面を下り、雪谿に沿ふて白澤の源なる水ある石谿に出たのは一時間餘り後であった、此處から此樣な澤を下るの

だと思ったのは大なる間違で、數丈もある瀑の上に出た、兵三郎の熟練と注意とで此難場を無事に下ると、今度は又た一面の雪となって其傾斜が急であるから、カンジキ無しでは中々歩き難くい、雪の割れ目とトンネル踏抜きの危險とに、多くの注意を拂ひつゝ、全く雪上の歩行を終ったのは丁度十二時である、氣の緩みか此終點近い處で自分は美事顚倒して一丈程もある割れ目に墜落せんとする處であった此處海拔千六百メートル位はある。

行路に雪は無くなったが、谿側には屢々大なる殘雪がある、兩側の山は甚だしい急斜面を示す、此邊で一つの崖の下を通る時、大きい落石があって我々の前方三四間の處を掠めて飛んで行ったのは恐るべき次第であった、漸く下れば雪崩れの凄まじい跡がある、尺徑近い白樺が他愛もなく引きちぎられて鋸の樣な切れ口を示して居るなど、其猛勢が思ひやられた、一時十分、左方より來り合する澤がある、是れ白澤の東澤で、今迄下ったのは西澤である、之れから澤の幅も廣くなり傾斜も緩くなって夫と共に、困難も無くなった、一時四十五分、遂に白澤の堂に出ることを得た、此白澤の谿路は頗る嶮惡な處があってオホキ澤の危險の少ないのには較べ者にならない。

昨夜の雷鳴は、大出邊では稀に見る烈しいものであって、一同我々の安否を氣づかったそうだ、然し僥倖にも、我々は之を山上に避難したのである。

（附記）○「種蒔き爺さん」の畫は、兵三郎と、同人の兄作十郎との二人が記憶によって畫いて呉れたものに、多少の訂正を加えたもので、寫生でないから、勿論正確なものでない、單に概念を示す爲めに挿入したのである。祖父ヶ岳と云ふ名は此「爺さん」から與へられたものであるから、双對的の意味はなく、附近に祖母ヶ岳の無いのは當然である、「祖父」よりも寧ろ「爺」の字を用いた方が正しからうと思はれる。

○「山岳」第二年第二號所載、志村氏の「越中立山より祖父岳を望む」と云ふ寫眞の山は、左手の遠方に高く見えるのが蓮華岳、中央にある鋭い山が本文中に名稱不明として置いた針木峠西方の尖峰、其右にあって蓮華と同じ位の遠さに見えるのが七倉岳（ナノクラ）である、祖父ヶ岳は全く此寫眞に現はれてゐない、會員増田吾助君が針木越に伴はれた人夫は前記の尖峰を北針木岳、蓮華を單に針木岳と呼んでゐたそうである、然し蓮華岳は紛もなき名稱であるから、自分は此尖峰に針木岳の名を與へたいのである、此山は自分の所見では蓮華より少し高い。

○鹿島の槍ヶ岳に登るには祖父ヶ岳から尾根をたって行くのが最も便利である、健脚の人は大出から二泊で足りるが、自分の樣に弱い者は、三泊を要すると思ふ、祖父から見た處では頗る近いが、何分尾根に縋んで行くのであるから、中々遠いさうである、此尾根には池があって熊取の小屋がある筈だから、野宿には都合よからう（但し明年もあるか、どうかは分らぬ）、山腹にはカンカン平（ヒラ）と云ふ妙な名の平があるそうだ、國境山脈中では、白馬と伯仲する高峰で、品右衛門などは、南の槍ヶ岳以北では、最も高いとさへ云ってゐる。

○昨年十月の時事新報に「日本アルプス探險」と云ふ大きな標題で、登山紀行を發表した、中井榮次郎と云ふ人は、棒小屋乘越から黑部に行ったのださうな、而して其文中『遂に日本アルプスの峻嶺たる海拔九千九百尺の劍ヶ峯（クラスケイヲ）に達し得た』と云ふ文句は、頗る同人間の疑問であったが、今度其時案内をした兵三郎の話を聞くと、中井氏は劍の麓にある内藏助（クラスケノスケ）平と云ふ處まで行かれた丈で、勿論頂上に登ったのではないさうだ、梅澤君の「登山の意義」の穿鑿も斯云ふ

場合があるから、大に必要となるわけだ。

（黒部の籠渡しは其後修繕せられたと云ふ通知があつた。）

日本河川志（三）

高頭式編纂

播磨洋

馬宿川系

別稱　舊名　黒羽川

（（香川縣統計書））馬宿川に作る、（（全讃史））第十卷、黒羽川、源を花折、鉢伏の諸山谷に發し、百折而して川股、黒羽を經、馬宿村に至りて海に入る」に作る。

流域　讃岐國大川郡。

發源　讃岐國大川郡相生村大字川股。

流末　讃岐國大川郡相生村大字馬宿に至りて、瀬戸内海に注ぐ。

河線　三里十町。

以上四項（（香川縣統計書））に據る。

水害損失價額　香川縣の調査に據れば、明治三十七年度に於ける馬宿川の水害損失價額は、千五百十圓なりといふ。

（（香川縣統計書））明治三十八年度、〇三頁に據る。

●馬宿川幹流　舊名を黒羽川といふ、讃岐國の東方に位する大川郡の東部を流る、源を阿波國境の大山（標高二千七十六尺、和泉砂岩層より成る）の東、北二方の和泉砂岩層地に發し、二水、相生村大字川股にて相合し、北流して、大字黒羽より沖積地に出で、大字馬宿に至りて、播磨洋に注ぐ、河線三里十町、溯詳かならず。

（（香川縣統計書））明治三十九年度四頁、「廿地形德島圖」、「刪製廿德島圖」、「地質四西部」參取、但し三圖記名を缺けり。

湊川系

流域　讃岐國大川郡。

（（香川縣統計書））に據る。

發源　讃岐國大川郡の中央南方に位する、笠ヶ峰と中尾山に發す、地は福榮村大字入野山に屬するか。

「廿地形德島圖」に據る、「輯製廿德島圖」中尾山と笠塚山に發源するが如く記せり、（（大日本地誌））國の南境にある笠塚山と登尾山等の北麓に發源し」に作る、（（帝國地名大辭典））福榮村大字入野山の山中に發し、東流して同村大字東山に至り同所より出づる一溪流を容れ」に作る、（（香川縣統計書））五名山村に作れども、恐らくは誤謬ならむ、現時の大川郡は、舊の大内郡と寒川郡の合併したるものにして、二郡の境界には、笠ヶ峰、中尾山の一山脈ありて、分水嶺をなす、湊川は其の東方に發源するものにして、即ち舊の大内郡に屬す、而して五名山村は、分水嶺の西方にありて、舊寒川郡に屬し、鵜部川の水源を作れり、故に取らず、後考を俟つ。

流末　讃岐國大川郡白鳥村大字湊に至りて、瀬戸内海に注ぐ。

（（香川縣統計書））、（（帝國地名大辭典））に據る、（（全讃史））湊に至りて海に入る、故に湊川と謂ふ」とあり。

河線　四里二十町。

（（香川縣統計書））に據る、（（大日本地誌））長さ凡そ十八粁（四里十九町）に作る。

水害損失價額　香川縣の調査に據れば、明治三十七年度に於ける湊川の水害損失價額は、五百六十五圓なりとひふ。

（（香川縣統計書））明治三十八年度一〇三頁に據る。

湊川幹流　讃岐國大川郡の中部を流る、源を郡の中央南方に位する笠ヶ峰（標高二千五十九尺、花崗岩より成る）の西方花崗岩地、及び中尾山（笠ヶ峰の南方にあり、標高凡そ千七百尺、花崗岩より成る）の南方花崗岩地に發し、二水、福榮村大字入野山（標高二百七十一尺、和泉砂岩層地）に至りて相合し、和泉砂岩層地を東北に向ひ、大字與田山（標高九十九尺、和泉砂岩層地）を過ぎ、再び花崗岩地を經、白鳥附近の冲積地に出で、西に虎丸山（標高千三百九十三尺、花崗岩より成る）、東に歸來山（標高凡そ八百尺、花崗岩より成る）を見て、北流し、白鳥村大字湊に至りて、播磨洋に注ぐ、河線四里二十町、濶詳かならず。

宮池　（（全讃史））宮奥池に作る、讃岐國大川郡の南方福榮村大字西山にあり、周回十七町、面積十三町、廣二町四十八間、袤二町四十一間、正保三年矢野部平八、高松藩主の命を奉じて、之を作るといふ。

（（香川縣統計書））五頁、（（全讃史））參取

（（香川縣統計書））明治三十九年度四頁、（（大日本地誌））第七卷六〇頁、（（帝國地名大辭典））河渠一九八頁、（（全讃史））第十卷、「廿地形德島圖」、「輯製廿德島圖」、「地質四西部」參取。

與田川系

別稱　舊名　水主川。

◎日本河川志　高頭

（全讃史）水主川、源を北谷西内諸渓に發し、水主、中筋を過ぎ、大谷、友國に至りて海に入る」とあるもの、此川ならむ。

流域　讃岐國大川郡。

（香川縣統計書）に據る。

發源　讃岐國大川郡、上星越嶺の北麓、譽水村大字水主か。

「輯製廿德島圖」、「廿地形德島圖」、（帝國地名大辭典）參取、上星越嶺は地形圖に據る、同圖は與田川の記名を缺けり、（香川縣統計書）松尾村大字田面に作れども、地形圖を案するに、田面は與田川と、津田川の分水嶺をなせる、宗信嶺の西に位し、津田川の流域に屬せり、故に取らず、後考を俟つ。

流末　讃岐國大川郡譽水村大字横内に至りて、瀬戸内海に注ぐ。

（香川縣統計書）に據る、（帝國地名大辭典）三本松町の西に至りて内海に入る」とあり、三本松町は譽水村の東隣なり。

河線　三里。

（香川縣統計書）に據る。

水害損失價額　香川縣の調査に據れば、與田川の水害損失價額は、明治三十七年度に於て二百四圓、三十九年度に於て十五圓なりといふ。

（香川縣統計書）明治三十八年一〇三頁、三十九年度四二頁に據る、三十九年發行の調査に三十九年度とあるは、三十八年度の誤謬ならむ。

❷ 與田川幹流、舊名を水主川といふ、讃岐國大川郡の中部を流る、源を郡の東南方、譽水村大字水主なる上星越嶺（標高三百五十三尺、花崗岩より成る）の北方、花崗岩地に發し、東方に虎丸山、西方に鞍掛山（標高九百三十七尺、花崗岩より成る）の間を北流し、大字横内に至りて、播磨洋に注ぐ、河線三里、潤詳かならず。

原間池　所在今ま詳かならず、舊大内郡原間にありといふ、河田池　大川郡譽水村大字水主にあり、（全讃史）に據れば、二池住古より之れありといふ。

（香川縣統計書）明治三十九年度四頁、（帝國地名大辭典）河渠二一九頁、（全讃史）第十卷、「廿地形德島圖」、「輯製廿德島圖」、「四十地質西部」參取。

松崎川系

❸ 松崎川幹流　讃岐國大川郡の中部を流る、源を郡の中央なる鞍掛山の東方、花崗岩地に發し、北流して冲積地に出で、龍王山（三本松町と丹生村の間にあり、標高七百九十九尺、花崗岩より成る、「輯製廿德島圖」此山を北山に作る）の東方、住吉岬に至りて、播磨洋に注ぐ、河線凡そ一里半、潤詳かならず。

式曰く、此川を記名せるもの、「廿地形德島圖」あるのみ、諸書も亦解説を缺く、故に詳述する能はず、後考を俟つ。

別稱 舊名 石田東川。

（（全讃史））石田東川、源を南川の諸溪に發し、石田東村を經、金山下に至り、富田西川と會し、北流して奥村に至り、岐となる、一は則ち東の方津田に至りて海に入り、一は則ち北流して、神前川（式曰く、今の鴨部川なり）と會す」に作る。

流域 讃岐國大川郡。

（（香川縣統計書））に據る。

支流 富田東川、富田西川。

（（全讃史））に據る、今まで改稱せるか、後考を俟つ。

發源 二源あり、(1)、讃岐國大川郡松尾村大字田面、(2)、同國同郡富田村大字南川。

「廿地形德島圖」に據る、（（香川縣統計書））田面に作る、（（帝國地名大辭典））富田村大字富田中に作る、（（大日本地誌））大川郡の中部にあり、笠ヶ峰、田面讃附近の諸細流相合して成れるものにして云々に作る。

流末 讃岐國大川郡津田町に至りて、瀨戸内海に注ぐ。

河線 三里二十町。

以上二項（（香川縣統計書））に據る、（（大日本地誌））長さ僅かに十二粁（凡そ三里二町）のみ」に作る。

水害損失價額 香川縣の調査に據れば、明治三十七年度に於ける、津田川の水害損失價額は、八百九十七圓なりといふ。

（（香川縣統計書））明治三十八年度一〇三頁に據る。

●津田川幹流（フガ） 舊名を石田東川といふ、讃岐國大川郡の西部を流る、二源あり、一は郡の中央なる鞍掛山の西方、花崗岩地に發し、北方に田面嶺（標高三百十七尺、花崗岩より成る）と、南方に宗信嶺（標高三百九十六尺、花崗岩より成る）の間を西流し、一は同郡笠ヶ峰の西方花崗岩地に發し、東方に宗信嶺と、西方に雨瀧山（標高約八百尺、花崗岩より成る）の間を西北流し、二水富田村大字富田中にて相合し、沖積地を流れ。

◎富田東川 （（全讃史））に據れば、源を日下石佛に發し、富田東村を過ぎ、北流して大井に至り、石田東川即ち現今の津田川に會す、流程詳かならず。

◎富田西川 （（全讃史））に據れば、源を破石、箕山の諸溪に發し、富田西村を過ぎ、西北流して、三佛寺、大田代を經、大井に至りて、石田東川に會す、流程詳かならず。

網ヶ岳（津田町の南方にあり、標高八百二十五尺、花崗岩を貫ける輝石安山岩より成る）の西北麓を繞り、津田町に至

りて、津田灣に注ぐ、河線三里二十町、濶詳かならず。

（香川縣統計書）明治三十九年度四頁、（大日本地誌）第七卷六〇頁、同書津田町を津田村に作る、誤謬なり、（帝國地名大辭典）河渠一三二頁、（全讃史）第十卷、「廿地形德島圖」、「輯製廿德島圖」、「四十地質西部」參取。

阿波國劍山幷に高越山登山記

多田香疇

四國第一の高山と、古來より云傳へし石槌山は、實測の結果二千米突の以下となれり、まだ四國全國の完全なる五萬分一地圖は、出版せられざれど、農商務省四十萬分一にては阿波の西隅なる劍山、先づ二千二百四十二米突として、四國第一の高山なり、されど參考に資する書少なく、余の不學なる、左の圖書を案内とす。

大日本地名辭書　千二百二十頁以下

日本山嶽志

大日本名勝地誌　八編　二百三十八頁附近

阿波名勝案内　明治四十一年二月石毛賢之助著

陸地測量部二十萬分一輯製圖　德島　室戸岬

同五萬分一　脇町　川島　德島

農商務省地質局二十萬分一　德島　高知　同四十萬分一　本州西部

附近村役場へ問答せし回答には、

美馬郡貞光町役場

一本町より劍山麓、登山口は一宇奥山村字桑平名。

一里數は九里八丁、内俥は本町より三里通ず、此賃金七八十錢位。

一山麓より山頂へは、二里にして、途中宿泊する處なし。

一本町より案内者は賃金、三四圓を要す（宿泊二夜日當共）

一親切なる旅宿は、本町大阪屋旅館なり。

一登山の時期は、七八二ヶ月にして、九月に入れば寒くして困難なり。

美馬郡宍吹村役場

一木村より劍山頂へ、里數十五里二十三町

一山麓木屋平村字川上より四里〇六町。

一木村に於ける、親切なる旅宿は大岩ヤス。

一登山し得べき最後の日は、十月三十日頃。

美馬郡東祖谷村役場

三好郡下名より美馬郡西祖谷山村に入り、有名なる善德愛橋を經て、同郡東祖谷山村大枝泊（宿屋は程野屋事、下名より大枝迄の距離六里）是より菅生を經て（劍山の麓）劍山（行程　九里餘

美馬郡一宇村役場

一貞光より一宇村大字一宇口山村字古見（戸數數十小都會）迄四里八町　此間郡道三里半開通便通す、殘二十八町二三ヶ月後落成）。

一古見より一宇奥山村字桑平（クワタヒラ）（人家所在地極端）迄三里

一字桑平より劍山絶頂迄約三里

一比較的清潔親切なる宿は、古見町柴田旅舘、其他都合により、登山の節は、其當時民家へ頼む事。

一劍山登山期として、氏子信徒の登山するは、御縁日舊四月十七日、舊六月十七日、舊八月十七日の三期、就中六月には、十日頃より約十日間、毎日晝夜の別なく登山す。

其他に劍山東麓なる川上并茗荷の所在地、麻植郡木屋平村役場へ、二回往復端書を以て、尋ねしも回答なし。

豫定は貞光より一宇溪に入り、祖谷山に下らんと志ざす。

九月上旬より、所謂舊の節替りとなり、永らくの暑さも涼くなれり、九月十二日出で立つ、午後五時二十六分の瀧車にて、六時三十六分大阪につく、川口に行きしに八時の舟は、天候の都合にて、出でず、午後十時と、一所になる、十年以前の德島行も變らず一ぱいの混雜、九時頃に漸く切符賣り出す、一ぱいの人なれば、一等貳圓貳拾五錢を拂ふ船はすぐ側に横はれり、加古川丸二百五十噸、現今德島通ひの最小船なり、一二三等共滿員定期の午後十時に出港す、海上波なく、兵庫に夜半寄港す、今朝より曇りし空晴れて、東方に月出でたり。

一睡の内に船の少し動搖するは、鳴門の潮筋にして、天明德島近く津田の川口を入り、富田橋畔に着しは、午前六時半、昔の如く大阪出港并に德島への着港も、警官のお調とて、巡査乘客を點檢す。

俥にて新町橋の南詰東舟場（センバ）なる、米田源太郎につく。

徳島は余の舊知の地、知己多し、朝飯後大瀧山より勢見佐古と名所巡りす、大瀧山の櫻は、よく茂り、花時は他所になき大觀ならん午後は知己の宅をめぐる。

九月十四日快晴。

午前は舊城趾なる城山に行く、本年春　東宮殿下の行啓ありし爲、俄に開きて公園となり、見違ふ清潔地、山は六十米突の獨立山徳島市街を見下し、東は淡路島沼島より、沖は靜にして、よき眺めなり。

午後一時發の瀧車にて、北方舟戸迄行く、停車場は新町橋を渡りて、約五町の處、列車は人少なくがらあき、瀧の山を廻りて平野の内を午後二時二十六分舟戸につく、こゝは北方の咽口として、俥もあり、構内切符は、貞光迄、三里十八町、四拾五錢、すぐ俥にのる。

舟戸は高越山の吉野川にせまる處、吉野川風景よく、二三町行けば、古手に渡船場あるは、岩津への渡し、脇町へ約一里餘なり、余は眞直の街道を行く、山崖吉野川に逼りて、景よし、道は平蹈坦々、三十町穴吹川を渡る、是より川に遠かり、田畑は桑多し、太田の村には、太田神社あり、吉野川に臨み、小き淵をなす、忌部神社の末社と云ふ、少しくせば貞光川あり、橋畔の柳林は、支那畫の如し、車夫云ふこゝより劍山能く見ゆといへば、車を見ゆる處まで引かせしに、山々重疊の間に遠く草山あり、それなりと云ふ、後にて登山せしに池峠の西の山ならんか。

街迫より南に入り込む事約四町、貞光町に入る、約一町、大坂屋に着しは午後四時三十分なりし、此宿風呂なし。

夕飯、鮎丸煮松茸の汁、鮎作り、鮎に松茸とは珍らし。

穴吹川にて左に穴吹溪奥に高く、奇形の山見ゆ、忌部社の祭神、即ち阿波國の祖なる日鷲神の住されし、月のイデ山とて、苧取石、幣立石、日名祇窟なんどある、友内神社ありと云ふ。

九月十五日　大雨

雨なれば詮方なく終日籠居す、町を散歩するに、約七八町の一筋の町、煙草專賣局、警察分署、電信もあり、脇町に次ての都會らし。

九月十六日　曇午後雨

昨夕より空晴たれば、夜來命せし俥にて、午前八時十分、貞光川を溯る、貞光町を離れて十町、貞光川を東岸に渡る、木綿葉橋と名く、端山村、川は屈曲多く、兩岸山岳逼り、纔かに少しの平地のみ、貞光より約二里にして、鏡と云ふ、部落の向ふに川を隔てゝ、斷崖屏風の如く、其下に一小祠あり、蜂巣祠と云ふ、車を下り、芋畑の道もなき畦を通る、約一

町、草堂あり、直下に深淵あり、對岸よく見ゆ、時に九時二十分。

蜂巣神社地は、西端山村宮平にあり、老樹斷崖に點々、一幅の畫圖なり、諸書大なる蜂の巣ありと記せど、對岸手にとる如く能見ゆれど見へず、岩石は古生岩の水蝕せるもの、恰も楠の化石の如く、木目に見へ、奇景なり、川に下る、細き道あれど、向岸に行くべき橋もなし、元の芋畑を上る一町、待ちし俥にて川を溯る。

西岸に高く見ゆるは、山上は吉良の御所平とて忌部(インベ)神社の舊地、麻植(ヲエ)郡山崎にある忌部神社と、本家爭をなし、遂に德島の勢見山に新築されし社なり、今は攝社となる、抑忌部神社は神代にこの粟の國に住給ひし日鷲命を祀れるもの、この邊の高山即ち劍山も高越山も、皆本尊は日鷲權現なり、俥上にて拜し行くこと約一里にして、右方高く山上よりかゝる瀑はこれ、鳴瀧なり、時は午前十時二十分。

鳴瀧は、地は西端山村字猿飼名に屬す、見上る高山より落つる瀑は、四段に分れ、其下に小橋あり、遙に下にて、又二段に落つ、恰も十津川溪の武藏温泉下流の瀑の如し、水量は多けれど、名高き名勝程の大觀もなし。

是れより一宇村大字一宇口山に入る、四五町川向に釜湧銅山とて、小屋山腹にあり、明治二十五年頃の發見と云へど、今は廢鑛となる。約八町にして今迄右に沿ひし川を、西岸に渡る、土釜橋と云ふ、名高き土釜は此所なり、時は十時四十分。

橋畔には二三の家あり、酢温飩(うどん)など賣る、地は一宇口山小字土釜と云ふ、土釜とは一宇川（即貞光川の上流なり）の俄に巨岩逼り、激瀑深淵をなせる所、其水の凄き、音怒釜より轉せし名なり、水聲は激しく聞ゆれど、橋上よりは流も見へず、里人の言に、東岸に新築せる空屋の裏に出でよと云ひければ、岩石をよぢ上り、よぢ下り、家の向に出れば、老楓數株は全溪を蔽ひ、溪流は其所にて、巨岩恰も瓢簞の口の如く、瀑布となり、一の釜、二の釜と分れ、深淵數處直下にあり、色は深綠、見るからに其音雷の如く物凄し、この新築の空屋は、住むもの祟りありとて、空屋のまゝなりと、古見の者云へり。

十一時十分、待ちし車にて又川を登る、是より字なし、約半里にして二軒の家あり、小字を犬の墓と云ふ、新道の車の通ずるは、此所迄なり、こゝにて下車す、貞光より三里半、此車代七拾五錢、時は十一時半、土釜出る頃より小雨來りしが、こゝにて彌々本雨となれり、雨用意して徒步出來上りの新道を行く、今工事中にて石壘を築き、道は纔かに工事中を飛び〳〵行く、遂に細き山腹の道となる、一宇川は幅漸く狹くなり、古見に近く、兩岸俄に峨々たる大石、石門の如く絕景なる處多し、約く二十餘町、山間少しく開けたるは、古見なり、山奥ながら家居もつづきたり、一宇村役場は此所にあり、右手に藥なんど賣れる家、柴田旅館と云ふ、午後〇時三十分つく、雨は茂し。

晝飯　燒あまご煮附　麩玉子茄子汁。

此家は婦人のみにて、登山の準備を尋ぬるも要領を得ず、隣りに此家の分家に、呉服荒物を賣る店あり、其人の周旋にて案内者を雇へり、一日食費は余の負擔とし、二十五錢の賃金なり、主人云には、此頃の天候何時雨が續くかも知れず、是より山奥は家ありとも米飯なく、白米の用意せよと云へば、チト大層には思へど、萬の用意とて。

米五升　一日約一升四日分萬一の用意とし、一升を增せり、幸ひ山中は天氣續きなりしも、一升五合を餘せり。

酒貳升　案内者は嗜好物とて、重きをいとはず持行たり、空屋寢るとき、間にあへり、又案内者を鼓舞せし力多し。

味噌二百匁　少許の外必要なかりし。

中次ゴザ一枚　笠　方言寶笠と云ふ共に少し役に立ちしのみ。

蠟燭十本　提灯一個　まつち四箇　大必要品なりし。

外に草鞋　醬油　福神漬　其外ネル單衣一枚を借る。

全然臺灣の生蕃地入の如し、宿にて案内整はざれば、村役場を煩はさんと思ひしも、先づこれにて大丈夫なり。

是等の品は、皆此家一軒にて整ふ、山奥は便利なり、古見は貞光附近より、祖谷山への街道（？）とて、宿帳には皆祖谷に行かふ人か、煙草專賣所の役員か、材木商のみなり、劍山登山などはなし。

雨甚しく、準備整へば、三時頃又半日の靜養、前の一宇川の流れ轟々物凄し、夕飯は晝と同じく、晝飯十五錢、泊りは三十五錢なり。

九月十七日　晴天午後曇

晴天なれば、五時に案内者來れと云ひ置き、四時目を覺さば、まだ雨なり、又一寐入、夜は明たり、雨も晴たり、雲は山上に入る、里人も天氣ならんと云ふ、幸ひ案内者も來れり。

朝飯　生玉子二つ　松茸燒たまご麩汁。

案内者は古見の者、横關岩太郎と云ふ、齡は五十元は讃岐の者にて、相當資產を失ひ、古見にて勞働者となり、時々劍山に登り、のり取とて木の根を堀り、紙に漉くを採集し、就中祖谷邊は地理に委しと云、少しく酒のめども、能き男、日給二十五錢とは大に安し、此行此好案内者を得しは、望外の幸なりし、他の者は一圓以下にて、此の嶮山を供するは、馬鹿なりなんど云ひしに、尤穩順なる男なりし。

彌々本日より脊廣に草鞋脚胖の姿にて、午前七時半出づ、道は降に降たれど、山間の事とて、泥少なし、此宿は町の南端

とて、七八間の家にて、町を離る、道は溪谷、屈曲多く、漸く荷車通ずる程なり。

約十五町蛇卷（ヨナマキ）とて道傍の岩石、水蝕の爲、蛇の卷たる如し、又猫戻りとて、一小澤あり、何等の奇もなし、空は日光を照す、案内者は雨の朝晴たれば、本天氣ならずと氣づかふ、道は一歩一歩、山水奇拔なり。古見より一里にして、須換瀨の村あり、久藪（ヒサナブ）の村と隣り十餘戸をなす、是より右せば、小島峠を經て、祖谷に入るなり、新道は祖谷迄俥を通ずるを目的とすと云へり、古見より三千六百七十五歩、時は八時四十分なり。

須換瀨より一宇奥山村に入る、一宇川を東岸に渡る、今迄は山側時々、玉蜀黍、陸稻なんどの畑を時々見しかど、是より溪は深く、畑もなし、約半里左に溪水暗き岩間より落くる大瀑あり、御出佛（オイデボトケ）と云ふ、岩間に佛像を彫りたるといへば、暗き岩を探れば、瀑布は數段となり、左の下に凹みたる岩間に佛像を彫りつく、奇なり、須換瀨より二千八百六十五歩。

人にも逢はぬ道を行く、約半里、山腹少し傾斜あり、煙草を植ゆ、煙草は古來此邊の名産たりしも、官營となりしより、一葉一種監督八ヶ間敷、花は一畝四五本に限り、葉も良葉の外は、遠く貞光なる專買所に持參るも、燒葉を命ず、爲に一宇溪より祖谷木屋平谷も、全畑悉く煙草をやめ、玉蜀黍稷などに變せり、只此附近に、少を見しのみ。

少しの農家あり、河内（コーチ）と云ふ、老樹二三株の下に、彫刻巧なる小堂あり、河内の御堂と云ふ、佛寺らし、時に九時四十五分、須換瀨より約一里、四千六百八十五歩。

右手に川を隔てゝ、見ゆる村は、平井と云ふ、約五町行けば、廣き馬場ありて、中野村と云ふ、左手の小丘に小社あり、劍山の末社にして、古見五社の内、中野神社と云ふ。

先に須換瀨過て、方二尺厚五寸程の純白の大理石を一輪車にて押くる有りしが、此祠の向に一軒の家あり、前に數個の大理石ありて、標札あり、大理石は水成岩、火成岩の間、云々など記して、産地は此所販賣店は、大阪西區靱南通五丁目宗傳某と記せり、こは數年前非職官吏某、此村に移住し、偶然此山腹にて發見し採堀せしも、收支つぐなはず、今は他の某繼續して、山腹採集盡したれば、河岸を堀れりと云ふ、是迄はよき道なれど、是より小徑殆んど山間の草路となる、道端の少しの畑には、大理石のくずを石疊として、積めり、約五町、道二つとなる、直徑は河又よりツヾロ道にして、劍山道は川に向ひ、右に下る、大理石に右つるた山道と彫りつけど、惜しき事には、半折れたり、大理石は、此右手の遙か、下の沿岸に産すといへり。

右手の細道を川に向ひて下り、一宇川を西岸に渡る、橋は一枚の板なり、是より殆んど人跡絶へし地、同じく川に沿ひ、昇降多く、二十町にして一宇川を、又左岸に渡る、下は激流一枚板にて、危けなり、四五町急坂を登れば、二戸の農家あり、

向に桑平の村散在す、此所は一宇村大字一宇奥山字葛籠名小字紙谷とて、長たらしき地、劍山への登山口なり、河内より四千四百九十歩、約一里、古見より三里にして、時は午前十一時、地は海突約六百米。

村役場へ問合せしは、桑平より登る由なれど、桑平は此川向の山腹にある村にて、それよりも登るを得れど、紙屋より登る方、近くて道もよしとの案内者の言に従ふ。

一軒の農家にて休む、森脇權造と云ふ、新らしき家、家居のさま伊勢の今宮に同じく、新築の家なり、稀に劍山登りの人、雨なれば頼めて宿泊すと云ふ、行李飯を食せんと頼めば、茶もあり玉子も大にして價二錢、雨なれば此家を頼み宿らんと思ひしも、空は曇りたれど、降らぬ様なり、是より上は人家もなく、只二里の上則ち山頂との間なる見の越に一軒の家あり十月一ぱいは庵坊とて一人留主番のもの居ると云へば、そに宿らんと定む。

劍山は祭日即ち一宇村役場より返書ありし如く、舊暦六月十七日前後、約十日程は參詣者、就中讃岐地方多く、返って阿波は附近の者の外は、少なく、例の白衣の行者山中を走り登る、其餘の月の十七日は御命日とて、纔かに山麓の者の詣ずる外、未だ周く社會に知られず、登山者皆無と云ふて、可なり、此家の主婦などは、祭日には早起山頂に遊び、夕には歸ると云ふ時は、舊暦八月十七日（本年は九月十三日に當る）も過たり、山中には庵坊一人の外人もなしと聞けば、何やら深山に入る心地す。

劍山登山道案内

左の記事は登山を終り、聞き且感せし事なれど、爰に記す。

劍山に登る道多し、阿波北方、平坦地方より登るには。

一、山崎より種野山、別枝小入村を經て、木屋平溪に入り、河合、谷口を經て茗荷より登る、則ち東口の本道にして、山崎より歩行のみ、約山頂へ十八里餘、案内者は河合、若くは谷口にて雇ふ、されど谷口は人がら惡しき地、其由は卷末にあり。

一、祖谷溪より入り、東祖谷山字菅生　又はナゴロより池峠を經て一宇口と合す、即ち西の本道なり、土佐街道、下名より約十里。

一、宍吹より宍吹川に沿ひ、杖立峠を越へ、木屋平村谷口に至り、山崎道と合す、十五里二十三町、好箇の案内者は得られず。

一、貞光より一宇川を溯り、紙谷より池峠(イケガヅチ)にて祖谷(イヤ)道に合す、山頂へ約十里、内三里半、俥道ず、余の取りし道なり。

南方より登るものは

一、木頭谷より登る道ある由なれど、登る人少なし。

一、土佐別役よりも、登る道ある由なれど、登る人少なし。

尤も近きは余の取りし一宇溪より登る道、本道なる山崎は、尤遠し、余は始め祖谷(イヤ)へ下らんと思ひしも、一宇溪よりは祖谷(イヤ)も同じ道なり、祖谷は只蔓橋見ん爲なれば、そは土佐街道より三里入込む方便利と聞けば、本道を取り、下山し、宍吹に出でんと志す。

四國の高山は、此劍山も石槌山も同じく、權現さんとて、昔は神佛混合なりしに、維新後神佛兩樣に分れ、神樣の方は劍山神社とて、木屋平口なる藤の池に有を、本社とし、縣社となり、山腹の小劍神社を奥の社とす、佛家の方は、昔の如く木屋平口の谷口なる龍光寺は、藤の池にあるを本坊とし（余の泊りし庵室なり）頂上の寶藏石を奥院とす。

祖谷口は祖谷溪の東、祖谷山菅生名(スガナ)にある、劍山圓滿寺は見の越を本坊とし、頂上の蠟石岩を奥院とし、互に參詣者を反目さす。

されど佛は古し神樣に勝ちて、祭日賽錢の上るは、佛寺の方遙に多しと云へり。

紙屋より頂上に至る里程は

紙屋		紙屋より	正午發	海突 約六百米	紙屋より	
池峠(イケガヅチ)	五十丁		後二時四十五分着 三時二十五分發	同 千三百米	四千五百四十歩	登り坂のみ始め三分の一は甚急
見の越	二十五丁	七十五丁	前七時四時二十五分着發	同 千二百五十米	七千四百五十歩	少し下り山腹を傳ふ
西島祠	二十五丁	百丁	八時四十分	同 千七百米	見の越より千三百六十歩	半急半山腹
蠟石岩	二十五丁	百廿五丁	十時二十分着	同 二千百米	同 二千四百九十歩	半山腹半急

地圖に完全なるなし、里程は里人の稱なり、三里半と云へど、四里はあり、則見の越が、中央にて、西島祠へ一里、蠟石岩へ又一里はあり、高さは農商務省四十萬分地質圖による、途中へ雨宿りする建物は、見の越の外なし。

正午彌々登山にかゝる、今迄沿ひ來し一宇溪谷を、右手に見て離れ、傾斜急なる山腹に、蕎麥、玉蜀黍、煙草など作れる間を登る、折節山上より二三の人、蒲團鍋釜を負ひて下り來れり、彼等は見ノ越附近にのり採に趣きしものなり、案内者は庵坊の見ノ越に居るかを聞きしに、庵坊は今朝より祖谷のナゴロに用事あり行き、不在なりと、留守にても、同人の食は一宇村より供するなれば、鍋釜借りても不苦といへば、彌々廣き山中に野宿とは心細し（庵坊とは昔時の御救小屋の如く、庵に居る坊主にて庵坊なり）。

畑は二三町にて盡き、灌木帶に入る、まだ巨樹はなし、此道中々急にして、山の脊、石槌の今宮登り口の如く、絶崖の如く約半里にして、山腹傳ひとなる、此邊白の梅鉢草地に滿ち、花盛り、ツルニンジンも多し、鳥甲の紫花多く美麗なり、薄は身の丈を沒す、道は廣し、山腹を或は上り、少しく下ること五町、一の谷あり、姥權現と云へど祠もなし、紙屋より約二十五町、二千百七十步、時は一時十五分、殆んど池峠（イケダヲ）との中央なり、紙屋より始めて水流ある處なり。

是より山腹をダラ〳〵登るなれば樂なり、道巾は約一尺、常に行かふ人ありと見ゆ約十八町、蠟石谷と云ふ谷川あり、姥權現より千六百五十步、時は二時十分、名の如く白き白灰岩の片々多くあり、（爰に記す谷とは、一々下るに非ず、只山腹を迂回して、流ある溪流を云ふなり、橋もなし、只岩間を飛び渡るなり、水は清冽にして飲むを得。）

又二三の谷ありて、樹盡きて小笹原に出づ、二本の朽木立つ、一の鳥居と云ふ、蠟石谷より二百四十步、龍膽、梅鉢草、山薊多し、地は一面の小篠にして、樹なく、比叡山の四明峯に同じき地を登ること五六町にして、池峠に至り西より來る祖谷道と合す、桑平より登れば、一宇溪の西岸の山腹より登り、此祖谷道の少し西に出づと云へり、余は一宇溪の東岸の山腹より登りしなり、一の鳥居より四百八十步、時は午後二時四十五分。

道の合する處、石を積上げし、小き石造の不動尊ます、向の山々は、同じ小笹山、正面に一の奇岩あり、其傍のみ、栂や、樹木茂り、其下に凹みたる約一町程の池あり、水は見へざれど、紅色黃色の草茂りあへり、祖谷方面に今一ヶ所、大なる池ある由なれど、人跡至らぬ處なりと云ふ、池峠とは此池のある峠によりて名けしもの、方言峠をダヲと云ふ、午後より曇の空、幸に降らざれども、例の高山の雲は附近の高き峰を往來し、顧れば一宇の溪も、祖谷の溪も、山に遮られ、見へず、只東方劍山頂は、此所にて始めて見ゆる由なれど、これも雲にて見へず、寒くていられず、午後三時發す。

今迄は貞光より南へと登りしも、是より山頂を東に行く、約二町にして、又古き朽木立つ、二の鳥居と云ふ、爰より見下せば、一大深谷をなし、今迄登りし道と異り、老栂樅の樹は、幾百年を經しかと思ふ朽木と共に、深谷を蔽ひ、祖谷の上流となり、正面此深谷を隔てゝ、劍山聳立す、全山扁平なる老樹を以て蔽はれし山にて、山頂は數峯に分れ、方言ハゲ

(笹原を云ふ)所々にあり、折惡しく頂上のみ、雲かゝる、晴たる日には、極南の頂上の一角に、劍山の神体とする蠟石岩は、白色屹立して見ゆと云ふ、約二十分も待てど、山靈は秘して姿を顯はさず、名殘惜しきを振切り、三時二十五分又歩む。

左の山腹を下りて、巨樹の森林に入る、道は殆んど平坦、右手に山頂を見れど、雲は益々深くかゝれり、約十五町にして右手の谷の道もなき處を下る、約三町にして巨岩屹立す御劍(ミツルギ)社と云ふ、岩は高十間巾四五間、前に谷の細き流あり、爰よりは裏なり、表に廻れば裏にて見しよりは、平凡、岩上に小祠あり、細き鐵鎖を繫ぐ、池峠より千九百七十歩。

此邊の樹は年ふり、立ぐさり、下草さへ苅らざれば、明なる道もなく、衣にかゝり、物凄し、向ふの細き道らしきを登れば、朽木は倒れて急坂案内者は、荷を負ひ朽木に妨げられ、荷を取りやりなどすること二三遍、漸く二三町登りて道に出づ　殆んど平坦の山腹にして、約十町、見の越の堂につく、時に午後四時二十五分、池峠より二千九百十歩、二十五町と云へど近し。

見の越には、大なる堂二あり、南にあるは東祖谷圓福寺のもの、北に有は、小劍神社のもの、共に空屋なり、鍋釜あれど圓福寺の方傍に水あり、炊事に便なり、果して庵坊も不在なれば、案内者は夕飯炊ぐ、先づ本坊に詣づ、廣き間の正面には、劍山權現の額あり、左右に大臣の木像兩狛犬は新らしく、鐘樓あり、銘に曰く。

維明治三十年酉三月二十一日鑄造阿州美馬郡東祖谷山村劍山圓福寺住職權少僧都井川勝應代師僧瀨勝慧藥師寺快蔑

案内者と二人して、附近の松露をとり、味噌汁拵へるやら、飯もたき、山中無人の境、幸ひ汚れたれど蒲團は多く、蟲の音鳥の聲さへ聞かず、提灯は第一の必要なりし。

此處は池峠より約五十米も低からん、北は池峠の山脈、高山となり、南は劍山北麓、東は其兩山連る峰、只西の一方のみ、溪谷となる、老樹にて四方を蔽はれ、日の出入遲し、夜中火なきも、寒さを覺へず。

九月十八日　快晴

午前五時目さむ、飯は宵にたきしかど、荷持の拵へにぐづ附し爲遲く、漸く七時に出立す、庵坊さんの土産にと、飯を殘しおく。

空は日本晴なり、是より道を南にとる、祠を過ぎて小溪を東に登る、道あり、こは藤の池とて木屋平口なる本社へ行く道なれば、余は南の山を登る、道は昨日池峠より見し劍山の北麓の山背なり、中々急、朝露の爲、草木衣を濡す、樹は樅栂の密林なり、赤土にして登れど〳〵、同じ坂は盡きず、約半里にして道は山の横がけとなる、老樹は少なくなり、熊

笹身の丈より高く繁茂し、道を沒し、足さぐりにかき分け行く、衣服は夜露にて濡鼠の如く、熊笹にて目鼻つかれぬ用意第一、案内者の少しく離るれば、笹に隱れて見へず、案内者も荷を擔へることなれば、笹に引かゝり、中々道ははかどらず、誰も劍山參りは、此熊笹に閉口するなり。

行けども〳〵、同じ熊笹加ふるに大なる朽木は道に横はるを、越へるやら、つる〳〵すべる上を、綱渡りの如く歩むやら、道は定まりなく二三の岐路あり、こは夏季祭事に登る行者の、熊笹中を從横に馳け歩みし路に迷ふやら、約十町にして、岩石累々たる山頂に出づ、記して曰く　岩右へ西島神社道。

時は八時四十分、見越より約一里はあらんか、千三百六十歩、足數は少なけれど、登りの爲、歩時計が音せざりし爲ならん乎。

此處より東を見れば、池峠より劍山見し如く、樅梅茂り、空間なき間より、一山を見る、これ眞の劍山なり、蠟石岩は見へず、始めて日を拜す、左右に岐路あり、右せば下る道、則ち左方の笹の間、纔かに道らしきを少しく下り、東方に向ふ、今迄の土と異り、道らしきなく岩石露出の間、纔かに人跡らしきを便とし、山腹を行く、朽木は倒れたるが多し、下をくゞり、上を跨く、其度毎に荷物を請取りやるやら、岩角多く滑り〳〵の道にて、登山中第一の困難なり、所々の大岩には、小き朽たる祠あり、頂上迄約十ヶ所もありたらん、皆何々神さんと名づけ、賽錢取る爲ならん、約半里にして又巨岩ある下に小祠あり、之を左に登る、此邊紫花の鳥甲、龍膽、紅色の鹽釜草、白色の梅鉢草咲き亂れ、就中鳥甲は一莖濃紫の花二三十をつけ、そこに一團こゝに一團、美麗言はん方なし、此道は小雨にても足滑らし、加ふるに笹身の丈を沒し、歩める道にてはなし。

又同じ身丈なる熊笹を分け行く、約八町、まだ山頂ならずと思ひしに、左右に山腹を並行するよき道あり、右せば約半町足らずにて、向ふは開けて少しの平地あり、屹然として白き巨岩立つ。

是れ劍山の奥の院なる蠟石岩とて、神靈とする岩なり、時に十時二十分、西島祠岩頂より千百三十歩、地は約二千百米、少しの平坦なる地の南端、深谷に望み、高二十間巾十間の、白色の大岩頂は、四に分れ、其内の一、恰も劍の如し、里人呼んで蠟石岩と云ふ、其下に木造の祠あり、今は空室とて、鍋と狛犬、獨り淋しげにあり、傳へ云ふ、岩中に安德天皇の寶劍を祀ると、大日本地名辭書には、阿波國神代の祖、忌部神即ち日鷲命を祀ると、雖も、高山崇拜の例、この大石を神靈とするならん、石質は石灰岩より堅く、俗に大理石と云へど、余の素人眼、能く分らず。

前の平地に立ち見れば、今日は殊に快晴、雲なく風なく、南方土佐境なる三傍示山は、草一面、三角形の扁平なる山よ

り、左は山々重なり、其溪谷遠く、下に少頃の畑の見ゆるは、祖谷のナゴロ谷、遠く土佐の山々を見る、其北方の扁平なる一列の山中、少し小高きは、烏帽子山ならん、其下に草山を見るは、池峠にして、彼の石の不動尊は、小く針の如く見ゆ、着藏池田の連山より遠く燧灘を見る、池峠より東は近き山に遮られて見へず、此邊の眺望は、只祖谷溪を見るのみ、大なる眺望はなし。

祠の南の斷崖直下に、高く屹立せる岩あり、二個の石柱の如く、上に丸き岩あるは、恰も人形の如し、是又奇なり。

見越より山頂に至る谷は、所々にあれど、皆涸溪、一も水なし、又山頂にも水なし、凡て水の用意を要す、阿波名所案内に、氷の橋、苔岩屋、西島の禪定穴の名所を記せど、案内者は知らざりし。

例により御神酒を捧げ、天氣のよきを賀し、案内者に一杯やれば、今までの苦を忘れ、勇氣滿々たるもをかし、携へし水にて晝飯す。

此所は殆んど山頂とも云ふべき南西端にして、眞の山頂は、まだ此上なり、十一時半出立して、祠の左手を登る、中々急なり、熊笹は丈低くして、一二尺、樹は所々に短小なるが茂生す、蠟石岩は足下にあり、約五町突然一平野に出づ、蠟石祠より二百五十步、時は十時四十五分、これ眞の山頂なり、山頂は比叡四明峰、伊吹山頂の如く、平地となり、東西三四町、南北約十町の地、多少の起伏あれど、殆んど平地にして、笹は小竹となり、花は龍膽のみ、最高點は約三町の南方、三角點は朽ちて、只二本の朽木のみ立つ、山上躑躅多き由、諸書に見へたれど、一も其樹を見ず。

此邊平家の馬場又御花畑と云へど、花は龍膽の外なし、快晴二千二百四十二米の高山とは思はれず、平野に遊ぶ如し、木屋平へ下る道は案内者の知らざる所なれば、木屋平谷を見る所へ行かんと、南に向ひ、約五町（七百步）の平野を行けば、山頂の北端に、巨大の岩あり、寶藏石とて、木屋平口の奥院の山靈とするなり、岩は高約五間巾三間の古水成岩にして南面して下に新らしき小祠あり、其上に凹める處に、小き紅葉早紅葉し初て、紅を點す、小笹原の山頂、巨岩あるは奇らし。

此所より俯瞰すれば、木屋平谷は直平にして、宍吹川の上流、一の銀線をなし、向ふは高越山小富士の如く、遙に阿讃國境の連峯を隔てゝ、讃岐の平野より、遠く播磨灘まで、肉眼に能く見ゆ、左右は山に隔てられて何處も見へず。

案内者は未知の道といへど、直下に道あれば、午后〇時三十分、下山す。

頂上寶藏石		頂上より	〇時卅分發	海拔約貳貳四〇米	頂上より
岩寶祠	八丁		〇時五十分	同二千米	二百八十步

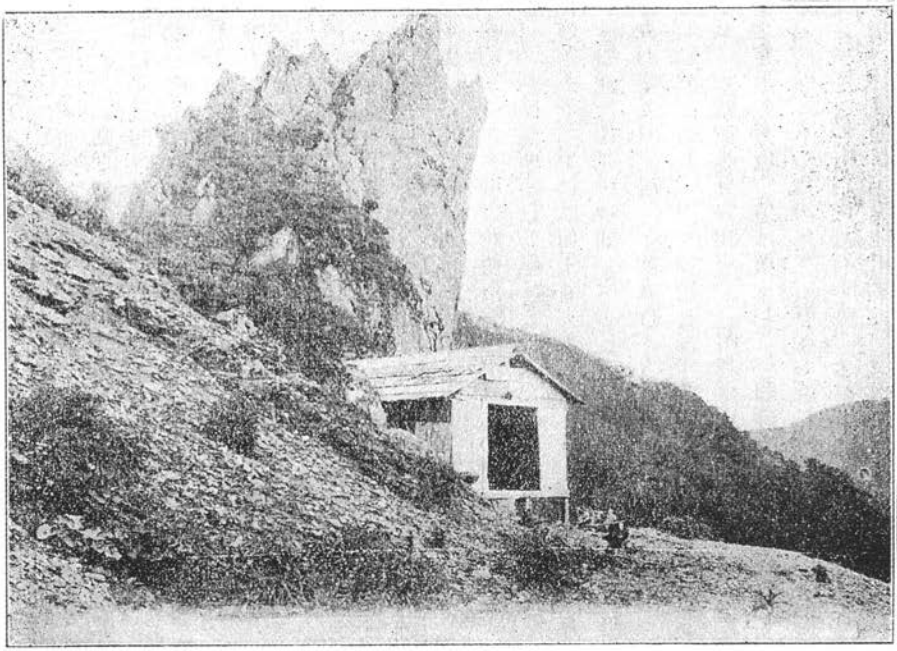
急坂下り

小劍祠	三丁	十丁	一時十分 二時着	同	千九百五十米		涸溪急坂下り
立石分れ	五十丁	六十丁	三時五十分	同	千五百米	三千二百二十歩	山の半腹下り少なし
藤の池	十五丁	七十五丁	前六時四十分發 四時二十分着	同	千百米	四千六百四十歩	山の背急坂
垢離搔川	二十五丁	百丁	七時四十分着 八時發	同	六百米	藤の池より 二九五〇歩	下り坂道宜し
卷淵	十丁			同		五千歩	川に沿ひ平地
川上神社	五十丁	四里半	九時四十五分着 十時發	同		一〇五五〇歩	同
瀧岩神社	一里		十一時十分發 一時着	同		川上より 四八〇〇歩	同
谷口	十丁	五里廿六丁	十一時卅分着	四百四十米		同 六八七〇歩	同

小笹原を少し下れば、又森林中に入る、道は小徑石ごろなれど宜し、祖谷道と異り、下るに從ひ、熊笹丈高くなれど、押分け行く事もせず、されど隨分急なり、上りは苦しからん、約八町程下り、兩山落合ひて自然の谷道となる、谷水はまだ遠からんと思ひしに、突然溪流の音聞ゆ、左に石崖頽れたる所に、岩實神社の標あり、少しく登れば、大なる岩窟あり、時に○時二十分、實藏石より二百八十歩。

岩屋は石灰岩、巾は狹けれど深く、中に入れば暗く、鐵鎖を繫きて穴中に垂る、穴は底深く見るを得ず、水聲滔々として瀑の如く、先に水音聞えしは此所なり、後にて聞きしに、不動の窟とて、行者は先達につれられ、此鐵鎖を下るなりと云ふ。

石ごろの涸溪少しく下れば、直下森々たる内に、雲か煙か、白き物あり、炭燒ならんと思ひしに、約三町、下れば果然新築中の家あり、大工二人盛に普請す、一昨正午より人に會はざる一晝夜、始めて人間に出づ、こゝは何處と問へば、兩劍祠と云ふ、是より西へ少しく登れば、小劍神社ありと云ふ、言に從ひ西に登る約半町、山角に小祠あり、直下に巨岩聳立して其下に祠あり、亞鉛葺の屋根、一人の大工、工事中なり、此處の風景大によし、前に一株の大なる梅は、葉は松の如く、サルヲガセかゝり、右手は深谷、向ふに見ゆる遠山は、祖谷の山々、巨岩は石灰岩らしく、青色斷崖削れる如し、



小劍山

先に大劍祠の前にて、縱横の道は、こゝへ來ると云へり。

案ずるに諸書に、小劍山を經て大劍山に登るとあるは、大工と此監督の言によれば、此祠を小劍神社といへば、小劍山は大劍山の溪谷の一部にして、月山に於ける湯殿山の如きものならん乎。

兩劍祠に歸れば、幸ひ湧きたる茶もあり、書飯の殘りにて滿腹す、此祠は、山崎の忌部祠の神官松浦某が築造にかゝり、大工は二人、本年六月より山籠りす、米は下の谷口より持登るに、一日を費す、余は茶碗に酒を一ぱいやりしに、數ヶ月口にせざりしとて、大に悅ぶ、本年の夏は山は非常に荒れ、死人もありしと、寶藏石より此處迄十町と云へり、祠の背後にも巨岩あり、岩は半前に望む、駒馳岩と云ふ、祭神は大山祇命幷大己貴命、不動窟より出でし水は、此所にて清泉となり、道と分れて南西に落つ。

長らく休みて道を尋ね、二時十分下山につく、道は右方山腹をとる、今迄の急坂と異り、山の半腹、方言横がけにして、谷と隔り、小徑ながら修繕の跡あり、又熊笹も苅採たり、道はよし、殆んど平地、少しの上下ある約五十町、石の立石あり。

道は五つに分れ、中々紛らはしき處なり、大工の言に從ひ、迷はざるを得たり、時に午後三時五十分、頂上より三

至藤池
下り道

上り道

◎立名

下り道

至劍山頂

千二百二十歩。日は曇りて、森林中暗し、暮ざる中にと急ぎ下る、山の腹にて急坂之字形をなし、所々切株あり、又修繕せし跡あり、約十二三町にして、藤の池なる劍神社に出づ、山腹少し、平坦の地に社殿あり、白色の狛犬並ぶ、見ノ越に比せば、甚立派、記して曰く。

三八六高地命名劍山紀念祭執行　劍山大權現の額あり。

時に午後四時二十分、頂上より四千六百四十歩。

社の西手に廣き馬場あり、見の越より來る道なりと、寫生し終りて前の廣き、よき道を一町半下りて、本坊に至る、是れ藤の池の地なり。

本坊は十間に五間の建物、空殿人なし、額あり曰く。

靈威赫々　德島縣知事床次竹二郎

坊の前は廣くして鐘あれど、樓なし、銘に

大篠劍大權現　安永十辛丑三月二十七日　別當利劍山龍光寺後　中興開山權少僧都蜜瞻光

坊の前を下れば、一大平地上の劍神社の鳥居あり、藤の池とて池もなし、下を見れば木屋平谷に溪水は見へず、向ふに高越山は、我と高さを同じくす、約千百米位の地ならん乎。

余の宿るべきは、此西南隅の小屋に、例の庵坊さんは、八月三日に死し其變りの留守居居ると、山上にて大工に聞しかば、訪へば臺所の口へ廻れと云ふ、六十餘の老人一人喘息煩ひ、物うげなり、昨日の見越に比せば、家も新らしく、小き洋燈もあり、菜には茄子と牛蒡の煮たるもあり、案内者は米たく、信徒寄進の汚き蒲團もあり。

藤の池には見越の如く水なし、當時寛を損じ、二三町下より汲來ると云ふ。

九月十九日　曇　午前九時より雨

曉、暴風甚し、樹々の梢を鳴らす、鼠の荒るゝと、蚤の多きによく、寢られず、庵主には米五合をやり、例の荷拵の遲き爲、六時四十分に出づ、二町程は山中珍らしき平野にして、道は殆んどよく、約三尺の巾、五六町は山腹にして、是より之字形の急坂、道は廣くして一間餘もあり、不動坂と云ひ、十八丁と云ふ、樹は森林、老樹多し、此道は近年四國遍路の者、某一人の勞力にて、食足らざれば里に出で、其他は山に籠りて造れりと云ふ、奇特のものなり。

途次所々何町目の立石あり、去れど其一丁たる、中々遠く、そを目的とするは誤なり、漸く谷川の水音近く、下りて谷に出づれば即ち垢離搔川とて、宍吹川の最上流なり、大なる岩上に、石彫の劍に、龍の卷きしは、瀨登り不動、次の大岩

には、優行者の像まします、此大岩を廻れば、清淨橋とて、長さ十五間、屋根ある橋あり、時は七時四十分、十六町目の立石あり、藤池より二千九百五十歩、眞は二十五町あり。

橋下は激流瀑布をなし、深淵巨岩多し、紅葉は隙間もなく茂り、橋を埋む、農夫の男、瀨登り不動に米をまき拜す、齒痛の治りし御禮參りと云へり。

八時川に沿ひ下る、是より坂なく、平坦なる道なれど家はなし、山は開けて山水の奇なし、今朝より收まりし風、小雨となる、四五町にして始めて、左の山腹に一二の家を見る、此邊は麻植郡木屋平村大字川上、小字を茗荷と云ふ、一宇谷と異り、平地多く稷、蕎麥、玉蜀黍など植え、米田もあり。

二十五町目の立石を過ぐれば、右手に茂れる森あり、頽れたる小祠あり、通れる老人に問へば、卷淵明神とて、祠の向に深淵あり、劍山參りの第一の行場にして、次は垢離搔川にて、水行し行くと、地は茗荷に屬す、この名所も、近時劍山神官の拂下を受け、卷淵祠を藤池に移し。森を伐る計畫中と云ふ、森に橡の木多し、實多く落つ、奇らし。

川に沿ひ、一板橋の危けなる橋を左岸右岸と渡り、中邊の少しの部落など過ぎ、清淨橋より約六十町、河上神社に至る、九時四十五分、藤池より一萬五百五十歩、雨は甚しからず。

河上神社は、此邊の村の鎭守とて、傍に妙見堂あり、神官の宅あれど、無住、風雨をよけて晝飯したゝむ。

十時に出づ、又少しの農家あり、日比宇と云ふ、川上の字はこゝにて盡く、川の左岸のよき道、荷車も通ずべし、川は屈曲すれど、奇景なし、約一里、左より一川の會するあり、向ふに小高き丘に社ます、瀧宮神社と云ふ、時に午前十時五十五分、川上祠より四千八百歩。

宍吹へ越ゆるは、此社前を登るなれど、余は晝飯せんと、この少し向に谷口とて、山間の都會あれば、入込なれど、橋を渡り、川に沿ふ、始めて煙草なんど賣る店もあり、散々ながら家多し、約十町、左に新築の小學校龍光寺の並ぶを見て、四五軒向に農家の穢けなる店に、荒物並べしが、宿屋と云ふ、家の名は半田屋、入れば皆留守なるを呼にやり、上れと云ふ。

谷口は木屋平村中の都會と云へど、眞の山奥、主婦さへ客扱も知らず、晝飯菜は茄子と牛蒡の煮〻、幸ひ生玉子もあり、穢き家なれど、無人の空屋よりはましなり、空は小雨、是より杖立峠をこへ、五十町一里、三里にして古宮迄行かざれば宿なしと云へば、足も疲れたり、又龍光寺をも訪はゞやと、一泊と定む。

午後隣の龍光寺に行く、約十間の藁葺、弘仁五年弘法大師の開基にして、始め長福寺と號す、傳云ふ安德帝の蒙塵に當

り、平國盛（忠盛の二男、敎盛の二男）屋島の役に敗れしより、帝を奉じ、元暦元年十月下旬阿波稻持（イナモチ）の庄より祖谷に入り、大枝にかくれ、阿佐に居し、爾來子孫連綿として、二十代現今阿佐與一郎氏、其所藏の平家の赤旗を當寺に日露戰役紀念として、寄附せりと云ふ、其緣起に。

旗は、大旗は古代の織物にして、弘法大師の筆、八幡大菩薩と記し、小旗はビセイコヲ織と稱し、嵯峨天皇の御宸筆、中央に八幡大菩薩、右に高良大明神、左に春日大明神とあり、共に赤色は變じて、薄黑き色となれり。

此旗は先年大阪に博覽會ありし時、見たることあれば見ず、今は寶庫に收めたりと、坊さんに寺の緣起を聞けど知らず、卷物三卷持來る、見れば二卷は垢離掻川の勸進帳、一卷は緣起佛果應報を多く並べたり其内に。

龍光寺は劍山と號し、山城嵯峨大覺寺の末寺にて、富士池坊と云ひ、始は長福寺と號せしも、享保二年長福丸樣御出生御名指名觸に付、龍光寺と改む。

劍山一に石立山と云ふ　土佐畠より石立山に登臨　紀貫之

燒山の煙も絕へて程近く間遠の摩尼珠の秋の夕霧。

天文年間僧清圓中興し、安永年間蜜憧又重造し、富士の池にて梵鐘を鑄造す、蜂須賀侯入國の後、崇信厚く劍權現の本寺とす。

夏季は登山者を多く宿泊せしむといへり。

寺の西に谷口神社あり、堂のさま變れり、傍に三抱もありぬべき老杉あり、阿波名勝案内に曰く。

龍光寺の側に、七八抱も有べき老杉の下に、廢屋あり、是ゞ大同年間に建立せし大御堂とて、龍光寺の本堂なり、建築材料としては、現時老杉の所にありし同樹を用ひ、一本にして川井の阿彌陀堂、別枝山村の地藏堂の三宇を建立し、何れも柾目の良木、曾て楔を用ひざるも、倒壞を免かれ、今日に至る云々。

外に小堂とてはなし、谷口神社の拜殿が夫ならん、平谷の神社は、此の村の鎭守なり、元（もと）は王子權現と云ふ。

其西に隣りて木屋平尋常小學校あり、新築にして、まだ杉の葉の門や、角力場跡あり、老人あり、學校へ上れと云ふ、若き先生あり、地方の事は何も知らず、老人に種々劍山に關することを聞き得し。

午後四時半歸る、雨は繁くして風さへ加はる、この處は木賃宿とて、夕飯も爐邊にて、荷持なんどの宿りしと共に食す、酒は一升五十錢甚薄し、柴は摘柴の浸物と生玉子の外なし、余等には一宿を貸しくれたり、蚊多く、蚤も多く困れり。

諸書に劍山の祭には、村の女子婚せざるは、額に白粉の上に、紅にて十の字かくとあるは、劍山の祭にてはなく、凡て

木屋平より一宇の村々鎮守の祭禮には、山車出し、其上に少女が其造りにて、太皷たゝくなりと、又此谷以前は、煙草の名產地たりしも、官營の爲引合ぬと煩はしきとにて、今は一本の煙草もなし。

九月二十日　晴天　午後曇

木賃宿の事とて勘定は

二十錢　泊り二人　二十八錢五厘　玉子十九　四錢　菜

外に十錢　小兒に遣はす　計六十二錢五厘

谷口		谷口より	六時十分發	約四百四十米			
瀧宮社	十丁		六時卅二分		一七二〇歩	平坦	
杖立峠	五十丁		凡九時半着 十一時十分發	約千百米	七四四〇歩	登り半甚急半溪道を迷ひし爲一里餘も多く歩めり	
石堂權現	三十丁		十二時着 〇時十五分發		杖立峠より 三〇五〇歩	下り道宜し	
平谷	五丁		〇時半着 一時十分發	約五百米	同 三五二〇歩	細道下り	
小谷	四十丁		二時廿五分		平谷より 七〇八〇歩	半細道半新道	
古宮	十丁		四里	二時四十分	約三百米	同 八〇〇〇歩	新道平坦
宮內	二里		六里	四時四十分着 五時發	七十七米	古宮より 一一八九〇歩	同
宍吹	二里		八里	六時五十五分	三十七米	宮內より 一一七七〇足	同

計四萬二千六百二十歩、計二百八十九丁。里人は五十町一里にて、六里と云ふ（三百町）則ち谷口（一里）杖立峠（一里）平谷（一里）古宮（一里半）宮內（一里半）宍吹。

午前六時十分發す、昨來し瀧宮神社迄戻る、約十町、鳥居より左に山に登る、谷に沿ひ、左に沿へるよき道は一宇への山道なり、道は甚急、樹なき草原なり、案內者は四五度も越し道と聞ば、大丈夫ならんと、頂上にて劍山を見るを樂として登る、暫くすれば、劍山は後に顯はる、連峰重々として、樹深々たる山頂に、饅頭形の草原あるは、平家の馬場、其頂

に黑きは寶藏石、兩劍祠は、其直下に見ゆ、藤の池は二つ峰を隔てゝ、遙に下に、草の點に見ゆ、空は曇りたれど、山神幸に始めて山の全景を見せくれたれば、うれし、寫生しつゝ登ること約一里、時は午前八時半、今迄廣かりし道、突然小徑となり、山腹に入る、今迄急なる坂は、俄に緩となり、道は漸次西する樣にて、薄道を沒す、行くこと五町、頂上は右手に近く、道は消へたり、案內者小首を傾て曰く、杖立峠は右方〳〵へと、山上を取り、常に人通りあるに、ヶ樣の道は心得ずと果然間違たり、今迄登り氣付ざりしも、左へ折れる道はあれど、右手に入る道はなし、山頂は近し、頂へ登れば見當つかんと、棘茢おし分け、道もなき所を登れば、山頂に出づ、案內者は近視眼とて、向に見ゆる宍吹谷さへ見へず、峠の形も目に入らず、只荷持の東方なりと云ふに任せ、余一人薄かき分行けど、道らしきはなし。

麓より人家なく、人さへ會はず、山中に考へさまよふこと一時間、詮方なし、空しく待つとも人の來る由なければ、今迄登りし勞苦は、劍山見物とあきらめ、大廻りなれど、谷口に下り、川井を經て宍吹川に沿ひ、出でんと決し、名殘を振切り、下山につく、四五町下れば、草中の藁中に煙立つ、嬉しや人ならんと尋ぬれば、老人一人居れり、杖立峠を尋ぬれば此所は舊道にして、今探せし處を西へ行くなりと、又間違せんも大變と、老爺が十錢くれゝば案內すと云に任せ、又來し道を逆戻り、山頂を西方に行くこと約七八町、果してよき道に出でたり、時に十一時十分、荷持はひた過りに過る、約一里の道と一時半を仇に費せしのみにて、今迄外に過失もなければ免しやる。

杖立峠は此山脈の少し低き所に一の森あり、名の如く枯枝の杖多く捨つ、劍山は前の山に遮られて、頂上少しより見へず。

下りはよき道なり、山の脊之字形、四五人の行こふ人に會ふ、下りは五十町と云へど、近く約三十丁下れば向ふに平谷の人家見ゆ、地は美馬郡に入り、半平山村なり、道の左手に巨大の岩あり、其右手に向ひて、大なる岩窟あり、石堂權現とて岩屋中に池水あり、劍山詣の行場といふ、一町下れば、始めて溪流あり、二三町にして平谷の農家あり、とある農家を頼み、晝飯に入る、時は〇時半、杖立峠より一里にして三千五百歩。

携へし飯を、幸ひ彼岸の日とて、例の茄子と牛蒡の煮〻、くれたれば、茶もあり、始めて滿腹し、人心地つけり。

午後一時十分出づ、谷に沿ひ、約半里、道は新道となり、三尺以上の巾となる、木屋平谷と異り、一宇谿と同じく、絕景奇勝多し、田の內、小谷などの村を過ぎて、古宮に至れば、二時四十分、平谷より八千歩、五十町一里と云へど近し、古谷の手前二町程にして、溪水一の瀑布となる、百々ヶ淵とて絕景なり。

古宮は約二三十戸の集まりし村、右手より木屋平村川井を經て、昨日來、沿ひ來し川、此所にて合し、宍吹川となる、

半平山村役場もあり、始めて旅宿もあり、休まずして行く、川の奇景多けれど、目馴し爲め、而白からず、行け共〳〵家なく、同じ川沿なり、古里より約一里にして、左手に大なる瀑布あり、里人に聞けば勸淨（クワンジヨウ）（當字なり）の瀧とて、水源は友内山（イウチ）に發すといへり。

又一里始めて村あり、こゝは口山村大字首野（クビノ）と云ふ、少しくして、宮内に至る、入口に白人神社とて、よき社あり、白人神社は慶長の七年、神、稻田氏の僕に託して曰く、余は爲朝なり、祀れば福あるべしと、同十九年、稻田氏功あり、依て之を祀ると、川岸に沿ひ風景よし。

宮内は又二三十戸の家つゞき、口山村役場あり、旅宿らしきもあり、右手の平田屋なるに入り、憩ふ、時に四時四十分、古里より二里にして、歩數は一万一千八百九十歩。

高越山へ登るには、此處より丸山なる村を經る方近けれど、途次近比、赤痢の流行あり、二三日前迄交通遮斷と聞ければ、日一ばいに、宍吹へ出られんと、菜はなけれど、茄子の新漬あり、殘の飯をかきこみ、酒一杯にて、元氣つけ、午後五時出づ、是より川の左岸に俥道つきて、道よし、川は平凡の景、約一里、漸く日暮れ、初草と云ふ村にて、提灯つけ、漸く宍吹につきしは日全く暮れて、大岩と云ふ宿に、六時五十五分つく、宮内より二里、一万一千七百七十歩なり。

此宿も谷口の如し、されど少しは上の部にて、木賃宿にてはなし。

宍吹村役場よりの返事には、劍山頂迄十五里二十三町とあれど、余の歩測にては、十三里二十七町となる。

貞光より山頂へは、九里十一町となる。

夕飯　燒あまご葱の汁、玉子、福神漬。

朝飯　玉子　麩味噌汁　酒四本と泊り二人にて、壹圓拾五錢。

九月二十一日　曇天　午後三時より雨　夜大雨。

空は曇れり、德島へ歸るも時間は早し、阿波富士として街道より誰も目に入る、千百二十二米なる高越山（コーチツ）へ登らんと、幸ひ荷持の連れ呉れと云へば、手廻り持たせ出ず。

高越山登山

午前六時五十分出づ、元來し道を少し戻り、東に入り、宍吹川の渡を渡る、綱引行く舟なり、渡れば拜村（ハイ）なり、農家の内を行く、約十町、左高越山道の立石あり、時は七時三十分、宍吹より一千八百九十三歩、是より上は人家なし、宍吹よ

り頂上へ五十町と云ふ。

少しく登れば、殆んど平地、道は一間餘もあり、二三町にして四十一町目の石標あり、同じ平地三十五町の立石あり、休憩所あり。

是より登りにかゝる、兩測は老松並列し、櫻は其間にあり、多し、花時は美觀ならん、高越山は諸書に、直立一直線に登ると記し、山下より見れば富士形の山にして、定めて細徑急嶮ならんと思ひしに、豫想と反對にて、立流なる之の字形の道なり、山上には高野豆腐を製する家ありて、馬も通ふと云へり、道は山の脊にて、左右共開けたれば、眺めよく、願れは吉野川の清流は、永く引き、宍吹町は直下にあり、一眸美景なり、一町毎に立石あり、里程は信用するに足る、約四五町目に新築の休憩所もあり、意外に登りよき道なり、上るに從ひ、櫻益々多し、八町目の立石に至れば、寒風と稱し、古櫻ある由、諸書にあれど、今は枯たるかなし、地は八百八十米、木造の鳥居樣の門あり、曰く。

以上麻植郡川田村高越山の地。

今迄は道の兩測、並樹の外、樹なき草山なれども、是より以上は、栂樅の老樹蓊蒼として、茂り、晝尙暗し、寒風より山の北腹を廻り、四町川田道に合す、こゝにも黑き冠木門あり。

二町登れば、樓門を見る、石道數段を登れば、高越寺に出づ、時は十一時、宍吹より四千九百三十步、一里二十四町の道なり。

高越山は、一名摩尼珠山、蓋山、木綿麻山、西山上の稱より、天智天皇御宇、優行者の開基にして、大和藏王權現と、一躰分身と稱す、故に西山上の名あり、延曆中、弘法大師此山に登り、本尊千手觀世音を彫み、一字一石の法華經を、山顚に埋めて、經塚の跡を殘し、理源大師又登山し、西南の岩屋にて、護摩供を練行すと、近時回祿にかゝり、今は再建の諸堂新築にして、立流なる寺、廣き平地あり、新らしき樓門、庫裏佛殿並ぶ、麓の村民病か流行るとて（赤痢ならん乎）村民交代にて、日參するもの多し。

本堂は南面す、前より詠むれば、阿波の平野一望、直下は川田より、吉野川は中島を隔てゝ、二流となり、山崎より遠く、眉山は低くして、一丘の如く、津田川口より淡路島、沼島を見る、右手は山丘重疊し、南方群山中、山頂に一叢茂るは、燒山寺山と云ふ、北は阿讃の連峯、其間に讃岐の五劍山見へたれど、奇形ならず、西方は詠めなし。

日參の連中は、庫裏へ行き、食事す、余も共に行けば、廣くして茶もあり、漬物もくるゝ。

此寺は頂上の少し南の下にあり、絕頂には三角點あり、只小社あり、彼日參連か案內すと云ふに、連れ立ちて樓門より、

南へ小徑を入る、二町麁造の石燈、登れば二の小社あり、高越寺と異り、荒れ果たり、諸書に伊裝諸祠とあるは、是なり、里人は日鷲命を祀ると云ふ、麓への里程標は、此所を基點とするなり、則ち。

○宍吹道　頂上祠（二町）高越寺（四丁）黑門川田分れ（八丁）寒風（十二丁）種穗分れ（麻植美馬郡堺）（三十五丁）山下（五十丁）拜村渡し場。

○川田道　頂上祠（二丁）高越寺（四丁）宍吹分れ黑門（二十一丁）中禪寺（五十丁）川田一の鳥居。

祠の西南方の荆蕀、かき分け、登ること約半町、絕頂三角點あり、頽れて只基石のみあり、五萬分一によれば、千百二十二米六とあり、されど四方は丈よりも高き草にて、四望を遮り、何の眺もなし、南に行けば、經塚ある山なれど、道もなく荆蕀ふざかり、行く事を得ず。

眺望もなければ元來し道を高越寺に下り、午後〇時半下山につく、停車場へは川田道を下る方近ければ、歸路を川田道にとる、約七町は、樹林茂る、急なる坂此所にも、又從是上高越寺所有地とあり、是より以下は、宍吹道の如し、兩側並木の外、樹少なし、櫻はあれど、宍吹道の方多し、道はよし、二十一町目に少許の平地あり、一戸の藁葺あり、前に池あり、此所は前神とて、中禪寺と云ふ、時に一時二十五分、寺より四千〇五十歩、地は海拔五百七十米。

此道も途次多く、休憩所あり、眺めは山上より下る迄眺よし、四十二町目より、道惡くなり、平野も近く、約五十町を下れば、一の鳥居あり、時は二時三十分、寺より八千九百六十歩。

曇りし空は、そろ〳〵雨となれり、田畑の間を行く五六丁、川田村の字町なる處、飲食店は蕎麥屋よりなし、注文せば、悠々火を起す、汽車にはまだ二時間あれば、ゆるりと休む、荷持には六日分、一圓五十錢と、今日の宿料として五十錢やれば、多しとて辭退す。

停車場は川田、湯立共、同じく十八町なり、雨は中々止みそふなく、三時半湯立に向ふ、村人の大なる芋の葉を、傘の代用とせしも珍らしく、同じく眞似して、川に沿ひ、湯立に至れば四時案內者はすぐ出る西行に乘せ、數日の勞をねぎらう。

雨ふれども、高越山は眞正面、富士山其まゝにして、頂上本堂迄よく見ゆ、德島へ三十三錢を拂ひ、四時五十七分發にのり、雨中石井邊にて日暮れ、雨中と暗中なる德島停車場へ、六時三十八分。

米田に寄夕飯して十時富田橋を發する、又同じ、加古川丸一二等も滿員、十一時二十分雨中を出港す。

九月二十二日　朝大雨終日雨。

未明兵庫に入れり、こゝにて下船し、雨中只一輛ある俥にて、神戸へ行けば今しも汽車の出る處、即ち六時卅五分にのり、八時五十七分京都につく。

此行日を費す雨に阻まれ九日と二晝夜、單に劍山登山のみなれば。

一日夕京都發　二日朝德島着　貞光を經て古見泊。

三日　見越泊　四日　谷口泊、五日　宍吹より終列車にて　六日朝　京着。

劍山登山は、祭日を除く外、殆んど無人の地、余の登りしは裏山なれば、古見にて凡ての準備をなすべし、諸書に茗荷又は川上より登るとあれと、そは單に登り口の名のみ、何れも農家、止むなくば谷口よりするなり、木屋平村役場所在なる川井は、谷口よりも不便の地と云へり、谷口にては、余の經驗によれば、案内者の雇入出來す、且人柄の惡敷所にて、先年某學校の生徒、三十何名とかは、案内者を雇ひしに、山の上下何圓とかを貪れりとか、强て表山より登るなれば、山崎よりすれば、能き案内者を得るならん、宍吹の者は、劍山に委しからざるやうなり。

植物草花は、裏山則祖谷道に豐富なり、表山は全然少なし、標高は高けれど、緯度の爲め、我比叡山に於けると異らず。

妙高登山の記

一　登山の動機

高田高等女學校長　山中鉦太郎

越後に住めるもの、就中上越後に居住する者は、朝に夕に、此の越後第一の高山である、妙高の仙顏に接せぬ者は無い。接して而して以謂く、願くは一度彼の山巔に登りて、眺矚を恣にし、彼の上杉霜臺公が據て以て雄を天下に唱へた山河の景色抔見たい者だと思ふは、蓋し萬人一樣だと思ふ、吾等は此の心を以て、常に此の高山に對して居る者であった。

近來は富士登山の評判が益々高くなる。本年抔は盲人までが登山を企て、目的を達した、女學生の登山抔は、最早餘り人が不思議がらぬ勢である。が然し之は東京大阪抔といふ最も開けた土地の人の考で、未だ〳〵田舍に之くと、婦人が山に登ると、山が穢れるといふ樣な、所謂女人禁制主義が、大に幅を利かせて居る世の中だから、吾等も餘り多く是等の希望を、女學生等に皷吹はせぬ積りであるが、然ればとて、世の機運が一旦動いた以上は、何時まで斯る不合理な禁制主義を格守する譯もにいかぬ。こゝは一つ女學校にて企てゝ見たら、ドーぞといふ事になりて、話頭は次第に進んで來た。兎角

する中に、夏季の休暇も近附いた。遣るなら此の好機會を逸してはならぬと云ふ事にまで運んだ。

二　登山の方法とその準備

さて愈登るとしたら、如何なる方法で之を決行したが可からん、世間には大分反對もある模樣で、今度の女學校の企では、蓋し失敗に終るであらう抔と、彼の守舊的禁制論が盛んに言ひ囃された。勿論妙高といふ山は、富士山と等しく四時積雪の絶ふる際の無い、海拔八千九十六尺とあるといふ日本有數の高山である、で從來も、婦人抔は餘り登て居らぬ靈山である。然るを世の風潮とは申せ、如何にも物ずき氣にも、妙齡の女學生をして、此の險山を拔渉せしむるは一面から見たらば、或は突飛を極めて、危險な樣にも思はれるのである、然るを强ひて之を決行するには、大なる自信と、深き覺悟とが此際最も肝要な事であったのである。

であるから、學校では出來る丈、最も周到なる方法と準備とを講じたのである。玆に一寸その要點を摘記して、今後の登山者の參考に供しやうと思ふ。

(一)登山志望者は先づ父兄の認諾を得せしむる事。

(二)一旦認諾を得た者の父兄に對しては、學校は更に親展書を發して、之を確むる事。

(三)前記の二項と、二回の校醫の健康診斷とを經たる者を以て、登山隊を組織する事。

(四)右の團隊を四小部に細別し、教諭一人づゝ附添ひ、之に各小隊より互選したる部長一人、副部長一人を隷屬せしめ、その隊員の指導監督に當らしむる事。

(五)右の外案內者として、剛力各一名を、小隊に配屬する事。

(六)校醫一人、寫眞師一人を、同行せしむる事。

(七)途中にての落伍者あるを慮り、小使を同行し、萬一の場合には之を保護して下山せしむる事。

(八)隊員の服裝は、麥藁帽子を被むり、猿股及び膝に達せる短袴を穿ち、脚絆甲掛草鞋をつけしめ、且つ左の品物に限り、携帶せしむる事。

一　握飯
一　水筒　麥湯又は砂糖水の類を盛る。
一　菓子　金米糖の類
一　藥　仁丹清心丹の類
一　杖及草鞋二足
一　雨具用蓆又は油紙
一　妙高山及び其の附近山川の地圖並に手帳の類
外に手拭鼻紙等

三　登山口の選定

妙高山に登るには、二筋の通路がある。その一は信越鐵道線關山驛にて下車し、西行凡そ里許にて、關の湯といへる温泉場に出で、夫より半里燕温泉場を經て、登山する山徑と、又一は、同線田口驛にて下車し、有名なる赤倉温泉場を經て、登山するものとの二條である、が燕口をとれば、徑は急峻絶壁の箇處多きも、里數が餘程減少するのである、又赤倉口を取るものとすれば、前者よりは、較平夷なるも、里數が比較的延長すといふの不利が伴ふ。で此の登山の選定に就ては、餘程念を入れた積りである、之が一日に登りて、其日に歸高すといふ樣な、極めて短兵急的の窮屈な旅行ならば、或は比較的平夷な赤倉口を取て、燕口へ下りたかも知れぬ、が何しろ二泊がけの、頗ぶる呑氣な、大事をとっての殆んど遊散に近き旅行であるから、種々の立場から、最も都合の好き、最も一行に取りて便利な徑路を選定したのである。燕温泉と赤倉温泉との、孰れが最も一行登山後の疲勞を慰むるに適せるか抔は、主たる條件の一として數へられた。遂に議は一決せられて、燕口を取て登る事となった、乃ち前日は燕温泉場に一泊し、其翌日登山し、赤倉に下りて一泊し、第三日目の午前は、靜かに赤倉の靈泉に、登山後の心神を養ひ、午後田口驛よりの滊車で、歸高する事となった。之が定められて登山隊員に普く告知せられた時抔は、少からぬ隊員の血を跳ら

せたのであった。

四　登山の第一日

右の如く萬事が順序よく進行し、細大殘す事なく準備せられて、愈出發したのが七月の三十一日、學校の夏季休暇が始まらんとせる前日の、午前五時四十二分、來り會せるものが都合七十人、何れも二回の體格檢査に合格した、丈夫な人たちばかりである。之が前途血の湧く樣な大々的希望を抱いて、列車に乘こんだから、汽車中の賑ひは頗る盛んなものであった、汽車は猶豫なく、此の花の如き一行を載せて走った、ソレ新井といふ間に、早くも關山驛に着いた。關山からは徒步で、全隊を四小分し、豫定の通り敎諭一名部長副部長各一名づゝ附添ひ、全隊肅々として、裾野の廣野を辿った。途上の風景は、眞に畫の樣である、遙かの天際には、目指せる妙高の主峯が、突兀として高く雲表に峙つ、外輪山の仙顏が、朝するが如く、笑ふが如く、又は吾等の來れるを微笑もて迎ふるが如き姿もて、立てる抔、見るものとして愉快の種ならざるは無い有樣であった。

やがて關の湯を前方の雲間に認めた、一行は踴躍して進む、名も知れぬ千草の、色々爛漫として路の邊に咲き亂れ、袂涼しき朝夕の風は、掖々として足元から起る。踏む足も左程苦にならず、午前十時には、早くも里餘の關の湯につき、此の地にある同窓生より、思ひも寄らぬ歡迎を受けたのは、一行の大に感謝した所であった。

燕湯へは、こゝより二十丁餘りと聞きけるが、來路に比すれば險峻の度を加へし事甚しかりしも、目と鼻の間に燕湯を望見したる一行のものには、素より何の苦もなく、一時間計りの後には、早くも同所の明治館に着いた。一浴後高欄に凭り、涼を呼びたりし時の快興は、山を知らぬ人々には、到底想像も及ばないであらう、特に有難かりしは、雪の御馳走であった、日中而かも七月三十一日といふ極暑の炎天を侵して、兎も角二千尺以上も攀登して來た吾等一行のものに對しては、之が第一の御馳走であったのだ。日頃から山下にありて、凝望した皚々たる妙高山の白雪である、平素は雲を握むが如き空想としか思はれざりし天上の積雪は、今しも口に入る、何等の愉快であるか、吾も人も、ハヤ仙境に入りたらん心地せられて、無上に嬉しかりしも、全く無理では無いのであった。

五　登山の第二日

翌日は八月一日、今日こそは日頃の渴望を果すべき大事の一日である。勿論一行中には、前夜より一睡だも交えざりし人々も多かった樣である。ハヤ午前二時には、宿屋の男が戸を敲いて起しに來た、手早く衣服を着換えて、立出でゝ見

れば、辨當の用意から、朝飯のお膳まで、全然出來て居た、如何に登山の客を相手にするが、商買とは申しながら、七十餘人の一行に對して、斯くも行屆いた待遇は、實に感心すべきの至りである。やがて食事も終り、全く用意が出來た頃には前夜雇入れた四人の剛力が、早くも山刀横たへ、出發を促しに來た。

丁度時刻は午前四時、山靄模糊として、まだ薄暗い山徑を先導者の築内につれて立ちでた。同行の長尾寫眞師は手早く此の光景を、レンズにかけた、身拵へする暇も何も無ったのは頗る滑稽であった。

最初のうちは、物凄い樣な曉方の濃霧の中を、先導者の掛聲に應じて、只機械的に歩を運ぶのみであったが、次第に登るにつれて、夜も全く明け放れ、遠近の山や峯、谷川の清き流れ抔、所謂妙高の奇絶と壯觀とが、遺憾なく吾等の眼に觸れて來た。汗水流して、漸く急坂を攀ぢつくせば、圖らずも清き泉湧きて、友待ち顏なるも嬉しい、喜びて腰を下ろし、冷水に舌打ち鳴らせし時や、又水筒の水呑みつくして、最早息も絶えなんと覺ゆるころ、思はぬ處にて、例の積雪に涼を呼ぶ時抔は、實に何とも言れぬ妙趣であった。

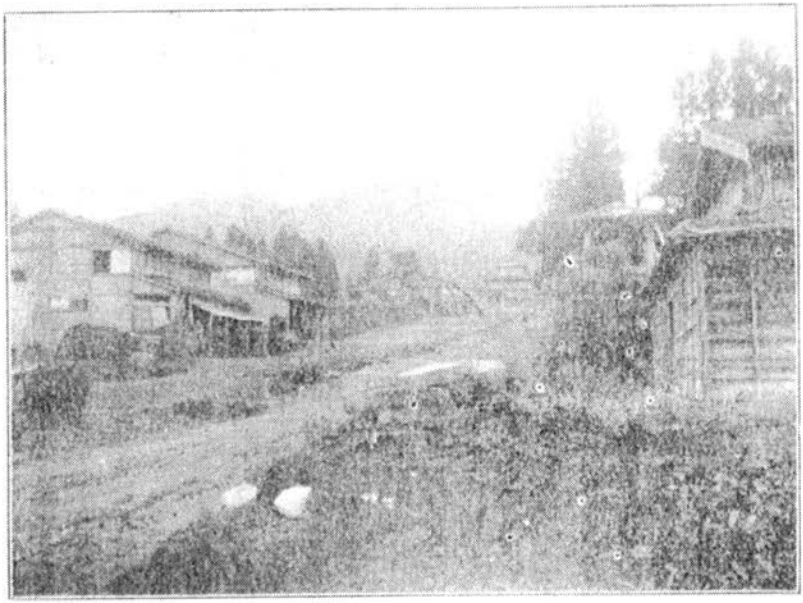
更に一行のものゝ、血を湧かした事實といふは、斷崖が高く削立せる所に、飛瀑のかゝる狀なのである、見るから涼風腋下に生ずるの思ひありて、苦熱イッしか流ひ去らるといふ樂みづくめにて、大なる苦痛も、心配もあらざりしが、北地獄谷の難所、長坂といふ、極めて急峻な坂路にかゝりし時は、一行の最も痛苦を叫んだ所であった。正に是れ斷岩千尺、一歩を失すれば、千尋の鬼となる一難所であった、正しく一行中の三名計りは、鼻血を流して卒倒し、同行せし校醫の救護を、一時仰いだ次第であるが、幸にも落伍者あらざりしは誠に天幸であった。

この坂を登りつめた處に、小安息所がある、有名なる天狗堂といふのが是なのだ、此處からは絶頂までは餘り遠くも無い、仰げば山巔雲近く、腑せば脚下は幾千尺とも知れぬ、名にしあふ北地獄谷の懸崖である、魂消え眼眩むといふも、斯る場所を言ふならんと、一行に少からぬ寒慄を覺えしめた所であった聞けば、最早海拔六千尺以上も來たといふ事だが、克くも斯る高所にまで、無難にて來る事を得たりしか、殆んど自分等の、身を信じ得ぬ程であった。

時計を見ると丁度午前八時である、燕を立ち出でゝから、四時間を經過して居ったから、持て來た握飯の一半を此處で、喰べる事となった、殆んど半日も、險隘を歩き續けて、空腹になった吾等には、蓋し山海の珍味にも、勝ったものであった、携へた菓子も、水も、大概は平げられて了った。休息は凡そ一時間計りで、亦疲れた足を引ずって、登り初めたが、坂は今迄とは違ひ、勾配は較減じた樣であるが、非常な隘路となったが爲め、大に苦しんだが、一行の注意の度が益周密になった精であるか、又は休息して、元氣を回復したものであるか、一人の病者も出さなかった。

前進約一時三十分計りで、登山中の最大難所に到達した、有名なる笈摺貝摺の險路である。只見る斷崖高く懸る五六丈ばかり、飛燕猿の類ならでは、列底飛越し難き山容であるのだ、雇來りし剛力は、宛も猿の如くである、見る〳〵この絶壁の要所々に攀に攀ぢ上り、垂下されたる三條の重き鐵鎖に、太き綱をつけ、之を手掛りに一人づゝ隊員を助け上らしむるのだ、最初のうちこそ、誰も彼も躊躇せしも、之を決行して見れば、誠に案外なものである、婦人の萬事に綿密周到なる美德は、斯る場合に遺憾なく發起せられ、何等の故障なく、さしもの一大難所を安安と通過せしには、吾等の初めて意を安んじた次第であった。

是からは路は峭壁の間に露出されて居る、折からの南風は、何にかも吹き飛ばされそうに強い、被むりし帽抔、吹き去られたものもある、ドウかすれば、身も飛ばされそうである、是ぞ危險界中の最危險界であるのだ。一行中の勇者は、先頭に立ちて、萬歳の聲が、早くも遙雲の間に湧き起つ、後れたるものゝ頭には思はず喜びの血が跳った。



妙高山（辻本滿丸氏撮影）

それから間なく、絶頂に達した、登山隊員の此場合の感想は、勿論其の形式に於ては、種々多樣であらうが、結局は一致せる、大なる何物かを握んだに相違無い、と思ふ。此の一物こそ、身體上、知識上に、大なる利益を與ふるは勿論、精神の修養上に、非常なる一大勢力を有するものであるといふ事は、吾等は深く信ずる者である、高山に登りて、普く眺矚を恣にした者でなくては、容易にこの神秘を覗ふ事は出來無いのである。

山頂には阿彌陀がある、其の側には寒冽なる泉水もある諸所に峨々として鋭く聳えたる巖がある、日本岩、胎石、鞍石抔は最も名のある岩である。當時の噴火口は、今は浸蝕崩壞して、

跡を求むるに苦しむも、仔細に注視すれば、蹄鐵形の火口がある、其の內測は懸崖削立の狀を呈して居る、又此山には、外輪山がありて、正圓の弧を成せる狀もて、一帶の環壁を成して居る、一見、美事なる二重式死火山である事は、誠に明瞭な事實である。

この火口丘の低地を、南北の地獄谷と呼び、溫泉が各所に湧出して居る、之が赤倉、燕、關等の原湯となるのだ、歸途南地獄谷より、一條の硫氣に沿ふて下れば、五十丁計りにて赤倉溫泉場に到る事を得るのだ、吾等の一行は、此の徑路を迂りて赤倉口へ下山したのだ。

吾等登山隊員が、絕頂に達した時刻は丁度午前十一時で殆んど豫期せし時刻に着いたのであった、一行は校長の發聲にて、兩陛下の萬歲を三唱し、終りて食事をとったが、實に此折の愉快といふものは、筆も舌も何物もつくせるものでは無い、長尾寫眞師は、直樣一行を撮影した、又某敎諭の物された登山中の餘興に成れる作物もある、之等は何れも別項記載の通りである。

六　山上に於ける生徒の感想

この休息中生徒が山上にての感想なるものを、尋ねて見たら、其の答振りが、頗る面白かったから、その一二を左に抄記して、此の紀行を終るとしやう。

一年の一生徒は曰く。

まるで箱庭の樣だ、米山や其外の山々は、續いたりされたりしてゐますし、信濃川は白い帶のやうですし、野尻湖は鏡で造つた池のやうですアヽよい箱庭ですこと私うちの弟に、此箱庭を見せてやりたいね。

三年の一生徒は曰く。

私は何んだか、月の世界にでも來たやうな氣がして居ります。

四年の一生は。

私共は學校で噴火山の事にっいては、大躰學んで居りますが、實地に火山の模樣を見ますのは只今が始めてです、火山の附近には、噴き出した岩石が、澤山であらふと云ふことは、想像して居ましたが、實際此頂上に登って見ますると實に想像以外の大きな岩が、山全躰を形造って居るには、驚くより外ありません、此大きな岩を噴出した當時のことを想像すると、火山力の實に驚くべき偉大なものであることを感じました。

卒業の一生は左の如きものを書いて出した。

婦人の身として、妙高山に登る、これ一の好奇心なり、此心我身を驅りて山に登らしむ、登りしは此身にあらずして此心なり、此心落ちんとする身を支へ、迷はんとする我を導きたり、頂上に達せし時、身は此にあれども、心は天外に走り、我にして我ならざる心地せり、此好奇心去りて、平常の我れに歸れば、戰慄の身を襲ふを禁ずる能はず。

アヽかゝること再びすべからず。

霧絶えず我等を圍みきそひ立つ巖さながら神ますに似て。

中空に巖峙つ八千尺かへり見すれば心そよめく。

巖の香さ霧のくゆり絶え〳〵に人の氣つゝみ天に流れぬ。

山民の生活

（第二回大會席上にて）

法學士　柳田國男

こんくうち侍りける時、畑燒き侍りけるを見てよみ侍りける　藤原長能

片山に　畑やくをのこ　かの見ゆる　み山櫻は　よきてはた燒け　（拾遺和歌集卷十六）

名山の頂上を窮めやうと云ふ諸君ばかりの中で、少く調子の合はん話ではありますが。自分は凡山の中腹以下の生活と云ふ低いことを御話します。日本は御承知の通の山國でありますが。その山國ぶりがよほど西洋の國々とは違ふやうに思はれます。取わけ北米合衆國の如き土地廣く人の少ない國は正反對のよき例であります。十五度とか二十度とかの傾斜度を境にして。それより險峻な部分は山地として其範圍内には殆と人が住みません。なるほど木樵炭燒牛飼羊飼が入り獵師藥草採も入り。又は登山の客避暑の客も來れば。之を相手の宿屋の類もありますが。其數は知れたもので。大躰から申せば平野は人間の住處山岳は野獸の住所と云ふやうに。自然に區劃せられて居るかと思ひます。日本などでこんな區劃をしたらとても五千萬の大人數は居りきれる筈が無い。故に色々と都合をして二十度はをろか三十度四十度の山腹にもずんずん村を作って早くから定住して居ります。何れの深山に入っても五里七里と續いて人家を見ない所の無いのは全く御國柄であります。つまり傾斜地を人間の住居に適應させる技術にかけては。日本は萬國に優れてをるかと思ひます。

今日では段々山から里へ下って來る傾向が顯はれて來まして。此先どうなるか少々氣がゝりでありますが、昔山奥を開

いた人々は。十分な用意と計畫とがありまして。恐くは自然の發達ではありませうが。山村には一定の型が出來て居ります。一例を申せば日本の民家は自由に建てさせれば凡そ三と二位の割合の長方形でありますのを。山腹の村では四と一位の長方形にして地均しの勞費を省いたのもありますし。飛驒白川の山中などでは三階四階の藁屋を作って出來る限屋敷の地面を儉約してをります。之と申すのも四面は海。內は人口增殖の壓迫の爲で。苟も谷川の流があれば。之を溯って奧へ〳〵と開いて往って。新しい學問で海拔何千尺と云ふやうな高地に。いつとなく寒い生活を始めてをります。「山口」とか「川上」とか云ふ村は次の時代には旣に川下に成って其奧に又村が出來る。例へば若狹の南河の谷などは殆源頭まで民家がありまして。「奧坂本」と云ふ村の奧に尙數箇の部落があります。我々の祖先は此の如き地形を河內（カフチ）と名け又入野（イリノ）とも呼びました。「我が戀はまさかも悲し草まくら多胡の入野の奧もまかなし」と云ふ萬葉の歌などは。入野が盛に開かれた時代には人を感せしめた歌でありませう。

入野では三方の山から水が流れますから。勿論開けば稻を作ることが出來ますが。昔の人は米が食へぬから村を作らぬと云ふやうな贅澤は申しません。水田にする程の平地が無くても氣候が寒くても。猶ずん〳〵と谷の奧へ上りました。そのやうな話ではあるが。山國では兵役に出て始めて米と云ふものを口にした人が幾何もあります。冬中の糧には栗「ハシバミ」「トチ」の類もやりますが。多くは山畑に粟稗大麥小麥の類を作って食料にしてをるのです。今日全國の府縣は年年各五萬三萬の金を使ひ。立派な技師技手を何人も置いて。稻はかうして植ゑるがよい蟲はかうして取れ肥料には何がよいと綿密に世話を燒くのが一般の風でありますけれども。此等の所謂農事改良とは丸々沒交涉で二千年來の勝手放題な食物の得方をして居るのが燒畑切替畑であります。燒畑切替畑の行はれて居る區域は存じの外廣うございます。其方法は全國到る處畧同樣で。燒畑と申すのは山腹の樹林地を片端から伐拂って。秋切れば翌年の春。春切れば其年の夏。一時に火を付けて之を灰にし。其灰分を肥料にして。粟なり馬鈴薯なり麻なりを蒔きます。作付する作物にも地方により一定の順序があります。大抵の山地では三年もすれば表土が流れて了いますから。之を打棄てゝ他の樹林地に向ふので。一旦荒した地方はよほどの年數が立たねば再び燒畑にすることが出來ませぬ。一寸考へて見れば亂暴至極の話で。よく農學の方では掠奪農法といふことを申しますが。此などは手も無く强盜であります。近年殖林の奬勵が盛に成りまするし。且水源涵養の問題がやかましい所から。例へば傾斜何十度以上の山地には燒畑をするなと云ふやうな府縣令がよく出て居りますけれども。外に食物を得る道の無い間は實際禁止することが不能です。山の人とても物すきに燒畑を作るわけでは無い。里近い所はとくの昔に燒き盡し。今は家から又二里も三里も離れた山中に。假小屋を設けて宿泊し野獸の害が多い地方では

蒔くから刈るまで番をする。引札や鳴子では間に合はず。男は晝寢て夜は起明しましてホーイ〳〵と夜通し怒鳴るのださうです。

燒畑地の山水は特色があります。夏の頃旅行すると山の中腹に貧乏人の股引の如く。所々四角に色のかはった部分の見えるのが。燒畑の麥が熟した有樣で。ひどく深山を求めんでも滊車から見える處さへあります。又以前燒畑をした塲所は地貌でわかります。又地名でもわかります。燒畑と云っても通じますが。地方に由っては切畑切山と云ひ薙といひ「カシキ」と云ひ「アラク」と云ひ「コバ」と云ひ「ヤブ」とも申しまして。それ等が其土地の字と成って殘って居るのです。新編武藏風土記稿には秩父では春切る山を「應」と云ひ秋切る山を「差」と云ふとありまして。武藏から甲州へかけ「大ザス」「黑ザス」「天目ザス」などゝ云ふ地名が澤山あります。小石川區指ヶ谷町なども其一例であります。甲斐國志を見るとあの國では燒畑を「刈生畑」とも又「ソリ」と申したさうで。東西河內領の山中には何々草里と云ふ地名が澤山にあります。「ソリ」は「アイヌ」語かと思ひますが證據が見出せません。奥州にもあれば駿河美濃などにも山中に「何々草履」と云ふ地名があり。伊豆には「大澤里」「高嶒峭」などの地名があります。三河の段度山の麓には「大藏蓮」「金藏蓮」等。木曾には「柿其」「赤ゾレ」など皆此であります。今日人の苗字に「佐分利」「佐分」と書いて「サブリ」と申しますのも。元は居住地の地名で。若狹の佐分郷の如きは倭名鈔時代から今日迄ありますが。疑もなく同一語であります。又諸國の山地の地名で「何の草」と云ふのが澤山にあります。

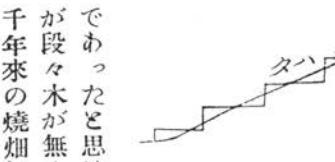
今日のやうに材木の高い時代に僅ばかりの物を作る爲むざ〳〵と大木を燒倒すなどとは無智も甚しいと云ふ人があるかも知れませぬが。それは山に行かぬ人の考で。如何に山の人が單純でも山中の材木が運賃に引合ひ多少の得分が有るものなら。決して松や檜を立枯しにして所謂白珊瑚を作りはしませぬ。買手のある限入用のある限は木材を採取して殘物のみを燒きます。薪炭用の雜木までが運むで金になる塲所では。假令其爲に土地の肥力が不足で外から補ふまでも先づ木を取ります。畑を燒くのは肥料を作ると同時に作物に對する障碍物を除くのですが。燒て灰にするよりは生のまゝ腐熟するのを待つ方が。肥力の足ぬ土地には好都合でありますが故。木を取る畑では燒くことをせぬ所も段々ありまして、此を切替畑と申します。燒畑のことを「カシキ」と云ふ處もあるが。「カシキ」は恐くは苅敷でありまして切替畑に當ってをります。切替畑はつまり燒畑の一段進歩したものです。燒畑と切替畑との中間に位する農法。例へば伊豫の上浮穴郡などの三椏畑の如く。雜木の麁朶を採取して跡地を燒くものもありますが。少しも火を掛けず純然たる切替畑を作る實例は。先づ伊豆の大島などであります。かの島では薪を通貨とする位薪の澤山出來る所で。「島マキ」と稱し昔から小船で東京へ運びます。

火山の周圍の山地はその薪山であって。十八年二十年の大島櫻や「ヤシャノ木」を伐り出して薪に賣った後は。三年乃至五年ほど之を畑として利用します。此は一つには造林前の整地の目的でありまして。澤山の地面を持つ者は分家や出入の者に畑を作って貰はねば手が廻りませぬ所から。あの島には小作料と云ふものがありません。又相州の高座郡所謂相模野の大部分武藏から下總へかけての高臺は。到る處非常な雜木林で。汽車などで通過してなぜに開墾をせぬかと訝る人もありますが、此が又大都會の爲に缺くべからざる燃料の供給地で。多くは大島と同じく切替畑の農法を行ふのです。それと云ふのが地租が低く手が掛らぬ爲に下手な雜穀を作るより引合ふので。「ハンノ木」の株を掘起し土釜炭に燒いても開墾費を償って餘があると申します。薩摩の南部の丘陵地でも切替畑が行はれ。彼地方の一風景を爲して居る松林は皆以前の畑に松を植ゑたものだと云ふことです。

燒畑切替畑の行はれますのは一には所有權の關係即ち村持字持で個人に屬せぬ爲もありますが。主たる原因は勞力の問題であります。土地はいくらも有るがさうは食物も不要なり一戸で二町も三町も作るだけの手が無いから。自分に宛てられた土地の五十分の三乃至二十分の三だけしか耕作をしませぬが。愈人數が多くなり又は桑や小麥の類がいくら有っても金に成るとわかれば。矮林仕立などの微弱な利用をせずに。手の及ぶ限地形の許す限土地を改良して常畠にします。信州などは隨分急傾斜の山が桑畠になって居りまして。此でも明治になってから燒畑切替畑のよほどの面積が常畠になったのです。地名にばかり殘って居る燒畑と云ふのは。再び造林せられた處も勿論ありますが。多くは切替畑に進みそれから又常畠に改良せられたものです。この常畠と云ふものが農業經濟の發達に伴ってよく見ると二通りに區別があります。此前まで四年目に林に戻したけれど今度からは肥料を施して續けて畑を作ると云ふやうな處では。以前の燒畑のまゝの山の斜面に沿ふた高低のある畑です。表土がどうしても流れまして上の方から土地が瘠せてまゐり。よほど土留めと肥培とに注意せぬと切替畑同樣十數年の後は見棄てねばなりません。第二種の畠は最初に餘分の勞力がかゝりますが。此心配だけはありません。即ち山腹を横に切込んで平らな耕地を作るのです。勿論此には表土の厚さ其他地質上の條件もありませうし。又物理學上の理由もありませうが。先づ經濟の方から說明しますれば第二種の常畠は更に一段進むだものと言はねばなりません。甲州から信濃へかけてはよく第一種の山畠を見受けます。切株のやうな臺を水平に畠の端に作らねば肥桶も置けぬと云ふ有樣です。

土佐の西海岸の密柑畠などは第二の例で。船の上から見ますと丸で山が皮をむいた筍のやうに見えます。瀨戸内海の島々

は二種の山畠が雜然と併存してをります。研究の方からは中々趣味がありますが。若干彼の海の風景を害してをります。さてその次が水田は更に一進境とも申しませうか。第一種の常畠では如何とも早仕方がありませぬが。水平式の山畠ならばもし之に灌漑すべき水さへあれば。即ち更級や田毎の月となります。兎に角米が作りたい〳〵と思ふ山民の希望を滿足させ得るのです。併し田にする以上は畠とちがひ單純な土留めだけでは不十分です、あまり水が漏らぬやう又崩れぬやうに工事を加へねばなりません。淺間山の麓を滊車から見ますと。上の田の下の境は石垣で築上げてある。肥後の阿蘇の西麓などは石が得にくいか。此が土でぬり付けてあります。年々田植時に改修するらしく中には高さの八尺も一丈もある處があります。同じ國でも天草下島などは又石垣で。その石垣が粗末なる。石の間に澤山の蟹が住むでゐまして。夜出ては下の田の稻を荒します。之を蟹囓と申しかの地方の害蟲の一であります。



我々の同胞が久しい間此の如く深山の奥のその奥まで入込みまして何んでもかでも其土地から生活の材料を得やうとした努力は到底地貌の上に若干の影響を及ぼさぬわけには行きませぬ。地貌學では天然の地表に及ぼす影響を主として研究しまして。人間の力の方は勿論一段輕く見られてをりますが。日本のやうな舊國では道路とか海川に對する築堤などの外に。山地に對する人間の痕跡も可なり重大であったことを考へねばなりません。昔は瑞穗の國と云って非常に肥沃な國であった話ですが今はさほどでも無いと同樣。素盞嗚尊が韓國から造船用の樹木を持って來られたと云ふ傳で。全國の山々は一面の林であったと思はれます。殊に邑落として最愉快な所は靑垣山を四方に取繞らした盆地であったのです。然るにその靑垣山が段々木が無くなり土が流れて岩ばかりでこぼこした黑垣山と成り。或は禿山の赤垣山と成りましたのも。その原因は數千年來の燒畑切替畑であります。燒畑跡は草ばかりよく茂り樹木は僅な雜木位で。それも繰返して居る間には段々山の肌が隱れなくなります。所謂坊主山は決して最初からの坊主ではなく。かゝれとてしもぬば玉のと云ふ歌のやうに。以前は眞黑に樹が生えて必づ北海道の未開地以上であったにちがひありません。普通の燒畑跡は忘れるほど棄てゝ置かねばならぬ所から。再び立派な林に復った所も有るでせうが。地層に燐礦があったり又は石灰の層が頭を出して居たりして。燒畑として人望のある所は殆山骨を暴露せねば止まぬ爲に。終に寄ってたかって防主にしたのです。信州などは山國の癖に木山が乏しいのは今は絕えて居るけれども昔盛な燒畑國であったからでせう。それから諸國の山相を此の如く變じたのには更に一の有力な手傳ひがあります。序に申しますがそれは外でも無い鹽です。西洋の諸國ではどうして來ましたか。日

本では甲斐の信玄が鹽を留められて苦しむだと云ふ如く。各地方毎に鹽の地方的供給を確保せねばならぬ爲に。越後の糸魚川でも出羽の鼠ヶ關でも奥州の宮古鍬ヶ崎でも甚しきは津輕の三厩まで鹽濱を開き鹽を煮ました。山國では又うすい鹽泉を汲上げて皆殆全部火力で蒸發させたのであります。家々の温室法も不輕濟至極のものではありましたが。中國沿海の山山の殊に荒れたのを見ると。鹽の燃料として烈しい山の伐採をしたことが想像せられるのであります。

燒畑の話に關聯して。自分ばかりかも知らんが面白い研究題目だと思ひますのは。此の如き土地利用法は果して我が大和民族の渡來に始るか否かといふことです。此國の前の主がアイヌかコロボックルか。國巢(クヽス)は何人種か出雲族は同族か異族か。此等は別の問題として。所謂天孫種の土着まで日本の山野は原始のまゝであったかどうかと申しますと。自分はどうもさうで無からうと思ひますが今の所證據を得ることが出來ません。併し前に申した「ソリ」とか「サス」とか云ふ語は本來の日本語では無いやうでありますから。此方から論究するのも一方法であります。但し假に前の居住者も燒畑を作って居ったとしても。之を我々の祖先が學むだとは申しません。疑なく祖先はどこかの山國から來た人でありますから。夙くから山地の利用法には長じて居たのでせう。唯燒畑を作って衣食を營むと云ふことが決して大和民族の特性とは言はれぬばかりです。然らばその新參の我々祖先が生活の痕跡は何れの點に求めるかと申しますと。自分はそれは稻の栽培耕作だと答へたいのであります。之も一種の假定說で他日反證が出ぬとも限りませんが。今は先づその假定の下に山民の生活の他の方面を說明して見やうと思ひます。

茲に注意すべき一の現象は我邦に田代と云ふ地名の多いことであります。田代は田の代(しろ)即ち水田候補地と云ふ意味でありましやうが。古くから荒地の意味にも用ゐられて居ります。この田代を舊村名即ち大字とする地が市町村一覽に四五十個所あります。南は大隅の肝屬半島から北は陸奥まで二十五國に分布して居る。小字の田代は現に五萬分一圖に見えるだけでも又數十ありまして。つまり全國到る處に有るのです。然るに僅かの例外を以て田代と云ふ土地には略共通の地形があります。それは例の河内の川上入野の奥で兩山の谷間の僅かの平地であります。東京近くで其適當な例は。相模の田代は馬入川の支流中津川の上流にあります。駿河の大井川左岸を溯っても三っの田代が皆畧同じやうな地形の處にあります。信濃の上高地は勿論「上河内」でありまして。そこの田代池も村では無いが一例であります。さて水田の豫定地と云ふ位なら平衍な水澤の地にでもあるべきのに。特に此の如き山中の小盆地に名けられたのは變なやうですが實は頗面白い見所であります。我々の祖先の植民力は非常に强盛でありましたがそれにも明白に一の制限がありました。如何なる山腹にも住む氣はある食物としては粟でも稗でも食ふが。唯神を祭るには是非とも米が無くてはならぬ。今日の考では解しに

くいが昔の人の敬神の念は中々生活上重要なものでありました。そこで神には粢なり神酒なり必ず米で製したものを供へねばならぬ故に。假令一反歩でも五畝歩でも田に作る土地の有ると云ふことが新村を作るに缺くべからざる條件であったのです。物恐ろしい山間へ始めて入込むのですから殊に産土の神の力に依頼する必要のあった上に。海岸などの平地では取別けてこゝを水田にときめて置く必要はなくても。山中では田代の地が非常に肝要であった爲に。自然地名と成って今日に殘って居るのであります。

此の如き次第で田代といふ大字小字があれば、其谷は日本人に由って始めて開發せられたことがわかり。且つ畧其時代もわかります。殊に考へて見ねばならぬのは川除潮除の土工の關係であります。成ほど川の流末の水付いた所は稻を作るに適しては居るけれども。其代り水害も恐ろしい。堤防を丈夫に築く智織と云ふものは京都附近は兎も角も。田舍には存外いつまでも開けなかったのです。故に今日ならば遠く海上に向けて埋立の新田を開くに適した所でも。中世迄は唯危險にして且つ困難な場所で。住居の出來ぬは勿論遠くから往來して田を作ることも先づ斷念して居りました。しかも田の用水なり飲料水なり水の必要は中々有ったのですから。村としては先づ水の害を出來るだけ避けて水の利益を出來るだけ多く得らるゝ所を擇ばねばなりませぬ。海に面し川口に面して開けた平野を控へて居る丘陵の中腹は申分なく此條件に合して居りますが。日本にはそんな誂向な地が少ない。據なく川上へ川上へと村の適地を搜索して行き。終に深山に田代を見出しました。エンバンクメントの技術が進むで後始めて海邊の平野に村を開き。井を掘る技術が發達して始めて高原の平地に住む樣になったのです。馬入川の上流田名の邊で川の西の高地から東の方を見渡しますると。所謂相模野が明に三段の段地に區分せられて居ることがよくわかります。この第一段即ち最も川に近い臺が最も古い村であるのです。

地名の方面から見た山地の生活には今まで人の注意をせぬ多くの問題がある、大字小字に何澤と云ふ地名は何原何野などゝ云ふ地名と同じく。單に地貌を言表はした語では無く。同時に人の生活と大なる關係がある爲に特に之を名を附ける必要が生じたのです。澤は關西では谷と云ひます。地方に由っては洞とも云ひ。又何久保とも云ひますが。大躰皆民居に適する小さい入野のことで從って今は多くは民居と成って居るのです。之と類似の地形に又「サコ」又は「セコ」と云ふ名があって、九州ではよく迫の字が宛てゝあります。「サコ」は東國の方へ來ると段々少なくなり其代りに「ハザマ」と云ふ地名が用ゐられます。陸中の大迫町は「オハザマ」と呼びます。然るに自分の信ずる所では「ハザマ」はアイヌ語の「ハサマ」(底で)此の如き低地の行留りを云う名詞であります。岱又は仁田と云ふ地名は今日でも水のじく〳〵した所即ち田代として適當な谷間を申すやうでありますが。此もアイヌ語の「ニタ」(濕地)であります。道滿、當間などゝ云ふ

地名が處々にありますのは亦同じ語の「トーマン」（濕地）であります。殊に谷と書いて「ヤ」と云ひ「ヤツ」と云ひ又は「ヤト」と云ひますのは明かにアイヌ語の「ヤチ」（濕地）でありまして。關東諸國に無暗に多くある地名です。現に奥羽には「ヤチ」と云ふ固有名詞も普通名詞も所々にあります。さて此事實は如何なることを意味するかと申しますと。我々の祖先は現にアイヌの祖先が居住して居る所へ後から入って來て。アイヌの經濟生活にはあまり大關係の無い谷合の卑濕の地を占有して田を開き其附近に住居を構へたと云ふことを想像させるのです。一寸人は蝦夷を追ひこくって其空地へ日本人を入れたかのやうに想像して居りますが。彼等と雜居すると稍久しくなければ決して此等の名詞を受け傳へる筈がありません。從って全國の蝦夷が悉く北海道へ立退いたこと恰も臺灣の隘勇線の前進が生蕃を押出すと同じかったとは思はれません。奥羽の邊柵で田村將軍が武威を耀してから後も。ずつと內地の關八洲の山地などには蝦夷と日本人とが境を接して居って。長い間平和なる又は武裝的の交渉が絶えなかったかと思はれます。

我邦では所謂神代の歷史にも見えず延喜式其他中古の記錄にも見えず又後世の勸請でも無い小さき神社が非常に澤山あります。殊に「ホコラ」と稱する小さき社又は單に神ありといふのみで社も何も無い場所が。何れの地方でも澤山あります。關東では「ネノ神」「十二ソウ」「テンバク」など云ふ神々もありますが。全國を通じて最も單純で且つ最も由緒を知りにくいのは「荒神」「サイノ神」「山ノ神」であります。佛敎でも神道でも相應に理由を付けて我領分へ引入れやうとしますが。未だ十分なる根據はありませぬ。それだけに又此神々の起原の新しくないことが想像せられます。「山ノ神」は今日でも獵夫が獵に入り木樵が伐木に入り石工が新に山道を開く際に必ず先づ祭る神で。村に由っては其の持山內に數十の祠がある。思ふに此は山口の神であって。祖先の日本人が自分の占有する土地と未だ占有せぬ土地との境に立てゝ祀ったものでありませう。元來神の社に注連を延へるのは人の田や屋敷に牓示を打つのも同じことで。其境內を侵さぬことは大和民族の嚴重なる慣習でありました。奈良の春日山や信濃の諏訪の社が草原の眞中に鬱然たる杜を成して居りますのは即ち此結果であります。「サイノ神」や「荒神」は今日の有樣では社を立てた趣旨の不明に成った所もありますが。つまり皆日本人の植民地と蕃界との中間に立てた一種の標識であって。而も其神々は先方の所屬であったが故に其名稱からも傳說からも由來を說明することが困難なのでは無からうかと思ひます。山の神は人の形をして丈高く色赭く眼の恐ろしく耀いて居る神で。折々山中で之に逢った者があると云ふ口碑は今も各地方に存して居ります。

又「シャグジ」と云ふ神がある。東海道の諸國では古來各村に祀って居ります。或は「三狐神」と書いて御食神だと云ふ說があります。或は「赤口神」で陰陽道から出たものとも申します。近年は又人類學會の先生たちが二三の地方で「シ

ヤグジ」を石神と書き又は「イシガミ」と云ふ神もある所から。先住民の遺物なる石器を祭る者だときめてをられますが。共に安心して承伏するとが出來ません。殊に第三の說はすぐに反證が擧げられます。多くの「シャグジ」は現ニ石器を神躰にしてはをりませず。「シャグジ」「サグジ」と云ふ地方は多くて「シャクジン」と云ふ所は少ないのです。つまり此神も蕃神でありませうが。その「サイの神」「荒神」「山ノ神」「天白」などゝの關係異同は今日となってよくわかりません。併し駿河などには「シャグジ」は土地を守る神だとか又は土地丈量に用ゐた器具を埋めた塲所だといふ傳說があります。荒神も三寶荒神などゝ云って今は竈の神のやうに思はれてをりますが。地方では山神と同じく山野の神で。神道の盛な出雲國などにも村々に澤山あります。荒神の荒は荒野の荒でありましやう。「シャグジ」と云ふ地名は西は肥前の海上にもあって全國に普及した地名であります。精進と云ふ地名もさっと「シャグジ」と關係があるだらうと思ひます。（終）

雜錄

山の表裏に就て

某氏が某山の表山を登って、裏山を下られたとか、或は某山の表口、又は裏口と云ふことは、度々「山岳」紙上でも見掛ることでありますが、一体この表と云ひ、裏と云ふことは、元々どふ云ふ根據から名けたものであるか、之は寡聞なる自分の知る處でない、然し朧氣ながら其標準と認められることに就て、自分の考を記して、見たいと思ふのであります。山の表裏を規定するのに（第一）最も簡單な定め方は、山の南方を表、北方を裏とすることであります、而して登山口が、一つ以上ある場合には、南の方を表口、北の方を裏口とするのであります、この定め方は甚便利ではあるが、實際處々の山に用ゐられてゐる表裏とは、大に衝突を來たすのであります、例へば甲斐駒で、普通表口と見做されてゐる甲州の臺ヶ原は、信州の戸臺よりも、餘程北寄である、又白山裏山の飛驒の平瀬は、加賀の尾添よりも南に近い方面にあると云ってよいのであります、從來慣用されてゐる表裏の稱呼を、一變しない限り、此定め方は、現用のものと一致しない缺點があります。（第二）次の定め方は、繁華な方面から登るのを表、然らざるものを裏とすることであります、この定め方は、甲斐駒や、白山の場合には適合するかも知れませぬが、然し繁華と云っても頗る漠然たる氣味があって戸數、人口等の取調をやって、比較して見ても、まだ明瞭を缺く虞がある、且又榮枯盛衰の運命は一朝にして變化することが無いとも云へない、御殿場と吉田とを比べて見て、どちらが繁華であるかの點で、表裏を定めるのは考ふものです。（第三）登山口から頂上までの距離の遠い方を表、近い方を裏とするのが、又た一つの定め方であります、玄關前が長くって、裏口の短いのは人間の住居にも見ることであるから、強ち無理な定め方でないかと思はれます、然し前の甲斐駒の如きは、自分が、まだ實地を踏まないから、斷言は出來ぬが、戸臺の方が近いか、どふかは疑問であります、要するに餘り面白い定め方でない。（第四）登路の難易を基にして、表裏を定めることも、一つの方法でありますが、餘程漠然たる許りでなく、道路の手入によって忽ち變化するから、この定め方は根據が少ない。（第五）山頂に神佛を祭祀した村、或に是等の神社、佛閣の向ってる方向を表、然らざるを裏とすることは一種の定め方と思はれます、然し神佛のない山は勿論のこと、山麓の諸村から多くの神佛を祭った場合には、譯が分らな

くなります。其外、表裏の定め方は色々ありませうが、以上の樣なものでは、現用のものと調和せぬ缺點もあり、可也漠然たる處もあって、自分は餘り同意出來ないのであります。それで自分はこの定め方を次のやうにしたいと思ふ、即ち登山口の海拔高距の低い方を表、高い方を裏とすること、是れ自分の定め方であります。

通常繁華な町村は先づ標高の低い方にある、又た低い處から登るのは概して高い處よりするよりも距離が長い、夫故前の（第二）（第三）は凡そこの内に包括されてゐる。又海拔の高い僻村から登ると、自然路の險惡なのが多いから（第四）も畧ぼ之と一致するに近いと思はれる。

甲斐駒、白山、富士の例は自分の、この定め方に適合します、登山口が多くある場合には、低い方をより多く表、高い方をより多く裏とする、富士について之を云ふと、御殿場は大宮よりも、より多く裏口、然し須走より、より多く表口なのであります。

然し茲に最も注意を要するのは、登山口の撰び方で有ます、夫には是非同じ階級の登山口を取って比較せねばならぬ、富士では大宮、御殿場、須走、吉田は先づ同じ階級の登山口として、よろしいが、槍ヶ岳となると一寸複雜となる、温泉一軒限りの上高地を、蒲田の村と同じ階級とすることは正當でないから、自分は蒲田に對しては一方に於て島々を以て、同じ階級の登山口と見做す必要があると思ふのです。

○雜　錄　傾斜面の見ゑ方

同じ場處から出發して、途中で路の分れる場合、例へば大出の村を出て、籠川の谷から、祖父ヶ岳に登るやうな時には、低い處で籠川から分れる白澤路の方をオホキ澤路よりも、より多く表路とするのであります。又た此定め方で、峠路の表裏を區別することが出來る、即ち碓氷峠について云へば、高い輕井澤から登るのが裏路、坂本から登るのが表路と云って、然る可きであります。

元來山の表裏と云ふことは、左程論ずる價値もないものでありますが、此自分の定め方は、大躰現今慣用のもと一致して、而も割合に曖昧でないと思ふのです、然し猶ほ詳しく取調べたら、色々不都合な點が生じて來ましやう、若し諸君に良い御考があったら是非高敎を願ひたいのであります。

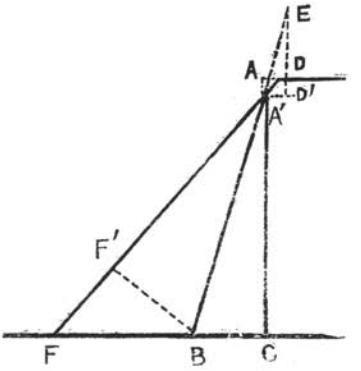
（辻　本）

傾斜面の見ゑ方

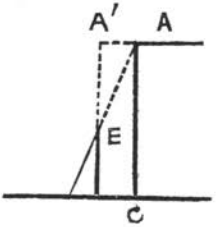
傾斜面の水平に對する角は Clinometer で測れば簡單に求める事が出來る、然し大躰の見當なら、少し馴れゝば目測で定めても大した差異はないものだ、然し目測となると感情が手傳うが爲か如何か知らぬが、初めの内は大分甚しく割增をして見える、その理由は心理學者にでもきいたら分って居る事なのかも知らぬが、別にその說明がしてあると云ふ事も聞かないので、彌次の本性を發輝して、一つ盲目判斷をやって見樣と思ふ次第なのである。

まづ崖の上端に立って見下した場合を考へて見るに、今

BCが水平でACが垂直だとする、人がもしAに立って見下せば直下にCを見うる筈である、然し崖の端は實際には多少丸みがついて居るので、Aに相當した點A′までは、行き得ぬ事が普通である、それで人が實際はDに立ったものとして、Eに目があると考へると、崖の端をかすめた視線はBを見る事となる、こゝでDに立って居ながら自分は崖の端に居ると思ふと、A′Bの傾斜面が垂直の樣に思へる事となるわけだ、もしかりにA′D′が二尺程で、D′Eの高さが六尺だとすればBの處の角は約七十三度を示す事となる、それが九十度と思へる事となると角度が二十度ばかりも割增をされて見える事となりはしまいか、これが上から見たときに、傾斜が強く見える一つの說明にならうかと思う、而して端から退く事が多いだけ割增は甚だしくなるわけになるが、あまり多ければ退たと云ふ事に、氣が付くから、左樣無暗に割增をされるには到らないのだと考へる事も出來やう、然しこにあげた例よりは尙多く割增をされる事は往々あるやうだ。それでこれでA′Fと云ふやうな傾斜のEの角はBからA′Fに下した垂線のBの處のA′BF′角位に見られる事となると考へて差支へはなからうと思ふ。



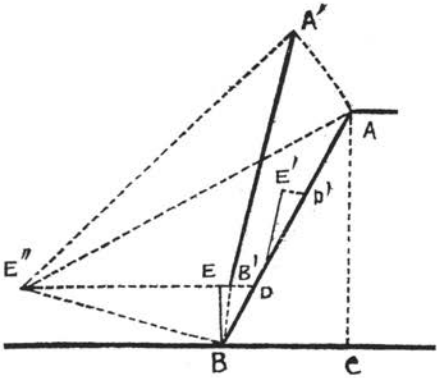
次には下から見上げた場合だ、今前の樣にACを垂直な崖と考へて、Eに人の目があるとする、Eの直上はA′でなければならないのだが、人が仰く場合には正しく直上が眞上に見えるまでは、首を後にはまはさぬ場合が多い（座敷に座って天井の節孔をながめて見てもその事は大抵分るだらうと思ふ）それで直上を指すと思って居る視線が實はEAの樣になることゝなるのだと考へると、AEの樣な傾斜面が垂直に見えることゝなるので、他もそれに準じて割ましをされるのであらうと考へられる、處でこの增される度はどの位かと云ふに、上から見た時と似たものと考へて大差がないやうである

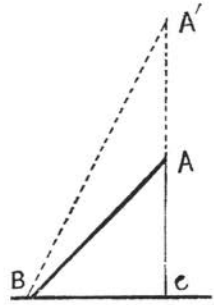


（左樣でないと云ふ人は試みに夜北極星を仰いで見給へ、實際は三十六度位の高さにある筈であるのに五十度以上に思へることがありはしないか、勿論これは他にも理由があるのかも知れないが、それで大躰の見當を考へうる筈だ）、次には大抵の人は高さを見損じる事だ、富士山の高さは一里に大分缺けて居る、安房の鋸山は三町には大分足りない、然し如何してもそんなに低からうとは思へまい（構型圖を作るときには山の高さは比例尺を半分にして即實際の倍の高さの割合に作るのだが、それを見て山が低過ると云ふ人の方が多いと云ふことだ）この高さを實際の倍以上にも見

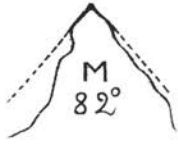
ると云ふ事が傾斜を甚割增すると云ふ結果に大に役に立つのだ、即實際はABである傾斜面がA′Bである如くになってBの角にAB′A′だけ增す事となると云た次第になるのであらうと思へる。

尙一言を加へたいのは下から見る場合に、崖のすぐ下から見るのと離れて見るのとの相違である、直下から見る場合には、全躰が見えないでEDの距離が直接に目に入るので、割增され方はあまりはげしくない事が多からうと思ふ（實際にこゝを登って居るに際しては躰が崖の方へ傾いて居るのでそれを忘れてE′D′をEDに等しいと見る爲に隨分多く割增をする事が往々あらう）然し少しはなれて例へばE″から見るとする、このときにはE′Bは實際は斜めなのだが一寸水平の樣に思へる、左樣するとBがB′にまはった角だけAも相當してA′にまはって見える樣に考へられやう、左すればABなる傾きがA′B′の如くになって見えるのではあるまいか、著しく離れてはこの影響は殆あるまいが、相當の離れでは隨分きいて來る樣に思へる、これは實際、崖の下に立ってどの邊で見ると傾斜が最激しい樣に感じるかを見れば分る樣に思ふ。





さて次には傾斜面を横から見た場合である、この時に割增をされる理由はどうも分らぬが、高さの思ひ違へが原因して居るのではあるまいか、前に下から見た場合にその事を云た處の圖を見れば大抵合點が出來るだらうと思ふ、下の二つ角は山岳の第二年第三號から槍岳（Y）とマテルホルン（M）との頭の處を一寸引うつしにして取出したもので、その角度を見たら思ひ半に過ぐる物がありはすまいか、とに角大抵の人は横から見た時にも、甚だしく割增をして居るのであらうと思へる。



尙終に一寸附加したい事は、Clinometerを使ふ際にはそれで測る角は、傾斜面が水平となす角であると云ふ事に多大の注意を拂ふ要があると云ふ事である、これを思ひ違へて垂直となす角などを測ると餘角であるから、三十度の處が六十度になってしまう、器械を用ひたときにはこんな點に極めてよく注意しないと、飛でもない誤を生じて、惡結果を來す事が往々であると云ふ事は大に考へられたい。

倘これに似た事で述べたい事が大分あるが、いづれまた題をあらためての事としてこの分は茲に留める、例に依て諸君の御指導をまつ事甚切だと云ふ事を最後に御願として加へておきます。

（梅澤親光）

山岳の稱呼に就て

何でもないことのやうであるが、何々山と云ふ如き、山岳名稱の山の字を音讀にするときと、訓に讀場合とあるから、各其山岳地方の人々が稱呼する通りに、サン、ザン、セン、ゼン、ヤマと云ふ風に振り假名をしたらよからうと思ふ。これを間違へて、地方の人に山の事を尋ねても、多少耳遠い樣に響くし、漢字では音でも訓でも變はりがないが、假名やローマ字にするときは困るであらう。山岳雜誌裏面の英文コンテンツにも羽後の森吉山をば、モリヨシヤマとしてあれど、地方の人はモリヨシサン（又はザン）と言ってヤマとは呼ばない。

頂上に神社か何かあると、敬愛の意味も含めて大抵はサンと稱する樣であるが、一概にさうも言はれないであらう。

（山本巔坊）

富士山名稱語源

神州の第一峰、富士とは如何なる意味か、誠に聞かまほしきことならずや、否な知らざるべからず。

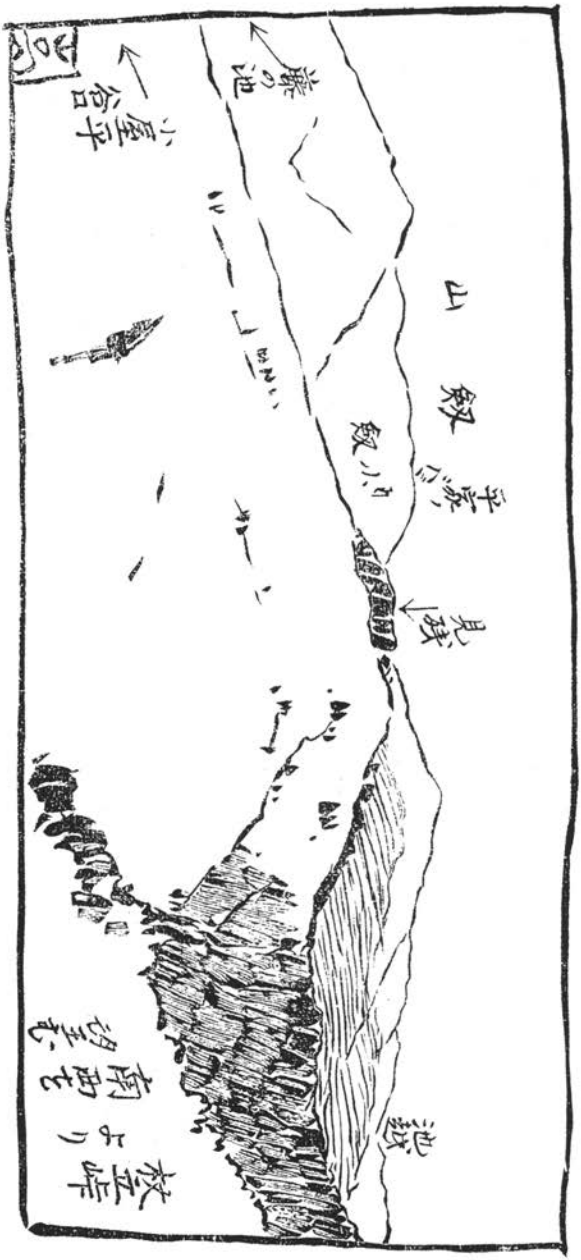
坪井正五郎、志賀重昂、久保天隨の博士學士を始めさてはアイヌ」語に精通せりと云ふバチェラー氏、同く口を揃へてふは火の義なり、富士は火山なり、是れ其名に依て出づる處なりと、驚くべき杜撰の說と云ふべし、自已の產聲を揚げし母國第一の名山且自已脚下の領內「アイヌ」語にかくも迂濶極まるとは實に驚かざるを得ず、況んや人類學や地學を以て自ら任ずる學者に於ておやだ、富士（ふじ）とは最も明了なる「アイヌ」語なり、土人は雪白被髮の老婆を稱して「ふち」と云ふ、去れど注意すべきは「ふち」とは直系尊屬親の祖母と云ふことにあらず、「オ婆サン」と云ふ意味にして、大に愛敬の意を含むと知れ、今一例を擧げんに、土人の例によれば火神を「アベカムイ」と云ふ、べきなれどシカ稱せずして「アベフチ」と云ふ、「火のオバーサン」となり、是れ嚴寒の地、「アベフチ」の恩惠夫れ幾何ぞ、多大の愛敬を表せざるを得んや。

八面玲瓏玉芙蓉、東海の天千古の雪を頂ける其容姿、何人か愛敬の意を表せざらんや、彼等の慈母戴雪被髮の「フチ」と何ぞ彼此の總てが相似たる、於此乎彼等は遂に此名山を呼んで「フチ」と云ふに至ること一點の疑ふべき餘地なしとす。

（山縣玉堂）

劍山の一研究

▲概略の案內　劍山に祀れる神佛につきては、諸書により多少異りと雖も、最も有力なる傳說は、安德天皇の御劍を、山頂寶藏石の下に埋め、之を御神躰となすといふ



にあり、劍山西麓見殘圓福寺寺傳に曰く「壽永年中、平家讃州八島沒落之時、檀の浦にて入水有りしと披露し越前守國盛朝臣安德帝を我子と僞り、阿波國祖谷山に供奉し、皇居御座す折柄、不幸にして崩御あらせられし時御遺勅に、朕が帶せし劍は清淨の高山に納め、守護すべしとの給ひしにより、御劍を當山に納め、劍山大權現と勸請まします」云々と、劍山の寺社は、西北麓の見殘、及び東北麓の藤の池の二派に別れ、各々寺社の堂宇あり、見殘より登れば頗る峻嶮なる坂路（山の稜）三十町にして狛犬あり、こゝより左の支路を行けば、小劍に至る、更に行くこと二十町にして、大石灰岩の聳えたる大劍に着し、猶七八町にして、頂上平家の馬場の草原に着す、其西端に三角點あり、此邊を御花畑と稱すれども、格別の草花を見ず、藤の池より登るには急坂十町餘にして、一小平地ありて鏡石を祀る、ここにて路二つに別れ、右は往路にして、左は頂上より山稜を下りて、こゝに來る歸路なり、これより山腹の路を西に

進む事約一里半、小劍の大巖下に達す、更に登る事十町餘にして頂上に着す、邑里より劍山に至るには、貞光川道、及び穴吹川道を最もよしとす、前者は貞光より川を溯ること七里にして、河内に至り、更に二里の嶮路を以て池越に登り、半里を下りて見殘に至る、後者は穴吹より五里にして古宮に着し、それより穴吹川の支流を溯ること一里、平谷に至り、杖立峠の上下一里半にして、再ひ穴吹川上流の沿岸なる小屋平村谷口に出づ、龍光寺はこゝより五六町下流にあり、猶溯ること二里餘にして、劍山山麓垢離取川の行場あり、これより十八町の坂を登り、藤の池に達す、其の他名西郡上山より來るものは、小屋平にて穴吹川道と會し、那賀、海部兩郡及び、土佐東部より來るものは、那賀川上流の岩倉より熊徑三里、劍山山脈を越えて藤の池に達す、祖谷より來るものは菅生より無壷山に登り、池越にて貞光川道と合す、又菅生よりナゴロ谷を溯りて、見殘へ、或は阿土國境の山頂をつたひて、劍山頂上に至ること能はざるに非ず。

毎年舊六月十二日より十七日迄を大祭日とす、登山者一千人以上あり。

▲位置及び構造　四國山系は幾多の相並行して署東西に走れる山脈によりて成り、其中軸をなすものは眉山より、西佐田の岬に至る、結晶片岩質の山脈にして、これを石槌山脈と稱す、この南側に沿ひて、小松島中津峰より起り、西宇和島灣の北端に至るは、古生層の山脈にして、阿波國の部に於て、最も高く南海第一の劍山を戴くを以て劍山々脈と名く、劍山は劍山々脈中より牛脊の如く秀でたる部分にして、頂は東西約十町餘の間高低の大差なし、構造する岩石は、秩父古生層中部に屬し、其地層は大抵七十度ばかりの角度にて南へ傾斜し、劍山北面の下部は硅岩石英岩粘板岩の互層にして、中腹部以上には晶質の石灰岩大露出をなし、頂部は概ね硅岩にて成る、これによりて推論せば、其頂上部の比較的まさかなるは、これ堅硬にして層理不完全なる硅岩が漸次風化したるに起因すべく、其北面の中腹部以上に於て、硅岩及び大石灰岩が多く露出せるは即ち地層の南に急斜せるが爲にて、大劍小劍以下の諸祠、皆これ等の露出岩の北麓、或は石灰洞に祀れるものに外ならず、殊に大小劍祠の大石灰岩の如き、實に二十間以上の高を有し岩頭蠱々として劍を列べたるが如く、灰白色の岩面には、綠藍の色麗はしき矮生植物點生し、最も壯麗を極む。

▲標高　標高を知る事は、實際上大に必要なるのみならず、又興味深き事なり、然るに劍山の標高につきては從來の地誌案内記等、謬說多く、例へば石槌山を以て四國第一の高山とするが如きもの多し、されど吾人の最も信頼するに足るは、二十九年農商務省發行の、阿波國土性地圖にして、これによれば、二千二百四十二米突と測られあり、されば近畿以西の南日本に於て、他の最高峰よりも、尙ほ高峻なる事、約二百五十米突なり、而して目下有力なる「日本山岳誌」「大日本地誌」卷七「日本歷史地理提要」「日

本地理集成」等の書は、皆これに從へり、さて又新刊の日和佐圖幅地質說明書によれば、劍山の標高を二千〇七十三米突と記しあり、これを比較するに、兩者の差實に百六十九米突の多きに至る、今や吾人は此の二者の平均數（二千百五十七米突）を用ゆるを以て、正鵠に近しとすべきか。

▲溪谷　劍山より源を發する溪流三あり、其北側の水をあつめて、北東に向ふものは穴吹川なり、西北麓より西に流るゝものは祖谷川の上流ナゴロ谷なり、南麓に源をひらき、東に赴くものは、那賀川上流槍戸川なり、此等溪流の水源即ち劍山の山腹に屬する小谷は、比較的傾斜弱く山腹を削摩せること甚だ少し、余の見を以てすれば、これが主因としては地質時代より、森林發達して谷水に大膨脹を與へざりしによるならん、又谷水は小暗き森林の下に急落するを以て、悉く乳白色を呈し、岩塊は苔に覆はれて、色黑く、最も幽邃の趣に富む、殊に粘板岩の所に於ては、小瀑布を作る事多し、而して此溪邊こそ、草本植物の最も發育せる所なり、其山麓を流るゝ各溪の上流は、水量比較的多きも、結晶片岩地に於けるが如き、斷崖深淵全くなしと云ふも可なり、從って溪中は岩石磊々とし、流水は其間をくぐり、迸りて流下す、大森林はこの溪流を覆ひて、恰もトンネルの狀をなす、秋氣紅葉の節は、一大美觀なるを信ず、又春期は愛すべきシャクナゲの花を、處々に見るを得べし。

▲氣象と植物　劍山は、南海の地に於て、他の最高峰よりも約二百五十米突だけ天に近づくを得べきものなれば、南日本の高山氣象及び植物の研究には屈竟の所と云はざるべからず、殊に植物帶に於ても、僅に灌木帶に達せんとするのみにして、日本中央部の大高山に比すべくもあらねど、地暖國にして且雨量多き所、加ふるに始原的大森林を以て、滿山を覆ふものなれば、其植物の種類の多かるべきは余の期したりし所なるが、果然一千一百種以上にして本邦に冠りたりとの說をきゝ、心中快然たるものなき能はず。氣象につきては、吾人充分なる智識を得る能はずと雖も、大躰は植物の狀態によりて、推測するに難からず、雪は十一月末より、五月に至る間は、頂上の草原地に屯し、六七月と雖も降雪を見る事あり、頂上の樹木を通觀するに其枝葉は皆北東に延び居るを以て、南西の風力强きを知るべし、且つ南方は太平洋を控へ、本邦中雨量甚だ多き地方なれば、夏期は殊に雲霧多く、山頂の快晴を見ること稀なり全山を覆ふ大森林は、小劍附近、即ち山腹の六七合以下は、濶葉樹喬木、綠麗はしく茂り、其より上部は針葉樹喬木藍濃く密生し、此境界最も歷然たり、山頂は樹木少く、殊に西端平家の馬場の如きは、小草小笹の僅に地を覆ふに過ず、全山中風趣に富むは、頂上平家の馬場附近にして、美はしき草原の一木一石、皆姿態たゞならず、又姫小松、五葉の松の、老木屈曲偃蹇たる、白珊瑚樹の如き、枯木など總じて盆景的の趣ありと雖も、到底下界のものに非ず、況や其絕大なる眺望あるに於てをや。

▲眺望と遠望　劍山々頂の眺矚たる、勿論壯大なりと雖も、四近に高峰多く、南海第一の高所にあるの感を與ふるに充分ならざるは、吾人の憾とする所なり、從って平原よりこれを仰望するを得る所は、勝浦郡小松島附近板野郡美馬郡貞光及び穴吹の對岸地等に過ぎずと雖も、やゝ高地に登る時は、これを認め得る事多し、余は又劍山の吾人に與ふるインプレッションを研究せしが、山形變化少なければ、大樣悠然として、殊に其山色深きを以て、壯重神秘の感あり、頂上に雪を屯する時は、大森林の濃藍と相對照して、最も崇高なり。

（笠井藍水）

甲斐駒ヶ岳の小舍

甲斐駒ヶ嶽屏風岩下の小舍は、本誌第三年第三號に、河田氏の記載ある通り、不意に燒失して、同山登攀者には、少なからぬ不安と、苦痛とを與へたりしが、本年同山に登られたる會員榎谷徹藏氏よりの通信によれば、同小舍は、ともかくも再建せられたるが如し、例令舊觀に復する能はざるにもせよ、爾後の登山者は、之によりて多大なる便利を得べきを疑はず。

通信文左の如し。

（さんわう）

同山中の屏風岩小屋は、先年燒失以來、附近の狹き岩罅を、假りの宿所とする登客、稀に有りし由に候へ共、斯くては不便一方ならずと、今夏某講社の發起にて、之が再建に着手し、現今地ならしを了りて、その一隅に狹き假の堀立小屋を築造致し候、いづれ來年の夏迄には、舊來通りのものを作り上ぐる豫定の由に候へ共、八月二十日過より、臺ヶ原の山田伊三郎と申す者、蒲團や、米や、味噌や、酒や、其他色々の食品敷物等を背負ひ上げて、この假小屋に起臥致居候間、今後の登山客は、爲めに非常なる便益を得ることゝ存ぜられ候、しかも伊三郎は毎日晝間、賽路を往復して、悠々と熊笹や灌木の、邪魔になる枝なども拂ひ居候へば、登路は一入安樂となる譯に候、序に申上度は、臺ヶ原の人夫賃金の低廉なる事に候、小生が雇ひし山岸喜作と申す農夫兼獵師は、一日一圓（辨當草鞋等一切を含む）の割に候ひき、これを他の諸山岳の人夫賃に比するに、その廉きこと恐らく第一流かと存じ候に付、併せて御報告申上候、喜作は私に向ひて來年の夏迄には必ず駒の頂上より、廣河原迄、越さんと言ふ客を案内し得る丈けの、資格を付けて置きたきものと、熱心に申居候間、其節は、この愛すべく健かなる男を連れて、該方面を詳細に討査せらるゝ會員の方方も、嘸多からむと想察致居候。

淺間の裏山

岩佐定一

淺間山に登るには、多くの人は普通道を輕井澤或は小諸等、信州の方に取る樣であるが、茲に一つ上州からの裏山道がある、即吾妻郡鹿澤（カザワ）温泉より登る道がそれである。

私は五月雨のしょぼ降る中を、草津から白根を萬座（マンザ）温泉

に越えて、其所に一泊して、其翌日鹿澤温泉（一に「山の湯」なる名がある）に着いて、茲からも淺間に登れると云ふ話を聞いて、天晴れたを幸ひ、案内を雇って登る事とした、然るに五月雨の空の定めなく、宿を出る時明かに噴煙を見たのが、其中雲となり、霧となり、雨となって、今一里と云迄こぎつけたを中止して「押し出し」の大熔岩流の、奇奇怪々なるを見て歸った。

私は後の、此裏山を登る人のために、一寸案内をして見ようと思ふ。

先づ鹿澤温泉に達するのであるが、汽車で行くとすれば、小諸から五里で、内二里人力車、田中から四里地藏峠を越える、内一里人力車、上田から五里半、内三里馬車、そして殘りは何れの道も馬が通ふ、前記萬座からは八里ある。

宿は三四あるが、私は紅葉館小林龜藏を御勸めする、茲の主人及其子息は、共に高山植物に趣味が深く、小規模ながら高山植物園の設もあって、近所の山々の高山植物の腊葉も大分集って居る樣だ、近來寫眞器械携帶者の便利の爲めに暗室建藏中である、そして此處から子息其重氏は、報知新聞記者高田氏（裏山最初の發表者）と共に裏山を登った人で、中々面白い人である。案内者も茲に賴めば都合がいと思ふ、私は一圓の約束をしたが、之は少し高いと思ふ、それで登山路だが、其路は湯尻河を田代の方へ半里許り下って、角掛山と、村上山の間を經て、田代牧場に出て、姥ケ原、廣河原等の裾野の草原を、西へ西へと二里許り辿った所で、三ッ尾山（三ッ尾根）をさして、道も何にもない草原を登る、そして猶石楠木、樅の木繁る尾根を、只々登るので、可なり急峻であると云ふ、そして遂に三ッ尾山に達して、白禿湯平を經て、小諸道の八合目に合し、遂に噴火口に合するのである、何しろ道と云ふは全くなく、只山を目標として登るので、天氣の日を選ぶ要がある、高田氏が書いた「淺間山裏山登」によれば、此道は景色の壯大なる事と、高山植物の豐富なる事に於て、他の諸道に勝って居ると云ふ。鹿澤温泉から噴火口迄、四里半である。

猶此外大笹から押し出しのあたりを登る道もあると云ふ事である。

押し出し迄は、湯から四里はあらう、一里四方ばかりの奇岩怪石が、波の樣に立って居る樣は、何とも云へぬ、私は其中に入って見たが、其岩の間には、いはかゞみ、石楠木等、澤山の高山植物がすがって居た。

序に云って置くが、「山の湯」は海拔四六四〇呎、附近既に高山植物の領域であって、四邊に聳ゆる山々は大棧敷山（一八〇〇米）小棧敷山、籠塔山（二一九六米）湯丸（凡六三〇〇尺、りんね草に富む）三根尾山（二四二四米）烏帽子山（凡七二〇〇尺）小在池山、角掛山（七二九米）等であって共に數時間乃至半日を以て、上下する事が出來る、四阿山も五里位のものであらう。

猶淺間山に登るに、先づ籠塔山に登って、夫れから峰傳ひに、上州信州の界を行く事も出來るさうだ、勿論道はない

事と思って頂きたい。

（岩佐定一）

早池峯及白馬岳植物採集案內

本年は、陸中早池峰に、第三回の登山を試み、亦信州白馬山に初採集を試み候、早池峰は、門馬口より登山致候、仙臺發の一番列車にて、盛岡に到り、夫より人車にて三里餘の梁川といふ所につき、中村方に一泊し、翌日は歩して、山麓門馬につき申候、盛岡門馬間は十里餘ありて馬車を通じ申候、馬車は午前四時盛岡を發し、午前十一時頃門馬につき申候、動搖甚しく、迚も靜坐すること難し、途中は別に採集物なし、門馬につきしは午後二時にて直に山麓帶を採集す、やなぎらんの原は見事なり、門馬の宿は餘りよき方にあらず、副食品の準備を要し候、人夫にも乏しき模樣なり、翌日頂に登り神社に一泊、頂迄は採集品極めて少し、蘚苔地衣等は森林多き爲豐富なり、此日は西方と南方に降りて採集し、例の狸いぶしの目に遇ひ、翌日は大出口の方に、少しく降りて、サマニヨモギ、カトウハコベなど採り、亦門馬に降り申候　翌日午後二時馬車にて盛岡に歸りて一泊致候、此方面の紀行は、植物學雜誌に田中氏の詳記あれば之を畧し、小生は矢張嶽口の方採集に都合よき事を主張致候、大出口は最遠く、門馬口は登路は短けれど、麓までは遠く採集品に乏し、嶽口は石鳥谷驛より山麓嶽まで、八里弱にして尤も近し、登路は四里餘なれど採集品尤も多く只サマニヨモギ、なけれども、リシリシノブ多し、東京を午後五時五十分に發すれば翌日午前十時には石鳥谷驛に至るべく、直に人車にて大迫町（オホ゜ヅマ）に至り、夫れより歩して嶽に至るべし、夙朝登山せば午前中に頂に至るべく附近を採集し（大抵登路に得べし、ヒメツガザクラ、カトウハコベ等を西方雞頭山に至る道に少しく降りて得べし）午後二三時頃を發すれば。夕方嶽につくべし、翌日石鳥谷に至り汽車にて歸京すべし、若し充分を望まば山上に一泊し翌朝大出口に少しく下りヒメツガザクラ、サマニヨモギ、カトウハコベなど採集し、門馬口の方に二三の木本など採り（七月下旬、ヒメイハショウブ、マメザクラ、ウコンウツギ等尙花あり、嶽口には花既に謝す、）此日は大迫町まで歸り翌日歸京するなり。

白馬山には八月十四日登山森林帶に蘚苔を採り、白馬尻小屋に泊り、翌日頂上の小屋に一泊、翌十六日鑓裏に至り、杓子岳の側を下りて大雪溪に出で白馬尻に一泊、翌十七日四ッ屋に歸り申候、此山につきては本誌既に詳記あり、亦蛇足を添ふる必要無之候へ共、頂に泊るよりも白馬尻の方標本の整理に都合よし、葱平に泊り次日鑓裏に泊る、樣出來候はゞ尙更都合よからん、明年は葱平に小屋を作るとか、鑓裏にも一つはしく候、裏白キンバイは頂に至るまでに多數見出し候、タカネキンバウゲ、クモマキンバウゲは鑓裏に多く候、此二種は八月二十日前後がよからんかと存じ候、他山は雜草短く採集に困難なきも、白馬は草長く搜索に困難なり、

（飯柴永吉）

山岳界だより

神東生

▲ヒマラヤのレコード破り

我山岳會にも所謂絶頂派の勇士は、澤山御揃ろひだが、海外でも絶頂派の氣焔は、一番盛んで、又一番勇壯に見え、毎日自分の許に來る歐米の諸新聞雜誌にも、其の企ての一つや二つは必らず載ってる、中にも近來面白く思ったのは、七月十一日ミラン發の通信で、其れにはヒマラヤ連山探檢中のマブルジ公の手紙を載せて居るが、其手紙は六月一日同連山中のケー、ッー山の一峰、標高一萬八千五百呎の地點で認めたるもので、一行は當時實に海拔二萬五千呎、人趾未踏の最高峯に攀づる準備中であったさうな。

骨を刺す如き寒氣、肉を嚙む如き山風の間を行くなれど、何れも元氣旺盛にて、小數の寫眞班員を除くの外、一名の病者をも出さず、極めて多くの荷物を携へつゝ、緩々と氷れる大山塊に登り行く光景は、何んなであらう、公と三名の案内者は、三千呎も高き一大岩石山を目がけて、道を開穿しつゝ前進し、次の露營地として、其附近を選び、他の一行は最高峯の下海拔二千八百呎の地點にある、雪白き一峯に向って進んで居る、一行の準備は非常なもので、公はカラコラム山脈に登る前に、三百六十人の熱心な希望者の内から十人の最も强壯な苦力を拔躍し、最も難澁な仕事を司らしめた、其學術的研究用の機械類は、亦驚く可きもので極めて精巧なパノラマ寫眞器、其の他百三十枚の全紙大乾板、長さ五百ヤードに達する活動寫眞用のフィルム迄も用意したとのこと。

同探險隊の最近消息は、五月二十六日附のもので、其の時公は既にケー、ッー峯、即ちゴドウイン、ヲースチン峯の麓に達して居た、此の峯は標高二萬八千二百六十五呎で、地球上の最高地點二萬九千二呎に及ぶエベレスト峯を除いては、確かに世界一であらう、さて從來ヒマラヤに登攀した連中には、大分豪傑が居る、例のコンウエーはビオニー峯（二萬三千呎）の絶頂を極めた勇士、ドーグラス、フレンフィールドは同連山第三の高峯キンチンヂャンガ（標高二萬八千百五十六呎）に登り、ハンダー、ウオークマン博士は海拔二萬二千呎の、コオゴー、ラングマ峯を極めた、然し其れ以上の高層に達したものはない。

さてマブルジ公とは、如何なる人かと云ふと、伊國皇帝の從兄弟、アオスタ公の息子で、母から莫大の遺產を承け繼ぎ、伊太利海軍に入って大佐迄進んだが、早くより探檢に趣味を持ち、千八百九十七年に數回のアルプス探檢を試みた後、アラスカに赴き、海拔一萬八千呎のエリアス山の絶頂を極め、其れより一轉して北極探檢の途に上り、ナンセン博士よりも更らに北極に近づいた、千九百六年には闇黑阿弗利加に大々的山岳旅行を試み、有名なるルーエンゾリ山脈にそゝり立つ十六高嶺に登り、一萬六千八百十呎の峯角を踏破した勇士である。

公は去る三月チグロット侯等と共に、ヒマラヤ探檢の途に上り今尙ほ千萬岳の間に入り込んでるが、此の行是非とも世界の最高峯、エベレストの絕巔に嘯かんと揚言したと云ふが果して成功するか何うか、以上の記事によつて、公の風貌を想像すると、筋骨逞ましき荒くれ男と思ふかしらんが、全く反對、今三十六歲、男盛りのハイカラ貴公子で、嘗て亞米利加淑女のカザリン、エルキンス孃と相思の末、婚約迄進んだと云ふ噂であるが、多分エベレスト峯のレコード破りをしてから後、盛大な結婚式を擧げるのだらうとの話。

▲虛空を舞ふ一千尺

日本の高山では、登山者が落ちた話などは、餘り聞かない、登り方が巧みなのか、何うかそこ迄は好く判らぬが、歐洲アルプス等では屢々ある、此の間のゼネバ通信によると、瑞西の山岳家ウインケルン氏は去る六月十五日三名の友人と共にセント、ゴールを出發して、アッペンゼールの最高峰センチス（海拔八千二百十五呎）の絕頂に登り、首尾好く目的を達した迄は結構だったが、下山の途中過って千二百五十呎の斷崖から眞倒に落ちた、五躰微塵に粉碎さるゝと思ひの外、天祐？虛空を舞ひ下ったウ氏の躰は、運好くも溪流に近い灌木の上に落ちたので、少しの負傷だけで生命には別條なかった、其れは一行がワイスバッドに向ふ近路の途中で起ったので、驚ろいた友人共は、山上に夜を過して、翌朝崖下に氏を搜し出し、共に恙なく歸ったそうだ。

▲一分間に熔岩三十萬噸

アレキサンダー、ヒユーム、フォード氏が、サモア群島の大活火山を視察した記事が、ハーパースマガジンに出て居るが、同火山が、四年間の活動中、噴出した熔岩は記錄にない程澤山で、每分三十萬噸に達する、其れが爲め、噴火口壁から溢れて洋中に流れ入り、砂と混じて海岸十哩許の間に、新たに海岸線を造った、熔岩の海中に注ぎ込む時は、中空高く鹽水逆卷き、鹽水の雨と降って植物を害し、寺院の亞鉛屋根を腐らせ、驚く可き被害を與へた、珍らしい火山もあるもの。

四方山話

私が或る執務先で、忙がしくペンを走らせてゐるとき、小童（ボーイ）が一葉のハガキを、默（だま）って机の上へ置いて往った取り上げて見ると、知らない人からの便りだ、S君と言って置く、肩書には、岐阜縣郡上郡八幡町とある、「私はあなたの本を讀んでから、山が好きになったおかげで槍ヶ岳、乘鞍岳、御岳、硫黃岳、惠郡山へ登山しました、ことしは白山へも登りました、實に登山ほど愉快なものはありませぬ、あなたの本で、云々のものは持ってゐる、外に云々といふ本があるさうですが、何處の何堂から出版になりました、私の町には本屋がありませぬから、どうか敎へて下さい」ザッと、かういふ意味だ、私は實は美濃の八幡町を知らない、併し郡上郡といふのは、飛驒に境を接して、山で取り圍まれたところ

だと聞いてゐる、私は美濃から飛驒川に沿いて、中山七里の路を、飛驒の國へと入ったことがあったから、かういった土地は、大概あやふやながらも想像がつく從來かういった意味の手紙を受け取ったことは、一度や二度では無かった、信州松本のY君は、松本に生れて、十七年も日本アルプス偉觀にあくがれて居られた、さうして私の自然論からラスキン先生を憶ひ起して、自分はどうかして山岳畫家として立ちたいといふ希望を有つに至ったといふ旨を、私まで言ひ寄せられた、私はそれ等のことが、幾分か私の著作に關係してゐるといふ點からして、どうやら吹聽がましく聞き取られる疚ましさを忍んで書くのも、私にはかういふことが、嚴肅な自然對人生の問題になってゐるからだ、八幡町といひ、松本市といひ、土地に廣狹文野の差別はあるであらうが、等しく山岳で圍まれてゐる人間の群落地である、今までの人々―おそらく先祖代々から、父母時代に至るまで、荒々しく、怖ろしい醜惟の形容をしてゐる高い山、雪や氷や大風を吹きおろす魔もの位にしか、見られなかったものが、自分の生命を、そこに透して見るかのやうに感せらるゝに至った動機は、何であらう、指先の火傷のやうに何年何月何日何時何分から、こんな烙印が自分の心に出來たと、誰もまあ明言が出來るほどの意識はなからうが、自分の中の、眞の自分といふものが、山といふ自然に、引き出されて、眼の前に据ゑられたのを、この人々は見られたのであらう、さうして興奮し、嗟嘆し、憧憬せられたのであらう、おそらくこの人々のみならず殆んど有らゆる愛山者に向って「山のどこがよいのか」と問うたなら、誰しも一寸答へに躊躇するであらう、さうして暫くして、そこに種々雜多な答案が並べられたにしても、それは愛する人の眼が美くしいとか、鼻が愛嬌があるとかいふ理窟と同じで相應に自分の愛を後から幾分か「道理づけ」したといふまでに止まって、實はそれが愛の起因でも焦點でもない、愛は愛なるが故に愛なりといふより、外に致し方がない、強ひて言へば、自分の可感性が山といふ可導體を待って初めて、熾烈に燃えたといふだけのことだ、何故億萬の自然から、特に山を選んだかといふことは、梅川に向って、何故お前は忠兵衛を選んだか、フランチェスカに何故パウロ故に身を果したかと詰るのと同じであらう、近松がお夏清十郎を謠ひ、沙翁がロメヲ、ジュリエットを描いた心は、やがて文晁が名山圖會を作製し、セガンチニイがアルプスの雪山を描寫した心に、變りがあらうとも思はれない、林和靖の梅、周茂叔の蓮も、億萬の自然から、最も自分に適した一ッを選んだといふまでゞある、右も左も寂寞な山を、始終默んまりで睨み合ってゐる中に、山が戀しく慕はしくなる人と、山が厭で邪魔で堪まらなくなる人と、山なぞ有っても無くても、自分の知ったことぢやアないといふ冷淡な人と、この三種の中から、第一種の人が、山岳會に集まって、來たのだとすると、私は「生」の追分に石の一片を拾って「右山みち」と彫み入れてゐるところなのだと、自分で

氣がついてハッとした、そうしてS君が、無聊で、退屈で、堪まらない、時候おくれで、もう山へも登れないが、せめて山のことが書いてある本が見たいが、その名も知らない、知っても買ふ本屋もないといふところから、見ず知らずの私へ、白山の繪ハガキに、走り書きして寄せられた心が、歴然と私にも通じる、私は自分のことのやうに微笑んで、執務のペンを措き、返書用のハガキを齋らし來るべく小童を呼んだ▲「鳴く蟲の研究」「蟬の研究」を著はした西村醉夢君が、某の日、私を訪ねて來られた、岩倉家の若殿と、燈岳や槍ヶ岳に登って、本年の夏「東京朝日」に、槍ヶ岳紀行を書かれたのは、君であるそうな「この前に富士へ登ったが、つまらないものだと思った、今度といふ今度、槍ヶ岳へ登って始めて山の威嚴といふものがしんみりと味へた、さうして君が山が好きになったのも尤もだと思った」と、いかにも私たちの事業に同情して言はれた、世間では、一寸した通りがかりの挨拶に、烟草の烟を鼻先にフーッとふかしながら「ことしも山ですか、どちらへ、赤ー石へ、ヘェー、嘸ぞおもしろいこってせうな、山の宿屋では、ドンな物を喰はせます、宿屋がない、ホーッ、私も成田山へ參詣したことがありますが、山ッてものは、見晴らしがようございますな、あなた富士山へお登りかな、ヘェー、それぢやあ、もう外の山なんざあ、どこへ登らうが、造作はありますまい」などと、親切に調子を合せて下さるのもある、火星と金星との距離は、何十百萬里か知らないが、私たちと、この親切なる交際家との距離の、甚だしいのには猶及ばない、私は醉夢君から、同感の言葉を聽いたときに、蟋蟀の髯に眞底から興味を持つほどの人なら、ヤハリ遠い遠い白い空線にも趣味を持ち得る人だと思った。▲山岳會有志晩餐會第三回は、會報にも見えてゐる通り、富士見軒に開會された、當夜は田中子爵も臨席せられ、日本の湖沼に就いて、耳新らしい話をせられた、子爵によると、日本の湖水中で、百米突以上の深さを有してゐるのが八つあるさうだ、第一は秋田の田澤湖で、最深度三百九十七米突（約一千三百尺）で、初め土地の測量家から、其報告があったとき、餘り深過ぎるので信用されず、再調査を請求せられたほどであったが、本年、子爵自測の結果、それが事實であった、この田澤湖の所在地は、海拔二百八十米突であるから、秋田から海に向って百十七米突は、海面以下に沈んでゐる勘定になる、尙ほ精密に測量すれば、或は四百米突の深度を發見するかも知れない、フォーレル教授に依ると、深い湖水は緣の方は淺く、湖棚といふのがあって、それから急に陷沒して、深くなるとあるが、この田澤湖ばかりは、これほど深いのにも係はらず、湖棚がなく、岸から直ぐ俄に百米突も深くなってゐる水の色は第一號色の純粹透明な色で、水面から三十五米突（百十六尺）迄は、見透かされるほどであるさうだ、第二は十和田湖で、この陷沒地の一部分、火孔の中は三百二十七米突（約一千八十尺）の最深を有してゐる、第三は北海道の支笏湖で、小藤博士の測量に

よると、三百二十七米突、即ち第二の十和田湖と同深度であるが、十和田湖の精密な測量をしたのとは違って支笏湖は僅に三四回箇處の測量をしたのに過ぎないから、百回二百回と測量してみたら、最っと深いところを發見するかも知れない、故に支笏湖を第二として、十和田湖を第三と順序を變へた方が宜からうといふことだ、第四は九州開聞岳下の、池田湖で、これが二百二十七米突（約七百五十尺）第五が北海道の洞爺湖で百九十二米突（約六百三十四尺）第六が中禪寺湖で百七十二米突（約五百六十八尺）第七が甲斐の富士山下の、本栖湖で百二十五米突（約四百十三尺）第八が岩代の猪苗代湖で、百〇二米突（約三百三十七尺）といふ順で、先づ今までに測量された中では、北海道低地帶の西から、本州九州を引っ括めて、深度百米突以上の湖水は、この八湖であるとのことで、殊に第一の田澤湖に就いては湖水の棲魚や、住民の湖水に關する傳說等の話があって子爵は別に數葉の寫眞を示された、山岳會員の多くが、絕頂派であるのに反して、同じ會員の一人なる子爵には絕底派といふ稱號を奉ったら、どうか知らむなどいふ笑話が初まって大分賑った、有志晩餐會は、單に晩餐をしたゝめるといふだけでなく、諸家の興味ある談話や、寫眞などを見聞することが出來るし、少しも窮屈な制約が無いのだから、會員諸君の參會を望ましく思ふ。▲山岳のやうな尨大な物躰は、いろ〳〵な方面から、研究されるだけの餘地がある、それだから趣味でなければならない、寫眞器械でなければならない、繪筆でなければならないといふやうな、窮屈な制限は、無論ある筈はない、併しながらもし登山が單に觀美のためであるとしたならば（さうして私の信ずるところでは、これが今の登山者の、大部分を占めてゐやしまひかと思ふ）空氣や、光線や、高距や、雲霧の出沒や、山の斷續やの關係から來る山景の變化といふことは、一刻も忽せに出來ない、山岳が、鍋や皿などの靜物と違ふところは、物質や形態以外には、何よりも先づこの變化と活動とにあると思ふ、さういった方面は、鋭い觀察眼を持たうとするには、私は繪畫―風景畫で、眼の練習をやったらどうであらうと考へる、自分で描ければ猶いゝけれど、才は必竟賜物の問題で、儘にならぬことだから、暫く措くとして、觀る眼だけは、比較的容易に、平生の修練で養ひ得られることゝ思ふ、文學の方面でも秀れた叙景文を描き得る人は、多少とも繪畫の心得があったやうだ、ラスキンの畫は、專門家に迫るといふし、ツルゲチッフも可なり立派に描いたさうだし、日本の現代では、夏目漱石君も、德富蘆花君も、一寸した水彩畫ぐらゐは、やるさうだ、登山するほどの人々は、せめて山の輪廓ぐらゐ、スケッチが出來て欲しいが、手よりも眼の方が先にいって光線や色彩に透徹するやうになれば猶審美享樂の上に快いことゝ思ふ、かういった眼の習練に有益な美術雜誌として、私は躊躇なく、大下藤次郎氏主幹の水彩畫研究「みづゑ」を擧げたい、同誌は、時々一山岳に、全紙を擧って費やしてゐる、赤城山

飛驒山岳、最近は上河内の穂高山など、それである、但し初心を對手にするといふところから、專門の美術家には程度が低過ぎるといふ難はあるかも知れないが、それだけ一般の人々には、却って有益であらうと思ふ、何にしろ山岳は好きだが、山岳風景畫には、一向趣味を持たないといふ人々はど……もしその人が單に觀美上から山岳が好きであるといふのならば私には辻褄が合はないやうに感ぜられることは少ない▲山岳を繪畫の方面で紹介する人が、これからは知らず今までは殆んど無かったやうであるが、寫眞では大分ある、志村烏嶺氏、河野齡藏氏、高野鷹藏氏、三枝威之介氏、石崎光瑤氏などは誰でもこの方面で算へねばならぬ人人であらう、今度志村氏の「山岳美觀」が出版せられた、一秩各六葉で、既刊が二秩、邦文英文の說明書がついてゐる、コロタイプ印刷も、立派な出來である、からいふ結構な出版物は、山岳趣味普及のためにも、どうか幾冊も續かせたいものである、同じ志村氏の『高山植物採集及培養法』が出た、總說、高山植物培養法、高山植物採集保存法、日本高山植物產地及植物目錄の四章を、又數十節に分けて、記述してゐる、本篇の主眼が、第二章、第三章にあることは、言ふまでもない、斯道に素人の私は讀んで、多大なる利益を得た、併しその他は、何となく粗枝大葉的で、物足りない感がないでもない、讀んで行く中に『從來先進學者の研究せし山々は、第二流の諸山にして、高山植物の寶庫たる日本アルプス地方は、特に吾人の爲めに、殘されるかの感あり、其賜の厚き、實に感謝せざる可らず』といふ一句があった、自他を激勵するだけの言葉であるかも知れぬがおそろしくイゴイズムに聞えた、さうしてこの不用意(おそらく)のレッテウロ一句に、負け嫌ひの登山者氣質がよくあらはれてゐると思った、褒貶の意味なしに、ドーデエのアルプス膝栗毛流の筆で、かういふところを狙って書いたら、面白い滑稽が出來るであらうと思った▲本誌前號の「裾野なる名稱に就て」の揃文は、不詮索の個所や、誤謬があるから訂正旁々、追加をして置く、先づ裾野の語を、新後選に始まったやうに書いたが、それより前に出た千載集(壽永二年二日後白河院の宣旨を奉じ、四年を經て、文治三年九月藤原俊成選、新後選はそれより後(のち)後二條院の嘉元二年に成る)秋の部に、「春雨のふりそめしより片岡の裾野の原ぞ淺綠なる」(藤原基俊)「秋山の麓をこむるうす霧はすそのゝ萩のまがきなりけり」(藤原伊家)「夏衣すそ野の原をわけゆけばをりたがへたる萩の花摺」(顯昭法師)「山めぐる雲の下にやなりぬらん裾野の原に時雨すぐなり」(從三位攝政)の四首がある、この中第一のは、富士の裾野ではない、第二から第四までは、富士の裾野としても、また外の裾野(必ずしも火山の裾野と限らなく)としても、孰れにも意味が通ってゐる、千載集よりも更に一層古いのは金葉集(崇德天皇の大治二年に源俊賴選す)に「なつ衣すそ野の草を吹く風に思ひもわへず鹿やなくらん」(修理太夫顯季)とあるのがそれで、これがおそらく、裾野の語の、初めてのも

のであらう、それからあの文には更科日記の作者菅原孝標女と、阿佛とを同一人にしてしまってあるが、阿佛は十六夜日記の作者で、別人であることは、今更ことはるまでもない、飛んだ粗忽を書き立てたものである、友人にして會員なる、I君からの注意によってこゝに補正し得たのを謝する。

（烏　水　生）

寄題鈴木某甫玩易廬

檜　谷

易說雖多端。歸諸陰與陽。何處定其位。上下各有方。何由別其性。升降各有常。常性何所徵。水浸與火揚。方位何所據。地冷與日煌。更說交易理。二氣互寄藏。陽或潛此厚。陰成寓彼蒼。包含又交錯。屈伸其道昌。斯理孰所闢。畫卦自伏皇。象火衷陰柔。畫水衷陽剛。否泰與兩濟。參互情益詳。特憾捉其果。其因終杳茫。知日爲純陽。却遺斜直光。光之一透地。溫久不散亡。動蠢而植蒲。其原玄和黃。易說未及此。後學歎亡羊。畫復與明夷。猶未免荒唐。天行地止說。一失終百忘。鈴君師島翁。見詣三昧鄉。玩易擇其處。結廬刀水傍。仰觀俯察勤。沈潛撥百忙。吾未解易說。象數看彷徨。惟於天地間。私心有主張。不古還不今。一想摩無疆。何日刀水湄。對牀細商量。

◎雜　錄　寄題鈴木某甫玩易廬

◎高山植物種苗分與

歐米產高山植物にて珍奇なるもの不尠、例年の通り明春多數の良種を直輸入實費分與可致希望者は可成年內に申込まれたし中には歐洲アルプス登山倶樂部の記章と云ふミヤマウスユキソウ（エデルウエス）を含む。

攝津灘住吉海岸九三九

會員　石川文彦

雜報

淺間山噴烟記

淺間山の大鳴動　五月十二日朝五時淺間山に近來稀れなる大鳴動あり但し一回にて止みたり。

五月三十一日午後十一時二十分頃俄然淺間山の鳴動あり宛然大砲の如き大音響を發したるより附近なる北佐久郡岩村田村輕井澤小諸町及び小縣郡上田町大谷驛の住民は打驚きて戸外に駈出で見れば數十丈の火焔逆立して中天を突き夫れより落下する數百萬の火の玉は燦々とし光を放ち全山爲めに燃ゆるかと疑はるゝ中果然山腹の山林より火災を起したり噴火は三、四十分にて熄みたるも此大音響の爲め佐久地方にては戸障子の破れ鴨居の落ちたる所もあり長野に於ても同時頃非常なる音響を聞き市民は何れも戸外に立ち出でたる程なるが佐久及び小縣の兩郡には二寸程灰を降らし桑葉に被害あり但し左したる損害にはあらざる可き見込なれども是れ天明以來の大震動なりとも云ひ又は明治二十二年以來の大噴火なりとも云ひ人心恟々たり。

淺間山鳴動　六月一日午後四時群馬縣廳に達したる長野原警察分署よりの電報に據れば同日午前零時頃淺間山の大鳴動と共に山麓附近に灰を降らしたるも桑葉には左したる被害なく人畜其他にも亦被害なき見込みなりと。

淺間登山者の談　淺間山噴火後第一着に登山したる小諸町小山勢太郎氏の談によれば山一面に直徑六間程の岩石數百千降り積りて何れも燒け爛れ居たりと山の麓に近き湯ノ平といへる處には一寸四角程の燒石霰の如く降り積りて之が爲めに山火事を起したる所もあり山上は硫黄の臭氣甚だ強くして到底止る事能はずと同氏の見たる所によれば山形は少しも毀損したる所なしと。

五月卅一日夜の淺間噴火降灰　南佐久南大井村大字平原郡部落に僅少の降灰あり農作物被害なし。

桑園を洗ふ　北佐久郡大里、小諸、北大井、中津、三岡の各村及び小諸町附近いづれも降灰多く就中大里村の如き地上一帶に積灰せり一般に農作物には被害なきも桑葉には今尚細末の灰固着し各自洗って給桑しつゝあるも中には漏斗又は喞筒を以て桑園を洗滌する者あり。

一坪約五合降る　小諸町北御牧及び三岡村等は一坪中約

五合本牧蘆田兩村は同じく約一合の降灰ありき。

降灰と給桑の實驗　淺間山麓谷村に降灰あり今尙桑葉に附着せるものあるは別項の如くなるが本縣蠶絲課にては灰の附着せる桑葉を送致せしめ之を給して有害なりや否やを實驗し當業者の參考に資すべしといふ。

淺間噴火の光景　淺間岳大噴火は輕井澤より報道せしが余は同夜夜行列車に搭じ大宮に赴くの時御代田輕井澤の間に於て偶然にも滊車の窓より此大噴火の光景を目擊したり。

同夜（五月卅一日）は天澄み月冴えたれば室窓よりは明かに淺間岳を望み得たり、余は室窓に倚り淺間岳を望み居ると十一時廿八分過ぎ淺間岳の噴火坑の空がポット赤くなると思ふ其瞬間、噴火坑より圓い火の柱が立ち昇りしこと數十丈、熾に天に冲するや一大黑烟と變じ山頂の空一面を覆ひ其黑烟の中より火花を散らすと共に恰かも數百のダイナマイトの一時に爆發したらんが如き大音響を發し音響と共に火花は山巓一面に落下し炎々たる焰と化したり、殊に噴火坑より西南に當る岩は一面の猛火に包まれ其谷間は噴き出したる猛火を以て埋めたれば恰かも火の中に立たる火屏風の如くにして實に壯觀極まりなく猛火の落下する時に小石大の數百の火塊の黑烟の中より四方に墜落する樣は一大花火を見るが如く猛火の落下し終るや黑烟は刻一刻に噴出し其量を增し其黑烟の中より稻妻四方八方に閃き雷鳴を起したる光景は壯絕凄絕にして到底言語にも盡されずかくて落下したる火は炎々と燃ゑ上り其狀一大山火事を現出したるが如くなりし列車の輕井澤に着したる頃も淺間山巓に當り尙火光の中空に映ずるを見たり。

淺間降灰被害　六月五日附を以て大山長野縣知事より農商務省に達したる公報左の如し。

五月卅一日午後十一時廿分山麓附近に於ては大鳴動あり天地震動し恰も大地震と雷鳴と一時に起りたるが如く加ふるに火口より盛に灰石を噴出して火焰は天空を衝き燒石亂飛し山腹以上は一面に火花を散したる如くにして其狀心膽を寒からしめたりき暫時にして鳴動は歇みしも大噴火は尙ほ繼續し六月一日午前三時に至る間各地の降灰より被害狀況當時の調査に依れば人畜には死傷なきも燒石の夥多に降下せし爲め國有林（中腹以上）は火災に罹り六月一日拂曉に至るも鎭火せず山麓長倉村には震動の爲め戸障子の倒るるもの及び鴨居等墜落せしものあり、降灰地は北佐久郡にありては北大井村、小諸町、大里村、川邊村、三岡村、中沖村、五郎兵衞村、南御牧村、本御牧村、蘆田村、三都利村、横鳥村及び北御牧村等の數村に亘り地上一帶に灰白を認め桑葉の如きは露の爲め濕潤せる上に降灰せしを以て桑葉の全面に附着し摘採して蠶兒に給する能はず一時給桑に差支を生じたり以上の外農作物には格段の被害を認めず。

淺間山大噴火　天明以來とも云ひ廿二年以來とも云ふ五月卅一日午後十一時廿分巨砲の如しと云はんよりは寧ろダイナマイトの爆發とも云ふべき凄まじき音響耳を劈計りな

りしかば折しも短かき初夏の夜の夢に入りたる計りの全町の人々は枕を蹴て戸外に飛び出せば淺間山巓は全部一團の天火と變じ其光焰空中に反映し八九合目は頂上より流下しつゝある數千萬の猛火團點々として山麓目がけて押し流しつゝあり其光景の慘憺にして又壯大なる非常のものなりき此慘憺なる光景は約四五十分の長きに渉り火團は漸次山下に押移り全く認められぬ迄になりしは一時間の後なりき。追分より塩野北大井方面即ち山麓一帶は戸障子の外れたるものあり又西南風が運びたる噴火灰は小諸より大里附近に夥しく落下しつゝある有樣十四夜の月光に明瞭に認められたり今迄に踏査したる御代田南大井附近には何等の被害もなく尙此他にも勿論人畜の被害あらざりしを推定すべき充分の理由を有するが木曾山林學校生徒七十餘名は丁度同夜山麓小沼村にて宿泊し登山翌一日小諸一番にて歸校の途に就く豫定なりしと聞きしが登山の慣例は大抵午前一時頃小沼村を發して山路につく順序ゆゑ前記大噴火の時は未だ小沼村にあり何等災害を受けざりしこと勿論ならんが今朝小諸一番には乘車せざりしより悲觀的の風說傳はりつゝあり記者は其萬異變なかるべきを信じつゝも巡視の途順として今よりは小沼村に至り更に詳報する處あらん今回の大噴火は岩村田町にては天明以來の大噴火にて老人も未だ知らざる程度なりと云ひ居れるが追分御代田にて親しく聞く處によれば去明治廿二年の冬に今回と同程度の大噴火ありし云云とも云ひ居れり。

淺間山大噴火　五月卅一日午後十一時二十五分過ぎ淺間山深更の寂寞を破って大音響と共に大噴火す直に街頭に立ちて仰望すれば噴火口よりは猛烈に炬火の如き火を吹き上げ其落火光景凄まじく山肩に降りかゝり忽然大美觀を極めたる大山火事と變じ只今激烈に四面を燃き立て居り候

戸障子外れ鴨居墜つ　六月一日午前〇時十七分發北佐久郡役所より本縣農商課に達したる電報に曰く只今淺間山大破烈し附近人家の戸障子脫れ鴨居墜落せり桑葉に降灰ありて農作物被害不詳人畜には害なき見込云々と。

大屋上田よりの望見。淺間山の大噴火　大屋にては五月卅一日夜十一時廿分頃俄然大砲を放ちたる如き音響あり續て恰も地震の如く約一分間震動せし爲め村民大に驚き老若男女孰れも屋外に飛出し何事ならんと互に語り合ひ居る中淺間山方面に當り數十丈の火煙高く中天に漲れるを發見し茲に始めて淺間山の噴火せし鳴動なる事を知り漸く一同安堵して寢所に就けるが一時は大騷ぎを爲したり又上田にても同樣の物音あり震動せるが大屋程の騷ぎは爲さゞりし。

長久保新町に降灰　小縣郡長久保新町にも降灰ありたるものゝ如し昨朝同町役場及町農會より郡役所並に郡農會に「灰降る給桑害あるか」との電報あり「灰桑洗ひ呉れよ」と返電せり。

地震乎雷乎　長野にても卅一日午後十一時過ぎ四邊の寂寞を破ってドーウンと云ふ大音響を聞き此の大音響に目を覺したる人々は地震乎雷乎と怪みたるが是なん別項淺間山

の大鳴動なりしなり。

上諏訪の降灰　六月一日未明上諏訪附近に降灰あるを發見せり。

淺間山噴火。蠶兒には害なし　五月卅一日の淺間山の大噴火に小諸町附近に降りたるものは噴火灰にあらずして火山砂なり同町の人が屋根の上に降砂せるを新聞紙の面積より掃寄せたるもの約五勺あり之を小縣甲種蠶業學校に持行き敎諭稻村農學士に囑托して分析したる所に依れば强鹽酸にて溶解せしものゝ內鐵が一番多く硫酸、硅酸、マグネシヤの順位にて僅に石灰を包含し强鹽酸を以てするも溶解せざる硅酸約八分强あり硫黃は化合物となりて全く其性質を變ぜりされば噴火砂の桑葉に附着するも之を洗ひ去れば蠶兒に害毒を及ぼすが如き事なしと云へり。

安筑地方も響震す　松本平安曇平にて五月卅一日夜十一時半頃雷とも附かず砲音とも附かぬ妙な音響あり同時に家屋の震動せる向きもありて人々皆な燒嶽の山鳴りなるべしと思へりしが淺間山の大噴火なると後に知られたり。

淺間山噴火後聞　同山此程の大噴火によりて熱せられて噴出せし大熔岩の中にはこの二日程前迄も未だ其熱放散せず登山者が新聞紙を其の間に挿入すれば直に燃燒する程のもの甚だ多かりし由なり因に六月十三日の日曜にも馬車中より望見すれば黑煙濛々として平日の噴火に十數倍せる噴火ありたり同日は本縣師範學校探檢遠足部生徒約百名の登山ありたる筈なり同山地方の人心は至つて靜平なり。

淺間噴火と官林被害　過般淺間山噴火の際蒙りたる國有林の被害程度に付山林局にて調査したる處に依れば噴火の爲め火災を生じ國有林の延燒三百餘町歩に及びたるも同日は風力弱かりし爲め三時間位にて鎭火せるを以て火災の爲め燒枯せし樹木は約二百本位に止り又亞流酸瓦斯の被害も尠かりしは幸なりしと。

噴火後の淺間山　六月一日午前零時卅分滿山火焰に覆はれ急霰の如き降灰中を一行六人探檢の途につき申候。

一行の心配は淺間山湯ノ平にある北大井村共勵會經營の休憩所番人の安否に候、村の盡る頃硫黃の臭氣甚だしきを覺え月もいつが噴煙におはれ常には馴れし原野山林も何となく物凄く感じられつゝほのくらき提灯の火に道をたどる降灰は字大石に至りし頃やみ申候。

この頃月ようやく西に傾き東天少しく明く里稱「ゾレ」に至りし頃は曉光幽かに谿間の水流を認め得るに至り申し候夜の全く明け候は里稱「盜人石」の處に候。

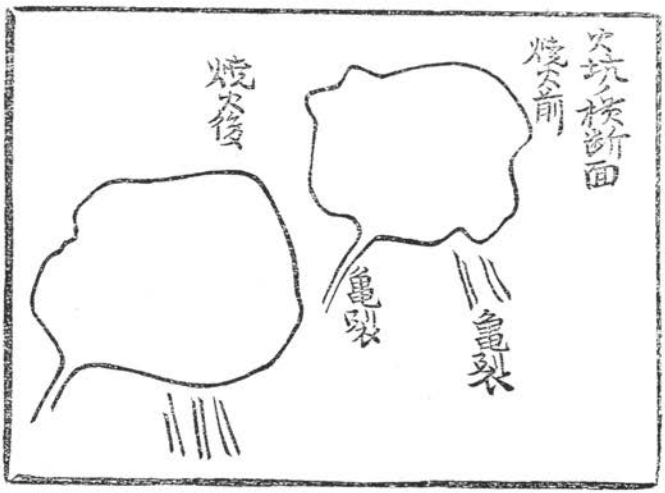
此わたりは降灰はあまり多からざるやうに候それより川を渡りて長坂下に進むに從ひ路傍の草の小石に打たれたるやうのものを見たれどもその小石は認められず草中に沒したるものらしく候。

長坂に至れば草木の砂礫に打たれたる者いよ〳〵多くこのわたりは灰色の石(徑一寸位より大なるものは二寸五分)を多く見受け申候、長坂上にて共勵會の休憩所を望み得て一同少しく安堵併し番人の安否をと一同聲を限りに呼べど

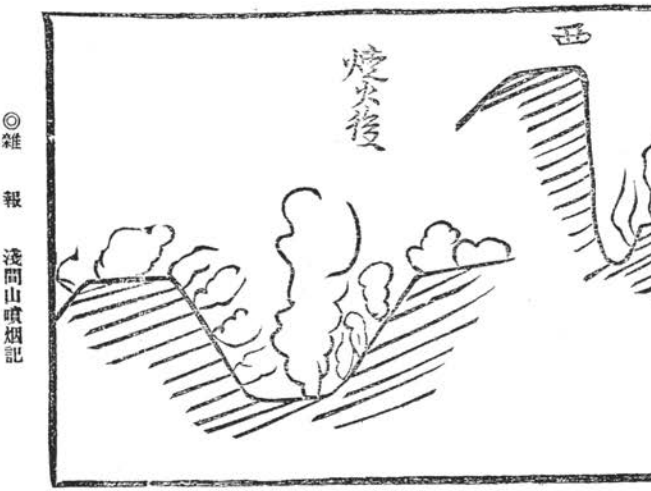
も何の應ふるものなし少しく不安の意にて急行す路進むに從って石いよ〳〵大きく又多し「硫黄小屋」に至ればこゝは如何にしてか只僅かに大豆大の礫を認むるのみにして其他降下したらむやうなもの更に認めず。

これより川につき休憩所に至れば番人は障子を半開して無言にて吾一行を迎ふ即ち内に入れば番人は唯嬉しくや思ひけん感極って目には涙を浮べ「よく來てくださいました」の外言葉なしとに角心を安めしめんと種々の話しをなし二三十分の後ようやく彼れ等は人心地つきしものゝ如し即ち昨夜の噴火の光景を聞くに、(このあたりは硫黄小屋と同じく降石なし。)

「只何とはなしに大きな音がしました、地震だか雷だか大砲だか何ともいはれぬ一大音響と同時に小屋は大震動見られよこの如く柱は裂け戸の錠は飛びて何れに行きたるやら分らずなりました、餘りのことに自分で自分の身がわからずなりました其錠の飛びたる時戸の明きし時見るとはなしに外を見ると天は一面の猛火の如くなって居ました」併し家は更に傾かず少し割れし柱一本のみ、この處に三十五分休憩番人にも勇氣をつけ一行七人にていよ〳〵探檢の途につく時午前六時半休憩所を發して登ること二丁にて茲に初めて降石の大なるものを認めたり其直徑約三尺附近は草木一面に燒け土砂また飛散して其物凄きこといふばかりなしこれより三尺徑四尺徑位のもの六合目までに數個を認めたり五寸、尺位のものは數ふるにいとまあらず六合目よりはいよ〳〵甚だしく徑二三間位の石殆んど押し重り道路など其形を失せし處多く其石の落ちしとき地に大凹所を作したるもの數知れず試みに石に手を觸るれば熱して手を觸れ居られず、空氣乾燥し風熱く恰然火事場に立ちて火焔を受くるの感あり。



登るに隨つて石愈々大きく九合目無間が谷に至れば其大なる者殆んど長十五間幅七八間高さ九尺位のもわりこれらは外部黑色なれども龜裂を生じ居りて其中は火氣炎々として杖を挿入すればパッと燃えつくなど其凄きこと甚だし年老ひたるものはこれより歸らむことを主張したれども青年は何死ん



でもかまはぬとて登る、やうやう噴火口に近づけば以前はこの邊一面燒砂にて礫だに認めざりしを今は小なるものも三四尺大なるものは十間より十五間位の石累々としてまた昨日の形を存せず火坑内を窺へば以前は其底部に一つの凸所ありしも今は變じてこれさへなく四邊また崩れて其形全く異れり周圍の火坑壁のうち舊形を存するは西方の「てうしの口」と稱するあたりのみにしてこの處は今も絶壁をなせども他は崩れて急傾斜をなし、殊に東方は噴火前は最も壁の高かりし處抔も今は崩れて徒歩にて入得べき程の傾斜となれり

一行はこれより熱したる石上を渉りて火坑の一周をなせりその北方に至りし頃は草鞋は熱の爲めに燃ゑ鼻口また乾きて其苦しきこと甚しかりし、これより東方に出で南方に下りたるにこのあたりは噴出岩ことに甚だし最も大なる者長さ約二十五間もありて幅また十五間位高さ七間もありけり表山は（南方御代田より登山道）道路悉く其形を失し石片（三四尺より五尺のもの）累々重なりて一行は兼て準備せし三足の草鞋を全く切り盡し足袋素足にて下山す。

これより劍の峰の背後に出で黒班に入れば降石のため草は皆燒かれ徑尺以上の唐松抔或は根より拔け或は挫けて飛散せる者多く天狗の露路など彼の毛氈の如き草皆燒けて青き者更になしこれより黒班に入り休憩所に歸り下山す。

巡査と技手の探險　岩村田署長中野卯三郎氏より本部への報告に依れば去る六月二日氏は淺間山麓小沼村に出張して取調べたるに同山は去る明治二十二年と二十年の兩度大噴火を爲したるも今回に比すれば約三分の一位にて五十以上の老人の言に徵するも實に今回は天明以來始めての大噴火にして噴火の際は大砲の如き音を發し强震一分間に及び北佐久御代田尋常高等小學校の窓硝子一本は破壞して落ち他の硝子障子四本は龜裂を生じたりと因て同日直に登山に經驗ある巡査柳澤愛一氏を派し更に同郡役所阿部技手外一

名も之に加はりて探檢の爲め登山し昨三日午前九時頃絶頂を極めし其復命に依れば噴火口の周圍は少きは高さ二尺多きは高さ六尺位づゝ陷落したるを以て以前よりは低くなりたる樣なりと又湯の平と稱する五合目には三尺六方位の大石二個の墜落し有るを始めとし大小無數の燒石散亂し九合目に至れば六尺乃至七尺を隔つる毎に必ず大なる石散亂し十合目に至れば滿山河原の如く荒凉慘憺を極めたりと十合目より約五十間を去る所には約五坪大の石あり夫より二間程隔てゝ約四坪程の大石あり群馬に向ふ銚子の口即ち噴火口より四十間程の所には七坪程の大石落下しありて絶頂には熱くして長く佇立し得ざる程なりと。

淺間山の探檢　北佐久郡土木吏員阿部幸太郎、同助手濱田利市小諸分署巡査にして廿年間十數回登山の經驗ある柳澤巡査等は强力五十嵐喜作を伴ひ去る一日二日淺間山噴火後の狀況を探檢すべく小諸方面より登山し危險を冒して坑口に達し同日午後無事歸廳したるが同方面は五合目位より新燒岩の「黑フ」中々多數存在するを認め其周圍は爲めに燃燒したる形跡あり其より漸次燒岩の容積大となり八九合目には二間三間四方厚さ六尺位の巨大なるものにて尙甚だしく熱氣を帶びたるものすらあり坑口は六七尺より處々より五間以上も大缺壞し音響は平日に數倍して物凄く其近邊は熱氣の爲め履き居る草鞋に甚だしき熱を感じ同一個所に長く居る可からざる程なり。

淺間噴火續報　淺間山大噴火に就き音響の絶大なりしと滿山皆火の樣の凄慘の光景なりしより何處にも多大の被害＝前例によれば重に群馬方面＝なければよきがとは皆々の憂ふる點なりしが山麓一帶即ち東西長倉、小沼、北大井、小諸、大里の諸村とも何等の被害なきこと今日の調査にて明瞭し山の直下追分驛などは同夜岩村田邊にて危險ありはせずやと見てとり直に馳せ付けたる多數の見舞人に對し却てけげんの面地するまで平氣の躰にて落付き拂ひ居る程にて中込、岩村田など距りたる個所の仰天したかと反對の狀況にて隨て損害更になく北方遠く山腹近き林野に火の移りたるありしも小林區員の手にて鎭火せしめたり唯二三戸障子の外れたるあるのみ此他北大井、小諸、大里附近の降灰は隨分夥しく試みに新聞紙を出して是を檢せしに約七匁の重量ありしと云ふ程なるも幸ひに蠶兒の給葉には障害なしと云へり各地人の觀想を比較して推定するに當夜の大噴火は同山の正面即ち正南方に向って熔岩の落下したるもの最大多量にて隨て山の西南方一直線を畫きたる町村岩村田、中込、野澤附近よりは眞正面に觀られしことゝて先づ絶大の音響に荒膽を挫がれ更に滿山皆火と云ふ未だ睹たることなき悽慘の光景に第二の喫驚をなしたるものらしく是に反し前記山の正南一直線以外の町村よりは音響と山頂の火焰は認め得たりしも熔岩の大流下は其一部分をのみより觀得られざりしより畏怖の感想も差異ありしことゝ推せられたり又木曾山林學校生徒七十餘名は踏査の結果全く一日違ひの去三十日山麓を通過して歸校したるにて種々の風說は

根據なきことを慥めたるは何よりなりき今回の大噴火に就き被害と云ふべきは鹽野官林の山腹に接したる少部分が熔岩より延燒せんとしたるを辛ふじて消止めたると御代田學校の硝子障子が破損したると其他各山麓町村の戸障子の外れたるもの數戸づゝある他何等損害なかりし噴火の程度は隔りたる岩村田附近や中込附近は全く未だ親睹せず天明以來なりと云ひ近き山麓にては却て明治二十二年冬期のと大差なしと主張しつゝあり因に云ふ山の三四合目の雜草木は一日午前は燒けつゝある處あり又山巔の形狀に異變ありしや否やは熔岩の甚だしかりし爲め鹽野方面よりは一日には未だ登山するを得ざりしため分明ならず。

淺間噴火別報　淺間山噴火に就ては山の東面に當れる輕井澤地方の者は何でもなき事に言ひ捨て居れど之に反して小諸、追分等の山西地方にては去る廿二年以來の出來事なりとて人心惴々たり右は全く當夜の東北風が强く噴火を西面に吹き捲くりたるによるものにて天明三年に數萬の死傷者を出せし夫れとは迚も比較す可もあらねど過ぐる明治二十二年の大噴火に次げる者とは適當に云ひ得べしとなり。

實見者の談　噴火の當夜折ふし淺間山の麓近く滯留し居たる小諸警察分署長の實見談と當夜小諸分署に在りて警戒の指揮を爲し居たる一巡査部長の話とを綜合すれば其夜は月夜なりしも多少の雲あり時候は連日八十度位にて例なき暖かさなり抔云ひ合ひたる折しも上り終列車の通過して間もなく突然海岸砲も打放てるかと怪しまるゝ音響起れり扨てはダイナマイトなどの破裂したるかと思ふ途端に地震起り同時に淺間山よりは一團の火焰虛空に舞ひ上りて火焰中又簪の如く閃めくものあるを認め夫が二分計りにて濟みたる後二十分ばかりにてバラ〳〵と小雨の降るが如き音を立てつゝ細かなる砂の降り來ること二十分ばかりにして今度は白き灰の落ちて來るを見たりと云ふ。

双眼鏡にて見た者の談　當夜双眼鏡を以て望みし人は語りて曰く烟の中にはチラ〳〵と電光が澤山にムいまして大な熔岩が飛び上り飛び下りして居て中々美事な者でした是等の熔岩はダラ〳〵と押し流され山の西半の方中腹以上に堆積して約一時間位は火の儘で盛んに燃て居ましたから私共は山一面に火口でも出來たのかと一時は驚いた位です。

登山者の談　小諸町の蠶業家小山清太郎氏は噴火後イの一番に登山したり其實況談は既報の如くなるが氏は猶ほ語りて曰く是程の噴火ですから火口は定めし變形して居るだらうと思ひましたが私の見た處では少っとも異狀が有りませんでした登山するには中々危險で三合目の湯ノ平邊までも燒石が澤山に轉がり落ちて居て少し大きいなのになると未だ〳〵大變な熱度でムいました此邊一面は此熔岩の爲めに野火を起して居て現に私は危うく火傷をする處でした頂上にある六尺幅の熔岩は何れも是れも二つ或は三つに割れて居て物凄じい事言句にはつくされません。

噴火後の冒險登山　卅一日の淺間山大噴火より二十五時間を經たる去る一日の午前零時三十分滿山尙ほ火焰に包ま

れ急霰の如く降る砂、灰を冒して登山したる者あり即ち北佐久郡北大井村なる小山常吉氏外九名なり其目的は淺間登山者の便宜を計る爲め豫て北大井村共勵會の設けたる淺間山腹の休憩所及び同所番人の安否を探らんとするに在り一行は山の裾にて早くも硫黄の臭氣に鼻を衝かれ愈々前途の困難を感ぜしも勇を鼓して長坂に至りしに路傍の草木悉く噴出せる小石の爲めに打たれ挫かれたるを見たり小石の直徑實に一寸より二寸五分を度る、軈て長坂の上なる休憩所に達し番人の安否を訪へば幸にして無事なり其語る所に依れば三十一日の眞夜中突然大音響を聞くと同時に小屋は大震動を感じて柱は傾き戸は外れたり空を打眺むれば一面殷紅の猛焰に包まれたりき云々、一行は夫れより其附近の降石の直徑三尺にも及べるを見つゝ燒け爛れたる土砂を踏みて六合目に至れば降石の數益々激しく直徑二三間位の岩石重疊たり試みに手を其の石に觸れば其多くは尚ほ熱を感じ中には手を觸るゝ能はざるさへあり九合目の無間ヶ谷には長さ十五間幅七八間高さ九尺位の大石あり又諸所龜裂を生じ居りて其中には尚ほ火氣の炎々たる者あり試に携へ居れる杖を挿入すれば杖頭バット燃立つなど恐しなんど云ふばかりなし有繋の一行中も恐怖心に襲はれつゝ中には引返さんと云ふ者もありしかど血氣に逸る青年等は斯の如き探檢は男子の快とする所死すとも慼みなしと主張して遂に引續き登山に決し十合目を經て漸く頂上に達するを得たり斯くて熱したる石の上を歩みつゝ二十町餘の噴火口の周圍を一巡して其狀態を視察したるに舊形全く一變して中央なる凸所の跡方もなく僅に舊態を存するは西の方なる銚子口と稱する處のみ從前絶壁の如くなり居たる火口側の如き物の見事に崩れ落ちて緩勾配となり塡所に依りては穴の中に歩み入るとを得る處さへ生ずるに至りぬ而して其周圍には七八間より二十五六間位の大岩石噴出し累々として算を亂し居り山腹の落葉松の如き一抱へもあるものが見る影もなく粉碎せられ居るを見つゝ一行は遂に踵を返したりと云ふ尚ほ岩村田警察署の巡査及び北佐久郡役所員等も同日午前九時より登山したるが其語る所に依れば絶頂は尚ほ熱くして立止る能はず噴火口の周圍は二尺乃至六尺位つゝ火口に向って陷落し九合目より十合目の間には一間置き位に噴出せる大岩石横はり居れり尚ほ降灰の爲めに附近の桑葉を害し養蠶上に大損害を與へたりと稱するものあれども今回の噴火は降灰の量餘り多からずして寧ろ降石の量多く從って桑葉には格別の被害なきものゝ如く山麓の村民等も今の處皆安堵し居れる模樣なり。

淺間山の噴出物實驗　時事新報特派員の齎し歸れる淺間山の噴出物に就き神保博士は顯微鏡試驗を遂げたる後左の如く語れり。

灰色の粉末と黝黑色の光澤を有する噴出物を顯微鏡にかけて熟視するに右の岩片及び灰は共に輝石安山岩にして斜長石と稱する者なり其玻璃狀の光澤ある結晶粒は綠色又は褐色の輝石の結晶粒を認むる外に細き長石等より成りたる

石基を示し又岩片は暗灰色を帶びて玻璃狀の光澤を放ち中に小さき斜長石の斑晶の夥しき石基の灰色を示せり又別に其粉抹を顯微鏡に照し見るに主として斜長石と輝石の斑晶ありて針狀の斜長石より成りたる石基を認む爰に示せるは參考の爲め右の安山岩を磨りて薄片となし岩石學用顯微鏡にて窺ひ見たる狀態にて多くの礦物粒は形容し難き程種々の美はしき色彩を放てり序に云ふ嘗て淺間山より珍らしき石片の噴出したる事あり歐洲人は特に或る趣味を以て之れを研究し其結果を書物に著せしことあり其時の石片は灰色にして往々瀨戸物に見らるゝ光輝を備へ普通の火山噴出物とは全然異なりたりき殊に其中菫青石と名づくる美しき鑛物を含有したるが這は學術上尤も注意すべきものにして顯微鏡下に於ては美はしき紫色を呈し居り斯の如く火山の噴出物中に菫青石を含みたる古き噴出石片を產するは學術上頗る興味ある事に屬す云々。

顯微鏡にて見たる噴出物

◎雜　報　淺間山噴火坑內に下る

淺間山噴火坑內に下る

自分は先に輕井澤から招れた序に淺間山に登山を試みた此時は暴風雨で滿足な結果を得なかったが十分地質學的興味を得たので心理學及地質學上の研究の爲再度の登山を思立った幽靈を怪物屋敷から驅逐するには地下室から天井裏まで隈なく晝の樣に火を點さねばならぬ自分は地質學上の觀察と科學的實驗の目的を以て再び登山し內部の狀態を探究する爲敢て噴火口に這入って見やうと覺悟した之に依て必ず心理的効果を得る事が出來ると信じたからである自分が此企の準備を始めると友人共は熱心に中止させ樣とした中には危み乍ら賞讃する者もあった何しろ自分は其時決心するに至った譯を話さなかったが萬一に備へる爲に有らゆる科學的豫防法を講じてある事輕忽に思立ったのでない事を說明した自分は多年地質學火山學の研究に興味を有して居たので準備の一部は全く自分の獨創になった者である。

噴火口の中へ降りる器械は梯子形の枠の一端に轆轤を附けたもので轆轤を通した綱に自分の身躰を結付る仕組である此枠は綱が火口內の岩に觸れるやうに突出し其端を人夫が支へるので人が十人位吊下っても決して倒れないやうに出來て居る自分は倔强な人夫十二人を選み四人に枠を持たせ四人に信號と同時に爆藥を噴火口に投入させ他の四人に綱を持たせて自分を昇降させる此外に信號が一人ある一つ綱を引けば降せと云ふ意味二つ引けば探檢するから綱を動

かすなと云ふ意味三つ引けば引上げよと云ふ知らせだと云ふことを豫め定め一分間引續き信號のない時は直に引上げよと命じて置た又寒暖計、晴雨計、針金の一卷、瓦斯試驗器アンモニアを含ませた布、これは硫黃の煙に卷かれた時鼻と口とに當てる爲めで此上の持物は不意の出來事の用意、又火口を調べる目的のものであった、今十分其の火口下りの科學上の結果を書くことは出來ぬが其企ては豫期以上遙に自分を滿足させたと云ふ事は確に出來る、私の豫期に加へて運好くも私共が火口の端に居る間に四度噴火があった、若し火口が火山石を以て滿たし其をば山の側に流し出したならば其は驚く可きものであったらう、四度の異った噴火の間に赤い燒けた石を噴出した、三度は火口から三百尺以上も噴き出し一行の頭をかすめて山側に雨の如く降った。

二度は火口の外端の部分四十ロット（一ロット十七尺弱）位の小さい石から人頭大の石の赤く熱した石で被はれそした一行の一人は石で打たれたが堅い帽子の爲めに傷を受けなかった、又一行中の婦人の三尺先きに赤く熱せる人頭大の石が落ちた、これ等の現象によって科學上の質問は無數であったさうで、中には火山岩の流出よりも餘計に興味を持って居った自分は其等の質問に對しては研究中だから其の內其を公にして說明を與へやうと思って居る。

登山は大抵の人は夜登るが私共は晝やった、もとの目的は五六の點に於て火口に下りるにあったが緩漫に人夫が綱や框を運ぶ爲めに晝登ったのである、重なる火口下りは午後八時頃する筈であったが第一の噴火で出來なかった、この前に一行は食事して居った處が烈しい硫黃の烟に卷かれて散々になった其時一行の者は一人以外すべて火口下りは例になき烈しき噴火故危險だから中止する方よろしいとの堅い言葉であったこの點に於て問答が初まった、皆は「何故かくも熱心に下り度く思ふか」といふので自分の答は「科學研究の目的だ」とのみ答へた、一行の人々は自分の心理學的の方面を理解しなかった、然しかくいふならば人々は私をよく解するでせう「これから淺間の火口に入った日本人が活きて歸って來る事が出來なければ其の人は武士道の人でない。これから淺間に入る日本人は探檢の目的で自殺の目的で入らないでせう」と、若し每年數度淺間に登るならばこれよりもっと好都合な條件もなく又もっと成功ある探檢はないと思ふ。（八月二十四日噴火孔に入りたる米國大學同盟會長ジェー、ロッヂヤース敎授談）

淺間噴火口の探檢二番槍

東京高等工業學校卒業生靜岡縣富士郡大宮町當時本鄕區龍岡町三四小園方止宿の伊藤景介（二十五）氏は淺間山が鳴動しつゝ新積立物の構成されつゝあるを知り是非此の危險なる噴火口底の探檢をなして學術上幾分かの參考にも供せんと親友なる同卒業生石川縣能美郡苗代村字蓮代寺の片山民一（二十六）氏と相謀り旅裝もそこ〳〵に二個の寫眞機械と數條の綱とを用意して九月四日午後二時の列車に投じ上野を發し探檢を遂げて九日歸京せり。

山麓の狀況　輕井澤から六里ヶ原の分去の茶屋まで約四里少し無理とは思ひ乍ら各自三貫目計りの寫眞機を肩にして茶屋まで急行したもう一里と云ふ處で日は全く暮れた怪雲の間から惡魔が火焔を吐いて居る樣に淺間の山は眼前に天を焦しつゝ聳えて居る宿に着たのが夜の九時來意を告て近頃の山の樣子を尋ねると主人は半ば感心した樣な半ば不安の風で種々と談して呉れたそれにあれは到着の前夜八時半頃戸障子が震動する位の大爆發があった由又去年の事火山礫を約一時間も降らせたことがあって通行人の傘は之れが爲め骨ばかりになった事があるそうである。

暗中の登山　空模樣を見計らひ六日朝二時二名の强力を雇って愈々登山の途に就た頂上までは約二里半で四時間を費すとの事で提灯を用意し暗中に淺間山の麓から昇り始た途の急なること富士の比でない小砂利の中を足元危く踏しめ踏しめ登るとて一間に一尺は必ず滑るので其疲勞すること大したものである一灯の明りで登り行く事とて周圍の景色は更に分らず只小淺間は最早脚下に黑く禪僧の樣に見分る事が出來るのみである約三分の二も登った頃東白く明け渡りて來迎を拜することを得た。

温度は益々下降して困難なる上り途に汗さへ出ない處が一寸でも休息しようものなら身の毛が彌立って肌に粟を生ずる道は益々險惡にして風は愈々强く一歩過てば千尋の奈落に轉落なければならぬと云ふ樣な鹽梅で全然夢我夢中で通り過ぎた頂上近くになった時果然噴煙に襲はれた之れは亞硫酸瓦斯であって噴火口から絶えず吹き出すのである濃厚なる部分に遭遇すれば窒息するが幸ひにして稀薄な部分であったので嚔位ひで濟んだ然し今に呼吸が止まるかと思はれたこともあった頂上へ達したのが六時半であった。

噴火口底に入る可く準備とて別段にないが只頼みになるは一條の綱で之れが眞個の命の綱だから之は充分念入りに取調べた寫眞機の外身一切の附屬物を取り除けて各自二條の綱を固く身に結付けて下るのであるが何しろ火口は削り立てた樣な斷崖絶壁で足の入れ塲もない其所か此所かとためらひつゝ萬死に一生を期して壁の一角から滑り降るのである口内の模樣を說く前に噴火口外輪上より見たる口底の模樣を一寸紹介して置必要がある。

死靈が恨の毒焰　山頂一面は近頃度々の爆發に依て噴出された岩石の恐しく焦げたものが隙間もなく積って居るが中には砂土を圓錐狀に掘て埋って居る大石もある强力の語る處によれば此大石は近頃噴上げられたものであるから撥が惡ければ何時憂い目を見ぬとも限らぬ其に北側の外輪は非常に崩壞して居たが之れは强力さへ知らなかったと言た口底より噴出する青味を帶た白色の有臭瓦斯は亞硫酸瓦斯に其他の有害瓦斯が混合して居るから口壁を下降するに從ひ呼吸は益す苦しくなる此分で穴を降ったら焦死よりも窒息して了ひ相である且燒火口内部の慘狀を見れば折角の勇氣も挫け相である暗褐色に燒た岩石は所々に暗黑青色を帶びた燒石と混淆して缺陷した穴からは帶黃色の煙を吐き硫

黄の結晶部分は是等の諸色と對照して一種慘忍なる光景を現して居る無窮の悲哀を呑で此の火烟中に身を躍らせたる幾多の薄志の青年死靈が恨の毒烟を吐いて居るのではないかと思はれる。

容易に死切れぬ　然し此處を見ない人には此口壁から身を躍らせたならば定めし瞬時にして熱火の爲めに形骸を止めずなってしまふだろうと考へるだろうが決して然うでない口側の直下に一つの中段があって其處は火烟を吐くのではなく硫黄の溶解物や結晶物、焦げた熔岩が堆積し居りて所々から硫黄が沸騰して居る樣な煙を幾條ともなく吐いて居るばかりであるから假令飛込だにせよ一朝一夕では死ぬるものでない一時は氣絶もしようが絶息までには尙ほ少なからず苦悶の時間を與えらるゝであらう（縱斷面圖參照）此の中段は頂上より降ること二十五丈の箇所に在て其段の周圍には青灰色の高さ三尺位の新たに噴出した外輪があって固く壁をなして居る中段以下は眞の噴火口で白煙漂々たる熱瓦斯は容易に其裡を窺はしめない白煙に黄赤色の恐ろしき噴煙を混へて居る其處から生ずる煙は口壁の廣き塲所に至って低き氣壓に會し一時に膨張して遠く長群の野に消えるのである。

是より口内に入る　噴火口の周圍には諸所に龜裂があって口壁其物は頗る不安全の位置にある地盤に一寸の變化があれば何處より崩壞するか判らない其の龜裂が内側面にある所よりは幾條となく細き煙を噴出して居るのみならず頂上にも龜裂ありて立って居れば足元から幾個も煙を吐て居る位であるから安き心もない探檢には非常に好天氣で少くも眺望二十里の外に屆く位の日であつて且可成噴煙少なく風の方向亦都合よく内部を窺ふに便利でなくてはならぬ茲に掲ぐる寫眞は片山氏が綱に依て身を支え口壁内部の斷崖より口底を撮影しつゝある光景で寫眞機は既に重心を失し僅かに三脚を地盤に打込むで支へて居るのである。

噴煙に包まる　一條の綱を不安心な岩角に支へさせ强力は萬一の危險がない樣にと綱の監督者として留めて置た直角に聳えたる口壁の事とて足の立塲もなく全く身は綱にブラ下って徐々に降つて行くのであるが下を見れば焦熱地獄も斯くやあらんと思はれるばかり仰げば岩角は今にも頭上に落つこちさうな按排で生た心地もない强力は絶えず注意の聲を發して警戒して呉れる口内約三分の二（？）も降つたと思ふ頃少し傾斜が緩くなつた此所まで來れば最早寒さを感じない感ずるものは地盤の震動と時々口壁の岩石の崩るゝ音、火口の頂上より吹き下す風の凄まじき音のみである尙も降るべき下方を見下せば猛烈に湧上る噴煙は口底の秘密を閉して窺ふことを許さない。

撮影の困難　煙の晴れ間を待って撮影せんと寫眞機を据たが勾配は二分一直角以上なので三脚の安定を許さず、地盤を堀つて三脚を埋め辛うじて機を据たが其脚を突込んだ小さな穴からは已に煙を吐いて居る、試みに手を入るれば熱して居る更らに噴煙は一間先の同志の姿さへ消して了ふ

のである瓦斯に咽ぶ苦しき加減ッたらない強力は非常に心配して頻りに大聲を懸け乍ら連絡を取ることに努めて居るが噴煙の音と距離の遠いのとで僅かに蚊の鳴聲の樣に聞とれるのみ然し待てば海路の日和とやら幸にも一時煙の晴れ機を逸せず最も敏速に一枚を撮つた。

轟然たる爆聲　更に口底に向つて歩を進めんとする時俄然小爆發に會し思はず口壁にピタリと打伏したが暫くして僅かに眼を開いて見れば獰惡なる黄土色を帶びた濃厚な噴煙、其噴煙中からは無數の小石が降って來て下降自由ならず暫し躊躇したものゝ斯くてはならじと勇を鼓して再び下り始めた見よ吾々の全身は黄土色の灰を以て被はれて居る。

口底に達す　口底は頂上より見たときと變りなく赤褐色の岩は熱して足を焦がし更に歩を轉じて硫黄の沸騰（？）して居る圍りに足を入るればズボ〳〵と埋まり相なので危險極まりなく注意に注意を重ねて愈々底の知れぬ眞の火口の側壁に近づき數度の大爆發に依て新たに堆積せられたる輪壁に手を觸れて見た此の新堆積輪は色は帶青灰色質は火山泥の固結したるものゝ如く硬度も弱く試みに杖で叩けば崩すことも出來得る位である壁に椅つて火口内に首を差出せば炎熱に面の向けやうもなく口底と思はるゝところの熱せられたる小石は透明なる瓦斯を發散して目も眩惑するばかりである瓦斯は丁度鐵瓶の口より發する蒸氣と同じである。

空前の成功　噴火口底の素人探檢は大躰如上のやうなものであるが若しも專門家が此擧に出たならば多大なる効果を收め得ることゝ信ず尚書漏らしたことは分去の茶屋より北一里許の處に「押出」と云ふ所がある噴火の際熔岩を流した跡で奇岩突出し當時の噴火の如何に猛烈なりしかを想像するに餘りがある其溶岩帶は山上より麓まで半哩位の幅で押出して居る云々八月二十四日米人ロージャー氏は口内探檢を試みて新堆積物あることを報告せるが今回兩氏は其新堆積の輪壁に手の觸るゝ迄下降し親しく口内の模樣を觀取して之を報告すロージャー氏以上の成功と云ふも妨げざる可きか（讀賣新聞）

木曾駒ケ嶽の山開き

七月十七日は太陰暦六月一日に該當せしかば神道者は夫々團躰を作り登山を企てし由なるが上伊那宮田村字割區登山先達樵爪喜十同友野啓十及同村宮田町天滿宮醫院院主伊藤左右司氏七名は同日午前三時宮田町發六根清淨御山の晴天を唱へつゝ駒ケ嶽の嶮を攀ぢ同午前十一時其絶頂を極め午前二時下山に就き同八時無事宮田町に歸着せり山上の模樣を聞くに下界の天龍河畔が炎熱九十餘度を示す今日此頃山上七合目以上は全然春四月中旬の氣候（らいちがつ）其儘にて山櫻の時知り貌に艷を競ひて咲匂ふあり雷鳥（らいちやうはくじつ）黄（きいろ）道眉白（しらく）檜帶（ひばまつ）偃松帶の雪尚斑白なる邊を縹（たゞ）び廻る孤眞個無何有の鄉も斯くやと想ほしむる程なりと

燒岳噴烟記

燒岳の大鳴動　去六月一日午後六時五十四分より燒岳大鳴動約十五分間にしてやがて晴天無風なりしため黑白色の猛烈一團となり天に冲すること數百丈に及び頗る壯觀を極め同七時頃より南の微風あり猛烈に次第に散亂せり。

猛烟凄まじき燒岳　前電の如く余は五月三十一日午前六時燒岳の麓を發し東南の一隅より溪間一丈餘の雪の上を登り行き猛烟悽まじき火坑を探見せるに昨年登山の際實見せる噴火坑は何時の間にやら全く休火坑となり其の東方十七八間を距りたる絶頂中央の凹地に新たなる大噴火口を生じ猛烟熾んに噴出し怖ろしき轟々たる音響想ます見渡せば全山の樹木悉く地熱の爲めに枯れ一山の風物死して生色なく樹木は漸次猛烈なる地熱に侵され次第に枯死するもの二里餘に達し荒涼慘憺實に名狀すべからず今上高地溫泉の經營者さし本年より同地にある加藤惣吉氏の談を聞くに同氏が去る十四日上高地に赴きたるに翌十五日の朝八時頃天地も爲めに裂けんかと思はるばかりの大鳴動と共に絶頂の噴火坑より一大火柱突出して炎々天に冲するの奇觀を呈し稍やあり猛々たる黑烟と變じ悽まじき勢ひを以て飛驒方面に向ひ更に二十一日の夜八時半頃又々前回の如き鳴動ありしも火柱は立たず黑烟のみ南東方向に流るゝが如く超へて二十八日午前三時頃大鳴動と共に黑烟熾んに吹き立てゝ間もなく米粒大の降灰パラ〳〵と恰かも夕立の如く降り頻りたりと云へり尙ほ燒岳の附近は勿論霞岳、穗高岳、蝶ヶ岳、鎗ヶ岳方面の降灰頗ぶる多く皚々たる白雪は灰色と化し、又草木も悉く新綠の色なし、（三十一日島々にて松東生）

大町地方の山鳴　大町地方にては六月十七日午前十一時二十分頃西南方有明山方面に當り數回轟々たる音響を聞けり其音響は大地震前の如き山鳴にてドドドーとの音響にて初め第一回の音響は八分間位にして五十分間位の內に數回の音響あり其響を聞きし人々は大地震の前兆なるやも知れずと驚き屋外へ飛び出したるも別段地震にもあらざりし故燒岳の噴火の響ならんと安心し屋內に入りたりと。

梅雨の時節に雪　南安西方の山嶺　南安臺郡地方は六月十七日午後一時過ぎより雷雨あり溫度又非常に下降したり昨曉に至り西方常念岳一帶の山嶺へ降雪ありたるを知り豐科附近は冷氣のため一面に恰も薄霜ありたるものの如かりし。

燒岳の探檢談　南安臺郡書記出川輝榮氏は大久保松本測候所技手及び安臺村駐在野呂巡査と共に燒岳探檢調査のため去る八日出發上高地より登山し六月十三日夜歸衙せり今其の語る處を聞くに去る十日早曉上高地溫泉を出發し燒岳の中腹まで登りたる頃雲霧全山を覆ひて咫尺を辨ぜざるのみならず何處よりともなく轟々たる音響を發して鳴動し同時に降灰のため項上まで達する能はず却って危險を慮りて下山するに決し飛驒中尾村に遁れて一夜を明かし更に翌十一日中尾村を出發し再び登山を企て正午過ぎ目的を達して項上に到り見るに大火坑は南北四丁東西二丁位と思はるゝほどにて此の大火坑より絕へず猛烟熾んに噴出し居れり尙ほ大久保松本側候所技手の觀測する處に依れば同山は海拔七千一百尺項上の氣溫十一度四分、九合目六十一度五分、八合目七十七度五分、六合目八十九度一分、五合目九十一度一分にして全山の風物全く死して生色なく枯死せる樹木は噴出せる大石のため打ち折られて光景慘憺たりと云へり。

燒岳の地質調査　曩に燒岳登山調査員として東京帝國大學地質科卒業生加藤鐵之助氏來縣すべく報ぜしが愈々去る六月一日長野測候所に來り夫より松本に於て五十日間滯在して每日登山調査をなす筈。

燒岳探檢狀況　燒岳噴火に就き幾多の危險と幾多の困難等を冒して登山探檢せるに山頂の中央に一大噴火坑の新に生じたるを見たり昨年登山探檢せる際に於て認め置きたる大噴火坑よりは噴火せず新噴火坑よりの噴煙は益〻猛烈にして轟々たる鳴動は熄まず全山の樹木は悉く枯死して全く生氣なし附近の降灰積ること約三寸餘（松東）

◎ドイツに於ける山中人命救護に關する會議

第一回萬國人命救護會議は其第一回會議を去る一九〇八年六月十日より同十三日に至る四日間獨逸フランクフルト、アマ、マイン Frankfurt am/Main に開かれたり是れに參同せし邦國と世界の文明國二十三ヶ國にて委員は計四百八十八人なり本邦よりは三人の委員參列したりと云ふ本會議は元と人命救護に關する事業の研究に任じ且つ之が進步と發達を企圖するあるを以て其研究

の範圍も又從て大なるは勿論なれども其内にも第九部會は山岳に關する人命救護の問題にして特に吾人の如き山岳に關係あるものゝ注意すべきこと頗る多く此の部會にての研究綱目を左に記すべし。

山中に於ける人命救護類發すべき災害原因及種類、過勞、虚脱、雪盲、急傷、電擊、墜石、損傷、雪崩に因する窒息、山員の救護處置、講習、其方法示教、救急器具、災害急報任務、道路地圖、小屋に於ける繃帶品、救急器具の準備、小屋に於ける素人救急函、息發内科疾病の與奮藥及救急處置法、山中に於ける患者運搬、被害者を救護する方法及補助法、應急的救急處置法、保護及運搬、發堀救護法、被害者の搜索、山中に於ける危險の示教、空氣變化の身躰に對する影響、高山病其他、災害統計。

一、高山に於ける保護及救急規定　ドクトル　コルマン（ライプチヒ）

二、患者輸送に關する山中の救護法　ドクトル　ベルンハルド（スイス、サンモリス）

尙ほ會議開會中は前日より閉會翌日まで展覽會を開き且つ前後二回の野外實地演習をも施行せりと云ふ。（田中）

今年の富士山

山開き　今年は山開き前に當りて雨降續き、其間山上二回も降雪ありたれば、寒氣は例年より強く、須走口一合目の山櫻漸く蕾を破りし位にて山雪尙ほ深く道路の改修其他の準備も霖雨のため大に手後れとなり、吉田口は七月一日山開の筈なりしが、十五日に延び須走口、御殿場口も十五日、大宮口、須山口は二十日と極り、諸事の整頓するは先づ廿五日後なるべし。

鐵道院と靜岡縣　鐵道院にては例年の如く登山往復割引券と登山回遊乘車券を發賣する外、今年は各登山口の驛々に山頂までの距離を白字にて詳記せし黑板を乘車中の客にも見得る樣に掲ぐる事となりしは親切の思附なり、又靜岡縣にては富士を世界一の大公園となす考へにて、今年より年々補助費を支出する事となり、今年は四個の登山道に就き二千圓の補助金を大宮、須走の電話架設費の半額を補助する等中々の熱心なり、斯く年々道路の修繕其他の設備を加へ、十年後大博覽會開設の曉に至り、外人をして目を廻はすべき結構なりと。

御殿場口　御殿場の新任驛長三宅氏は赴任日尙淺きも是亦中々の熱心にて、今回院に稟議し、陸橋の乘降場に面する兩側には富士登山道と大書し、下りホームを改築し、其待合所を二倍の大さとし、上りホームには日覆をなし、構内の空坪に四十坪の日除を施し大なる腰掛十六個を据ゑて登山者の休憩所とし尙ほ團躰登山者の待遇其他土地繁榮の策を土地の有志に說き、警察分署長も亦有志に注意を與ふれど、土地のものは餘計の世話なり抔薩口を言ひ旅舘側も團躰登山者の如く世話許り多く收入少なきものは眞平御免といふ有樣なれば、唯だ縣より四百五十餘圓の道路改修補助費を得たれば夫に二百圓弱を足し、玉穗村陸軍廠舍邊より太郎坊まで六十六町餘の道路を改修するのみ。

須走口　須走口は之に反し非常の奮發にて、野中馬車鐵を買收し、御殿場馬車鐵と改稱し、廿五人以上の團躰は賃錢を一割引き、十人以上の申込には何時にても臨時馬車を出し、須走より頂上までには電話を架設し、須走、馬返、古御嶽、六合、八合、北口頂上に電話所を置き、道路は淺間神社より一里松まで縣の補助費を加へて改修し、精進川の土橋は板橋に架換へ、一里松以上立木ある迄は全村手斧當惣掛りにて改修し、山室の便所は各持主にて悉く改造し、尙ほ古澤より興樓地藏を經て須走までの道は今度假定縣道となりたるを機として改修し、團躰登山者に對しては豫め相談あれば割引其他の便利を謀り、强力の襟章號は是まで白布にて刑事被告人の如く見ゆれば、今度櫻花形の中に富士と松を畫きし金屬製の徽章を胸間に懸けさせ、御殿場驛長の勸誘に基き水色の提灯を同驛の兩ホームに登山期中絶やす之を掲げ且つ汽車馬車時間表、宿泊料、登山用品代價、里程、地圖、登山、案内を掲げし印刷物を列車内にて配布する等拔目なき幾十分の設備を施す筈なり。

大宮口　大宮口も須走口に劣らぬ新設備多く、今春富士驛の新設ありたるより長澤村鎌田橋まで廿八町の新道を急造し、之に富士馬車鐵道の支線を

數く事となりたれば、竣工の曉には關西の客は從來の鈴川驛に下車するに比し、里數短く、費錢減じ、時間縮まり、關東の客亦時間の上に利あり（されど來月中旬ならでは竣工せざれば夫までは鈴川驛に下車するを宜とす）又大宮より頂上までは電話を架設し、大宮、一合、二合、四合、七合、頂上の六ヶ所に電話所を置く事となり、本月中に竣工の筈、道路は大宮町にて同町より万野まで三十町を改修し、村山にて同村の舊登山道より水の平を經て新道の一合目に通ずる新道を開鑿する事となり、登山者は新道のカケスバタを經す村山の舊道にて多くの古跡を見る便利を得たれば、登山の休泊會社はカケスバタの事務所を一合目に移し、同所に雜貨店をも新設して必用品は大宮同樣の價格にて販賣し、各山室には大宮よりの里程、海拔、隣り室の距離歩行時間等を記せる標札を掲げ四合目以上の山室には新たに床板を張る由。

警察と馬車　斯く備設の整頓するに從ひ登山者も多くなり、從て警察事故も繁くなるを豫想し、警察署にては頂上の奥宮脇を久須志神社脇に巡査派出所を增設し、大宮第一の旅舘偕樂園も座數を增築したり、尙此外富士軌道會社にては第一期線として大宮以北上井出まで、第二期線として上井出以北人穴まで軌道を布設するを利用し、大宮口には砂走りなく下山も同じ處を降る缺陷を補ふため、下山の際は吉田口に廻り、五合目より小御嶽天狗庭を經て大澤の北より人穴に下り、夫より馬車鐵道にて白糸瀧、駒止櫻、工藤祐經墓、曾我神社、大石寺等を巡覽して大宮に歸る樣になさんと計畫中なれば、是は多分今年の間には合はざるべし。

須山口　須山口は佐野より須山を經て登山する道なれど、元里道のため十分改修も出來ざりしが、今年より縣道に編入せられたれば、佐野より中里の旭の瀧附近までは沿道村民の寄附にて九尺道路を二間幅に改修し、須山より一合目までは縣の補助金にて改修を施し、山室は一合目に增築を加へ、二合目を雲切不動の處に新設し、御殿場口と合する三合目には御殿場口の山室の外に此日の山室をも設くる筈なれど昨年の如き不便なく、斯くして數年撓まず此口の發展を謀らば、鐵道院も佐野驛の乘客に對し割引若くは回遊券を發行するに至り、始めて舊時の盛況に復するならんか。

富士山初雪　八月二十七日午後二時頃より富士山頂に一寸餘の降雪あり午後五時に歇みたり。

富士山に大狼出づ　山梨縣南都留郡木立郡一二三番地小林正吉（四十五）は性來獵好にて九月廿二日例の如く銃を携へ富士山西麓駿河方面なる十一番官有林字トヤといふ老樹鬱蒼蓋も圍き山中に分入り宜き獲物來れかしと待居る所へ怪しの物音の聞ゆると共に一頭の怪獸現れしをよく見れば身の丈五尺餘、全身茶色の長毛に包まれ顏は恰も人に似て口は耳際まで裂け紅の舌に眞白き齒を剝出し正吉の前五十間許の處にて立止まりたる其形相の怖ろしさに剛氣の正吉も狼狽し肩の銃を取外すより早く怪物目蒐て一發放ちしも彈は外れて怪獸は飛付かんとするにその場に銃を投棄たる儘同山中開墾地まで逃げ廷び炭燒小屋渡邊三二郎方へ駈込んで助けて與れと一聲叫び樣人事不省となりたり三二郎は此躰に打驚き種々介抱の末漸く蘇生ほしたれど重體にて吊舟にて自宅へ送り目下治療中なるが此山中には折々大狼の出沒するとあり右の怪獸も必ずこれならんと目下同所の邊男等は狼退治の相談中なりと。

不二の電話開始　大宮より不二山頂へ電話架設の事は屢々報道せる如くなるが今六月十三日靜岡縣より一千三百圓の補助をなす事となり他は有志の寄附を俟つて近き山開き迄に開通せんとて當局者は目下準備中なり。

富士山の警察電話　富士山頂より須走口に至る三里二十四丁五間の警察電話は千五百二十五圓二十九錢にて又同頂上より大宮口に至る五里二十六丁四間は二千四百七十五圓七十九錢四厘の經費を以て何れも單線の鐵線にて目下工事中なるが來る七月二十日迄には落成の見込なりと。

富士山派出所と電話　靜岡縣警察部にては來る七月二十日より九月十五日まで富士山開期中大宮口及び須走口より頂上まで都合十個所の派出所を設置する筈にて目下準備中又警察電話設備も開山期までには完成せしむる見込なりと。

富士山頂の警察電話　富士山頂より大宮までの警察電話架設費の中七百五十圓及び須走より頂上までの同線架設費中四百五十圓の寄附金は先頃來募集中なりしが七月十二日右寄附金は本縣參事會に於て之を受領する事に

決し又電話線も八百ヤード丈け到着したるを以て近日中に其完成を見るべしと。

富士天拜所展覽會　去る七月二日開所したる富士北口八合目天拜所にては登山者の參考に資せん爲め同時に寶物展覽會を開きたるが其重なる珍品を列記すれば左の如しと。

梵字富士山寶印（往古富士山頂に於て登山者の希望に任せ囊布等へ押捺したるものにて筆者は役の行者なりと傳ふ）富士山緣記略（今を距ること二百四十年前延寶八年庚申五月に製版せし紀念物）長方形富士山寶印（富士山内檀要の地にて各登山者の需めにより押捺せしもの）大日如來像（富士山頂東部を往古表大日と稱せし時代頂上の堂宇にて專用せしもの）藥師如來像頂上北部久須志神社を往古裏藥師と稱せし時代同所の藏版）駒の像（頂上駒ヶ嶽の藏版）梵字木版（最初の梵字富士山寶印と同時代のもの）。

富士の山開　富士山頂上なる淺間神社にては七月二十日午前十時竹間宮司以下參列の上莊嚴なる山開式を擧行したり。

富士山嶺の音樂會　富士山の山開きも來る二十日と迫りたるが其廿五日といふには山嶺において帝國音樂會主催の大音樂會の開催ありて鑛笑聲の山鑛を驚かさん企あり出演の重なる人々は學習院教授小松玉巖、女子音樂學校講師吉澤重夫、東洋音樂學校講師本居長世其他知名の人々なりといふ。

富士山の降雹　富士山麓は數日前より氣溫急下し既に厚さ約二分の結氷を見るに至り八月廿七日午前中の溫度は廿七度にして冬期の氣候なれば從つて各方面より登山する者も漸次減少し同日の登山者は僅々五十餘名を數ふるのみなり然るに同日午前四時頃氣溫非常に逓減し大雨の霰來に加へて鷄卵大の降雹あり登山者は大狼狽して岩陰又は石室に避難したれど中には逃げ損じて負傷せるものさへありたり尙廿七日より大宮及び御殿場兩口に於ける巡査派出所は大宮御殿場兩警察分署間の電話夫れ〳〵開通するに至れり。

◎富士山頂最近十年間每冬最低氣溫　今夏富士山に派遣せられたる中央氣象臺員の報告によれば昨年八月、同山久須志神社拜殿内に懸垂し置けるー最低寒暖計は氷點下二十六度五を示し、昨年に比して六度の高溫なりしと云ふ、尙に同社に於ける既往十ヶ年間の最低の溫度は左の如し。

平均	冬季	(一) 二四、五	(十) 〇〇、二
最低	冬季	(一) 二七、八	(一) 三、一
	冬季	(一) 二六、一	(一) 一、七
	冬季	(一) 二三、五	(十) 一、二
	冬季	(一) 二三、八	(十) 〇、九
	冬季	(一) 二九、〇	(一) 四、三
	冬季	(一) 二四、〇	(十) 〇、七
	冬季	(一) 二八、七	(一) 一、〇
	冬季	(一) 三二、七	(一) 八、〇
	冬季	(一) 二六、五	(一) 一、八
		(一) 二四、七	—
		(一) 三二、七	—
		(一) 二三、五	—

◎雜報　今年の富士山　富士山頂最近十年間每冬最低氣溫

法意　第二欄の（一）は氷點下を示し

第三欄の（十）又は（一）は平均よりの高底を表す　（田中）

富士山上八月中氣象　中央氣象臺への報告に依りて八月中富士山上の氣象を記せば左の如し

	氣壓	氣溫	風向	風力	雲量	雨量	最高氣溫	最低氣溫	記事
一	日午前六時	四九一・六	五 南西	強（雨）	—	—	—	—	
一	日午後二時	四九一・七	七 南西	烈（晴）	—	六	二		
二	日午前六時	四九〇・八	七 南西	強（曇）	—	—	—	—	
二	日午後二時	四九〇・八	九 西	疾（晴）	—	七	二		
三	日午前六時	四九一・〇	七 南	軟（晴）	—	—	—		
三	日午後二時	四九一・二	一〇 東	和（快晴）	—	一〇	四		
四	日午前六時	四九一・五	九 南東	軟	四（晴）	—	—		

四日午後二時	四九一・三	九	東	疾	七	一	三
五日午前六時	四九〇・三	五	東	疾	九	一	一
五日午後二時	四九〇・八	五	東	强	一〇	一	三
六日午前六時	四九一・〇	四	北	强	〇	一	一
六日午後二時	四九一・九	七	西	疾	一	六	八
七日午前六時	四九一・六	五	南	疾	〇	一	一
七日午後二時	四九一・三	一〇	南	和	〇	二	二
八日午前六時	四九〇・六	五	南	軟	〇	一	一
八日午後二時	四九〇・三	九	南	和	〇	一	〇
九日午前六時	四九一・八	六	南西	和	〇	一	一
九日午後二時	四九一・五	一三	南	和	〇	一	一四
十日午前六時	四九一・三	六	南西	和	〇	一	一
十日午後二時	四八九・〇	一〇	南西	疾	一	二	一
十一日午前六時	四八九・二	五	西	疾	一	一	一
十一日午後二時	四八九・〇	一一	北東	和	七	一	三
十二日午前六時	四八九・一	四	南西	軟	二	一	三
十二日午後二時	四八九・一	九	北東	和	九	一	二
十三日午前六時	四八九・三	五	西	軟	九	一	一
十三日午後二時	四八八・九	八	南西	和	一〇	一	二
十四日午前六時	四八九・一	五	北東	軟	一〇	一	一
十四日午後二時	四八八・八	九	南西	和	一〇	一	一〇
十五日午前六時	四八八・八	五	北	軟	一〇	一	一
十五日午後二時	四八八・四	九	北東	軟	二	一	二
十六日午前六時	四八七・九	七	南	軟	一〇	一	一
十六日午後二時	四八八・七	一二	南東	和	一〇	一	三
十七日午前六時	四八八・三	七	南西	和	七	一	一
十七日午後二時	四八八・四	一三	東	軟	九	一	一四
十八日午前六時	四九〇・七	五	南西	疾	一〇	一	一

降霰ありたり
上層雲見ゆ
降霰ありたり
上層雲見ゆ
同右
霜ありたり
上層雲見ゆ速さ
緩降霜ありたり
霜ありたり
上層雲見ゆ速さ
緩
同右
上層雲見ゆ速さ
緩
上層雲見ゆ速さ
緩霜ありたり
上層雲見ゆ速さ
緩
上層雲見ゆ速さ
緩
同上
上層雲見ゆ速さ
緩
同上
同上
雨

十八日午後二時	四九〇・九	一三	南東	軟	七	一	三
十九日午前六時	四九〇・九	五	西	烈	一	一	一
十九日午後二時	四九〇・四	一三	南	和	一〇	一	一三
二十日午前六時	四九〇・〇	六	北西	和	一〇	一	五
二十日午後二時	四九〇・五	八	南西	和	一〇	一	二
廿一日午前六時	四八七・三	三	西	疾	〇	一	一
廿一日午後二時	四八七・五	六	西	疾	一	二三	七
廿二日午前六時	四八九・二	三	西	烈	一〇	一	二
廿二日午後二時	四八九・五	六	北	和	一〇	一	九
廿三日午前六時	四九〇・四	五	西	疾	二	一	二
廿三日午後二時	四九〇・二	五	西	疾	一〇	一	一〇
廿四日午前六時	四九一・〇	二	西	和	一〇	一	三
廿四日午後二時	四九〇・四	三	西	疾	一〇	一	一
廿五日午前六時	四九〇・四	四	北	疾	三	一	一
廿五日午後二時	四九〇・〇	五	西	和	一〇	一	八
廿六日午前六時	四八九・七	二			一〇	一	一
廿六日午後二時	四八九・六	六	西	疾	二	一	九
廿七日午前六時	四九〇・二	四	北	和	五	一	一
廿七日午後二時	一	一			一	一	一
廿八日午前六時	一	一			一	一	一
廿八日午後二時	一	一			一	一	一
廿九日午前六時	一	一			一	一	一
廿九日午後二時	一	一			一	一	七
三十日午前六時	四九〇・〇	四	南西	軟	一〇	一	一
三十日午後二時	一	一			一	一	九
廿一日午前六時	四八一・五	五	西	疾	九	一	一

上層雲見ゆ速さ
緩
上層雲見ゆ速さ
緩
同右
同右
同右

七日午後より二十九日午後までの報告を缺けるは實に遺憾とする所なり。

注意一日より四日午前までは雨量を示さず天氣として示せるを以て其まゝ載せり。

雨量最高最低氣溫は毎日午後二時に於て其前二十四時間内の事實なり。

樽前山噴出詳況

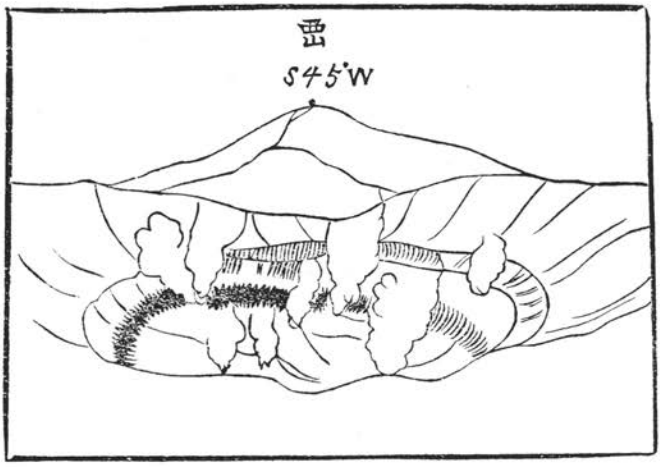
緩漫なる傾斜

樽前山麓には海岸の汀線が土地の隆起作用に依て生じたる數多の段丘あり頂上に達するには此段丘の傾斜を登りて一里の間些の凸凹だになき處を行くなり而して高さ六十米突の段丘上には裏燈會社の燐寸箱製造所あり右の傾斜の度は緩漫にして僅に五度を出でず山頂は一面に浮石質の岩滓を以て蔽はれ純粹の熔岩流は全く見出す能はず。

行くに路なし

山には人の登るべき路全くなし故に登山者は岩を跳れ越に藪中を潛ぐるなど勝手の道を選ぶなり案内者すら道を知らずとは滑稽の話ならずや然るに正月より月下旬にかけて山上なる噴火口に新火山を發生したりとて天氣晴朗の日など登山者引きも切らず日に三十人より多きは百人を下る事無しとぞ。

新火山湧起前の樽前山噴火口



火口丘の新火山

噴出の新火山は從來の樽前山最高點よりは尚百尺の高さに在り錦多峰より遙かに見渡せば黑き雲の塊りかと怪まる右は多分四月四日以後に出來たるものなるべし其日は好天氣なりしかば北海道顯の警吏等札幌礦山監督署の技師と共に登り行きたるに山上別に異狀を認めざりし然るに同月二十三日再度の登山を試みたるに今迄北方に聳ゐたりしマツカリヌプリ山の姿も形も見ゐざりしかば不思議に思ひて熟々視れば何ぞ圖らん火口丘に新火口の噴出せし爲めマツカリヌプリ山は其蔭に隱れて見ゐずなりたるなりき新噴出の火山の南部は熱鐵を欺く火の玉の如き巨岩より絶ゐず花火の如き閃光を散し剩へ雷鳴の音を發し暗夜は殊に凄絶壯絶の光景なり然れども雷鳴の音と火花とは新火山の山容を刻々に變化し行きて南側に熔岩を剝落せしめ崖錐を停滯せしめ而して水蒸氣を噴出せり但し北方は異常なく苫小牧より山容を見るときは北方は圓狀にして南方は恐ろしく角張りたり。

熔岩の溫度

佐藤氏と同行者にして米國の火山學者たるジヤツガー氏携ふる所の火熱計を以て表面黑褐色に變色しつゝ尙ほ水蒸氣を迸出せる處にて測りしに水の沸騰點よりは四倍半即ち攝氏の四百五十七度の溫熱を保持するを見たり左ればこそ其近傍は非常の溫暖を覺ゐ人をして全く高山の頂上にあるを忘れしめき。

世界の三不思議

今回の樽前山と同樣の現象を呈せるは西印度諸嶋中のマルチニーク群嶋中のペーレ！火山にて西暦千九百二年に噴出したるが高さも形も崖錐も樽前山の新火山に寸分異りたる所なく又アリウシアン群嶋中のボゴスロタ火山も全く同型にして此三者は地文學上頗る珍らしき現象なり。

震動と潮汐の關係

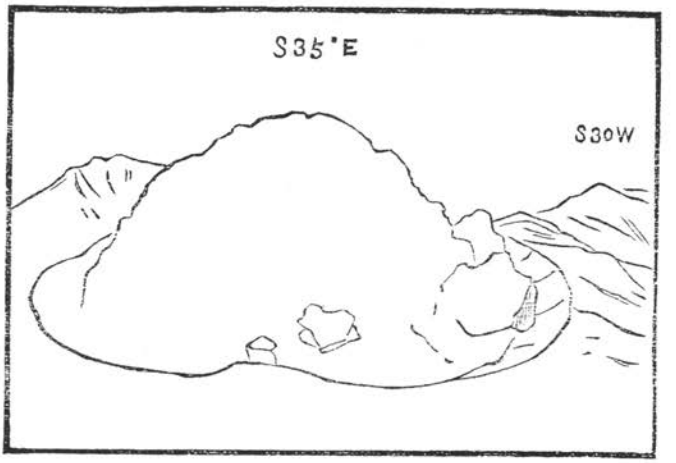
火山の震動も地震の振動も亦た潮汐に關係する事多し左ればこそジヤツガー氏は火山の活動を想像して十九日は注意すべき日なりと云ひたりしが果して其言の如くなりき伊太利のペレイツト氏も夙に

理學士佐藤傳藏氏（調査）

世事實を發表せり云々。

樽前山の現狀　米國ジャッーガ博士に依て大噴火の兆ありと豫言されたる北海道膽振の樽前山の現狀に關し頃日現場視察を終りて歸京せる佐藤地質調査所技師は語つて曰く

新火山湧起後の樽前山噴火口



樽前山位置と經歷　同山の位置は膽振國の勇拂、千歳兩郡界線上北緯四十二度四二東經百四十一度、二三の個所に在り室蘭より一時間にして山麓なる錦多布停車場に達するを得べく夫より頂上迄約四里の行程あり同山は嘗て數回噴火せる歴史を有し居れる休火山にして其噴火口は直徑十二三町に亘る頂上の中央に約直徑六町の火口を有せる者なり。

今回噴火の經過　今回の噴火は去る一月二十二日夜多少の鳴動あり雪上に灰を認めしが其後二月六日午前九時に噴烟を認め同十時砲聲の如き鳴動あり十八日に至り再び噴烟を認め越へて三月三十日午前七時噴火に先ち約三時間の大鳴動ありて大豆大の灰方石其他硝子質のものを噴出せるも其後一時沈靜せり四月十一、十二の兩日に至り山地は大振動をなし鳴動と共に破裂を爲すに至りたれば山下三里の某工場の女工の如きは何れも避難仕度をなしたる程なりしが十三日に至りて再び沈靜せり。

新山の隆起　越へて二十三日北海道礦山監督署技師等登山當時は中央火口（直徑三百六十五間三百間）上に新たに高さ五百七十尺直徑二百二十間に二百間の新山隆起し居るを認めたり右は十二、十三兩日の大鳴動の際溶岩の瘤起したるものにして我國に於ては嘗て斯の如き奇なる噴火狀態を爲せるものを認めず。

噴出物降下の範圍　は北方より南方への風強かりしため南岸苫小牧より錦多布を經て別々川、社臺川附近迄海岸附近へは大豆大の方石を山頂直下には二三間乃至七八間に亘る巨大なるラバを落下したるも人畜には被害はなかりし。

十九日の大噴火如何　米國ジャッーガ博士が豫言せる如く果して十九日大噴火あるべきや否や固より疑問に屬するも余の考ふる所によれば元來火山の破裂には根本の原因は他にあるも多く副因に依り其時期を推測するを得べく其副因の主なるものは月の盈虧に依るものにして月の引力強きときは火山の噴火、地震等多き事は統計の示す所なり而して恰も十九日は舊四月一日に相當すれば是等の點より豫言せるものなるべし云々。

樽前山の降灰　樽前山は五月十四日夜二回鳴動あり周圍約二里の間に灰を降らし支笏湖水は爲めに黄濁色を呈せり。

獨逸博士の樽前山談　獨逸火山學者イー、ブリード、レンデル博士來着せり同博士の談に曰く今回現出せる樽前火山の新火口丘はドームと稱し熔岩より形成さる日本にては鹿兒島開聞山を除くの外他に類例なし而して新裂孔の東南の區域は今後裂傷の度益々增大する兆あるが元來日本の火山は布哇伊太利の其れに比すれば概して噴火激裂なれば何時不慮の變を見るやも計り難し云々尚ほ博士は本日支笏湖に向って出發す約一ヶ月間本道に滯留洽く各火山を比較調査すべしと云へり。

諏訪湖の秘密

御渡の不思議　みすゞかる信濃國に不二の根うつす鏡と歌はれ諏訪の湖信玄の死んだ後其の屍を石棺に納めて湖心に沈めたと傳ふる諏訪湖には種種の不思議がある、中にも最も不思議なのは冬の諏訪湖で八ヶ嶽から日本アルプス一帶の高嶺が皚々たる雪の水晶峯と化する時、一夜氷に張りつめた湖面に奇々妙々の音がして湖上を一文字に氷塊の堤が出來る、翌朝湖岸の人々が見て御渡と崇め諏訪明神の御使なる狐が明神の代りに上社から下社へ行つたのだと信じて其の年の吉凶を卜し氷上の交通を開くと云ふ。こゝに湖沼學の研究を以て地學界に重きをなせる田中子爵は先年來上諏訪町高島小學校教員橋本福松氏を補助として同湖の研究に從事され此の程漸く完了したるが其の結果がなかなか面白い、神秘に包まれた諏訪湖が學理の前に如何に赤裸々に現はれるか。

諏訪湖の御渡

圖中の點線は即ち氷の堤平行せる線は開水面を示す

日本中の御幣かつぎ　御渡には四種ある一の御渡、二の御渡、三の御渡併びに佐久新海明神の御渡と云ふので何れも場所によつて違ふ。一體此の土地で御渡を觀測し初めたのは嘉吉三年十二月十日（西暦千四百四十四年一月九日）で以來寛文元年十二月一日（千六百六十二年一月廿日）に至る二百餘年間を記錄によつて調べて見ると、毎年湖岸の住民は湖水の氷結するや直ちに暦を見て吉日を卜し一二三の御渡を調べて諏訪明神へ報告し明神より京都の執權職へ達すると京都では其位置如何によつて年内の吉凶を占ふ習慣であつて即ち當時諏訪湖の御渡の有樣如何は實に日本國中をして御幣をかつがしめたのであつた、其の後暫く此の御幣かつぎも途絶にて居たが不思議にも明治の御代になつて此の舊慣を再興する說が出て二十九年一月二十八日に出來た御渡から上諏訪町の大和の總代が調べて明神迄報告することゝなつてゐる。

氣候の暖かなる證據　さて御渡即ち氷上に裂目の生じた時日を古い時代から調査し十年毎に平均して見ると第十五世紀の半頃より約五十年間は毎年一月一日より十日間に御渡を生じ十六世紀に入つても略同樣であつた、只千四百八十年から九十年に至る間は一月三十一日、千五百〇一年から十年間は一月二十五日に出來て居る、是れに依て見ると氷結期には週紀があつて著しく遲れる時もあるが大抵は一月初めである、然るに十七世紀の後半になると一月の十五日過ぎ二十日迄の間、十九世紀の末から本世紀の始めには一月二十四日から二十八日の間に氷結して居る、斯くの如く氷結期の次第に遲くなるのは明かに一般氣候の暖かになつてあるのを立證するものである。

何うして出來るか　御渡は何んな風に出來る者かと云ふと何れも氷の張らない所即ち開水面を連結して出來る、諏訪湖に注ぐ川は澤山あるが其注入する所は水が絶えず移動して居るから氷結する間がない、又上諏訪附近では湖中から溫泉が湧出するから其所にも氷は張らぬ其外天龍川の落ち口にも開水面が殘されてる。第一の御渡は湖水の最東に偏した處上諏訪附近の開水面から下諏訪方面の開水面へ出來る破れ目で途中で所々溫泉の湧出の爲めに出來た開水面を貫いてゐる、第二のは其西に寄り砥川と衣渡川の兩川口を結び第三は更に西で横河川と六斗川の川口を結んでる。

大々吉の年は無い筈　其れから、第四即ち佐久新海明神の御渡と云ふ六ヶ敷い名の破れ目は一の御渡の北端から二の御渡の北端へ湖の北岸に沿ふて生ずる者である、是等の御渡の位置は毎年多少移動するもので其れによふて年内の吉凶を卜するとは前にも云つた通りであるが殊に第四の御渡の湖岸を一週する場合を大々吉として其の出顯を待ちに待つてるのであるが不幸にも古來一度も出來た事がない、其れも其の筈何う考へても學理上斯くの如き破れ目の出來る譯はないのださうな。

氷の神秘　氷！其の切るが如き冷たさと氷晶塊の如き美しさを以て三伏の苦熱をも忘れしむる氷、昨今の東京に於て人の口に萬石の水と化しつゝある諏訪湖の天然氷は、抑も何如にして造らるゝか造物主が其の巧みなる技を振ひて造る氷に何如なる神秘の宿れるかは次に述べう。

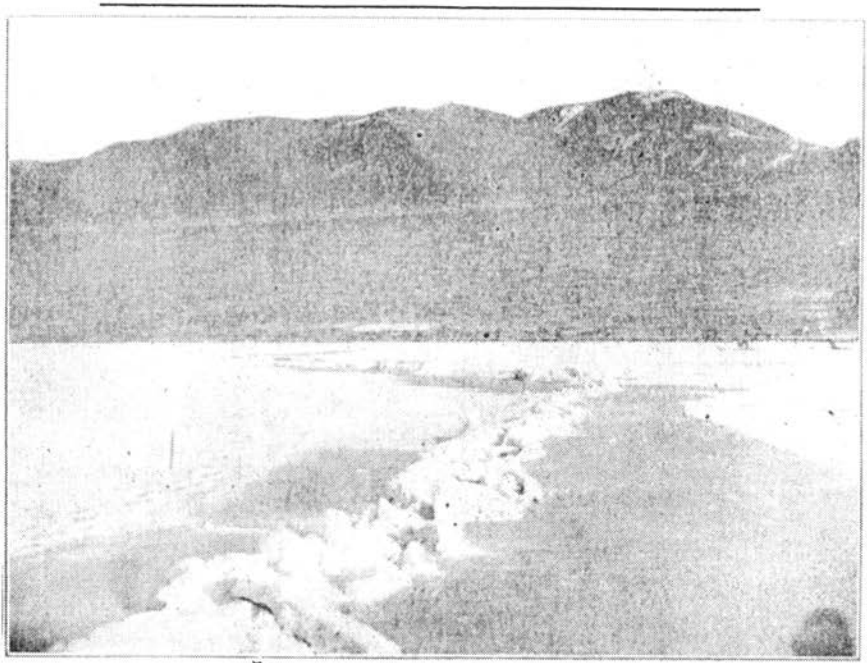
漁船氷に鎖さる　冬になつて氷の湖面に張る時は先づ岸の方から初める其れは淺い所の水は對流作用速かに行はるゝ爲め何うしても滯りがちであるからである、初めの内は夜氷つては晝解けるが寒さの次第に增すと共に岸から若干の距離迄氷が出來寒の增すと共に全面に及ぼすので其れからは次第に裏面に厚さを增し日を經るに從つて廣くなり且つ厚くなるのである、氷の出來る時は、決して初めから氷晶塊の樣なものになるのでない、美しい奇麗な結晶が水の上に浮いた樣に見ゆて其れが丁度蠟の羽根の如くに透いてゐる不思議と思ふ瞬間にそれが一面に氷結してしまふので其の中に閉ぢ込められた漁船は途に漕ぎ歸る事が出來なくなり大騷ぎをやると云ふ話もある。

夜半の奇響　夜半空氣が冷却して氷の面の最も弱い部分に破れ目が出來ると直に下の水が滲み出して破目を充たし即時に氷結する其の破れ目の出來る時宛然小銃を連發する樣な奇妙な音を發し四方の山々に反響するのが何とも形容しがたいものである、翌日空氣の溫度が高まると氷は膨脹を初め强大の壓力で兩方の氷が破れ目に向つて壓迫して來るが既に其所には新らしい氷の出來てる爲勢ひ兩端が持ち上り遂に口が明き倒れ重なり其の結果一米突程の堤防狀の山を造り一直線に湖心を渡り或は直角に交叉しつゝ開水面と開水面とを連絡して前に述べた御渡を造るのであつて初めの裂れ目を御渡の子と云つてゐる、源顯仲が

諏訪の海氷の橋は千早振神の渡りてさくるなりけり

と歌つたのは即ち此の光景である。

氷の上陸　大波が岸を打つて陸上の建物其の他を破壞する事は往々あるが氷の海嘯……氷嘯と云つたら適當かも知れん……は暖かい地方の人には到底想像が出來んが而し實際である、諏訪湖は岸が大抵石崖の爲め此の害を被る事は比較的少ないが其れでも湖岸の砂利を含んだ儘岸へ押上げ陸上の樹



諏訪湖四十一年一の御渡（ワタリ）

木を倒す事が度々ある、又解氷期には破碎した氷が一度に風で陸上に吹きよせられ遂に初めの氷の上に次の氷が押上り甚だしきは田畑を荒らす事さへある、此の現象は歐洲では見ないが英人が西藏で見たと云ふのは之れと同じ樣である、毎年春先きに南西の風で解氷を吹き送る爲め上諏訪附近は常に其の災を被るが稀には反對の風で天龍川口へ吹き寄せる時には橋を落してしまふ位其れ故湖畔には一本の杭すら打てず棧橋等を造る事は到底出來ぬ、只一ケ所上諏訪の湖明館には棧橋が出來てゐるが其れは附近に溫泉が湧く爲め氷が出來ないからで何の不思議もない。

二重氷と乳氷　氷が一度張つた後其の上の方が解けたり或は雨水の溜つた時空氣冷ゐて中間に水溜り上下に氷の張る場合がある、是を二重氷と云ふので其の厚さ二米突内外に達するものがある諏訪湖のは未だ〳〵小さな方で靑森縣の惡山の湖に張るのが非常に大きいとの話である、又氷であつても透明でなく乳白色を呈したものがある、之は乳氷と云つて氷に雪が混じて出來たので頗る奇麗だ。

氷上の落穴　一面に張りつめた氷の上に所々一米突乃至二米突の穴の明いてる事がある、其所丈けは何んな寒中でも決して氷は張らない、其の原因は別に不思議でも何でもない其の下に溫泉が湧出してゐるからで土地の人は是を釜穴と云つてゐる、其れでも非常に寒い時には極く薄い氷が張るが是れは色が變るから直ぐに判る而し雪の一面に降り積つた時には其の中に落る事があるが周圍が堅いから多くは溺れる樣な危險はない。

氷は惡いが氷は良い　諏訪湖は詩人に曰はせると極めて晶明の水を漢へた樣であるが實際はさうでない、底が淺い譯もあらうが種々の關係から全體に混濁して居て平常は七十糎以下は見ることが出來ぬ、而し氷の出來る時は都合の良いもので水中に遊離して居る固形分を分離するから氷は頗る奇麗且つ透明となつて下が能く見える位天然氷としては極めて純潔なものが出來る、又氷上に穴を穿つて火を附けるとパツト燃ゐ立つて五分間位炎が見ゐる偶然出合はすと如何にも不思議に感じられるが實は何でもない、其の下に瓦斯が噴出して居るからである。

河底の氷　四方の山々から諏訪湖に注ぐ澤山の川があるが其の河では上には水が流れて居るのに下の方に氷の張つてることが間々ある、之れは山國の谷川には珍らしくないことで黑龍江の出口などにもある、其れは氷の平板が流れの爲めに沈澱し河底に溜るので寧ろ冲積氷と云つてもよい、川の水が溫くなると浮いて流水となり湖中に流れ出る、此所には大抵夜中に氷つて朝浮き出すので甚だ小規模のものである諏訪湖の氷は他のに比べると早くから張つて早く解ける是れは畢竟淺いが爲めで一月の半から末にかけて張り二月の半には解けてしまふ結氷日數極めて短いのは確に特色だ。

御渡は信州ばかり　さて此の御渡は結氷する湖水には何所でも出來さうであるがなか〳〵さうでない、諏訪湖と松原湖ばかりで稀には野尻湖にも出來るさうだ、多年北海道に住居して居た人の話によると彼地の湖は氷結はするが御渡と同じ現象は少しも起らないと斷言してゐる、是に依つて見ると諏訪湖は比較的に大陸性の氣候を有して居るからであらう、其れには第一、一日中の氣溫の變化の可成大きいのが必要で、さうでないと氷の伸縮の差も亦大きくない第二結氷後初めての降雪の量少く且稀な事も必要で氷上の積雪は氷層が直接空氣に接することを妨ぐるから氷層の伸縮をも妨げる譯となるのである諏訪湖は是等の諸點に於て御渡を作るに殆んど注文通りとなつてゐる。

諏訪湖に關する田中子爵の研究は未だ種々なるが何れ機を見て紹介しやう。

（中央新聞神東生）

新に發見されし日本最深の湖

去年中央新聞紙上で初めて公にした「中禪寺湖の秘密」を讀んだ人は同湖が田中子爵測定の結果本洲最深の湖であると云ふ事を知つたであらう、然し今や記者は其斷定に訂正を加へる時機に立ち至つた、其れは矢張り同子爵が今夏秋田縣の十和田田澤兩湖を調査した結果田澤湖が最深と定まつたからで先日富士見軒に開かれた山岳會第三回晩餐會席上初めて子爵の口から發表された、田澤湖は秋田縣仙北郡生保内村にある直徑僅か一里餘の圓形の陷没湖である子爵が測量したのは必らずしも田澤湖の最深點とは斷定出來ないが其れ

でも三百九十七米突はある、中禪寺湖の百七十二米突に比べると非常に違ふ、然も標高二百八十七米突の地點に淤へたのであるから日本海の海面より百十米突も深い譯である、然し尙ほ精細に調査したら更らに深い塲所を發見するかも知れないとの話、面積は小さいが岸から急に深くなつてるので大波の一上一下する樣は全然海と同樣である。

其れに面白いのは昔タッ子姫と云ふ美人が故有て湖中に投身したと云ふ奇譚が原因で今でも舟に鐵村を使ふのを禁じた爲め何れも丸木舟許りを浮して居る、波が激しいので其の船を二艘連れ間から錘を下げなければ轉覆の憂がある、其れでも尙風が吹くと到底測量しては居られないから糸を浮木に附けて水上に捨て逃げ歸り又行くと云ふ次第である、田澤湖の次ぎは北海道の支笏湖で三百二十七米突、次が十和田湖で支笏湖と同じ深さ、其れから池田、洞爺、中禪寺湖となるのださうな。

（中央新聞）

古代諏訪湖上生活に就て

神保博士の談　信州諏訪湖上の證跡によりて古代人民が此に生活したる事あるべしとの推定を得たる坪井博士が尙ほ歩を進めて研究するの要ありとの意見を發表せし事は前號の本誌に記せしが爰に神保博士も亦た諏訪湖及び其附近に於て多くの石鏃、木の實、土器の破片並に坪井博士の未だ手にせざる貝を採集して五月七日午後歸京したり左に同博士より聞き得たる談話の要領を掲ぐべし。

湖上生活の證　自分に地理學で造詣の淺からぬ田中阿歌麻呂子と共に去る四日出發して五月五日午後諏訪に着いた實は輕井澤よりも高い富士見高原附近で鑛物學上の研究をする目的で行つたのであるが生憎の大雨で見合せる事とし此の日は唯だ諏訪の町を其處此處と視察し六日は坪井君が調査した大和ソヲを實地に就て調べた相變らずの雨の爲めに少なからぬ困難を感じたが七日には是非歸京せねばならぬ必要があるので僅かの時間ながら兎も角大和ソヲを見た未だ充分坪井君の意見も聞いて居ないから自分も意見を此に發表する事を好まないイヤ出來ないのである殊に平生研究して居る方面が坪井君と異て居り且づ只ポーリングロッド（鋼鐵製三尺餘の鐵棒にて尖端に一尺の長さ程の溝あり土中に突き入れて二三度突廻して拔けば研究の資となるべき材料が此溝中に入りて採集に便ならしむるもの）で一寸探た位であるから素より充分の說明をする迄の證據は得られないが然しソヲの上を一寸見た觀察では湖上生活と思はれる的確の證據を得なかつたのを遺憾とするのである。

土地の押出し　これも關聯して居る問題であらう自分は上諏訪の天神山から手長神社へかけて特別な地勢を見、諏訪の西岸岡谷の附近と小田井小坂等にても亦た特殊な地勢を實見した且つ近年上諏訪と下諏訪間の鐵道が開通の間際になつて俄に土地が押出し之が爲め著しい高下を生じたのみか引續き約一ヶ月半程も地盤が靜かに動いて遂に上下九尺水平に二十二尺の地辷りを生じた左ればといつて此地盤は決して濕地でもなければ土土が甚しく深い處でもない即ち岩石で成り立た山腹なのである夫れから見ると湖岸には昔土地の陷落があたかも知れぬと想像される。

ソヲの研究　ソヲの上で其地質の調査をすると云ふ事は一日や二日で爲し遂げられると云ふ簡易な仕事ではない水の中へ杭を打込んで其地點を明かにしてから湖底の土砂を採集し精細に調べないではソヲの生因が何樣ものかと云ふ事は知られないであるからソヲの位置は湖水の深さを見たのみでは容易く發見される者でなく棹の樣なものを湖底に突入れ堅く手答へを得て始めて夫れと知る事が出來るのである夫れに諏訪の水は充分透明でないから水上からソヲの存在を見る事は到底出來ない自分の出張した時は平水よりも四尺から增水して居た平水の時は僅に二メートルの深さであるが水上からソヲの塲所を見透す事は迚も出來ない兎に角湖上生活に關する事は更に坪井君の說を聞いた上でなくてはお話しの仕樣もないが今迄餘り注意されなかつた水上生活と云ふ事を坪井君の發表に依りて注意する樣になつたゞけでも其利益は多大なものである、夫れから上諏訪で土中から杭を掘出したと云ふ噂のある塲所へも行つたが杭に就いて詳しい說明を聞く事の出來なかつたのは遺憾である。

ミラージの實見　話は違ふが自分の實驗した事であるから序にお話しする夫れはミラージ（Mirage）の現象を見た事である是れは殊に春と秋と

に多く見られるが自分が諏訪に居た時にも見えた水面上にある船湖岸の人家抔が倒さに甚しく短かく（普通は長く映ずる）映つて其映つた影が水面より其儘浮上つて居る樣に見えた、云ふまでもなく水面と空氣の濕度の差から起るもので朝に於て好く見られる餘り珍らしい現象でもないが一寸人の注意を惹くに足らうと思ふ云々。

（時事新報）

日本北アルプスの初雪

九月十三日信州有明附近連峰は一面の降雪あり頂きは白雪皚々たり是れ本年同地の初雪なり。

高山植物取締

長野大林區署にては學術研究の爲めに爲すの外は一切高山植物採取を禁ずる事とし左の如く規約を制定し夫々管内各小林區署に宛て送達濟となり八月十七日より實行しつゝありと。

一、高山植物採取は學術研究の爲にする外は之を禁ず

二、高山植物を採取せんとするものは其族籍、氏名、年齢、住所、職業採取期日若しくは期間採取す可き植物の種類及採取個所等を白紙に明記し所轄小林區署長に宛て其願書を提出して許可を受く可し、

三、右手續亞當該取締吏員の指揮命令に違背せるものに付ては適宜戒飭を加へ尚改悛の狀なき者に對しては森林法又は警察犯處罰令に依り科刑の手續をなす可し。

尚植物採取の際取締吏員の取調べを受くる事あるに依り豫め許可書を持參す可し。

輕氣球のアルプス横斷

三哩半の高さに飛ぶ　伊太利の飛行家スペルテリニ大尉が三名の同乘者と共に輕氣球に乘じて首尾能くアルプス横斷を遂行したる由は當時のロイテル電報に見えし所なるが大尉は三名の同乘者と共に八月八日佛國シャムーニーを發し伊太利ピードモントのロカルノ（五千四百尺の高所）に近き一地點に無事降下し夫れより難路を歩してロカルノに到着したり飛揚中に到達したる最高點は一萬八千三百七十三呎にして即ち三哩半弱なり右同乘者の一人なりしフイガロ新聞通信員の談に據ればモン、ブラン（アルプスの最高峰）通過後風起り輕氣球は之が爲に平原を越ゑ山間に吹き付られたり既にして日暮れ風漸く烈しく瞰下すれば一面の岩岨石塊の外亦一物の認む可きなく船内には僅に五個の砂嚢を餘すのみ此情勢を以て飛揚を繼續するは地獄に突進するに異ならず是に於てスペルテリニは千八百呎の高所より狹隘なる上陸地點を選びて降下せんと企てたり若しも此地點に降下し損ずるときは到底死を免れざる窮態に陷りしがスペルテリニは巧に輕氣球を下降せしめ上陸地點の一角に下り立ちたりとあり出發地たるシャムニーに於ては一行の安否を氣遣ひ居たるがロカルノ安着の報告を得て初めて安堵したりと云ふ輕氣球のモン、ブラン横斷は去る千九百六年十一月には輕氣球ミラノ號に搭乘せし二名の伊太利人に依りて行はれたり此輕氣球はミランを出發し三時間に百七十五哩の距離を飛揚し高所空氣の稀薄なるを慮りて酸素供給の設備を爲したり因に氣球に乘じて高所に昇騰したるは千八百六十二年英人コックスエル并にグレイシャーの約七哩の高所に到達したるをレコードとして千八百七十五年に佛國人チサンジャーの五哩を昇騰したるあり一英人は五哩半の高所に至り昏倒したるあり又千八百九十三年巴里に於て乘員を搭乘せずして昇騰せしめたる自働記錄器付輕氣球は五萬二千四百九十呎の高所に達したりと云ふ。

高山登攀のレコード

二萬四千六百尺富士山の約二倍　高山登攀を以て著名なる伊太利のアブルツチー侯は、去る八月ゴッドウイン、アウステン山に上り、又々高嶺登攀のレコードを作れり、登山中天氣極めて良好にして、一行は何れも元氣よく、遂に二萬四千六百尺の高所に達せり、元來同山はヒマラヤ山脈の一峰にして、海拔二萬八千二百六十五呎を算し、エヴエレストに次ぎ、世界第二の高山なり從來同山登攀のレコードは分明ならざるが、千九百七年二名の　人が、同山中稍や低き峰に登り、其の一を二萬三千九百呎、他の一を二萬四千十九呎なりと稱せるが、此數字の信憑は疑はし、只デュ、ランゲスタッフが、千九百六年に二萬三千四百六呎の高峰に上りしことは、確實なりと稱せらる、斯くの如く未だ其の頂を極めたる者なき高山なりと。

北海道大雪山登攀記

ヌタツプカムシユツペ山は一名大雪山と稱し海拔七千五百尺餘にして實に北海道第一の高山なるが、上川中學校にては一昨年之が探檢的登山を試み好結果を得たれば本年も第二回登山を企て志望者七十六人に對して體格檢査を行ひたるに五年生十四人、四年生二十人、三年生八人、計四十二人の合格者を得更に同校卒業生たる中央幼年學校生徒小林光俊、第二高等學校生徒竹原、並に小樽中學卒業山崎を加へて山田常憲、鈴木桑藏、田中亮の三教授監督の許に一行四十八名の登山隊組織せられ七月二十九日旭川を出發し無事登山の目的を達し八月二日歸校せるが一行の各自携帶せる物品左の如し。

食糧四日分（米、鑵詰）外套、油紙、背嚢、水筒、飯盒若くは鍋、着換のシヤツ一枚、足袋一足、草鞋は一日一足宛の割にて上衣は冬服下に夏袴

此一人分の重量三貫目にして油紙は露營の際草の不足の場合に屋根に代用し尙ほ途中降雨の節は荷物を包むに用ひ足擦と豆の豫防には一昨年經驗に依りピン附を使用して大なる好結果を擧ぐべく人夫三人には露營用の鉞、鎌、鋸、繩類を提帶せしめたり、斯くて早朝より續々上川中學校々内に詰掛け此未曾有の快擧に就て語らざるはなく一行中一昨年登山せしは山田教授と五年生の田中、星野兩氏にて他は凡て初めての登山故前途に大なる望を屬して廿九日午前六時三十分と云ふに出發の途に就けり、此日一天雲なく非常なる好日和にて隊中の元氣殊の外盛んに四條通を一直線に二十丁目に出で東川村の基線東二十號に向て忠別原野を横斷せり日は益々照りに照り炎威到る處に發ひ來りて今は身を隱すに處なく殊に初日故荷物の重きこと限りなく一行は三伏の熱に神經氣倦みて流汗水の如く一方ならざる苦しみを嘗めつゝ三里八丁を行きて東川の西八號に出で郵便局長の好意を得て茲に休憩をなし一息つきて再び進む斯くて午後三時と云ふに基線東二十號に達し日は未だ高かりしも疲勞甚しきを以て農家に一泊することゝなせり第一日の行程約七里、明れば二日目の朝である百性家の破窓よりは目眩い日光が萬遍なく部屋中に漲ふて一行の出發を促してゐる、午前五時三十分と言ふに第一日の宿營地たる農家を後に見て出發した、忠別川を前に控へて一面の密林が其豐富な自然の色彩を矜つてゐる、俳趣を加味した丸木橋を通り忠別川を渡つて之れから森にかゝる、小川あり水は靜かに蛇行して森と森の間を迂回すること十九回、又もや忠別川を渡つて林に出で三度同川を徒涉して午前八時と言ふに菊地小屋に着した、此小屋は沿道に於ける最終の小屋で冬期間樵夫の使用せし物之れより奥には小屋掛を見ないと云ふので此處に休憩し一同撮影す谷より谷へ△森より森へと傳ほつて苦められし一行は之れより又も谷より谷へと苦まねばならぬ、此小屋より谷は右と左の二つに別れ、左方はピユケナイの澤で中央には早川が流れ途中に飛瀑あり潔々として一條の烟霧を起す處清冷の趣致あれど歩行一層の困難なるより一行は右方の水なき無名澤より進む、澤は四つありて其長きは一里に亘り林中黴風だになく其蒸暑きに苦む、澤には石疊々として碁布し其上を一つ宛傳つて行くに苦に辷りて轉ぶものありて危險千万なり△奮鬪苦戰　此の日は一行の最も惡戰苦鬪せし日である、晝尙ほ闇き林中に丈なす草を分けつゝ進むには風全く死してソヨともせず只蒸しに蒸されて嫌な草の臭がする堪へきれぬ此惡臭と百度に近き大暑とに苦められて流石の健兒も疲勞せしこと一方ならぬ△失望落膽　谷合は一對に椴松繁茂す幾千株の樹木蔚然として林をなす處を下れば谷地なり此處には虎杖が今を盛りに紅白の花を飾つて居る一昨年登山の節は四つ目の澤に殘雪あり一同茲に喉を潤して疲勞を慰せしと聞き疲れし足を引づりながら目的の澤に來りしにアナ不思議雪處か水一滴もなく一同の落膽傍の見る目も憐れなり△春に熊の出沒　水なき澤は此處につきて午前十一時三十分細き小川に出づ附近は一帶に谷地にして一丈餘の歎冬が一面に林をなしてゐる更に一つの峰を上ればイクマベツと言ふ高麗にて榛の木頂に掩ひ重なりて老龍の雲を呼ぶが如く谷地には芭蕉繁茂す此草は熊が根を堀りて食するものにて例年春になれば熊の出沒盛んなりと△露營地の撰定　午後五時高臺を下りてピユケナイ川の上流に出でたるに川岸が一帶に平地にして露營に適するより少しく上に昇りて兩岸に五人十人と一團となりて露營の準備にかゝる、小屋は木を組合せて造り之に草を敷きて屋根にも草を應用し其準備をなし各自飯盒又は鍋を持つて川に下り米をとぎて自炊にかゝりたるに枯木は水を含みて火がつかず火焚番は非常の困難をなしたり

斯くて夕食を終り各自思ひ〳〵に寐に就きたり第二日の行程八里　△露營地の曉色夏の夜明けの空氣はしつとりとした落付があつて凡ての物に深い趣が味はれる、殊に茂り交した草や木の葉に眞白い露を置いた風情は何とも云へぬほど好い、ピユケナイの川は其中央を水銀を流したやうに白く光つてウチヲリウチヲリと流れてゐる、誠や滿目畫の如き此勝景に圍まれつゝ一行四十八人は圓かなる夢を結んだのである、日は今東山に出でゝ一行の前途を祝ふが如くである　△熊の爪立て坂　午前四時四十分には隊員悉く食事を終りピユケナイの川を挾んで兩岸に一同集合した、旭川を出發して以來二晝夜の間は深林白日を蔽ふて山も丘も見ぬ森の中を歩いて堪へ切れぬ暑に蒸されて苦闘した一同は三日目の本日を以て愈々登山の目的を達し得らるゝので誰先つともなく金剛杖は自然に地を打つて勇氣凜々として四邊を拂ひ五十の健兒躍起して立つ時に五時、ピユケナイの川に添ふて上るとやがて二ツの勾配急なる山嶽がある、此坂は鷲口も金剛杖も用をなさぬ只爪を立てゝ笹を力に一歩進む坂は一面に笹に蔽はれて路は勿論ない處々にアイヌの通つた樣な跡が見ゐるのみだ　一昨年の登山の際此の峻坂を稱して熊の爪立て坂と名を付けたのである　△河中に湯の噴出　此坂を上りつめると五十坪計りの谷地に出た、此處にはモウセンゴケが一帶に生ゐて高山植物が多い、十丁程再び笹の中を通ると水のある澤へ出る幅一間半位の川を二十五丁あまり進むと川中に三ヶ所盛んに湯が噴出してゐる爲めに水が暖かい、之を超ゐると ヒヤリと身に感じて急に水が冷たくなつた兩側は露にイタトリが一面に生ゐ川には魚は一尾も居らぬ、處が湯のある爲めか蟹大の虻が澤山居てソヤツの上から此奴に喰はれるには　流石の健兒も弱つた、やがて河水は隱れて再び笹の中を五六丁行くと平地に出た此處に三十分程休憩して又も進む　△美しい花畠　上り坂だ、あまり急なので段を付けてある測量師が付けたのだらう、此坂は一面に岩高蘭が咲いてゐる白、紫、桃の岐阜提灯の樣な花で毛氈を敷き詰めた樣に美しく其風咏渾べて瀟洒　△大雪山見ゆ　此處より大木がない、坂を登りて斷崖の狀を見かへれば鑿もて穿ちたるが如く空山寂寞たり、此時前方の浮雲悉く散じて突兀として現はれたる大雪山の英姿なり、今は空間に浮出て白煙長蛇の如く横たはるは硫黄穴の噴煙とこそは知られたり△一同呆然たり　本年は例年に比して非常に暖かく爲めに一昨年の經驗により登山途次第一に渴を送す可きものとして望を屬して勾配急なる二つの山岳を越したる澤に於て雪塊なきに失敗し今又た苦しい思ひをしながら勇氣百倍して此峻坂を昇りつめたるは一昨年の節此處にある深山清冷な雪に接せんとせしにアナ埋めしや雪は何處に消ゐしか影だになく一同呆然たらざるを得ない　△清麗なる姿見の池　尙ほ往くこと六七丁にして沼がある、愈々七千五百餘尺の雪中に入る第一歩は此處より始まるのである、沼は五十坪あまりにて水面の清麗宛から珠玉を伸べたやうで水底の小砂利は一々讀むことが出來る水は清冷で五分間とは水中に立つて居られぬ、湖邊には矮生の五葉の松のみ生じ低く柯をたれ姿態奇趣に富み水之が爲めに淺翠の色をなし大雪山の靈岳は湖面に映じて最も偉觀を顯して居る、此邊最早巨木大樹は盡きて低き五葉の松と岩高蘭のみが生じて居る姿見の湖畔から登ると羊腸たる坂路の兩側にはミヤマリンド、岩高蘭、エゾ小櫻などが時を得顏に咲き亂れて居る△噴煙盛んな硫黄穴　午前九時半と言ふに四合目の硫黄穴に着いた、穴は十四ヶ所あり最大なるは直徑二尺位にて盛んに白煙を吹いて居てゴウ〳〵と凄しい音をなしてゐる、試に石を投げ込めば石は空に舞つて轉々と噴上げられる、穴が四つ程集つて最も噴煙の盛んな處に一同集合して撮影した、此處一帶に石のみで草木は全く盡きて居る　△轉々落下する　大溶岩之より上は燒石のみにて何處よりも自由に登られる坂は益々險惡となりて其急勾配は一歩登れば、ズルリと一歩下る、若し一歩を誤つたならば鉢彌は轉々して停止する處を知らないであらう、此危險を冒して攀ぢ登る困難は單にこれのみではない更に危險なるは大岩石の落下である、數列になつて登つて行くと先きなる人に蹈まれて燒石が轉び出す、其石が左に飛び右に跳れて石より石を生み轟々として一行の頭上を掠ふて來る危險だと叫ぶ間に石は物凄い音を立てゝ走る其早さ、登るに從つて石の飛び方が一層劇しく一行は互に注意して二町行きては休み一町行きては休みて進む　△山々は脚下に迫る硫黄穴の白煙を掩ふて尙ほも喘ぎ喘ぎ肉登る、此邊隊の行進は宛然虫の這ふやうだ、八合目より望むと絶頂は手の届きさうに近く見ゐる、嶮は益々加はり一歩辷れば溶岩に衝當り轉々として

落下する處危險は益々甚しい折しも白雲の破間より微隙りも知らぬ金銀色の光線がサッと計りに射出した其美觀到底筆に描き口に述べ得べきものではない、が惜い哉雲未だ全く晴れずして下界を望み得ず、石狩嶽獨り髣髴嶋嶼の如く其岳嶺を現はしぬる以外乾坤の上未だ何物の活動をも認め得ぬ、雲海の廣さが增して來るに從つて、純白の雲が宛然綿を千切つた如く漂渺として下界を覆ふてゐる、雲は飽迄平らかに靜かである風はそよとも動かない此靜寂なる雲表に立つて隊は絕頂を望んで進發した九合目近くに達した時風は下界より雲を動かし始めた、海の如く平かであつた雲が見る〳〵内に亂れに亂れて何處となく散つて仕舞つた △雄大なる絕巓絕頂に近づくに從つて寒さも刻一刻增し來る、二人の者は最早隊を拔驅して頂上に達して盛んに相連呼して、手の舞ひ足の踏むを知らないやうだ、絕頂には三角臺があるのみにて突元とし五坪あまりよりない、隊員一同頂上に達したのは午前十一時、一同は此處まで殆んど夢心地だつた、只感情が熾に昂かる。

大日本帝國萬歲　上川中學校萬歲

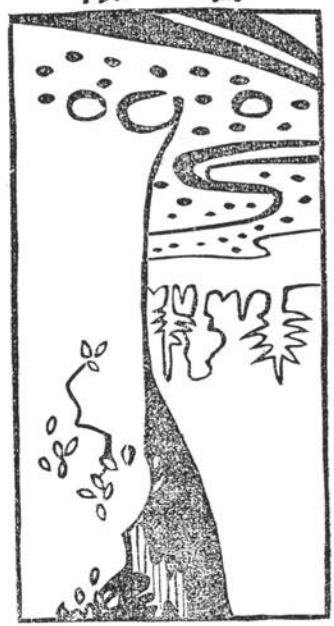
と四十八の健兒魂の聲を合せて呼ぶと、大雪山の靈岳爲めに動き出した樣だ

噫明治四十二年七月廿九日、此日より幾多の苦闘をなして我が隊は五十一時間の長きを經て遂に此處北海第一の絕頂に杖を立つるに至つた、海拔七千五百有尺ガプタテスケ山に續いて石狩嶽、天嶺嶽、の峰々が聳にてゐる、其他の峰々に至つては瞰下しなければ眼界に入らぬ、滿目唯是等の群山攢峰の紫翠と縹青あるのみで日は赫々として白銀の矢を放ち旭川町は金輪の爲めに眩ゆし △絕念撮影　一同撮影だと呼ばれて皆な今更の如く絕頂の物恐しい有樣に氣が付いた、頂上には三角臺と測量師の小屋があつて、其他には何物もなく撮影するに全員を入るべき餘地なし一同重り合ふてやつと撮影終る △頂上の四方　絕壁にて一歩あやまれば轉々として其行く處を知らずだ、西に向て噴火口を望む今は其中央切斷されて谷となつてゐる一を大雪山A峰と稱し他を大雪山のB峰と云ふ、頂には石楠木、岩高蘭、岩梅等がある、岩高蘭は今や花盛りであるが石楠木と岩梅は最早花の終りであつた△下山　午後一時一同下山の途に就いた四時半ピュケナイの澤に下りて泊り翌日午前五時出發して菊地小屋に至り同所に一泊して二日の午前八時と云ふに無事歸校した。（小樽新聞）

北海道第一高山の初雪

九月廿二日北海道第一の高山　ヌタップカムシュベ山（石狩）八合目以上に降雪ありたることを廿三日　朝發見せり、昨年より早きこと四日、例年より遲るゝこと一日なり。

會報



飛驒高山町に開かれたる山林家大會

本年九月飛驒國高山町に、山林大會を開かれたるが、岐阜縣よりの招待を受けて、吾が日本山岳會役員の一人、高頭仁兵衛氏は、吾が日本山岳會を代表し、同會に出席せられ、同地の有志家住廣造氏、及び其他の諸氏より、盛なる驩待を受け、深き感謝を荷ひて歸られたり、茲に記して岐阜縣知事、住廣造氏及び其他事に與かりたる同町の諸君子に謹謝す。

來年初號の『山岳』及び山岳寫眞帖『高山深谷』の發刊

『山岳』第四年は、本號にて完結し、來年より第五年に入るを以て、第五年第一號は、第五周年記念號と題し、紙數に於て平生の二倍大なる『山岳』を發行する計畫あり、寫眞挿畫等、亦之に準ず、其要目等は、本號の廣告を見られたし、又本會より、新撮影に係はれる、山岳寫眞の粹を拔き、精巧を極めたる各種の寫眞版にて印刷し『高山深谷』と題して、來春豫約發行すべし、この寫眞帖に收めたるは、孰れも未だ曾て世に公にせられたることなき作品にして、日本アルプスの神秘境は、帖中に非人寰の別域を作りて、諸君に見ゆべし、その如何ばかりの逸品なるやは、發售を待ちて後、知られたし。

本會規則の改正

本會規則は、役員及び特別會員の協議を經て、多大の修正を加へ、左の全文通り、變更確定したれば、來年一月一日よりは、凡べてこの修正規則に準據することゝ知らるべし、こゝに本號に載せて、普ねく會員諸君に謹告す。

日本山岳會規則

第一條、本會ヲ日本山岳會ト名ヅク。

第二條、本會ハ山岳及ビ山岳ニ關スル一切ヲ研究スルヲ以テ目約トナス

第三條、本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ毎年三回機關雜誌「山岳」ヲ發行ス又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ。

第四條、本會ハ毎年一回大會ヲ開ク尙ホ本會役員ニ於テ必要ト認メタル時ハ臨時集會ヲ開クコトアルベシ。

第五條、本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理ス。

第六條、本會ハ本部ヲ東京市ニ置ク。

第七條、本會ハ相當ノ會員數ヲ有スル地方ニ支部ヲ設ケ該支部會員ノ選擧セル委員ヲシテ支部ニ屬スル一切ノ事務ヲ處理セシム。

第八條、支部ニ關スル規則ハ支部委員之ヲ起草シ本會ノ承認ヲ經テ定ムルモノトス、支部ノ記事ヲ「山岳」ニ掲グルコトヲ得。

第九條、本會會員ヲ分チテ正會員、特別會員及ビ名譽會員トス、正會員ハ本會ノ主旨ニ從ヒ山岳ノ研究ヲ爲シ、特別會員ハ尙特ニ本會ノ事業ヲ贊成シ次條ニ定ムル會費ヲ納ムルモノトス。

名譽會員ハ本會役員之ヲ推薦ス。

第十條、正會員ハ會費年金貳圓トシ特別會員ハ年金參圓以上トナシ、何レモ前納スルモノトス。

第十一條、本會會員タラント欲スル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齡職業及ビ會員ノ種類ヲ詳記シタル申込書ヲ添ヘ事務所ニ送附スベシ。

第十二條、入會ノ許否ハ幹事ノ決議ニヨルモノトス。

第十三條、入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金貳圓及ビ第十條所定ノ會費ヲ拂ヒ込マルベシ。

第十四條、本會會員ニハ「山岳」毎號一部ヲ頒付ス又本會發行ノ諸出版物ハ實價若クハ無代價ヲ以テ頒布スルコトアルベシ。

第十五條、本會會員ハ大會又ハ臨時集會ニ出席シ又本會幹事ノ承認ヲ經テ會場ニ會員外ノ知友ヲ同伴スルコトヲ得。

第十六條、本會會員ハ會務ニ關シテ建議スルコトヲ得。

第十七條、本會會員ハ幹事ノ承諾ヲ經テ本會所藏ノ圖書ヲ借覽スルコトヲ得。

第十八條、本會會員ニシテ本會ノ躰面ヲ傷クル行爲ヲナシ若クハ本會會員ノ資格ナシト認メタル時ハ幹事ノ決議ヲ經テ退會ヲ命ズベシ。

第十九條、本會會員ニシテ住所又ハ職業ヲ變更シ改姓改名ヲナシタル時ハ其都度必ズ通知スベシ。

第二十條、本會會員ニシテ會費ヲ納付セズ或ハ滯納シタル者ニハ雜誌ヲ發送セズ、二回ノ督促ヲ受ケテ猶納付セザル時ハ會員名簿ヨリ削除スベシ。

第二十一條、退會ヲ欲スル會員ハ其旨必ズ事務所ニ書面ヲ以テ申出ヅベシ。

第二十二條、本會ノ規則ヲ變更スルニハ本會幹事及ビ特別會員ノ協議ニヨリ出席者ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ之ヲ議定ス。

但シ委任狀ヲ以テ出席ニ代フルコトヲ得。

第二十三條、本會ハ既納ノ金品ヲ一切返附セズ。

附　則

第二十四條、第十三條ノ入會金ハ明治四十三年一月一日以後ノ申込者ヨリ之ヲ納付セシム。

第二十五條、本規則ハ明治四十三年一月一日ヨリ効力ヲ有スルモノトス。

改正規則の要點

別項に掲げました來年より實行の、改正規則は、現行の規則とは、大分違ったところがあります、從前の本誌に、印刷してある現行規則と、比べて御覽になれば、直ぐ御解りになることですから、一々相違の點を、列擧する煩ひを避けることにいたします。

が、只一ッ會員諸君のために、重要な點を、こゝに擧げますと

通常會員の會費が來年より一ヶ年貳圓になること

新に來年に入ってから。入會される御方より。入會金貳圓を。會費の外に徴收すること。

であります、何故會費を引き上げたか、何故入會金を徴收することにしたかといふことは、現在の會員、及び將來新に入會せられやうとする御方のためには、利害問題ともなることであるから、概畧を說明して、御勘考に供します

元來會費とは、會の存立や、事業やを引き括めて、會に必要な費用であることは、言ふまでもありませむ、そして會の主旨を贊成し、會の存在を必要とし、會を維持するだけの熱心を頒たれるものであることも、亦當然でありませう、日本山岳會は、日本山岳會員によって成立して居ます日本山岳會を維持し、活動を便にし、存在を確保するだけの費用は、之を會員諸君に仰がないで、どこに仰ぎませう、實は日本山岳會が、次第に發展の途に上る今日となって、會費を引き上げることは、會の前途に及ぼす影響のほども量りかねて、役員の苦痛とするところでありますから、幾回も今まで躊躇し、又愼重の態度を取って、下相談を重ねました、その結果このやうに修正したのも、實にその必要に迫られたからであります。

本會の今までの事業といへば、御承知の通り只だ雜誌を發行して、年に一回大會を開くと、いふことだけでありました、實を言ふと從來の會費は、會の創立時代の、第一事業なる、雜誌發行をのみ、目安としたものでありましたが、それすら趣味普及を旨とするあまり、會費は雜誌の印刷代にも、足りないで忍んでゐたのであります、況して大會の費用とか、その他通信費とか、事務所に要する諸雜費とかいふものは、丸で會費からは出ませむ、又況んや本會の事業として、趣意書にもある、山中小舍の設立とか、登山案內記の出版とか、いふ類の經營は、今のやうな會費では、何年たつても著手などは思ひも寄りませむ、そこで從來費用の補足は、會の役員で之に當りましたが、至って少數の役員が會の費用を補助負擔してゐるやうでは、その少數者の存亡と共に、會の存亡が伴ふやうな結果になります、會の基礎は、薄弱なるものと言はねばなりませむ、私どもが會を發起した理由は、日本のやうな山岳國に、山岳研究を

專門とする會が必要であると思ったからであります、この必要は、今日でも變りはありませむ、それ故、この山岳會といふものが、何人によって組織せられ、如何なる役員によって經營せられることにならうとも、會は是非保存させたいものです、盛大にしたいものと思ひます。

私ども役員は、會員諸君が、やはり擧って本會存立の必要を認めて下されることゝ信じます、故に存在に必要な費用は、おそらく負擔を否まれないことゝ信じます、如何せむ今までの會費は、諸君のためには實は雜誌購入費にしか當りませむ、會費則ち雜誌代の觀がありました、が、會の事業と費用とが雜誌發行と其印刷費だけでない以上は、會費を增すより、外に途がありませむ。

獨り本會のみでありませむ、日本に存在する學術の會は會員に雜誌代以上より遙かに、以上の會費を徵收して維持をして居ります、一寸例を擧げると、左のやうなものです。

會名	一ケ年會費	雜誌	一ケ年雜誌代價
東京地學協會	六、〇〇円	地學雜誌	二、六五円
東京動物學會	六、〇〇	動物學雜誌	三、〇〇
東京化學會	五、〇〇		四、二〇
天文學會	二、〇〇		一、八〇

但し本會は、前記の會のやうな、特別の造詣ある專門學者の、少數團體とは、性質の違ってゐる點もありますから、凡べてを則らうといふのでは勿論ありませむ、之を歐米の山岳會に見るも、會費は雜誌の賣價より、凡べて高いか、或は會員以外には、雜誌を配布しないかであります、こゝに本會は、會員諸君に向って本會のために（或は言ひ過ぎすかも知れませむが、日本山岳研究、そのものゝために）必要な負擔を辭されないことを、懇請する次第であります。併しながら、會員諸君の中には、只だ雜誌が見たいから、入會したまでゞ、其他の必要は、自分には認められない、假令認めるにしてからが、都合上現在の會費以上を、負擔するわけには行かぬ、と考へられる御方もあらうと、思はれます、本會では、さういふ御方のために、又は一方趣味普及の方便として、雜誌代價の低廉を必要とするために、一部賣の雜誌だけは、（記念號の如き特別號に限り、相應の値上げをしますが）今後も實費標準で賣りますから、假令會籍を脫せられて、雜誌だけの購讀者となられても、それは本會員と同趣味者であり、同研究者であるといふ點で、本會は敬意を表するに、何の變りはありませむ、只だ來年度からの會員は、同趣味者であるのは勿論として、それ以外に同情者であり、又併力協心者であることを、回避しないといふことが、自然費用共同分擔の一事で、表現されるわけになります、但しから言っても、役員の分を、輕減するといふわけではありませむ、役員が當分猶多くの費用を、これからも負擔することだけは、從前と變りがありませむ、が、それは從前のやうに、其月々だけの費用を、辛うじて辨償補塡して行くといふやうな、消極的なものでなくて、會の基本金として積み立てゝ置くとか、又は他の新ら

しい本會の事業に、積極的に使用したいと思ふからであります、假令今の役員が、悉く改選せられて、他の何人が就任せられても、忽ち會の維持や、經營に苦しむやうなことが無いやうに、して置きたいと思ふからであります。

來年度から、新入の會員に、紹介を要したり、又入會金貳圓を徵したりすることは、會員には、身許や經歷のたしかな人々を欲するためで、入會金貳圓の中、壹圓は會員章の鑄造費、壹圓は基本金に組み入れるためです、その代り來年から入會される方は、必ず本會章を入會承諾の通知と共に、交付いたします、が本年までの會員には會員章は、實費を添えて、申し込まれる方にのみ、呈することにしてゐます、成るべく洩れなく會員章を佩用されたい希望を、本會の役員どもは有してゐます。

會員諸君に

一、會務整理上會費納付方重ねて御催促申上候へ共未だ御納入無之き方有之候此等は引續き會員たるの御希望なきものとし名簿より削除し公示致すべく候。

一、本會規則改正の結果會費增額致し候に就ては明年度會費の內端數御納付濟と相成居候諸君は此際事務所より各別に計算の上御通知申上ぐべく候間殘金御納付被下度候。

一、毎度御願申上候へ共、會員諸君御轉居の節は必ず御通知被下度雜誌配布上甚だ差支へ申候。

一、從來會員諸君の雜誌配本先の內、學校、又は下宿等の方有之此等の諸君にして休暇旅行等の爲め不在中に、雜誌到着致候爲間々紛失し、雜誌未着の故を以て、再三御問合せ有之候諸君少なからず候、此等の諸君は雜誌配本先を成る可く確實なる所に御定被下度殊に學校宛等は堅く御斷り申上候寄宿舍、下宿等に御在住の諸君にして、休暇、旅行等の塲合には、御鄕里等御通知被下候はゞ事務所は特に其の號に限り、御鄕里等へ御送附するの面倒と手數は致すべく候。

事務所より

熱心な會員と購讀者

正直のところ「山岳」の事務ほど、うるさいものはない、三日も拋つて置かうものなら、手紙や、ハガキが、束になつて机の上を塞ぐから閉口する、片手間仕事としては、隨分の骨折さいふべしである、併し、會員その他愛讀諸君の熱心に絆されて、こつちも油が乘つて來ないわけにはゆかない、初號より是非揃へて欲しいといふ人、事務所に一部も無いと斷はると、今度は退會した人から、買ひあつめたいから、是非何號頃の、退會者の氏名住所を調べて知らせろといふ人、又山岳會大會紀念繪ハガキを、第一大會の分から、揃へて藏して置きたいと言つて、移轉した當時の寶捌所を、追つかけて搜し歩く人など、それは、それは、山キチ……イヤなに山岳愛好者が、こんなにあらうとは思はなかつた、併し日本人ばかりでない、橫濱何某商舘に依賴して、佛國西巴里在住の、モノードといふ人から、初號から全部購入の申込があつた、勿論無い號だけは、斷はつたが、大分前金を拂ひ込んで來た、世の中はよくしたもので、かうゆう熱心な先生が一方にあるかと思ふと、又一方では、何度催……以下沒書（事務所の小會投）

第三回有志晩餐會

九月五日午後五時より東京市麴町區富士見町富士見軒に

於て開かれたり、會するもの次の十九名

今村己之助　二階堂保則　大下藤次郎
河田　默　川島錄郎　田中阿歌麿
上山六助　高野鷹藏　辻本滿丸
梅澤親光　山內淳一　丸山晩霞
增田吾助　江原竹二　三枝威之介
神東惇　角倉邦彥　小島久太
守田豐藏

午後六時より一同卓につく、當番幹事、川島錄郎氏の開會の辭あり次で各自姓名を名のる、丸山氏の岩菅山群猿の話大平氏の越後風景の色彩談、二階堂氏は特に編纂されし富士山頂と下層との氣壓、風力等の比較圖を以て山岳と衞生との關係を述べられ、田中氏は、日本最深の湖水に就て同氏の研究の結果を發表せられたり（本誌雜錄中にあり）尙は、小島氏は當晩餐會に對する希望を述べられて、卓を閉ぢ別處に於て此登山期に於ける功名談に各自の鼻愈々高きを加へたり、食後高野氏の閃光（フラッシュ）に紀念撮をし全く散じたるは十時を過ぎたり。

第四回は明年一月、開催せらるべく、吾が山岳界の諸士の新年會を加味しての會合なれば成る可く多人數の集合を希望して止まざるなり。

當番幹事は、大下藤次郎氏、丸山晩霞氏、神東惇氏指命されたり。

會員宿南昌吉氏は急病の爲め京都大學病院にて死去せられたり本會は玆に哀悼の意を表す

會員登山報

この登山報は
(一)編輯者、又は事務所まで、會員諸君より、直接に通知を受けたるもの
(二)直接に通知を受けざれども、他より聞き知りたるもの
等に據りて、次第不同に列擧したるものなり、右の內(二)に屬するものは、誤謬脫漏等素より多かるべきをおそる。

會員諸君自らよりの登山報は、本會の歡んで聞かむことを希ふものなれば長短精疎を問はず、成るべく寄せられたし。

(一)會員大平晟氏は、八月五日「マクカリヌブリ」雌、雄阿寒岳及「ヌタブカムウシュベ」に登られたり。

(二)會員齋藤功氏は、八月六日、淺間山に、十七日赤倉溫泉より妙高山に登られたり。

(三)會員谷口源藏氏は、八月二十三日第四回の阿蘇登山を終へられたり、此行は單に噴火口に留めず、先づ宮地より正南に、中岳、舊火口壁に攀ぢ、更に一五九二米の高岳の絕巔を極め下りて、新噴火口より湯の谷を經て夜陰肥後橋木溫泉に下られたり。

(四)本會幹事辻本滿丸氏は、八月十六日富山市より上瀧、

芦峠、水須等を經て、有峰の孤村に達し、藥師ヶ岳（同氏の壓力計にて約三〇〇〇メートル）及上ノ岳を極め、眞川に沿ふて、立山温泉に出で佐良、針木二嶺を越へて、信州大出に下り、同地より祖父ヶ岳に登山せられたり。（本號本欄參照）

（五）會員今田十五郎氏は、八月中淺間登山の後、二十三日上高地に到り穗高山に登り、槍ヶ岳には坊主小屋にて一泊し、二十七日絶巓を極め、翌日木曾路に向はれたり。

（六）會員石崎光瑤氏は、七月十七日立山に第三回登攀を試み、二十四日河合良成、吉田孫四郎、野村義重氏等と共に打ち連れて、室堂を發し劍岳谷に露營し、二十五日劍岳の頂上を極め二十六日立山温泉に下り、石崎氏は更に立山に第四回登攀を試み、二十九日奥大日岳に登られ、三十日温泉に下りて休養、八月三日更に第五回登山を試み、植物風景等の寫生に日を送り、十一日下山されたり。

（七）會員辻村太郎氏は、七月下旬葛の湯に滯在し、二十八日より同行二人と共に、白馬岳に登り、蓮華温泉に降られたり最初の計畫は、絶頂より直に正南黑部河畔なる、越中祖母谷温泉に降り、魚津に出づるにありしも、人夫の都合に依り、果されざりき。

（八）會員須田星河氏は、八月十五日赤城山最高點檜山へ登り、澁川に下り、榛名山を極め、十八日信州下高井郡澁温泉に滯在、澁峠を越えて、草津白根を踏破せらる、黑檜山より利根の大袈裟丸山を仰ぎ、澁峠より笠ヶ岳、横手山、岩菅山、萬座山、赤石山（上信界）の偉容に接せられたり。

（九）會員榎谷徹藏氏、は八月十一日美濃阪下より眞弓峠を越えて王瀧に入り、御嶽に登りて、頂上の各所を寫生すると全一日、黑澤に下りて上松に出で、駒嶽に登りしが、雨の爲めに材料收集の目的を達すると能はず、それより茅野に出て、埴原田より本澤に入り、二十日八ヶ嶽に攀登し、臺原に出でゝ、二十四日甲斐駒嶽に登る、この行、寫生スケッチ、併せて六十餘個を得らる。

（一）會員塚本永堯氏は、伊吹山に登山せられたり。

（二）會員英人ウエッブ氏は、今夏白馬岳に登り、歸途富士山に第五回の登山をせられたり。

（三）會員小林兼次郎氏は、七月下旬東京發、塩尻より木曾御嶽、駒ヶ岳に登り、中央西線にて歸京せられたり。

（三）會員武田信氏は、箱根舊道を越え、三島より富士山に登り、河口湖を渡り、御阪峠より甲府に出で、昇仙峽を探り、歸京せらる。

（四）會員田中健太郎、同伍一、增田吾助の三氏は、七月二十五日東京出發、大町より針木赤澤の（籠川との）合流點に、第一野營し、二日黑部に一泊し、翌日立山室堂に至り、石崎光瑤氏の一行と逢ひ、富山に下山せられたり。

(一五)(一六)(一七)會員竹内義雄氏は、信州御嶽に登らる。

會員並木氏は、立山に登らる。

會員武山良次氏は、友人成澤氏と共に、不二に第三回登山を試み、吉田に下り、御阪峠より松本に向ひ、大野川より乘鞍に登り、湯川を下って白骨温泉に出で、槍ヶ嶽より烏帽子迄の縱走に成功し、燒岳穗高山を登られたり。

(一八)會員鵜殿正雄氏は、八月一日御岳登山、二日駒嶽に登られたるも事故生じ八合目にて下山し、十一日乘鞍岳に登り、十二日上高地に出で、十三日燒岳に、十五日穗高裏山より登り、露營、翌十六日峰傳ひに槍岳に登り、十七日常念岳に至り、二の俣小屋に泊り、十八日東天井岳、大天井岳、燕岳を踏破し、中房温泉に下られたり。

(一九)會員山内淳弐氏は、八月十五日甲斐國北巨摩郡大泉村字町屋を出發、八ヶ岳の權現岳に至り、直下三百メートルを降りて赤岳に登躋、濃霧と暗夜に苦しめられて、同夜八時半、本澤温泉に到着、翌々日夏澤峠を下り、茅野驛より歸京せられたり。

(二〇)會員能登定吉氏は、七月二十三日立山登山、二十四日正午、室堂に於て、石崎光瑤氏一行の劍岳探檢を遂行し歸らるゝに會ひ、二十五日立山温泉に降られたり。

(二一)會員桑原金之助氏は、八月中信州戸隱山に登り、それより木曾地方に入りて御嶽及び駒ヶ岳を登攀せらる。

(三)會員寺島英(尾上榮三郎)氏は、八月一日富士山に登られ、それより信に州向ひて、淺間戸隱邊に遊ばれたり、富士登山に就きて時事新報の記載次の如し。

尾上榮三郎は去る一日男衆の貞藏と、車夫の米吉とを伴ひ登山の途に就きたるが、少し變つた行方をとの企みより、幸ひ優は山嶽會に入會以來、信州甲州邊の山巡りに、經驗もあることゝて、米味噌罐詰類など、一週間の糧食を始め、鍋釜寫眞器、測量器等約八貫目程の荷物を携へ、白リンチル洋服に扮裝ち、太郎坊に着いて十五分の内に夕飯を濟ませ、其夜の十二時三分には、早くも四合目の室に着し、二時間半程憩ひたるのみにて、是れより水兵六人と連れになり、普通の登山路にては面白くなしと、山嶽地圖と磁石とを信憑に九合五夕まで眞直に這ひ上りしには、有繋の强力も舌を捲きたりとぞ、斯くて頂上に着きたるは午後四時十五分にて、又も一時間半程休息の後、歸途に就き、今度は前の水兵等とも別れて、一行三人須走りの裏道を急轉直下したるが、山の傾斜四十度にて、强力といへども此の道の案内を熟知せず、ことに夜道ではあり、山靄深く立籠めて、一寸先きも眞黑闇なりしかば、豫て山籠りの用意にとて携へ行きたる、アセチリン洋燈及び馬乘提灯を打振り〳〵、二日の午前一時頃には吉田口より一里程手前たる中の茶屋に着きたるも、此邊近頃物騷なりとて、戸締を明けて呉れざるにぞ、已むな

く軒下に轉寢をなし、夜明けて後、吉田口の東京館に入りたるが、太郎坊以來、一晝夜飲まず食はず歩き詰めの空腹なれば、湯にも入らず、其儘散々に飯を詰め込み、夫れより大槻、猿橋を經て午後十時無事濱町の自宅に戻りたり、供に立ちたる男衆車夫等は、其の後暫らく綿の如く身體勞れ果て居たるも獨り優は平氣なものにて「なに富士よりも信州、甲州の山嶽の方が餘程嶮しいのサ」との大氣焔には、聽く人怯氣を振はぬはなしとぞ。

(三)會員笠井高三郎氏は、本年八月、劍山植物講習會に加はりて、劍山を登攀研究せられたり、(本號雜錄參照)

(四)會員飯柴永吉氏は、陸中早池峰に第三回の登山を果され、八月十四日信州白馬岳を登攀せられたり、共に高山植物採集のため。(本號雜錄參照)

(五)會員岩佐定一氏は、上州鹿澤溫泉より、淺間山の裏山を登られ、九月二十四日那須岳へ登られたり。(同上)

(六)本會幹事河田默氏は、信州阪下より高遠に入り、市ノ瀨に一泊し、こゝにて導者及び人夫を賃し、翌日三峰川に沿ひ、荒川と三峰川本谷間の嶺下に一泊し、翌朝荒川を溯り、市ノ瀨地方の所謂荒川岳を登攀せられて、赤石山脈の間の岳と同一なるを認められ、前夜の宿泊地に下りて、又一宿し、翌日三峰川に沿ひ、仙丈岳下に到りて一泊、翌日其絕頂を窮めて、市ノ瀨に歸らる。(本號本欄參照)

(七)會員丸山晩霞、赤城泰舒二氏は、七月より八月にかけて信州澁溫泉より、發補溫泉に到り、岩菅山附近の森林、高原等を寫生せられ、水彩畫の作品數點を獲て歸らる。

(八)會員大下藤次郎氏は、七月十六日上州榛名山に赴かれ、榛名湖や烏帽子岳を寫生せられたり。

(九)會員志村寛氏は、八月中信州岩菅山に登攀せられたり。

(一〇)會員河野齡藏氏は、七月下旬宮田より信州駒ヶ岳に登られ同山脈を南へと向ひて縱斷を試みられ、ウツギ岳へ達せられ、山上に野臥すること、四日なりしといふ。

(一一)會員瀧澤彦太郎氏は、七月十九日信州淺間山に、第三回の登山をせられたり、當日は天氣清朗、四周の遠望より、火口の奥底まで、隈なく眺め得られたりと。

(一二)本會幹事高頭仁兵衛、高野鷹藏、小島久太、會員三枝威之介、中村清太郎五氏は、畵家茨木猪之吉氏を加へて、七月二十日甲州鰍澤に到り、二十一日湯島溫泉に一泊し、翌二十二日登山準備を整へ、二十三日人夫十一人を引卒し、赤石山脈縱斷の行程に上りて新澤嶺腹に野宿二十四日大井川西俣の眞砂澤に野臥、二十五日惡澤岳頂に登りて野臥、二十六日千枚澤岳、惡澤岳、西河内岳、魚無河内岳の四大岳を縱走して尾根の凹窪地點に野臥、二十七日赤石山の前山及び本岳を縱斷して、南方尾根の中腹に野臥、二十八日大森林を下りて小澁川を二十七回徒涉し、小澁溫泉に一泊、二十九日大河

原を經て飯島に一泊、三十日一行を解散して行を終れり、其後三枝威之介氏は八月初旬北アルプスに向ひて、鹿島槍ヶ岳を登攀せられ、同じく小島久太氏は、富士山の御中道を一周せられ、中村清太郎氏は八月下旬美濃惠那山に登り、轉じて信州穗高山を究められたり。

(三三) 會員田中富彌氏は、七月下旬より八月初へかけて、甲州に入り、富士山及び駒岳を究め、更に金峯、奥千丈、國師、萩原の諸山に遊ばれたり。

(三四) 會員瑞西人ファーデル氏は、八月中信州白馬岳へ登られたり。

(三五) 會員山本陣吉氏は八月中旬木曾御岳に登山せられたり。

(三六) 會員、塚本樂山氏は八月十七日大峰登山參籠所に宿泊下山せられたり。

(三七) 會員木村鑛吉氏は、八月戸隱及び白馬岳に登攀せられたり、

(三八) 會員靑木忠次郎氏は、本年八月、蒲田より、槍ヶ岳へ登られたり。

(三九) 在米國ポートランド、オレゴン會員遠藤章二氏は、本年の夏(八月十二日)北米の高山レーニア Mount Rainier (海拔一萬四千五百二十八呎)の絕巔を極められ、山頂に備へつけある記名簿に、最初の邦人登山家として記名し、且つ日本山岳會員の肩書を錄せられたり、思ふに我が山岳會設立以來、會員にして、外國の雪線以上の高山に登攀せられたるは、恐らく氏を以て嚆矢となすべきに似たり、氏は書信の端に『氷河の壯觀は、殘念ながら日本では、と存じ候、……暇さへあれば、山研究いたし居候ものから、友人ども、小生の名を呼ばずして「やま」と申居候故、それなりに『耶麻』といふ號を用ひ居候』と、因にいふ同氏は本年二月彼地(オレゴレ)の山岳會マザーマ倶樂部 Mazamas Club 會員として登錄せられたり、マザーマ倶樂部は一千八百九十四年彼地の高山フッド山(Mt. Hood)の絕頂にて、始めて成立を告げ、會員の資格は「活動せる氷河を有せる雪線以上の高山に、人工機械に依らずして」登山し得たるものに限らるといふにあり、同氏は富士山を登りたるに依って會員として允許せられたるなりといへど、今回の登山にて「活動せる氷河を有する雪線以上の高山を確實に登られたるなり、本會成立以來會員にして外國の山岳會に入會を許可されたるものも、恐らくは氏を以て始めとなすべきか。

內外增加圖書報告

地學雜誌	二十一年	二四六號より二五〇號まで	東京地學協會
地質學雜誌	十六卷	一八九號より一九一號まで	東京地質學會
山岳美觀	第一、第二輯		志村寛氏
飛州志			住廣造氏
筑波山登山の手引			佐藤順一氏

高田高等女學校妙高登山隊寫眞及はがき　高田高等女學校
淺間山かびね形寫眞二葉　松本卓爾氏
御嶽山かびね形寫眞一葉　住伊書店
青山白水　三卷九月號　岳志會

Oesterreichshe Alpenzeitung 790-794. Oesterreichshe Alpen Club.

Jahrbuch des Schweiser Alpen Club. 1908-1909. Schweiser Alpen Club.

Butlleti Centre Excursionista de Catalunia, 171-174. Centre Excursionista de Catalunia.

Sweden. Swedish Touristing Club.

Stockholm-Dalecarhi viâ Gefle. Swedish Touristing Club.

Picturesque Sweden. Swedish Touristing Club.

La Montagne No. 8. Alpine Club of France.

Alpine Journal No. 185. Alpine Club.

Canadian Alpine Journal Vol. II. No. 1. Canadian Alpine Club.

The Exploration of the Caucasus by Freshfield 2 Vols. } 購入
The

新入會員

明治四十二年十一月一日印刷
明治四十二年十一月三日發行

定價參拾五錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町六丁目九十三番地　廣瀨安七

印刷所　横濱市太田町六丁目九十三番地　東京印刷株式會社　横濱分社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九號　電話最長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

第四回日本山岳會有志晩餐會は!!

山岳研究者。登山家。山岳愛好者。山岳畫家。山岳寫眞家。高山植物學者。氣象學者。天文學者。山岳醫家。山岳文學者の會合なり。

明春一月を卜して山岳界新年會を加味して第四回を開かるべし。廣く會員諸君の來卓を望む。

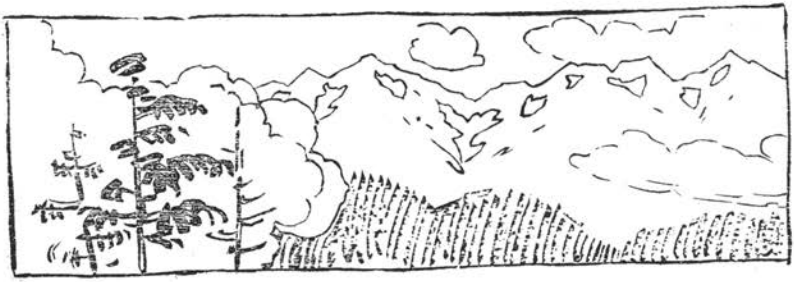
會員外の有志者諸君の來會大に歡迎すべし(會員の紹介を要す)

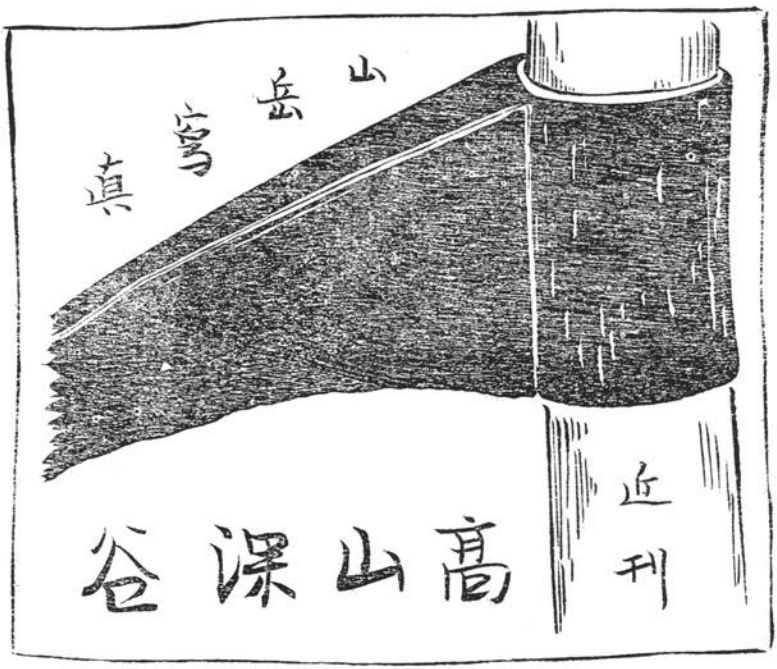
出席御希望の諸君は本會事務所に申込るべし。會期場所等確定次第通知すべし。

當番　大下藤次郎

幹事　丸山晩霞

　　神東惇





廣告第四頁を見よ!!!

第五周年記念號發刊豫告

（一部賣の代價は未定）

我が「山岳」は、來る四十三年の初號が、發刊以來第五周年の首途に上るに當るを以て、記念のため、平生の二倍大の册子として、會員及び愛讀者諸君に見えむと欲す、彩色石版、コロタイプ版、網版、木版等の饒多と變化ある、表紙や紙幅紙質に意を注げるは、一々言を俟たず、殊に材料の精選と、記事の豐富とは、本誌の獨得にして、他の如何なる雜誌にも比類を絶するものなり。

其要目を擧ぐれは左の如し

ウオルタア、ウエストン氏自傳及び肖像

今より二十年前『日本アルプス』の高山大岳を、日本人及び全世界に向つて、始めて紹介し、殊に日本の青年を刺戟して、山岳研究の志を起さしめ、延ひて山岳會の設立を見るに至らしめたる、原動力は『日本アルプス登山探檢記』の著者なる、英人ウオルタア、ウエストン氏なり、氏は本會の請に應じて、其最近の肖像、及び登山自傳を送らる、原文及び和文の對譯を載せ、氏の肖像に、筆蹟を添えたるもの、是れなり。

赤石山脈縱斷記

高頭式、高野鷹藏、三枝威之介、中村清太郎、小島烏水

本年の夏、前記諸氏より成れる山岳會員の一行、甲州より大井川の峽間に入り、赤石山脈を縱斷し、從來の地理書、及び地圖に絶えて記載なき惡澤岳、千枚澤岳、西河内岳、及び魚無河内岳を走り、赤石山を貫ぬきて、信州に下る、中村清太郎氏、主として之を筆記し、其他の諸氏、之に增訂を加へ、添ゆるに一行親しく撮影の寫眞と、同行の洋畫家、茨木猪之吉氏作のスケッチを以てす、初めて世に公にせられたる、赤石山脈縱斷記なり。

白峰山脈縱斷記

小島烏水

白峰山脈の南、白河内岳より始めて、農鳥山、間の岳、北岳の三大主峰を縱走せる紀行にして、始めて世に出でたる白峰山脈縱走記なり。

越中劍岳

吉田孫四郎

越中劍岳は、古往今來、登山者絶無と稱せられしが、參謀本部員一行の之に登攀せる談話、近く我が『山岳』に見え、天下愛山家の耳目を、聳えしめしが紀行文として、始めて世に公にせられたるは本文なり、一行中の石崎光瑤氏の作れる濃彩畫、及び寫眞等の、豪壯跌宕なる、紀行と相俟ちて、絶品なり。

越中藥師岳及上ノ岳

工學士　辻本滿丸

北アルプスの雄峰、藥師岳は、辻本工學士の本年夏の登山によりて、精確周密なる本文となり、初めて世に紹介せらる

レーミーア山登攀記

遠藤章二

北米の峻峰、レーミーア山、海拔一萬四千尺、氷河を蒙むりて、天外に兀立す、始めて足跡を此山に印したる邦人の紀行にして、又初めて外國の雪線以上の高山を踏破したる、本會會員の紀行なり。珍らしき寫眞入り。

其他登山紀行には、城數馬氏の長白山、志村烏嶺氏の木曾御岳續稿、榎谷徹藏氏の甲州駒ケ岳（スケッチ畫數葉入）等を初め、目下依囑中に係はりて、發表の運びに致らざるもの多し。

山岳寫生に就て。畫家の觀たる山岳

大下藤次郎　丸山晩霞

二篇は、如何に平生自然に接觸せる風景畫家が、山岳を觀るべきかを敎へて、興味饒多なり。

雜錄

以下の各欄亦豐富なり、只だ時機少しく早くして、詳細なる目錄を、具體的に發表すること能はざるを憾む。

高山深谷

今や吾が日本山岳の精美は、鏡玉を通じて世界に其光彩を發輝されんとす。

吾が日本山岳會は、明年を期して、日本山岳寫眞帖を發刊せんとす、其内容裝禎は明春初號に詳細發表すべし。

コロタイプ版、寫眞亞鉛版、銅版等寫眞を應用せる諸印刷術にて、最高の技術を有する職工に由り印刷せしめんとす。

本書は豫約に由りてのみ配布すべし。

(次號を見よ)

日本山岳會